

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第93集

かり やす か  
菟 安 賀 遺 跡

2001

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター



97C-SK15



96G-NR01



97D-NR01



96D-SD01



96BC-SD22



## 序

平成4年から東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査として当センターが実施いたしました発掘調査はのべ10遺跡を数えます。そのうち、もっとも南に位置するのが一宮市菟安賀遺跡であります。

菟安賀遺跡の発掘調査は、他の遺跡が農耕地帯に設定された道路予定地内での発掘調査であったのとは異なり、民家に接する町中での発掘調査でありました。とりわけ平成9年度には道路建設工事に並行して発掘調査を行なうことになり、安全対策はもとより防塵対策など周辺環境に配慮しながら調査を進めてまいりました。その間、地域住民の方々には、調査を円滑に進めるうえで、多くの御協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

今回の調査では菟安賀城に関連する資料や江戸時代の街道沿いの様子が伺える資料が得られるのではないかと予想して調査に入りました。その結果、戦国時代の菟安賀城の堀の一部や城内の北部を占めた寺院の大溝、旧河川、祭りの場など多様な姿が明らかになりました。また江戸時代では街道沿いの町家の様子などが伺うことができました。

発掘調査および本書の刊行にあたっては、理事・専門委員の諸先生方および愛知県教育委員会のご指導を賜るとともに、日本道路公団・愛知県建設部・愛知県教育委員会・一宮市教育委員会・そのほか関係者の方々から多大なご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

平成13年8月

財団法人愛知県教育サービスセンター  
理事長 久留宮 泰啓

## 例言

1. 本書は愛知県一宮市大和町苅安賀に所在する苅安賀遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団および愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財センターが平成8年4月から平成9年10月まで行なった。

調査面積は平成8年度4989㎡、平成9年度1732㎡、総計6721㎡である。

3. 担当者はつぎの通りである。

発掘調査 平成8年度 主査：黒田哲生（現愛知県立五条高校） 主任：石黒立人

調査研究員：大崎正敬（現稲沢市立大塚小学校教諭）

平成9年度 主査：黒田哲生 専門員：石黒立人

調査研究員：浅井厚祝（現美和町立美和小学校教諭）

報告書 平成12年度 主査：石黒立人

4. 調査にあたっては次の諸機関のご指導・ご協力を得た。

愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団、一宮市教育委員会

5. 本書の執筆分担は目次および文末に記したとおりである。なお、編集は石黒が行なった。

6. 遺物の整理・製図等に応じた方々の協力を得た。

調査研究補助員：平野昌子、東竜太、華井京子

整理補助員：大西多賀子、松田典子、加藤美和子、中村智可子、高山正美、野々垣裕美、穂波由枝、

桜井和枝、前江田久栄、小森奈菜枝、木村房枝

・近世陶磁器・石製品の一部についてアイシン精機株式会社事業企画室文化財プロジェクトに実測とデジタルトレースを委託、近世陶磁器の染付け模様について濃淡処理を委託した。

・カラー図版の集合写真の撮影に関しては深川写真館（深川進氏）に委託した。

・木製品の樹種同定は株式会社パレオ・ラボ（担当：植田弥生氏）に委託した。

7. 報告書の作成にあたって、次の諸機関・諸氏のご教示・ご協力を得た。

一宮市博物館、

土本典生、久保禎子

8. 調査区の座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。

9. 出土遺物および調査記録は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

## 凡例

1. 遺物実測図及び遺物写真図版の番号は、一部を除いて登録番号表記である。

ex. 97B-D07-270 → 省略形 ② D07-270、もしくは③ 270

① 調査区 ② 遺構名 ③ 登録番号

SD07

※②はSD・SX・SEなどの遺構記号を「S」を除いて表記。

※省略形は②③の表記、③の表記というように、レイアウト中にある見出しによって使い分けている。

2. 「検出」（省略形「検」）とは遺構外の意味。発掘作業上、機械的（層別ではない）に上部から掘削する各段階にローマ数字をあてて表記している。「検出」で終了する場合は包含層が薄く、遺構検出面も1面となる。

包含層が厚い場合には検出が「検Ⅰ」「検Ⅱ」というように検出は複数となる。また、遺構検出面が複数である場合にも、遺構検出面をまたがって「検出」が複数となる。基本的には、「検出」の数字が大きくなるにしたがって下部となる。

## 目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	1
A. 平成8年度の調査	1
B. 平成9年度の調査	3
第2節 遺跡の環境	4
A. 苺安賀と苺安賀城の歴史	4
B. 苺安賀遺跡の現況	8
第2章 調査の成果	10
第1節 基本層序	10
第2節 弥生時代の遺構と遺物	10
第3節 古墳時代の遺構と遺物	13
第4節 古代・中世の遺構と遺物	16
第5節 戦国・江戸時代の遺構と遺物	19
第6節 遺物各説	31
A. 陶磁器	31
B. 木製品	65
C. 苺安賀遺跡木製品の樹種同定	78
D. 金属製品・鑄造関係遺物	84
E. 石製品	88
第3章 まとめ	93

## 付論

苺安賀遺跡における鉄生産を考える（鈴木正貴・蔭山誠一）	98
-----------------------------	----

## 挿図

### 図 1

-1	調査区配置図 1/2000	1
-2	調査区位置図 1/25000	2
-3	96F 区調査風景写真	3
-4	荇安賀遺跡の現況写真	8
-5	土地条件と遺跡分布 1/25000	9

### 図 2

-1	土柱図	10
-2	96BC 区 SD18 プラン (1/80)・セクション 1/40	11
-3	96BC 区出土弥生土器	11
-4	弥生石器実測図	12
-5	弥生土器実測図	12
-6	古墳時代井戸状遺構プラン・セクション 1/40	13
-7	97B 区出土線刻土器実測図	14
-8	97A 区出土土器	14
-9	96L 区古墳前期遺構 1/200	15
-10	中世井戸 96L 区 SE03 プラン・セクション 1/40	16
-11	中世井戸 96H 区 SE03 プラン・セクション 1/40	16
-12	96L 区中世区画溝 1/200	17
-13	97D 区旧河川と区画溝 1/200	18
-14	97C 区中世溝(SD10・15)セクション 1/40	19
-15	96BC 区近世井戸(SE05)プラン・セクション 1/40	19
-16	96BC 区近世井戸(SE08・09)プラン・セクション 1/40	20
-17	96BC 区近世柵列柱穴セクション 1/40	21
-18	96BC 区柱穴セクション 1/40	22
-19	96BC 区 P23 出土土師皿	23
-20	96BC 区近世遺構(SD)セクション 1/40	23
-21	96F 区近世遺構プラン・セクション SE09:1/20 ほか 1/40	24
-22	97B 区近世建物の復元 プラン 1/100	25
-23	97B 区近世廃棄土坑の分布 1/200	25
-24	97B 区近世屋敷地の構成 プラン 1/100	26
-25	97B 区近世遺構(SA01)プラン 1/40	27
-26	96H 区近世井戸(SE01・21)プラン・セクション 1/40	28
-27	96H 区近世遺構プラン・セクション 1/40	29
-28	96G 区 NR01 遺物出土状況写真	30
-29	陶磁器実測図 1 96BC 区 SD16 その 1	34
-30	陶磁器実測図 2 96BC 区 SD16 その 2	35
-31	陶磁器実測図 3 96BC 区 SD16 その 3	36
-32	陶磁器実測図 4 96BC 区 SD16 その 4・SD22 その 5	37
-33	陶磁器実測図 5 96BC 区 SD22 その 1	38
-34	陶磁器実測図 6 96BC 区 SD16 その 2	39
-35	陶磁器実測図 7 96BC 区 SD16 その 3	40
-36	陶磁器実測図 8 96BC 区 SD16 その 4	41
-37	陶磁器実測図 9 96BC 区遺構(SE・SK)・検出	42
-38	陶磁器実測図 10 97B 区遺構 SE・その他	43
-39	陶磁器実測図 11 97B 区遺構 SK	44
-40	陶磁器実測図 12 97B 区遺構 SK10 その 1	45
-41	陶磁器実測図 13 97B 区遺構 SK10 その 2	46

-42	陶磁器実測図 14 97B 区遺構 SK30	47
-43	陶磁器実測図 15 97B 区遺構 SK87 他	48
-44	陶磁器実測図 16 97B 区検出その 1	49
-45	陶磁器実測図 17 97B 区検出その 2	50
-46	陶磁器実測図 18 96D 区遺構(SD01・SX02)・検出	51
-47	陶磁器実測図 19 96D 区検出	52
-48	陶磁器実測図 20 97A 区遺構 SD01	53
-49	陶磁器実測図 21 97A 区遺構 SD02 その 1	54
-50	陶磁器実測図 22 97A 区遺構 SD02 その 2	55
-51	陶磁器実測図 23 97A 区遺構 SD その他	56
-52	陶磁器実測図 24 97D 区 NR01	57
-53	陶磁器実測図 25 97B 区検出	58
-54	陶磁器実測図 26 97C 区遺構 SK 各種その 1	59
-55	陶磁器実測図 27 97C 区遺構 SK39	60
-56	陶磁器実測図 28 97C 区遺構 SD・SX・NR	61
-57	陶磁器実測図 29 97C 区検出その 1	62
-58	陶磁器実測図 30 97C 区検出その 2	63
-59	陶磁器実測図 31 96H 区遺構 SD01・05 その他	64
-60	木製品実測図 1 木簡	65
-61	木製品実測図 2 各種 97D 区 NR01 (1)	67
-62	木製品実測図 3 各種 97D 区 NR01 (2)	68
-63	木製品実測図 4 各種 96G 区 NR01 (1)	69
-64	木製品実測図 5 各種 96G 区 NR01 (2) SD01	70
-65	木製品実測図 6 各種 96BC 区 SD29 他	71
-66	木製品実測図 7 各種 96D 区 SD01 (1)	72
-67	木製品実測図 8 各種 96D 区 SD01 (2) 他	73
-68	木製品実測図 9 各種 96A 区・96BC 区	74
-69	樹種顕微鏡写真 1	81
-70	樹種顕微鏡写真 2	82
-71	樹種顕微鏡写真 3	83
-72	各種金属製品実測図 1	86
-73	各種金属製品実測図 2	87
-74	石製品実測図 1 火打石 1	89
-75	石製品実測図 2 火打石 2	90
-76	石製品実測図 3 火打石 3	91
-77	石製品実測図 4 五輪塔・硯	92

### 図 3

-1	近世町屋地割推定図 1/200	93
-2	中世遺構展開図 1/1000	94
-3	戦国期遺構展開図 1/1000	95
-4	近世遺構展開図 1/1000	96

## 表

### 表 1

-1	調査進行表	3
-2	荇安賀関連年表	6・7

### 表 2

-1	主要木製品一覧表	75～77
-2	樹種同定一覧表	80
-3	主要金属製品一覧表	85

## 巻頭カラー図版

- PL1 97C区-SK15 出土中国陶磁器  
PL2 上段：96G区-NR01 出土土師器群  
下段：97D区-NR01 炭化物層出土陶器群  
PL3 上段：96D区-SD01 出土陶磁器群  
下段：96BC区-SD22 出土陶磁器群  
PL4 上段：97B区-SK87 出土陶磁器群  
中段：97B区-SK30 出土陶磁器群  
下段：97C区-検出I 陶磁器群

## 遺構図版

- PL5 96A区プラン  
PL6 96BC区プラン南部  
PL7 96BC区プラン中部  
PL8 96BC区プラン南部  
PL9 96BC区土層セクション  
PL10 97B区プラン上面  
PL11 97B区プラン下面  
PL12 97B区・96D区土層セクション  
PL13 96D区プラン  
PL14 97A区プラン上面  
PL15 97A区プラン下面  
PL16 96F区プラン南部  
PL17 96F区プラン西部  
PL18 96F区プラン東部  
PL19 97A区・96F区・96L区土層セクション  
PL20 96L区プラン北部  
PL21 96L区プラン南部  
PL22 96K区プラン  
PL23 97D区プラン  
PL24 97D区・97C区土層セクション  
PL25 97C区プラン上面  
PL26 97C区プラン下面  
PL27 96H区プラン北部  
PL28 96H区プラン南部  
PL29 96G区プラン南部  
PL30 96G区土層セクション

## 遺構モノクロ写真図版

- PL31 97A区全景／96BC区全景  
PL32 96BC区近景  
PL33 96BC区各遺構近景  
PL34 96D区遠景  
PL35 96D区SD01 近景  
PL36 97B区全景  
PL37 97B区近景  
PL38 96F区全景／個別遺構近景  
PL39 97D区全景  
PL40 97A区遠景／近景  
PL41 96K区遠景／96L区全景  
PL42 97C区全景

- PL43 96H区中景／個別遺構近景  
PL44 96G区中景／近景  
PL45 96G区NR01／SD01 遺物出土状況  
PL46 96G区NR01 遺物出土状況細部

## 遺物カラー写真図版

- PL47 96BC区SD16 その1  
PL48 96BC区SD16 その2  
PL49 96BC区SD16 その3  
PL50 96BC区SD16 その4  
PL51 96BC区SD16 その5  
PL52 96BC区SD16 その6  
PL53 97B区SK10 その1  
PL54 97B区SK10 その2  
PL55 97B区SK30  
PL56 97B区SK87  
PL57 97A区SD02 その1  
PL58 97A区SD02 その2  
PL59 97A区SD06・07  
PL60 97D区NR01 炭化物層  
PL61 漆椀集成  
PL62 火打石集成

## 遺物モノクロ写真図版

- PL63 弥生土器・古墳時代線刻土器  
PL64 古墳時代土器96F区-SE07・96L区-SK02  
PL65 96BC区SD16 その7  
PL66 96BC区SD16 その8・その他  
PL67 96BC区SD16 その9・その他  
PL68 96BC区SD その1  
PL69 96BC区SD その2  
PL70 96BC区SD22 その1  
PL71 96BC区SD22 その2  
PL72 96BC区SD22 その3 土師器集成  
PL73 96BC区SD22 その4 特殊品・土製品・瓦他  
PL74 96BC区SE・SX  
PL75 96BC区SK  
PL76 96BC区検出その1  
PL77 96BC区検出その2  
PL78 97B区SE  
PL79 97B区SD  
PL80 97B区SK16 その1  
PL81 97B区SK16 その2  
PL82 97B区SK01～31  
PL83 97B区SK32・33  
PL84 97B区SK  
PL85 97B区SK56・88  
PL86 97B区SK・SX10  
PL87 97B区SK10 その3  
PL88 97B区SK87 その2  
PL89 97B区検出その1  
PL90 97B区検出その2

PL91 96D 区 SD01  
PL92 96D 区 SD01 中層  
PL93 96D 区 SD01 上層その 1  
PL94 96D 区 SD01 上層その 2  
PL95 96D 区 SD01 上層その 3  
PL96 96D 区 SD01 上層その 4 ・ 97A 区 -SD06 ・ 07  
PL97 96D 区 SD01  
PL98 96D 区検出その 1  
PL99 96D 区検出その 2 ・ SX02  
PL100 97A 区 SD01 ・ その他  
PL101 96F 区 SD02 ・ その他  
PL102 96F 区 SD15 ・ 16  
PL103 97D 区 NR01 その 1  
PL104 97D 区 NR01 その 2  
PL105 97D 区その他  
PL106 97D 区検出  
PL107 97C 区 SK  
PL108 97C 区 SK26  
PL109 97C 区 SK31  
PL110 97C 区 SK39 その 1  
PL111 97C 区 SK39 その 2  
PL112 97C 区 SK42  
PL113 97C 区 SK43  
PL114 97C 区 SK51  
PL115 97C 区 NR ・ SD  
PL116 97C 区 SX02 ・ 検出その 1  
PL117 97C 区検出その 2  
PL118 97C 区検出その 3  
PL119 97C 区検出その 4  
PL120 96H 区 SD  
PL121 96H 区遺構各種  
PL122 96H 区その他  
PL123 96G 区 SD01 ・ 検出  
PL124 96G 区 NR01 その 1  
PL125 96G 区 NR01 その 2  
PL126 96G 区 NR01 その 3  
PL127 土製品その 1  
PL128 土製品その 2  
PL129 瓦  
PL130 金属製品 ・ 鑄造関係遺物  
PL131 鋳滓  
PL132 石製品  
PL133 火打石その 1  
PL134 火打石その 2  
PL135 火打石その 3  
PL136 火打石その 4 ・ 各種石器  
PL137 木製品

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査の経緯と経過

苺安賀遺跡は一宮市南西部の大和町苺安賀に所在する。

発掘調査は、東海北陸自動車道および県道岐阜稲沢線建設に伴う事前調査であり、日本道路公団および愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として当センターが実施したものである。

発掘調査は、平成8年度がA、B、C、D、F、G、H、K、Lの9調査区で4989m<sup>2</sup>、平成9年度はA、B、C、Dの4調査区で1732m<sup>2</sup>であった。総計は6721m<sup>2</sup>である。

### A. 平成8年度の調査

平成8年度の調査は、北端の96F区・96L区からとりかかった。表土を重機で除去してから作業員の手作業によって遺構精査・掘削を行なった。遺構は残りが非常に悪く、井戸など、本来はかなり深く掘り込まれたはずの遺構でさえ、1m程度の深さしかなく、すでにかなり削平を受けたらしいことが窺えた。

県道を挟んだ反対側の96L区においても状況は同様で、耕作に因ると思われる幅の狭い溝が東西南北の方位に規則的に並んでいた。両調査区とも溝や井戸が中心で、建物遺構は発見されなかった。遺構の時期は古墳時代前期から江戸時代にかけてであり、古墳時代前期の井戸は北に接する八王子遺跡との関連を示すものであり、注目された。

一方、南端の96A区と96G区では確実人工的な遺構といえるのは96G区のSD01のみで、遺跡範囲の南限であることが確認できた。96G区SD01は江戸時代の用水路であり、その南で自然流路への傾斜面を検出したが、調査区全体を深く掘り下げた結果、調査区の南半分が自然流路であることを確認した。中世後半から江戸時代初期にかけての長期にわたって集落域の縁辺であったことが明らかになった。

県道西側の96BC区、96Da区は民家の立ち退き等の制約条件や調査の進行上から、BC区を一括調査、D区はDa区、Db区に小区分して調査することになったが、最終的にDb区の調査は次年度に送られ97A区となった。以下、96Da区は96D区と呼ぶ。

96BC区では調査区の北部と南部で様相が全く異なっていた。北部では遺構の重複が激しく、遺構検出面の整理に手間取った。96BC区の北にある道路が旧街道に比定されていることとの関連が強く印象づけられた。

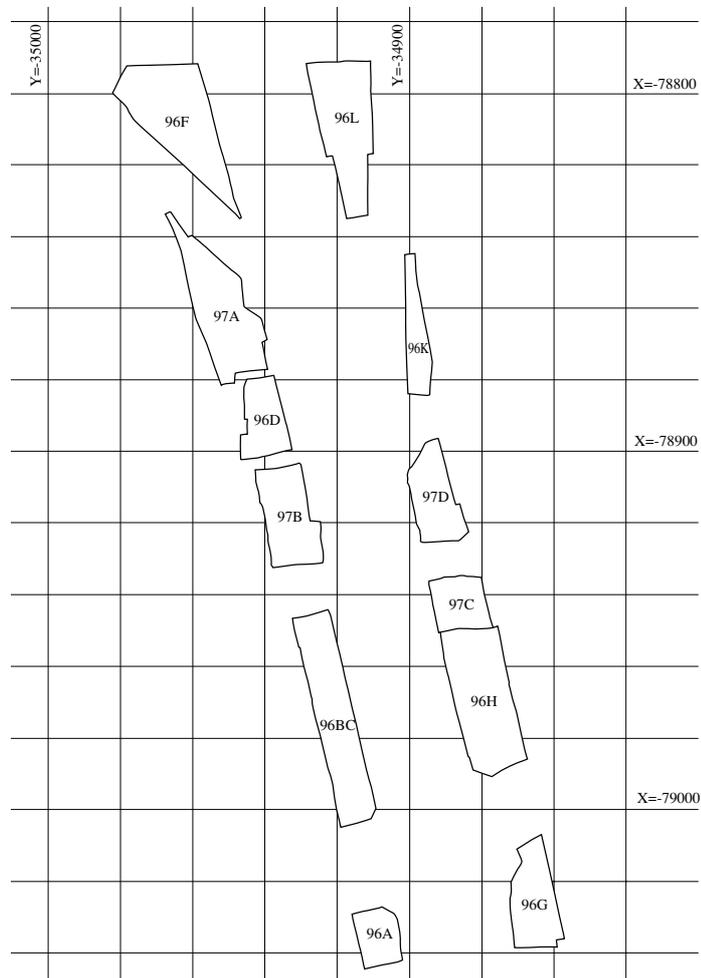
96D区では北半分の掘り下げは容易であったが、南半分は整地層であったので、遺構面を確認するのに手間取

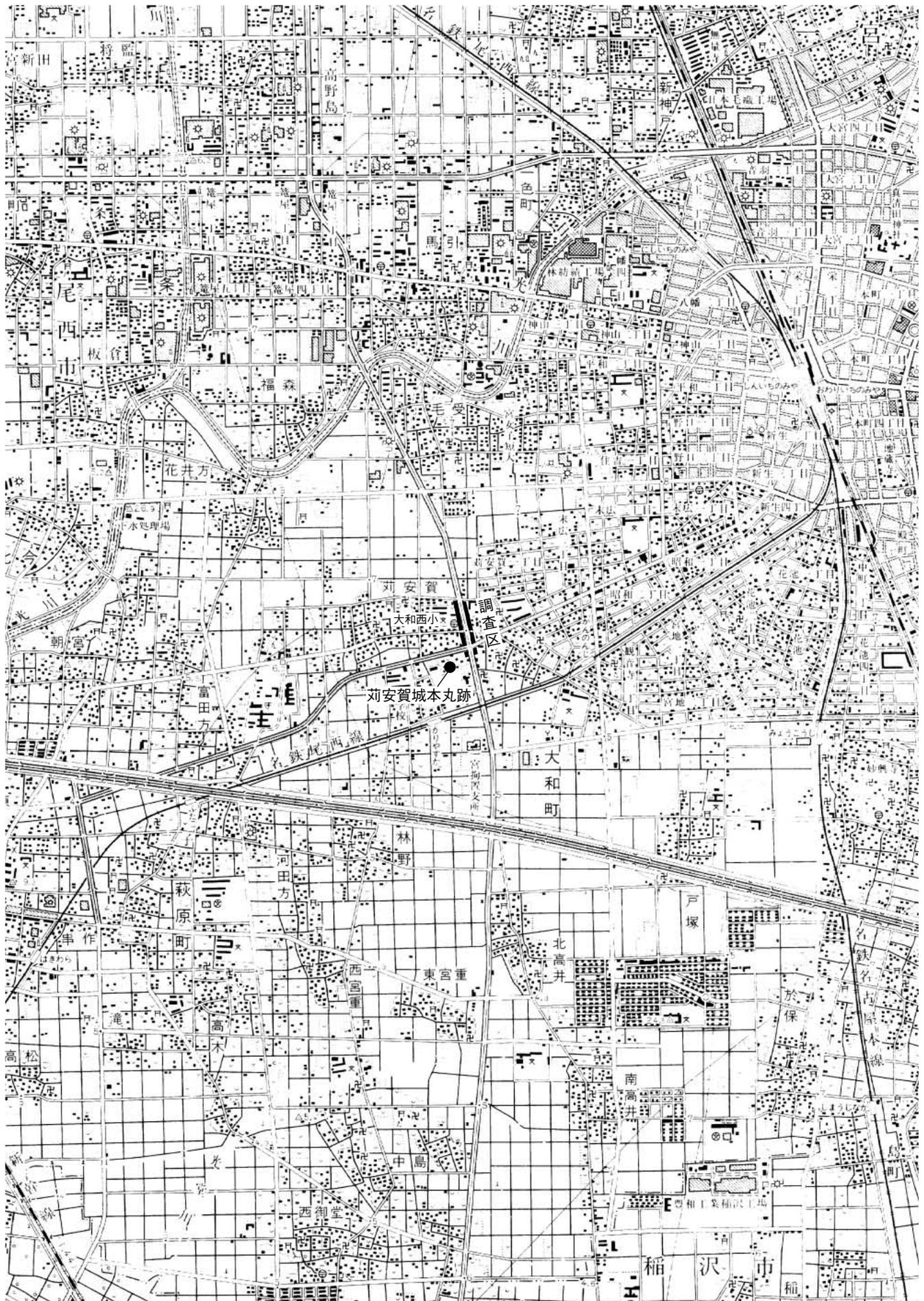
た。最終的にはSD01とした大溝を確認し、それが苺安賀城に関係する遺構である可能性が考えられた。

県道東側では96K区を調査した際に湧水で悩まされ旧河川を掘り切ることはできず、右岸を確認したにとどまった。旧河川以外は水田造成による削平が著しく、遺構は認められなかった。

96H区では調査が冬期にかかったために遺構面の凍結による崩壊で悩まされた。遺構は中世以降が主であったが、調査区南部で黒褐色シルトの堆積が認められ、内部から古墳時代前期の土器が出土した。弥生後期から古墳前期にかけての遺跡である北川田遺跡に

図1-1 調査区配置図 1 / 2000





隣接することから該期の遺構である可能性もあったが、最終的には自然地形と判断した。

### B. 平成9年度の調査

97A区は大和西小学校の体育館跡地であり、調査区の大半が基礎工事によって破壊されていたが、南端付近でかろうじて大溝ほか小溝群が検出できた。また茶褐色シルト層が良好に遺存し、内部から古墳時代前期の土器が出土したことから、本来は旧地表が有機質を多く含む堆積層に覆われていた可能性が高まった。

97B区は96BC区の道を挟んだ北側に位置している。南部では遺構の重複はそれほど顕著ではなく、柱穴に河原石の礎石を置くものも多く認められたことから、建物が展開すると考えられた。それに対して北半分では陶器類が多量に投棄された土坑が展開し、屋外である可能性が考えられた。

97C区と97D区は県道の東側で旧街道を挟んで南北に位置し、街道に隣接する調査区として成果が期待された。北の97D区では旧河川の左岸を確認した。左岸寄りに炭化物を含む層が認められ、内部から陶器類や木製品が多量に出土した。木製品には各種あり、近世初期の良好な資料を得ることができた。

97C区では3面にわたって遺構検出を行なった。

第1面は整地層の除去から人力作業で行なった。廃棄土坑の検出・掘削に終始した。

第2面は第1面で見逃した遺構に加えて新たな廃棄土坑群を追加した。とくに第1面で廃棄土坑としたものが第2面にいたって井戸であったことが判明した事例も複数あった。

第3面は97D区から続く旧河川左岸と

表1-1 調査進行表

調査区	担当者	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
96A	黒田							.....					
B								.....					
C								.....					
D	大崎	.....			.....								
F					.....								
G	石黒				.....								
H					.....				.....				
K					.....								
L		.....											
97A	黒田	.....											
B					.....								
C	石黒			.....									
D					.....								
	浅井												

東西に走る大溝(SD08)を検出した。溝幅が5mを超える点から、苅安賀城に関連する遺構である可能性が考えられた。

発掘調査は以上のように進行した。近世遺跡はこれまで主要な城下町に関連するものが主であり、農村部における調査事例はほとんどなかった。

したがって、今回の苅安賀遺跡の調査はいちおうは城館周辺ではあるものの、主要な農村の実態を明らかにする

機会であった。だが、調査時における見通しの不十分さなど、調査内容がそうした課題に添うものであったのかどうかについては、真摯に批判を受けなければならない部分を多々残した調査であったと反省している。

図1-3 96F区調査風景



## 第2節 遺跡の環境

### A. 苺安賀と苺安賀城の歴史

#### 地名

苺安賀は戦国時代にみられる村名である。津田正生の『尾張国地名考』によれば「旧名は須賀村なるべし。苺屋はのちの冠字なるべし。」と自然堤防地帯の砂地を指す須賀地名と考えている。

地名としては南北朝時代からみられ、『妙興寺文書』の嘉慶2年(1338)に「穴田仮屋須賀」と記されている。以後長亨元年(1487)頃まで当地の地名が妙興寺文書に残り、「仮屋須賀」「苺安須賀」などとも記されている。

また本願寺関係の「阿弥陀如来絵像裏書」として光福寺(岐阜県羽島市)の文明7年の年記をもつ裏書には「尾州中島郡苺安賀正徳寺門徒」と記されている。

#### 町並みの沿革

苺安賀の町並みの歴史は5期に分けることができる。

**第1期** 古代から中世にかけて、現在の大江川・日光川・光堂川などに囲まれ、自然堤防上に集落が発達した。集落は八王子遺跡から苺安賀遺跡へ中心を移し、そこに鎌倉街道の脇街道が通り、賑わいをみせた時期である。

**第2期** 室町時代から戦国時代にかけて、日蓮宗要法寺(現高知県高知市所在)、浄土真宗聖徳寺(現名古屋市所在)などの寺院が建立され、寺内町的な性格をもち、町が大きく発展した。「逢州旧勝録」によれば連如が三河国上宮寺に下向の時に花井方村に立ち寄っている。

**第3期** 戦国時代から織豊期にかけてで、もっとも発展した。浅井新八(郎)によって苺安賀城がつくられ、城下町も形成された。「逢州旧勝録」によれば、「城下町の節、町名今残る分」として、東市場町・橋向町・本町・富田町・若宮町をあげている。小牧長久手の戦いでは織田信雄・徳川家康方に攻められ落城した。

**第4期** 江戸時代。美濃街道からもは

ずれ、苺安賀城も廃城となり、宿場町・城下町の機能を失ったが、六斎市が行われた市場町として、周辺農村の商業的中核として生き延びることになった。いままでの街道は巡見街道となった。『寛文村々覚書』(1666)によれば13の寺があり、苺安賀廃城以後に建立された寺院として、専養寺と心証寺をあげることができる。

『尾張名所図絵』(天保年間)『苺安賀村絵図』(弘化年間)からは以下のことがわかる。第一に、巡見街道が村の中央を東西に通じ、東は一宮村、西は萩原村に通じている。第二に、村の中央にある正福寺に入る道は、北にある八王子塚の西を通り、毛受村に至り、さらに北へのびている。第三に、苺安賀城が町の南に位置し、城と町は多くの川や堀に囲まれている。第四に、街道沿いに民家が並び、東から観音寺・鎮西寺・誓願寺・専養寺・妙栄寺・蓮照寺・国照寺・心証寺・常清寺・正福寺・専徳寺と西に広がっている。「水筋も通りし里や 芥子の花」と名所図絵にも詠まれ、商品作物の栽培が盛んとなり、関戸家などの大地主があらわれた。幕末には御鋤祭りや稲場騒動がおこり、町が動揺した。

**第5期** 明治維新以後から現在。明治24年の濃尾大震災は町に壊滅的な被害を与えた。今回の調査で区画溝が見つかった心証寺は、「寛文元年、浅井田宮丸の後裔浅井七郎左衛門正貞(宝暦9年没)が父心証院(慶安4年没)菩提のために創建し、代々の菩提所としていたが、明治29年11月、当地檀家信徒切望により、迎えられ、現地(一宮市大宮)へ移転し・・・」とあるように、明治24年の濃尾大震災を契機に移転した。

#### 苺安賀城の歴史

苺安賀城は日光川の自然堤防地帯に位置する平城である。『尾陽雑記』には、「東西43間、南北30間。四方二重堀」、『尾張志』には「東西42間、南北32間、内外二重堀也」と記されている。

苺安賀城には五つの重要な年号がある。

#### ①永禄4年

浅井新八(郎)によって苺安賀城が造られた年である。内・外堀をもつ城下町が整備された。この3年前に織田信長によって岩倉城が落城させられたために、岩倉の城下町から寺院などがしだいに苺安賀へ移された。

#### ②天正9年

浅井新八(郎)が亡くなり、子の田宮丸が跡を継ぎ、織田信雄の3家老となった年である。田宮丸はまだ16歳であったといわれている。

#### ③天正12年

浅井田宮丸が豊臣秀吉と内通した疑いをかけられ、織田信雄の命によって長島城で殺された年である。これが小牧・長久手の戦いのきっかけとなったが、この時苺安賀城は森勘解由によって攻められ、落城させられた。そして、家康と信雄によって、早速「小牧・長久手の戦い」の前線基地として普請を命じられている。

#### ④天正18年

この年、豊臣秀吉は小田原攻めを行い、そのための尾張の警備を小早川隆景に命じ、隆景は自らは清須城に入り、彼の手兵500名を苺安賀城に入れている。

⑤?年 詳しい年号までは特定できないが、苺安賀城廃城の年である。この頃、田宮丸の母が苺安賀で里人と共に暮らし「苺安賀殿」と呼ばれていた。慶長7年(1602)には美濃街道が整備されて6宿が置かれたが、苺安賀は外された。『尾張地名考』『尾張志』『尾藩世紀』によれば、徳川義直は苺安賀御殿を築き別邸として利用していたと記されている。鷹狩りを目的に、寛永3年(1626)、正保元年(1646)、正保3年(1648)の3度訪れたという記録が残っている。いずれにしても苺安賀が城下町としての機能を喪失したのが17世紀の初めであったと考えられる。

#### 苺安賀城の位置

『寛文村々覚書』(1666)には「先年

浅井信濃守居城之由、今は新田ト成ル」と記されている。すでに寛文年間には城の多くが新田となっていたことを示している。『苅安賀村絵図』（弘化年間）によれば、町を貫く街道の南側に「浅井田宮丸城址」と書かれた城の主郭部分が小高い森のように表されている。また、『尾張名所図絵』（天保年間）には「古城址」と記され、小高い畑のように描かれている。明治26年の地籍図によれば、主郭は小高い島地となっている。大正6年には「苅安賀城址」の石標が建てられた。現在は自動車学校の敷地となりっている。『愛知県中世城館跡調査報告』では、一宮市大和町苅安賀下火口、上火口の辺りに主郭があったと推定している。

### 苅安賀をめぐる人々

浅井新八（郎）

尾張浅井氏と考えられる。諱も「政澄」「政貞」「政高」「賢政」など諸説があり、定かではない。

中島郡苅安賀村に居住し、信長に仕える。永禄年中、赤母衣衆に選ばれている。

『信長公記』によれば、永禄11年（1568）の信長上洛の折、佐久間信盛・木下秀吉・丹羽長秀とともに箕作城を攻めている。また元亀元年（1570）の比叡山攻めでは叡山の麓を取り巻いた中に浅井新八の名前がある。

元亀2年（1571）の第1回長島攻めでは大鳥居（三重県桑名郡長島町）砦攻めに佐久間信盛とともに参加している。

天正2年（1574）の第3回長島攻めでは早尾口（愛知県海部郡立田村）より木下小一郎秀長・丹羽長秀とともに先陣を勤め、篠橋にあらわれた一揆勢を蹴散らしている。いずれの戦いでも信長の馬廻りとして小部隊の指揮官を勤めていた。有力武将とともに行動し、連絡将校の役割を果たしていたのであろう。

天正2年（1574）頃から織田信忠の尾張・美濃支配が進むと尾張衆として麾下に組み込まれたようで、天正6年（1578）の播磨攻めでは林通勝らとともに砦の警護を命じられている。

山内一豊の父盛豊とは従兄弟であっ

たといわれている。一豊も苅安賀に身を寄せた時期があったということも信憑性がありそうである。

『尾陽雜記』によれば浅井新八は天正9年（1581）に没したと記されている。

### 浅井田宮丸

浅井新八の嫡男として永禄12年に生まれた。田宮丸は元服後新八を名乗った記録が残っているが、殺害されたのが19歳であったためか、幼名が通称になったと考えられる。

本能寺の変より少し前に父の跡を継いだようで、尾張衆として織田信忠に仕えた。本能寺の変以降は尾張を領した織田信雄に仕えたが、天正12年3月、秀吉と対立した信雄によって、秀吉に内通したと疑われ、長島城において津川義冬・岡田重孝とともに殺害された。

『寛政重修諸家譜』によれば、新八の子新太郎政重は後に大和郡山の豊臣秀保の臣となり、後に幕臣となっている。田宮丸の弟であろう。

### 苅安賀殿

『尾州府志』によれば「苅安賀殿ハ毛利伊勢守ノ女ナリ。毛利ハ武衛族（斯波氏）為リ。浅井新八郎ニ嫁ス。田宮丸ガ生マレル。田宮謀ラレタ後、此ノ邑ニ居住ス。我ガ敬公（徳川義直）之ヲ厚遇ス。邑人苅安賀殿ト称ス。」と記されている。

苅安賀殿は斯波氏の出で新八の妻、田宮丸の生母である。夫と我が子を亡くした後も苅安賀に居住し、土地の人々とともに戦国時代を生き抜いた。徳川義直に厚遇され、「苅安賀殿」と称した。（浅井厚視）

表 1 -1 苅安賀関連年表

時代 (元号)	苅安賀城関係	清須城関係
嘉慶 2 1388	妙興寺領 346 町歩の中に「穴田借屋須賀」の地名が見られる。1487年まで、当地の地名が妙興寺文書に見られる。	
応仁元 1467	日蓮宗要法寺が創建される。山内一豊によって、17世紀土佐へ移る。「苅安賀聖徳寺門徒」という本尊裏書があり、すでに聖徳寺(真宗)が苅安賀にあり、少なくとも16世紀中頃まで存在した。現在は名古屋に所在。	
明応 6 1497		
享祿 1528	日蓮宗国照寺・妙栄寺が、岩倉より移る。	
年中 ~ 32		
天文 5 1536	この頃苅安賀聖徳寺が、本願寺の常住衆として活躍する。	
天文 21 1552	織田信長と斎藤道三が、苅安賀聖徳寺で会見する。	
弘治 1 1555		織田信長、清須城に入る。
永祿 2 1559		織田信長、岩倉の織田信賢を下し尾張の実質支配を完成する。
永祿 3 1560		桶狭間の戦い。
永祿 4 1561	浅井新八郎高政が、岩倉の町並・寺院を移して、苅安賀に城下町を形成する。萩原町中島の浄土寺を苅安賀に招き、誓願寺とする。 この頃、苅安賀城下で六斎市が始まったと考えられる。	
永祿 6 1563		織田信長、小牧山へ居城を移す。
永祿 10 1567		織田信長、岐阜へ居城を移す。
永祿 11 1568		織田信長、將軍義昭を奉じ、入京。
元龜元 1570	長島一向一揆。当地より多数の門徒が参陣した。	
天正 1 1573		織田信長、室町幕府を滅ぼす。
天正 3 1575		長篠の戦い。
天正 9 1581	浅井新八郎が没し、田宮丸が16才で跡をつぎ、織田信雄の三家老の一人となる。	
天正 10 1582		本能寺の変。清須会議の結果、織田信雄が、尾張・伊勢・伊賀の領主となる。
天正 12 1584	苅安賀城主浅井田宮丸、羽柴秀吉に内通の疑いをうけ、長島城で、織田信雄の命によって殺害される。 小牧長久手の戦いが始まる。森勘解由が苅安賀城に入る。戦いに備えて、徳川家康・織田信雄が、苅安賀城の普請を命じる。	
天正 18 1590	豊臣秀吉、小田原攻めに際して、小早川隆景に尾張の警備を担当させ、苅安賀城に手兵 500 名を入れさせる。	織田信雄、追放される。 小早川隆景、清須城に入る。 豊臣秀次、尾張領主となる。
文祿 3 1594		福島正則、清須へ転封。
慶長 5 1600		関ヶ原の戦い。徳川家康、四男忠吉を清須へ転封。

慶長 12	1607		忠吉の死去に際して、九男義直が清須に 転封。
慶長 7	1602	美濃街道が整えられ、6宿が置かれる。 苅安賀は街道からはずれ、宿場としての 機能を失う。 浅井田宮丸の母(苅安賀殿)、生涯里人と 共に苅安賀で暮らす。 この頃、苅安賀城が廃城となる。慶長13 年(1608)～延宝2年(1674)。 正福寺過去帳によれば、苅安賀の町並と して「北市場」「橋向町」「本町」「富田 町」「花井町」「東市場」の町名が見られ る。寛延2年(1749)に「若宮町」が初見。	尾張地名考によれば、義直は苅安賀を別 邸として利用していたとのこと。
元和元	1615		民情視察のために、巡見使が各地に派遣 される。巡見使の通路が巡見街道として 整備される。
寛文元	1661	目蓮宗心証寺が創建される。	
寛文 6	1666		徳川光友横須賀御殿を建てる。
寛文 12	1672	「寛文村々覚書」によると、苅安賀村の世帯数は348軒、人口は 1541人、寺院の数は14、板橋11カ所と現在の一宮市内では、一 宮村に次ぐ大きな村であった。	
享保 13	1728	苅安賀村、日市の開催が許される。	
享保 15	1730	苅安賀村、日市の目数増と開催期間中の諸興業を認められる。	
宝暦 4	1754	日市で売り出していた物として「ろくろ・木履・古機具・槍物類・附 木・綿車・ひしゃく・つるべ・はし・桶・槍笠・たんす・長持・あやへ板・ 下駄」などを販売した記録が残っている。この頃、関戸可ト・木村 蓬萊・関戸経忠・関戸角露・井上八雷・舟橋木旦・朝野三輪女ら苅安賀 七老として和歌・俳諧等で活躍した。また、組百姓と呼ばれ、苗字 帯刀を許された家が商品作物で財をなし、これ以後大地主に成長 していった。	
天明 4	1786	朝野三輪女、不治の病の夫を介抱して、貞女として表彰される。	
文化 7	1810	苅安賀村農民が、牢貢の破免願いを出し、以後毎年の検見によっ て、年貢を決めることとなる。	
文政 10	1827	苅安賀村で御鋤祭りが流行する。勝手な祭礼を禁止した藩の方針 に逆らって、村中休日にして賑わった。	
文政 12	1829	苅安賀村で小百姓が地主に対して小作料の減免を要求して騒動を 起こすが、高持百姓の譲歩によって収拾される。	
安政 6	1859	苅安賀村で御鋤祭りが流行する。	
文久 2	1862	「猿」の絵を書いた苅安賀村の画家浅井星洲、没す。この頃、観音 寺・常清寺・心証寺・鎮西寺・専養寺で寺子屋が行われ、心証寺は明 治6年、寧静学校となる。	
明治 2	1869	稲葉騒動が起きる。村々の小作人が富裕な地主の邸宅を打ちこわ したり放火したりする。稲葉宿を申心として苅安賀、萩原、築込 等が渦中となる。	
明治 5	1872	苅安賀村は廃藩置県以後の行政改革によって第5大区14小区に入 る。	
明治 24	1891	苅安賀村の世帯数256戸。男573人、女15人。濃尾大震災がおき る。	

新編一宮市史 (本文編上・下 資料編9・補遺2 年表)  
角川日本地名辞典・愛知 (角川書店)  
史録いちのみや (郷土出版社)  
愛知県教育史・愛知県寺子屋一覧  
清洲町史

愛知の地名 (平凡社)  
寛文村々覚書  
尾張国地名考  
尾張の女性 (ザ・尾張シリーズ第4集)

B. 荻安賀遺跡の現況

荻安賀遺跡は、地図によるかぎりは東西に伸びる自然堤防もしくは旧浜堤上に位置していると推定され、標高は6mほどである。現在、遺跡付近は住宅街となって完全に市街地化しているが、建物が新しい以外は近世荻安賀村以来の集村としての景観を残しているともいえる。

さて、荻安賀遺跡の範囲については、それぞれ時期ごとに変動があると思われるけれども、今回の調査成果の主要な部分占める江戸時代に関しては、ほとんど旧街道沿いにおいて切れ目なく続く印象を与えている。そのため遺跡範囲を推定することは難しいが、東辺は除いて一応は現在の住宅密集地の範囲に一致するものと考えられる。となると、遺跡範囲の東部を西尾張中央道が南北に貫いていることになるが、発掘調査でも明かになったように、その位置はちょうど旧河川に相当していた。したがって、本来は河川を挟んで豪壮な寺が点在する町並みが展開する—それはまさに尾張名所図絵に描かれたものであるが—景観であったと思われる。



図1-4 荻安賀遺跡の現況

八幡社

荻安賀集落遠景





図1-5 土地条件と遺跡分布

## 第2章 調査の成果

### 第1節 基本層序

基本的な堆積層は、最下部から粗砂、シルト、黒褐色シルト、近世整地層という順になる。このうち、近世以前の人間活動に関係するのは黒褐色シルト層であり、層中上部には遺物が含まれていた。

主たる遺物は、97A区では古墳前期土器、96BC区では弥生土器であった。また、直接関係するのかわからないが、96H区では弥生前期の土器が出土している。これらの点から、苺安賀遺跡においていつの時点で有機化が

進んだのかはわからないとしても、黒褐色シルト層上面がかつて地表面であった可能性は高い。同様の黒褐色シルト層は濃尾平野に分布する諸遺跡において認められている。朝日遺跡ではその形成時期が弥生時代以前、おそらくは縄文時代後期と推定され、他の遺跡においても弥生時代以前である可能性が高い。

さて、黒褐色シルト層は図2-1のように97B区で窪んでいる。このことは旧地表面に起伏のあったことを示し

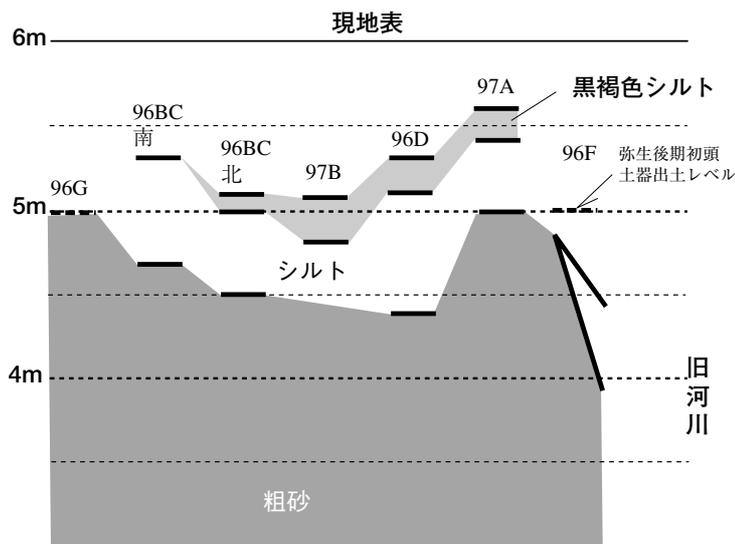
ている。苺安賀遺跡周辺は、土地条件図によれば微高地がやや北に彎曲して東西方向にのびており、自然堤防状を呈している。南北の横断面で微高地の中央が窪んでいるのは、この地形がかつて旧流路であり、その天井川化とともに微高地化し、さらに自然堤防になったことを示していると思われる。

いっぽう96F区では黒褐色シルトが検出されることはなかった。しかし、近世遺構の検出面であるシルト層中から弥生後期初頭の土器がまとまって出土したので、該期にも堆積があったことがわかった。黒褐色シルトが弥生時代の堆積であれば検出されるはずがそれがみられなかったこと、下部の粗砂層に急激な下降もみられることから、96F区基盤層は八王子遺跡との間を流れる旧河道の堆積層であったと推定される。

このように、苺安賀遺跡が立地する微高地は比較的古くに形成されたのであり、また南北を自然流路に挟まれていたと考えられる。

おそらく、弥生前期に八王子遺跡が営まれた段階には、すでに微高地として存在していたと考えられる。そのことが土器・石器が出土することの理由であろう。

図2-1 土柱図



### 第2節 弥生時代の遺構と遺物

96BC区で幅4m、深さ約1.5mの大溝SD18を検出した。検出当初はその上部を黒褐色シルトが覆い、その範囲を自然の窪地であると考えていた。ところが、トレンチを設定して断面確認をした結果、溝であると判明し、掘削することにした。

溝壁面は南側が急峻であり、北側はそれに対してやや緩やかであった。出土遺物は、溝最下層から中期後半(朝日編年V-1期)の細頸壺が1点出土した。方形周溝墓か環濠いずれかの可

能性を考えたけれども、遺構・遺物が希薄である点からいけば、方形周溝墓の溝の一部—とすればかなり大規模なものとなるが—であった可能性が高いと考える。

確かに弥生時代の遺構といえるのはこれだけだが、96BC区では同時期の弥生土器が他に2点出土している。1点は近世の溝から出土した甕で、口縁部には時期的な指標である指頭圧痕紋が施されている。

96F区では近世遺構の検出面で、弥

生後期初頭の土器群を検出した。当初は遺構ではないかと疑ったが、その後破片がパラパラと出土したことから、堆積が進行する過程で包含されたのではないかと考えた。八王子遺跡の範囲に含まれることを示す資料であり、洪水性の環境にあったものであろう。

この他、打製石斧2点、有孔磨製石鏃1点、下呂石剥片などの石器が出土している。

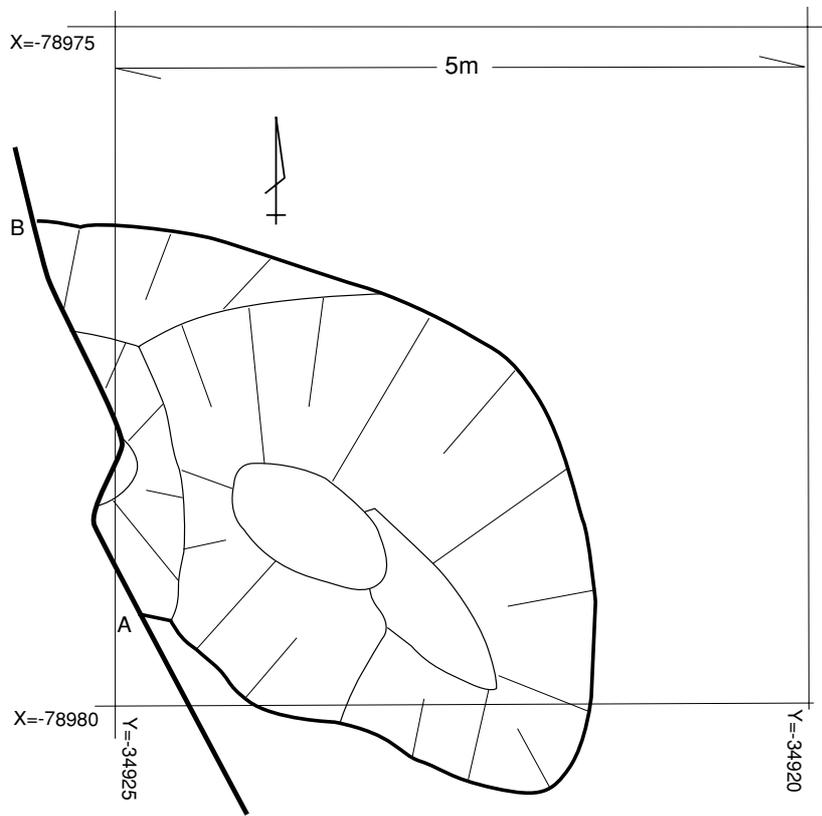
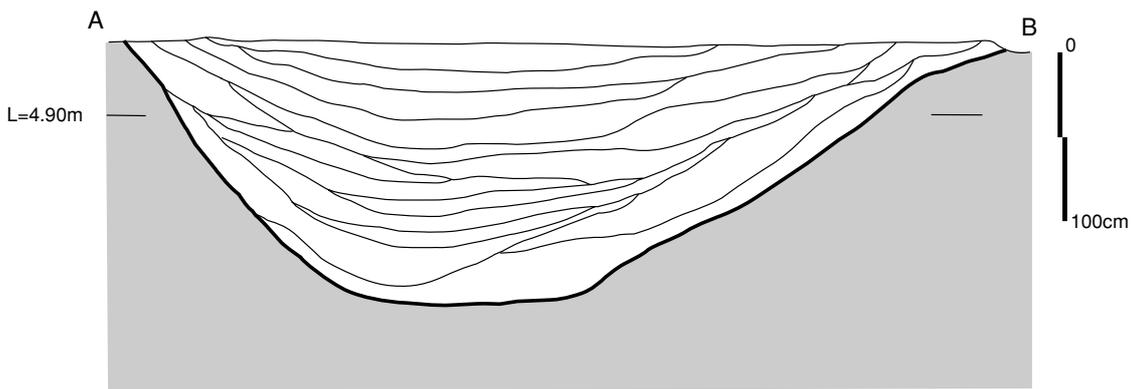


図 2 -2 96BC 区  
SD18 プラン(1/80)  
セクション(1/40)



96BC-SD18

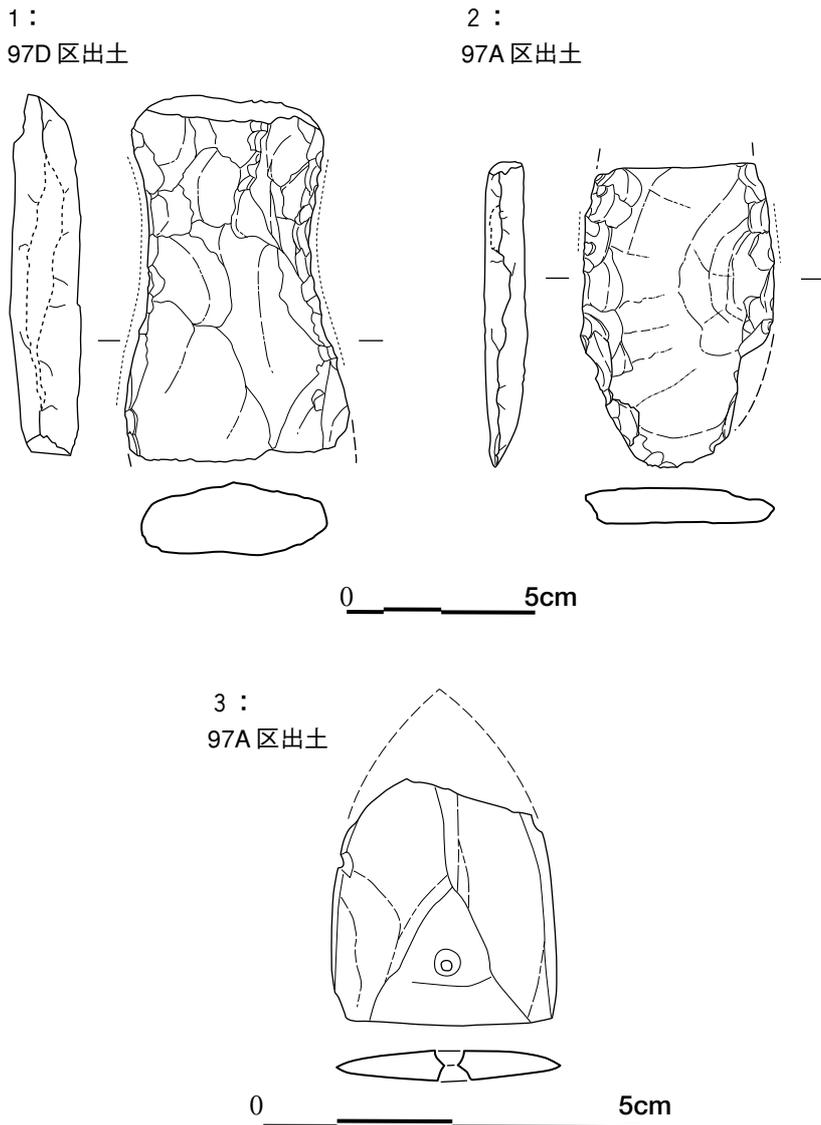
図 2 -3 96BC 区出土  
弥生土器



2 :  
SD18 底部  
出土細頸壺

1 :  
SD14 出土  
平底甕

図2-4 弥生石器実測図



弥生時代に属すと考えられる石器には、打製石斧、磨製石鏃、タタキ石、下呂石剥片、残核などがある。

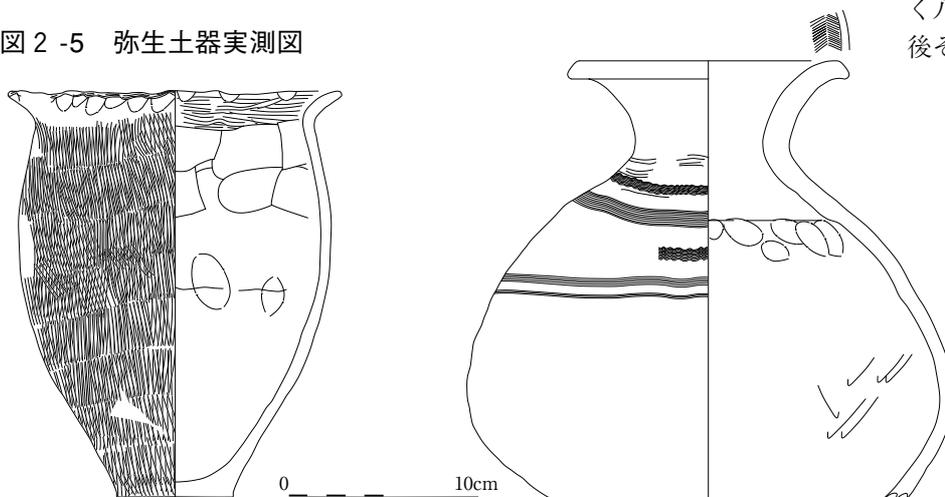
打製石斧は确实2点で、可能性があるものの断定にいたらない破片も若干ある。所属時期は弥生前期であろう。図2-4:1は身の上半部で刃部を欠損している。表面の風化が著しい。彎曲する側縁には小さな剥離が集中し潰れている。図2-4:2はあまり風化していない。刃部側の破片で基部を欠損している。

磨製石鏃は1点出土した。図2-4:3は先端部を欠損しているために所属時期の細かな判断はむづかしい。側縁が直線的ではなくややふくらむことから弥生後期に属す可能性が高い。穿孔は両側から行われている。

弥生土器は、中期に属すものは96BC区出土例に限定される。前期に属すものは2点出土し、遠賀川系B類壺片と削痕系甕片である。

後期は96F区から壺・甕が出土した。図2-5:2は口縁部内面にハケメ羽状紋、体部に直線紋や波状紋などの櫛描紋が施された壺で、頸部の屈曲が弱いことから後期初頭から前葉に属す資料と考えられる。一緒に出土した甕も山中式に先行する特徴をもつ。当該期は従来からその存在は伺えたものの痕跡程度であり、資料が不十分であった。今回の出土状況がその理由をよく示している。なお、類例はようやく八王子遺跡でまとまって出土し、今後その詳細が明らかになるであろう。

図2-5 弥生土器実測図



1 :  
96BC区  
SD14出土平底甕

2 :  
96F区出土壺

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

96F区と96L区で、古墳前期の土坑を3基検出した。うち2基には堆積層上部に古墳前期の土器が投棄されていた。

96F区-SK08は截頭円錐形を逆にした形態で、廃棄後の侵食によるのか壁面は凹凸が著しい。

最下部は砂層に達しているわけではなかったが、形状から井戸の可能性が高いと考える。

同じ96F区のSE07は断面がロート状を呈し、古墳前期の構造物が抜き取られた井戸の形状に近いことから、当初から井戸と認定した。

96L区-SK02は前者に比べていささか大きく、深さもあるようだ。残念ながら湧水のために底部の調査は断念したが、堆積層も複雑で、井戸としてよいのか心もとない。

96L区ではSK02に重複して溝SD07

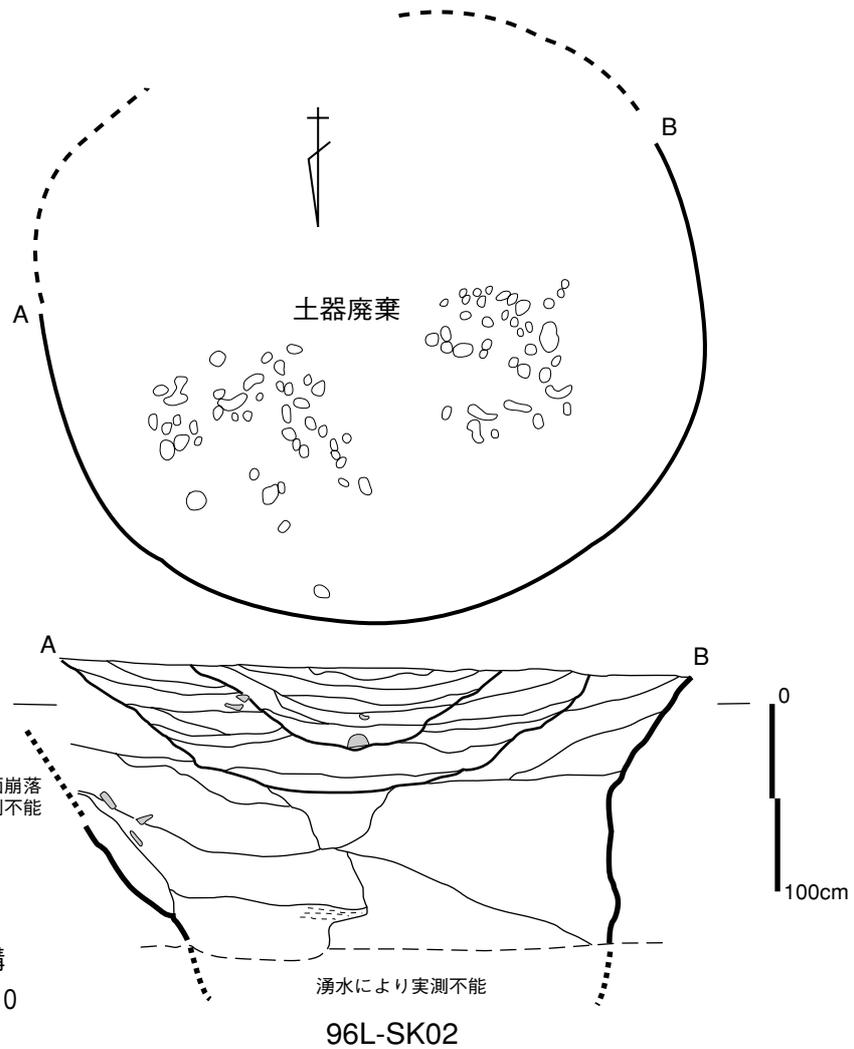
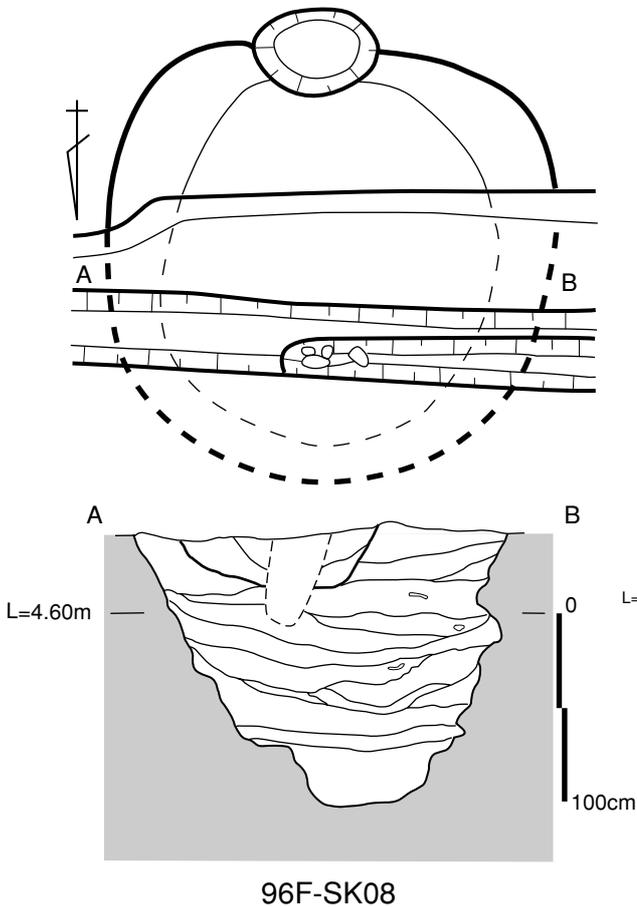
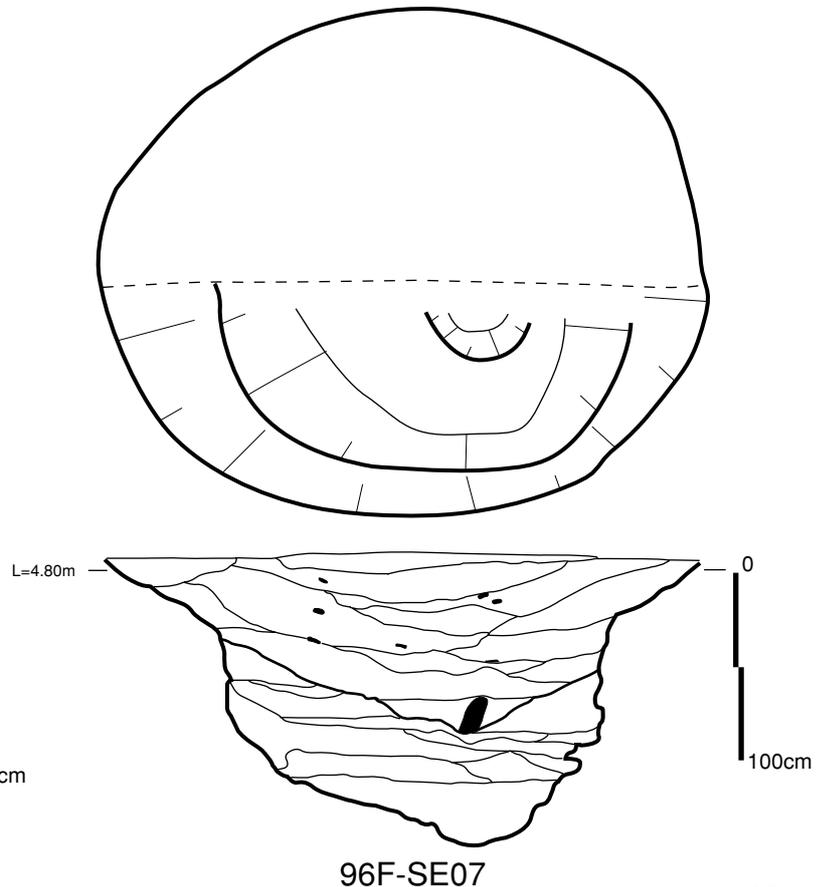


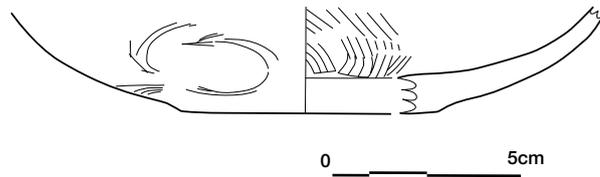
図2-6 古墳時代井戸状遺構  
プラン・セクション 1/40



96F-SK08



96F-SE07



97B-D07-270

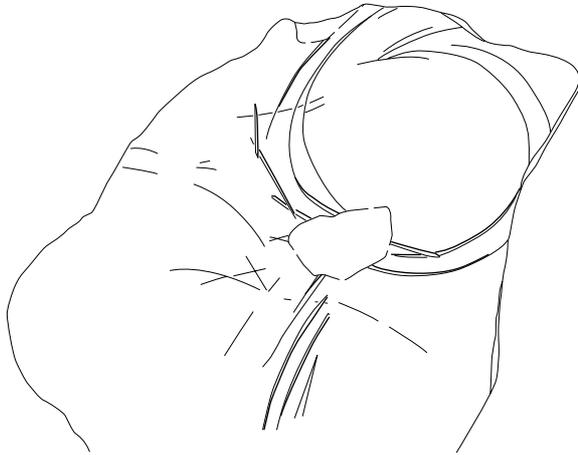


図 2 - 7 97B 区出土  
線刻土器実測図

が検出された。検出時には深さ約 10cm と痕跡程度にしか過ぎなかったが、方位性が窺えたことから八王子遺跡の同時期の遺構軸線と比較した結果、対応関係にあると考えた。

96F区も含めて周辺はすでに大きく削平されてしまっているが、八王子遺跡の古墳時代集落の南限をこの SD07 に当てるとともに、SD07 が集落を区画する溝であった可能性についても指摘しておきたい。

古墳時代の遺物は、97A 区で前期土器が比較的まとまって出土した他、96H 区でも自然地形の窪地から二重口縁の赤彩壺片が出土した。96H 区の窪地は隣接する北川田遺跡との関係から当初は人工施設（墳墓の周溝）の可能性も考えたが、掘削を進めると最終的には不定形となった。この窪地は旧流路が侵食した窪地であった可能性が高く、同例が八王子遺跡でも散見される。

図 2 - 7 の線刻土器は近世溝から出土した。壺の底部片で、外面にはススが付着している。

線刻は非常に細い線で描かれている。ラフスケッチのように複数の線が認められる。

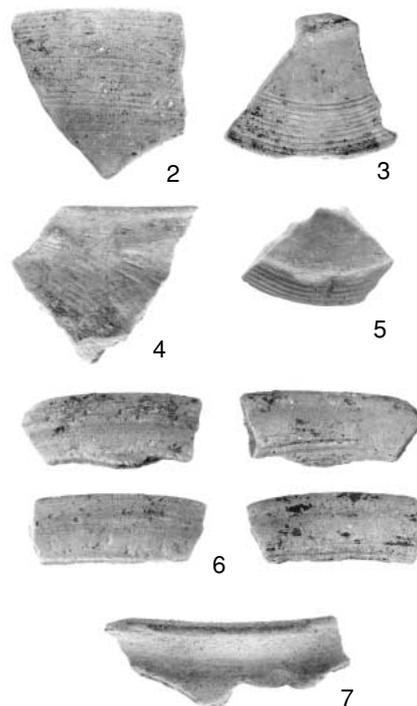
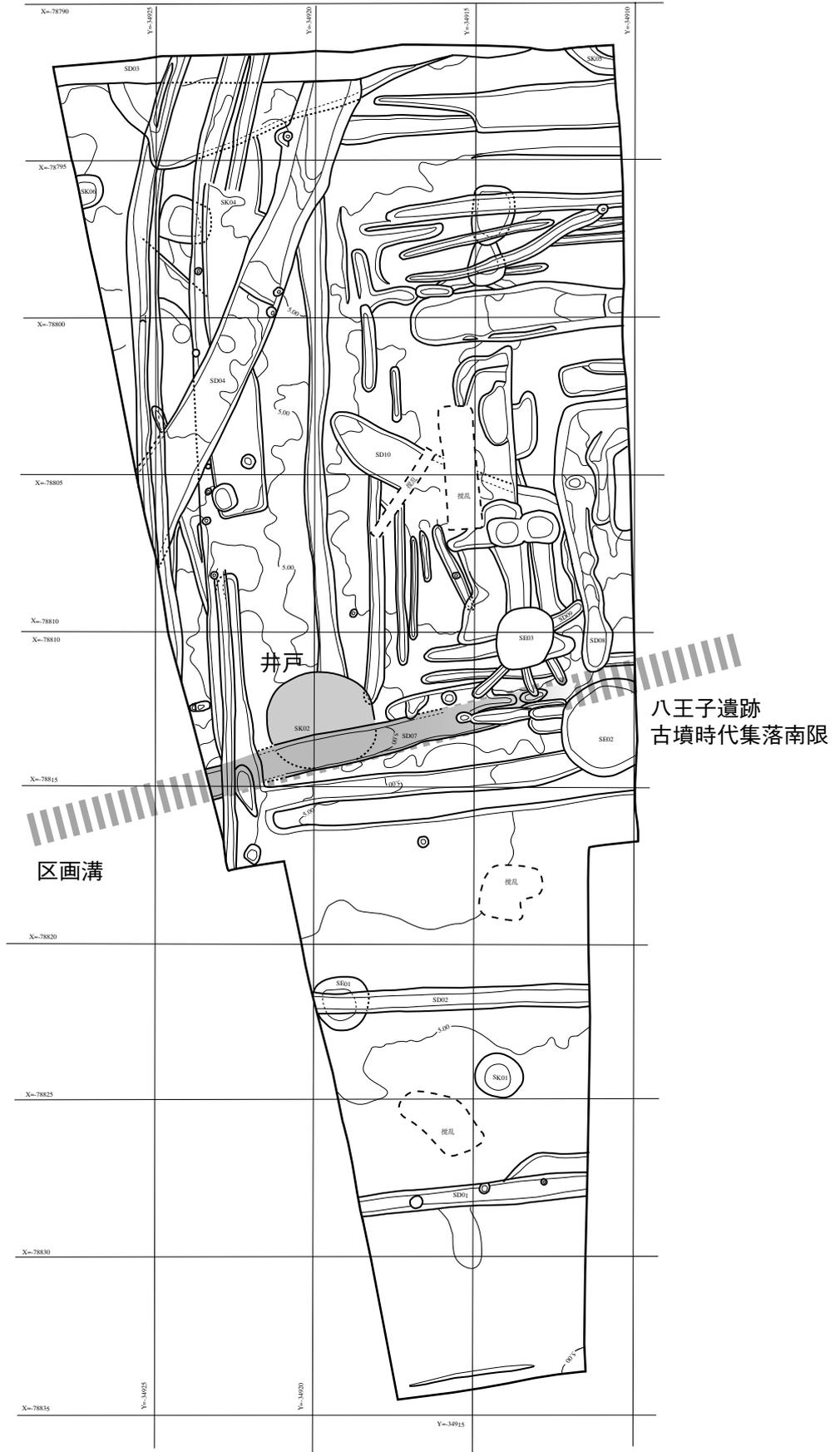


図 2 - 8 97A 区出土土器

図 2 - 9  
 96L 区古墳前期遺構  
 1 / 200



## 第4節 古代・中世の遺構と遺物

古代の遺構はこれまでのところ見つかっていない。だが、遺物は散漫ながら97D区、96H区で出土しており、調査範囲以東の旧河川左岸域に古代の遺構群が展開する可能性もある。

中世は後半期を中心に古代以前よりは遺物出土量も多く、また井戸や溝などの遺構も検出されており、散居的な集落の様相が窺える。

以下では個別の遺構について解説しよう。

**96BC区**ではSE12を検出したが、近世井戸SE09の掘り方によって大きく破壊されていた。曲物の残存が認められたことから井戸と認定した。

SD38はSE12に重複する溝である。断面が逆台形を呈するSD40・42は96BC区の北端で拡張区として調査した範囲でみつかった溝である。SD40は砂層を埋土とする溝で、河川に連続していたと考えられる。

**97B区**では調査区の北端で蛇行する溝SD08を検出した。断面は逆台形でしっかりしている。

**96D区**ではSD17を調査区の南壁際で検出した。壁面は急激に立ち上がり、断面は箱型である。

**97A区**では調査区のひとつが破壊されていた状況下で、SD14・16・23の3条の溝を検出した。SD23はやや溝幅が広く、他は重複して掘削されている。断面形はU字形で、けっしてしっかりしたつくりではない。ただし同じ場所に重複して掘削されていることからみて、主要な軸線を共有する区画溝であった可能性が高い。

**96F区**ではSE06が、掘形底部から曲物の断片が出土したので、井戸と認定した。中世の陶器類が出土した。

**96L区**ではSE02の抜き取り穴が認識できなかったために掘形を掘り下げた。しかし下部では湧水のために調査

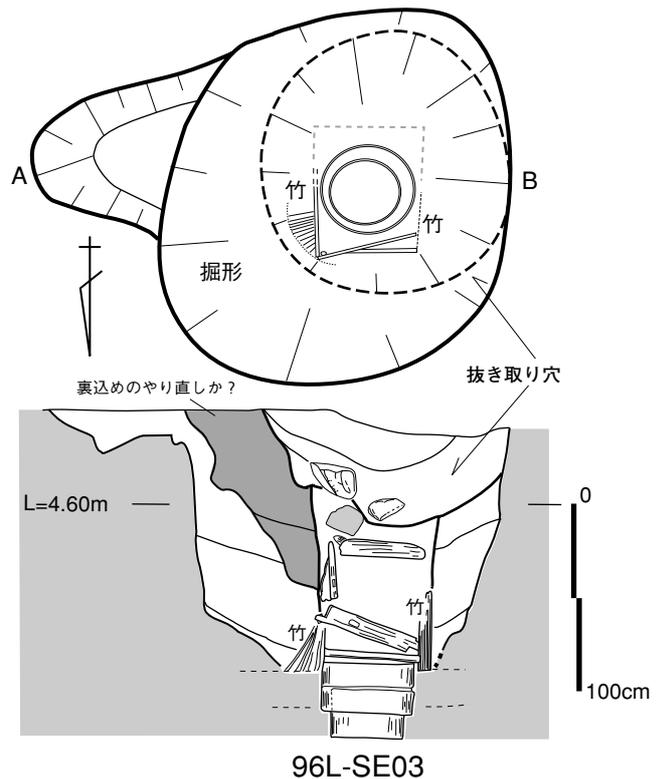


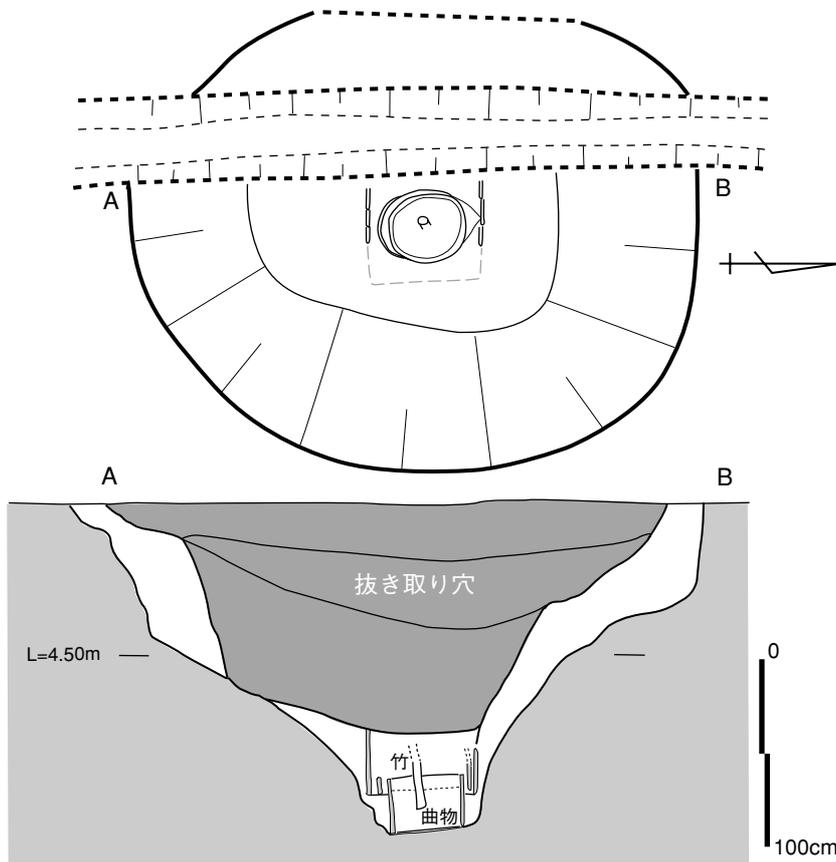
図2-10 中世井戸  
プラン・セクション  
1/40

を十分に行なうことができなかった。底部付近で砥石が出土した。

いっぽうSE03は、上部には横棧がそれほど崩壊せず遺存し、下部には曲物が残っていた。曲物は3段あり、上1段目の外側には竹が立て並べられていた。ただ一部は掘形側にはみだしており、板組の崩れを修復した際にそのまま棄て置かれたものようである。作り直しが認められる珍しい例といえよう。東側に張り出した舌状の段は作業時の足場か。

96L区ではこの他に溝が直交して配置されている様子がおぼろげではあるが認められ、図2-12のように推定した。屋敷地割りにしては小規模な区画であり、集落に直接関係するのかわからないが、軸線の存在は窺えよう。

図2-11 中世井戸  
プラン・セクション  
1/40



96H-SE03

図 2 -12  
 96L 区  
 中世区画溝  
 1 / 200

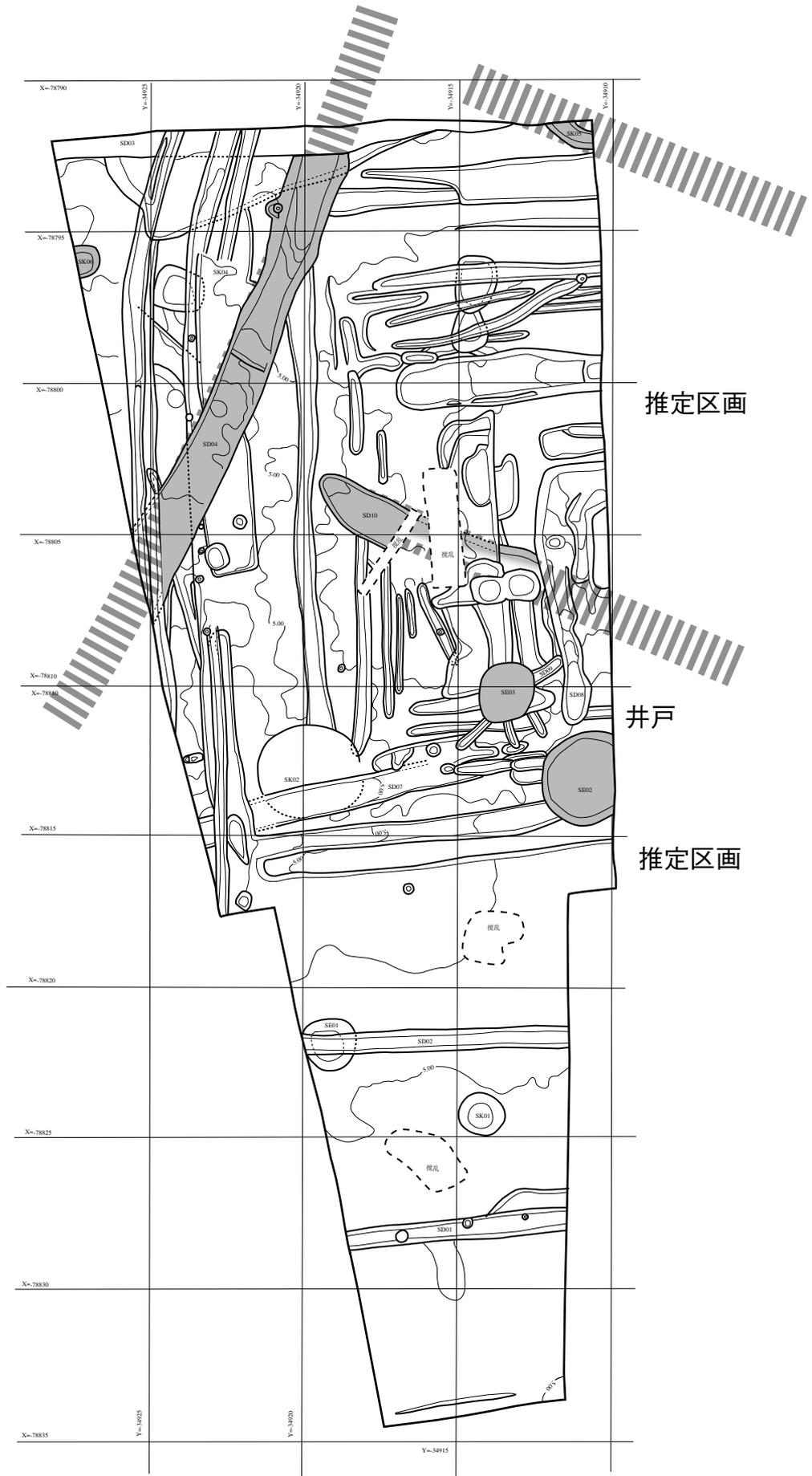


図 2 - 13  
 97D 区  
 旧河川と区画溝  
 1 / 2 0 0

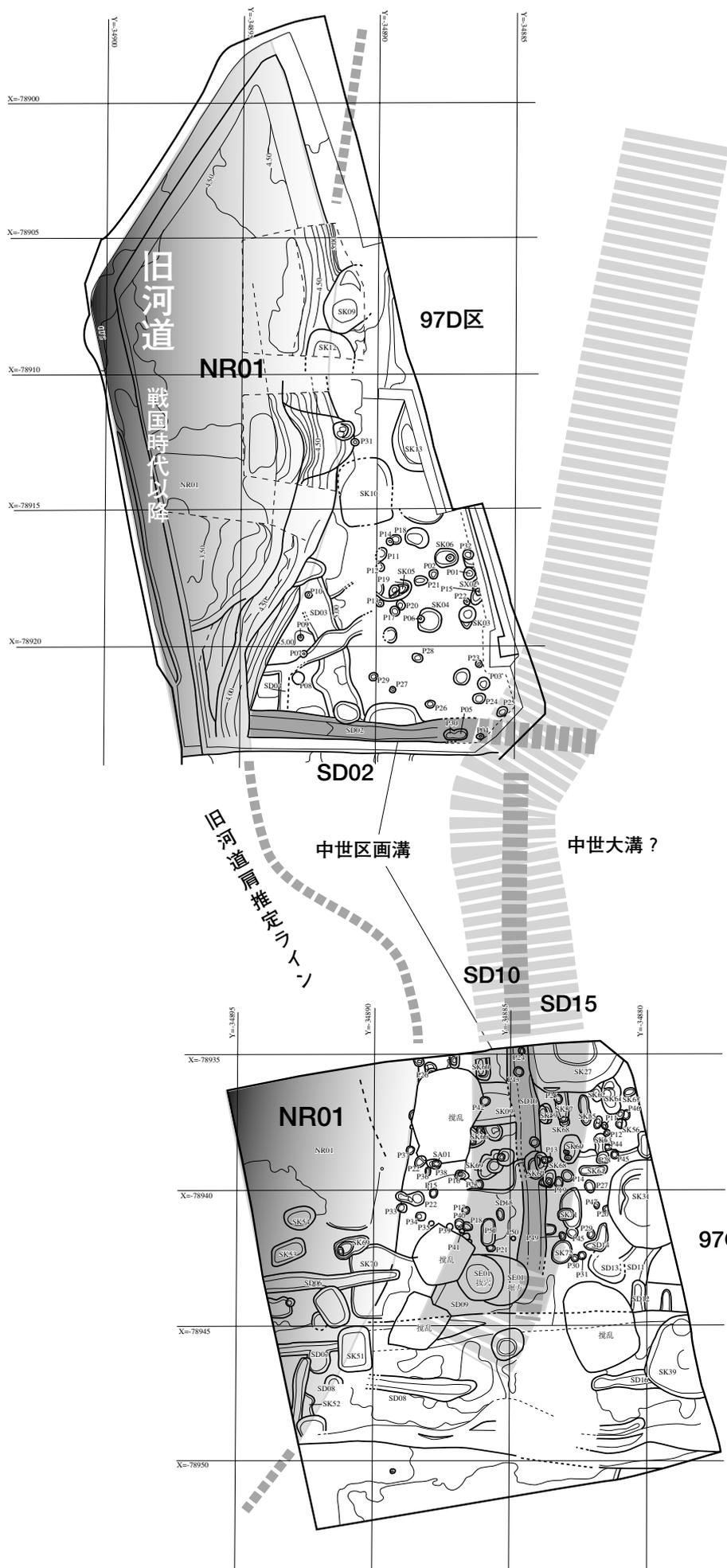
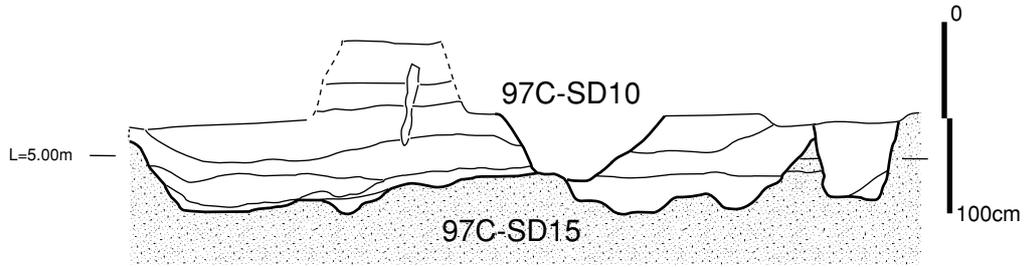


図 2 -14  
97C 区  
中世溝  
セクション  
1 / 4 0



97D区では南壁際で東西方向に走る溝SD02を検出した。断面は扁平な逆台形である。平面的には検出できなかったが、調査区南東端で後述する97D区のSD10・SD15に対応すると考えられる溝状の落ち込みを確認した。

97C区では幅3.5mの比較幅の広い大溝SD15を検出した。底面は起伏があり整ったものではない。中世の溝であるSD10が重複して掘削されていることからそれ以前に掘削されたことは確実であるが、古代にまで遡るのかどうかは明らかでない。

本来の掘り込み面は検出できなかったが、当初規模はより大きな溝であっ

た可能性がある。

97D区・97C区における遺構の相互関係を図2-13のように復元した。97C区-SD15は旧河川に平行して掘削されている公算が大きいと推測したが、NR01そのものは戦国時代以降の遺物が主であって、時期的に不整合となる。この点に関しては、もともと南流していた小河川を戦国時代に荊安賀城造営時に堀の一部として取り込むかたちに改修したと考える。

96H区ではSE03とSD09を検出した。SE03は構造物が抜き取られた際に大きく掘り返されたことが土層断面から確認できた。曲物は最下部の2段

が遺存していた。

SD09は微妙に蛇行する溝で方位性は窺えない。この他96H区では陶器類の出土が目立ったものの、ほとんどが遺構外から遊離して出土したもので、当地区の特徴を伺うには至らなかった。井戸が検出されたとはいえ、生活感は認められない。

## 第5節 戦国・江戸時代の遺構と遺物

戦国から近世にかけての遺構・遺物は今回の報告の中心をなすものである。96BC区から以下主要な遺構について説明する。

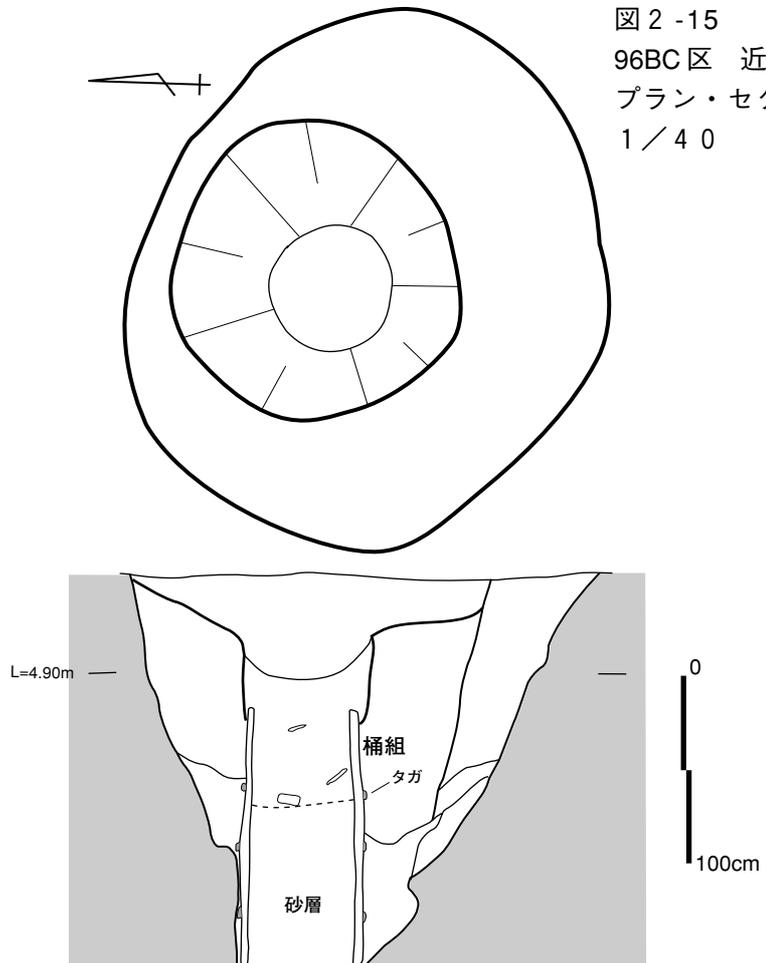
96BC区では井戸が7基検出されたが、いずれも調査区北部に集中していた。とくにSE02、SE03、SE04、SE05、SE08、SE10は掘形が重複しあって、良好に確認できたのはSE05のみであった。いずれも廃絶時の廃棄行為は認められず、97BB区や97C区とは対照的であった。

SE05は桶組で1段のみ検出した。ほかの井戸も基本的には桶組であったようで、桶そのものは抜き取られて無くなっていた場合でも、桶の形に抜き取られた跡に竹のタガがそのままの状態に遺存しているものが多くみられた。

井戸はその多くに砂の噴出が認められた。砂は桶内部のかなりの高さまで上昇しており、そのこともありタガが遺存していた。

おそらく、地震に因る噴砂が廃絶の原因であったと思われる。

図 2 -15  
96BC 区 近世井戸  
プラン・セクション  
1 / 4 0



96BC-SE05

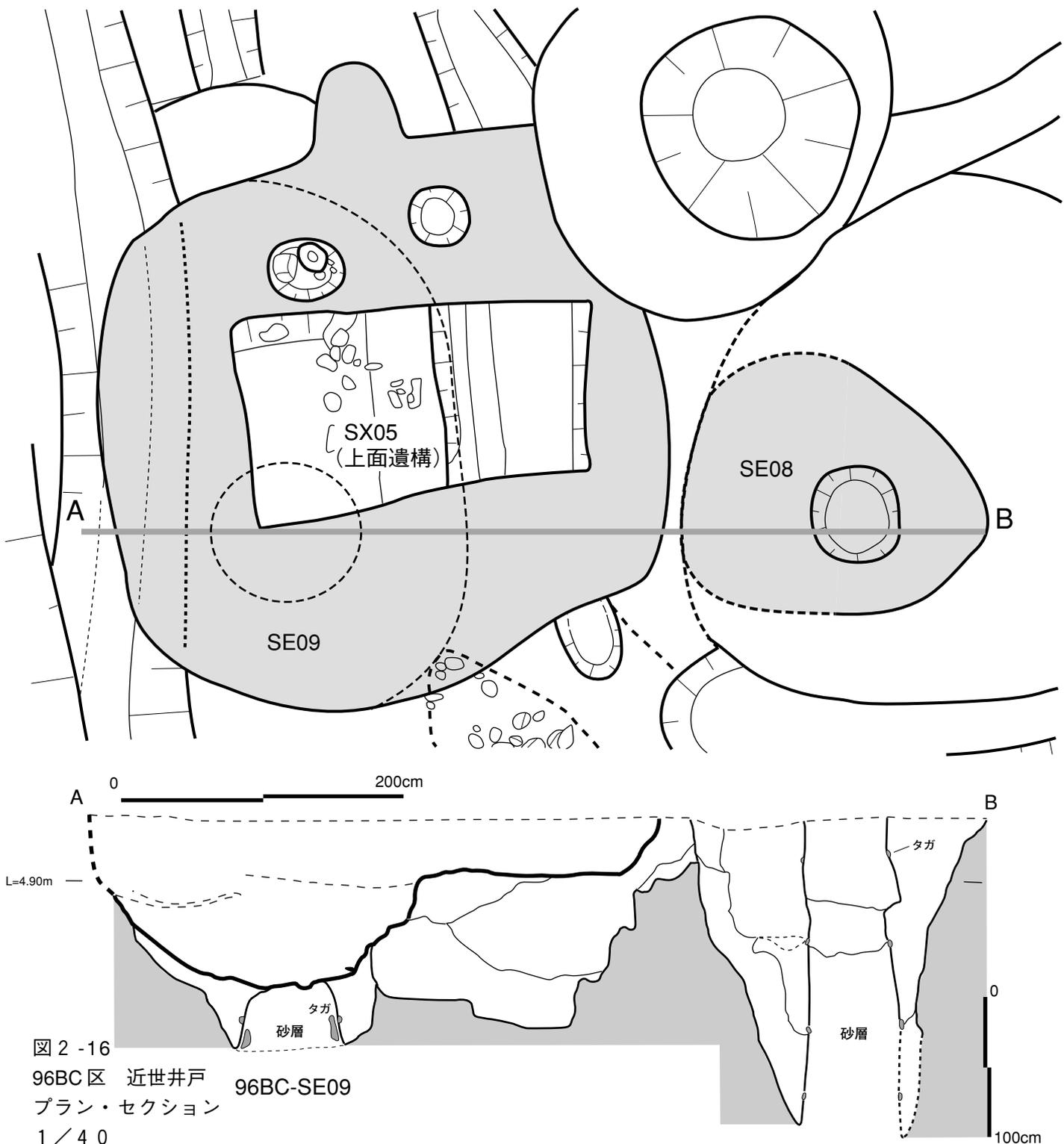


図 2 - 16  
96BC区 近世井戸 プラン・セクション  
1 / 4 0

96BC区では基本的な区画になると  
思われる溝が検出された。

SD29は井戸群に接して東西に掘削  
されており、幅は約4mと広い。溝底  
面は不安定で乱れており、地震の影響  
を受けているようである。

遺物は木製品がまとまって出土した  
ものの陶器類の出土は少なかった。遺  
構の重複関係からみて最初期に遡るも  
のである。

埋土は有機分が濃厚で、澱み状で

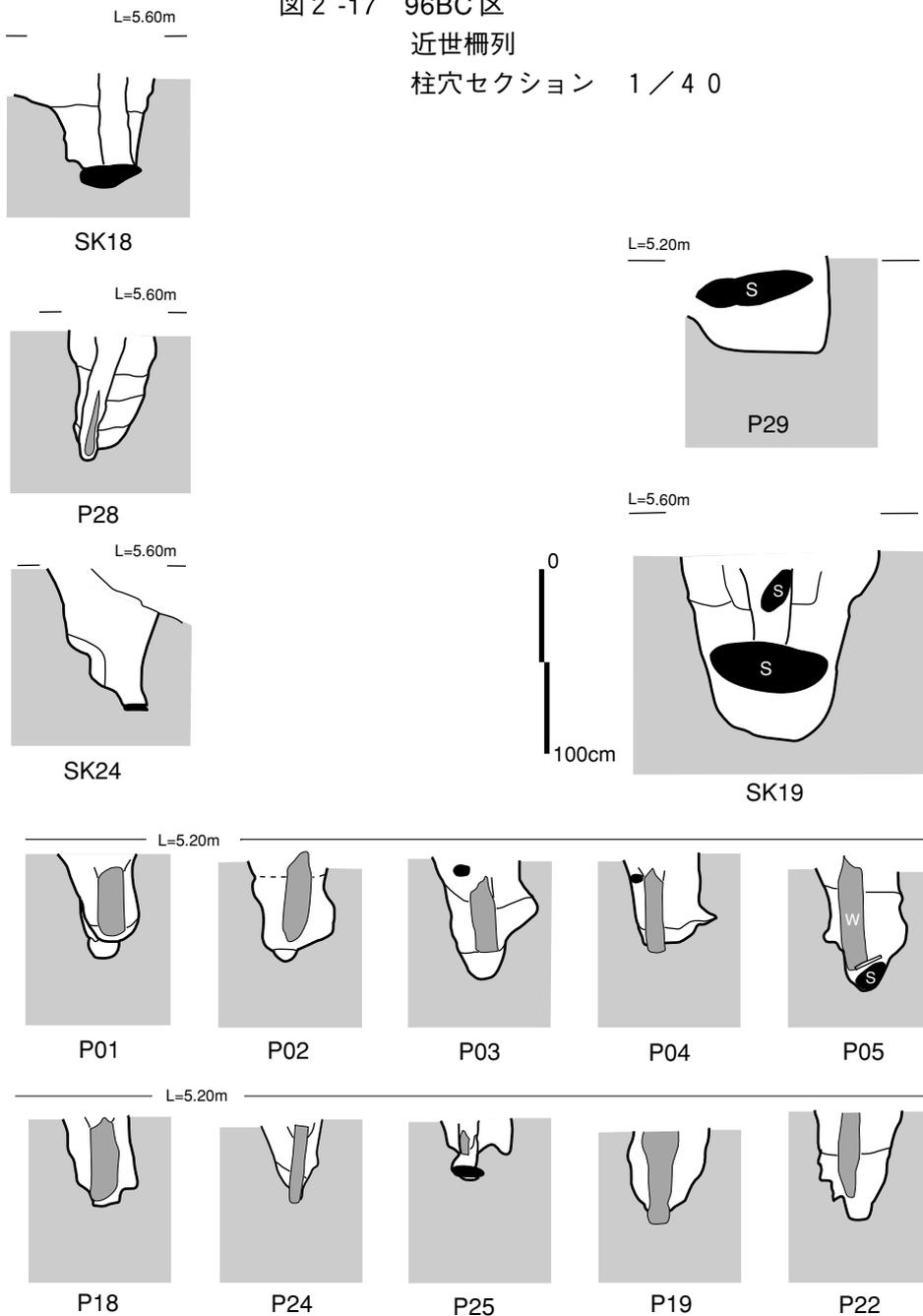
あった。96BC区では建物に関係する  
と考えられる柱穴などがSD29以北に  
密集する傾向にあり、地割規制の基準  
であった感がある。

SD04、SD22、SD23は相互に規制  
しあう位置関係・プランを示してい  
る。ちょうど要の位置にあるSD15は  
溝というよりは大きな落ち込みで、内  
部からはほとんど遺物が出土しなかつ  
た。しかも廃棄土坑ではない。それ  
に対してSD22上部からは炭化物ととも

に大量の陶器類が出土した。出土した  
陶器類には比熱したものが含まれてお  
り、火災に伴う廃棄であった可能性が  
ある。

隣接するSD16東端の土坑状の部分  
からも陶器類が大量に出土した。年代  
は18世紀代におさまるもので、SD22  
と同様に被熱して変色したものも含ま  
れていた。

図2-17 96BC区  
近世柵列  
柱穴セクション 1/40



96BC区では柵列を3条検出した。SA01は柱根や根石を遺存した柱穴が直線的に並ぶもので、間隔は140cm～160cmとばらつきがある。柱根は方柱状であり、円柱状のものは無かった。SA01下部には軸線を一致して重複する溝があり、それは調査区中程でSD17に接続する。

SD17は底面西寄りに幅の狭い布掘り状の溝が走り、その軸線がちょうどSA01の並びに一致していることから、SA01に先行する何らかの区画施

設—おそらく堀か—が存在した可能性が高い。ただ、SD17すべてがSA01の延長とはいえないので、途中で西に折れるか、南側を閉じない区画であった可能性がある。なお、便宜上「柵列」と呼称しているが、SA01に関しては土堀もしくは板堀の基礎部分であったと考えている。

SA02は柱穴の間隔も狭く、柵であった可能性が高い。

SA03は南北列のみ確実で、東西南方向は不明である。並びの中心に位置す

るP26から土師皿が埋納状況で出土したことから建物の一部（束柱）であった可能性も考えられるが、よくわからない。軸線はほかの2条に一致しており、独立することはない。

SA03は、SA01のほとんどに柱根が遺存していたのとは異なり、柱根はまったく出土しなかった。そのかわり、P26から土師皿が出土した。口縁部には黒色の付着物があり、未使用ではない。

ロクロ成形で底部には糸切痕が認め

図 2 -18  
96BC 区  
柱穴セクション  
1 / 4 0

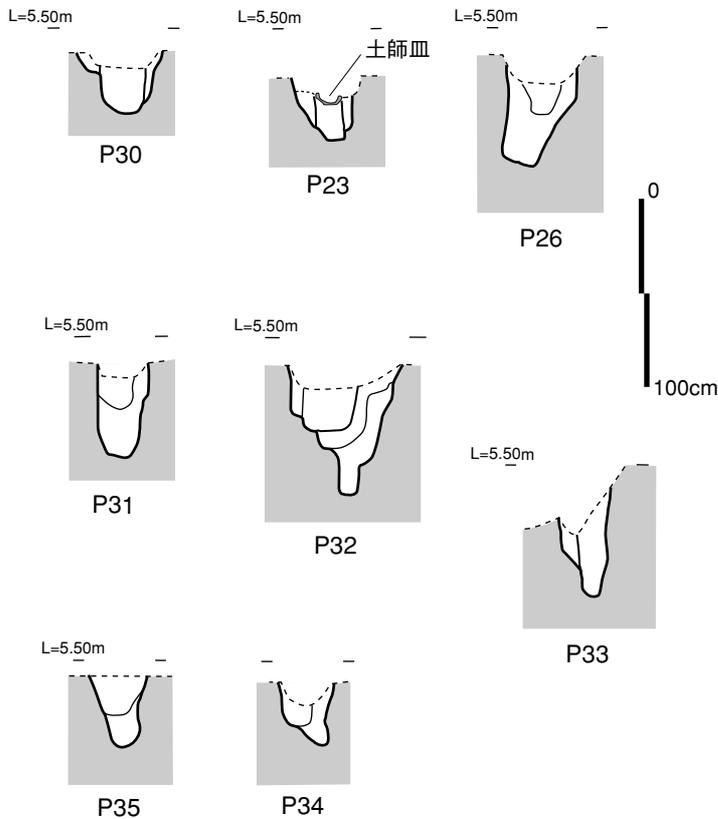
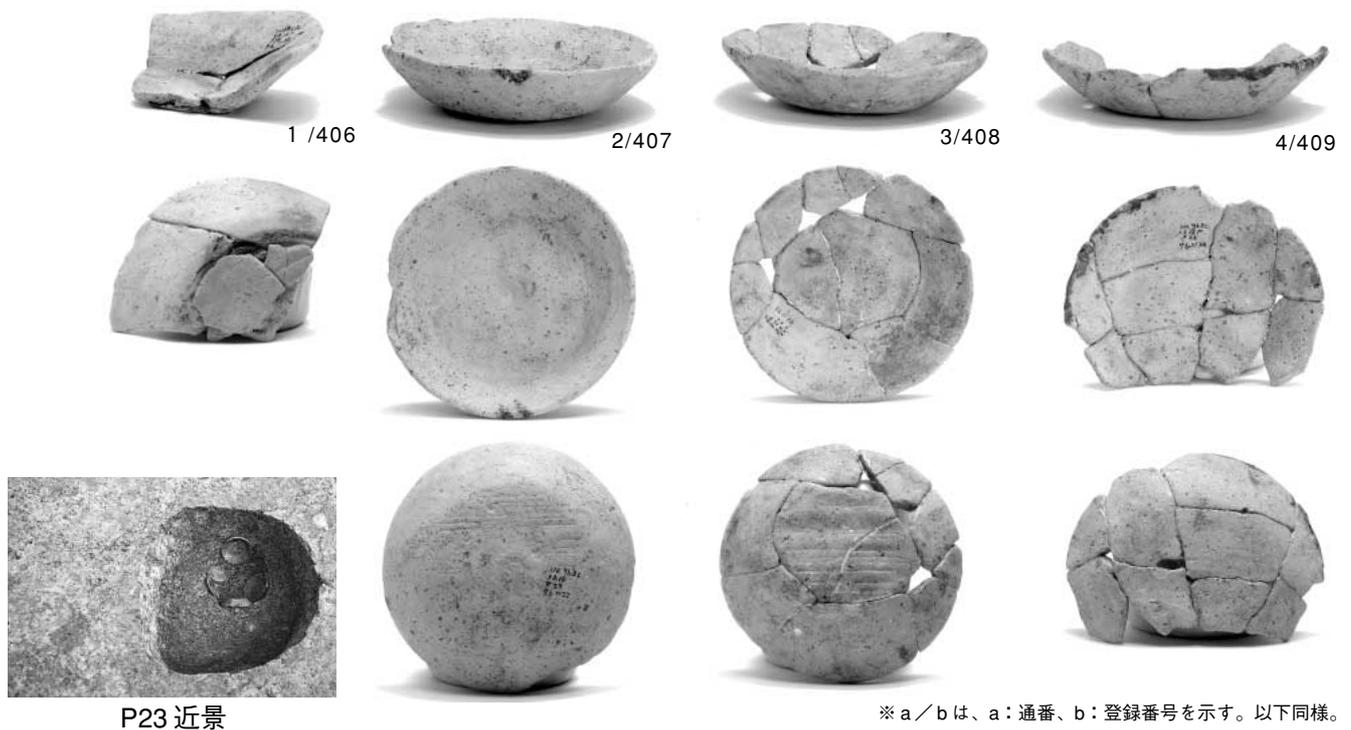


図 2 -19  
96BC 区  
P23 出土土師皿



られる。そのうち407・408には板目痕が認められる。

建物はSB01・SB02の2棟を復元したが、確証は無い。

SB01は近世遺構群とは軸線がややずれるが、小屋程度の規模であり近世に属すと考える。

同じくSB02も軸線がずれている。弥生時代の遺構であるSD18以南に位置しており、また付近で弥生土器が出土していることから时期的に遥かに遡る可能性もある。

96D区では大溝SD01を検出した。検出時の底面幅約3.5m、上端幅約7m、深さ約1mであった。

SD01の堆積層は複雑で、人為的な埋め立てによる溝の縮小過程に自然堆積も伴っている。

SD01aの最下面は砂層に達し、層位がやや乱れている。最下層は自然堆積層で、植物片を含み、砂層のラミナが含まれており、旧河川に接続していたと考えられる。中層は斑土を含む整地層で、南からの流入が認められる。

SD01bは幅約4mでかなり縮小している。複数回の掘り直しが土層断面から伺える。上層には整地層があり、19世紀後半の遺物が出土した。

そして最後が近現代の溝で、当初は素掘溝、後に板で側壁が作られてい

図 2 -20  
96BC 区  
近世遺構  
セクション  
1 / 4 0

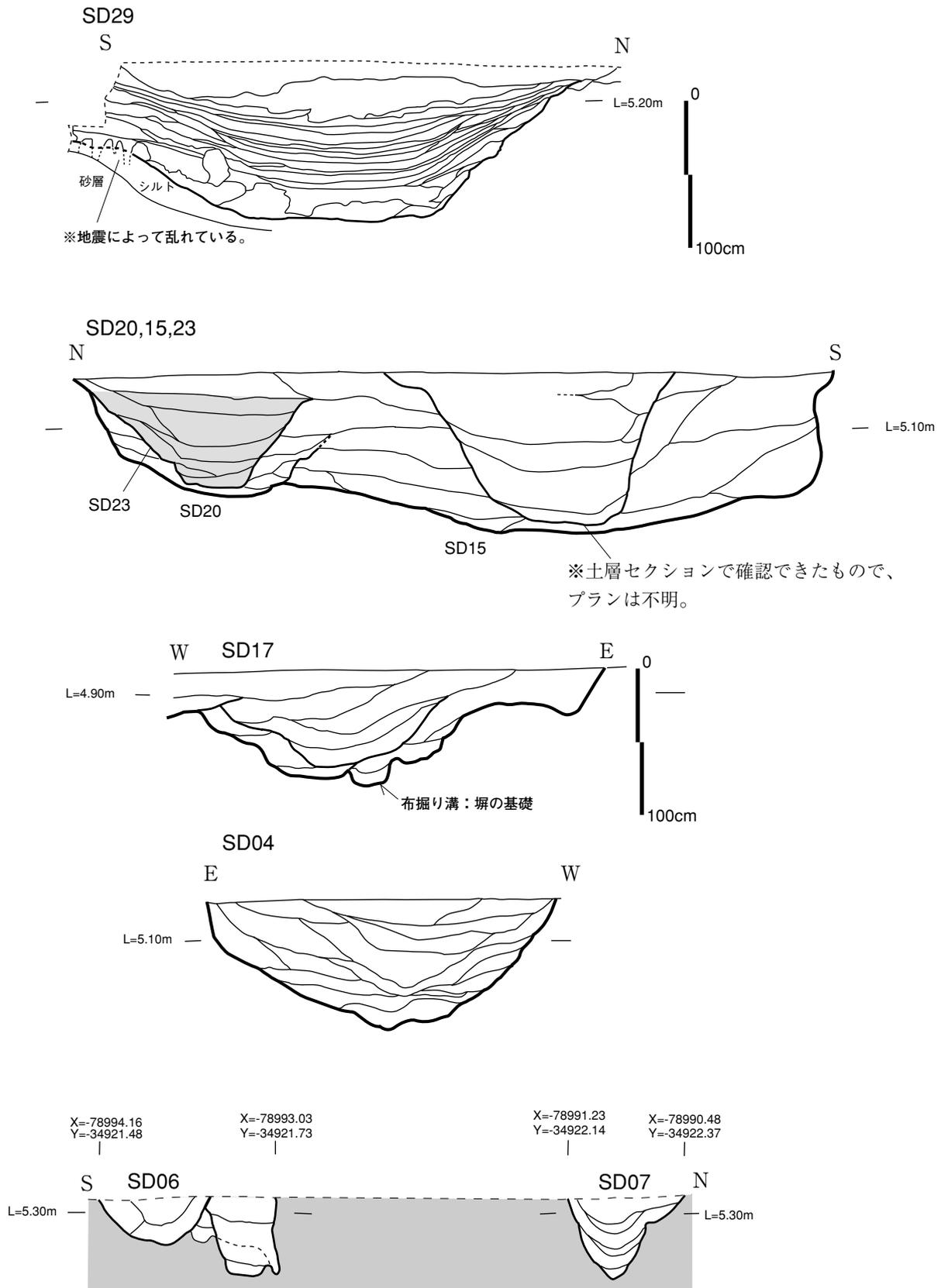
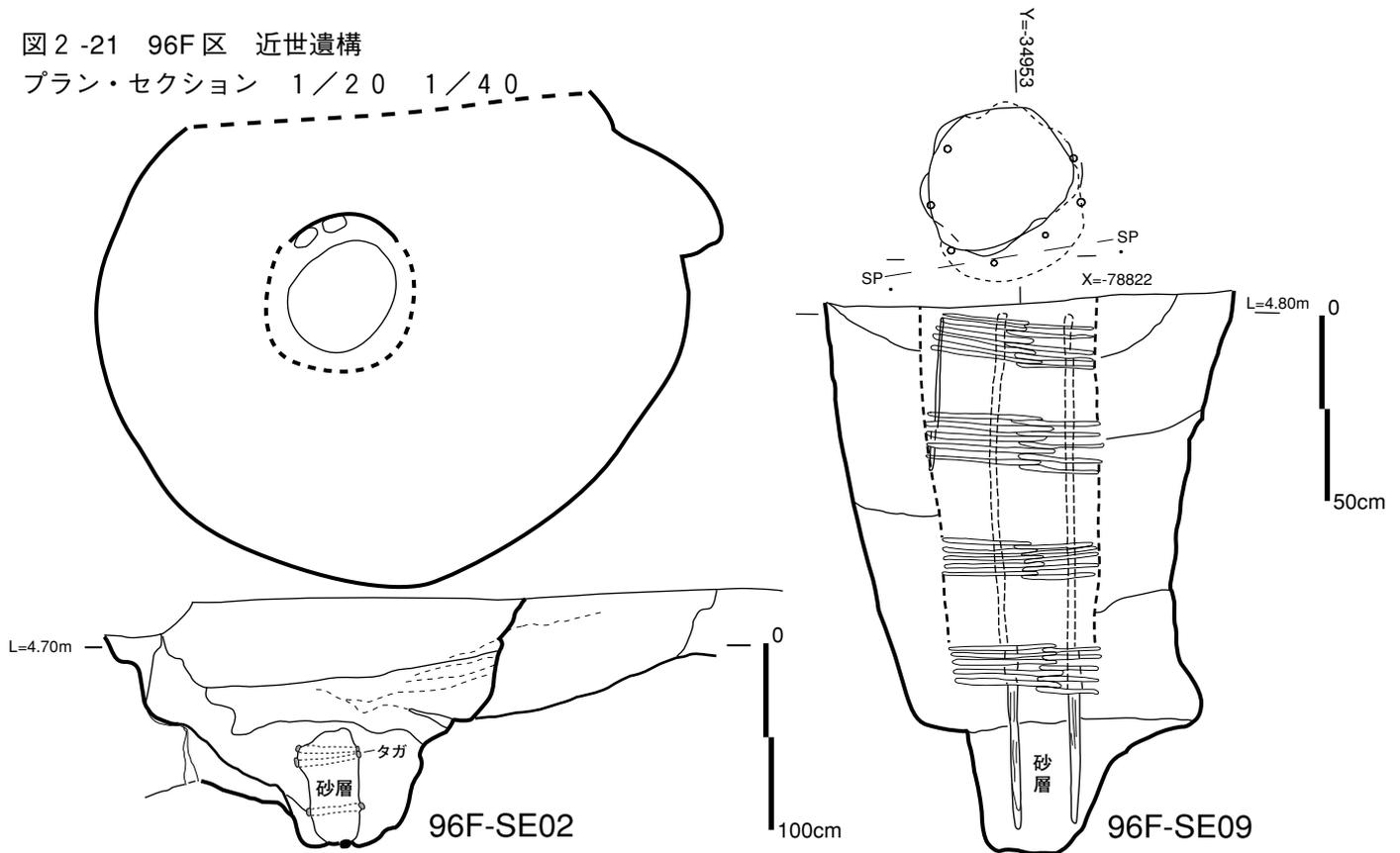


図2-21 96F区 近世遺構

プラン・セクション 1/20 1/40



る。

SD01は「外堀」として伝承されてきた大溝で、苧安賀城に伴う遺構と推定される。中層に斑土を含む整地層が認められることから、土塁が南側に存在した可能性が高い。

本来の溝の規模は深さ以外は実態に近いと考える。当初の深さについては、現地表面が大きく変動していなかったとすれば、2m程度、上端幅も8mほどになろう。この規模が大きいのかそれほどでもないのかは今後の他遺跡との比較検討を待つ必要がある。

97A区は一宮市立大和西小学校の旧体育館の建設工事で調査区の大半が破壊されていた。わずかに南端で溝などを検出したにとどまる。

SD02は南側にテラスをもつ断面逆台形の溝である。SD06・SD07はその下部で検出した。基底となるSD07は幅約5m、深さ約1.2mで、96D区SD01よりは規模が劣る。最下層は灰白色砂で、その上部に植物片を含む層位がある。旧河川に接続していたと考える。

96F区では削平が激しいために井戸も底部付近が遺存したに過ぎない。

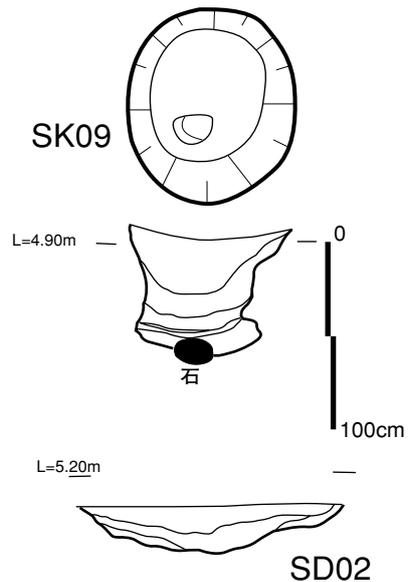
SE02は桶の抜き穴に砂が充満して形がきれいに残っていた。タガも本来の位置にあり、噴き上げた砂の圧力が強かったことを示している。

SE09は最初掘形が小さかったのでSKとして調査していたものである。掘り下げると竹を編んだようなものが見えたが腐食が進んでいたため側方からの観察を優先し、大きく断ち割って調査することにした。その結果竹を縦にして横に割竹材を交互に送り込んだ円筒形をしたカゴ状のものがあらわれた。時期は出土遺物がなくわからなかったが、江戸時代の井戸であろうと推定した。

SK09は底面に接して円礫が根石状に置かれた状況で出土したものである。内部から灰釉系椀が出土したが破片であり時期を決定するものではなかった。

SD02は底部付近が検出できたに過ぎないが大量の遺物が出土した。19世紀中ごろである。

調査区北端で検出されたSD15・16は南壁面が急傾斜で、また時期が16世紀末から17世紀にかけての遺物が破



片ながら出土したことから、苧安賀城関連の遺構である可能性がある。従来は96D区SD01が外堀に比定されていたようだが、実はそれは中堀で、96F区SD15・16が外堀であった可能性がある。

ところで、96F区には江戸時代になって心証寺が創建されたと言い伝えられる。となれば97A区のSD07は寺域の南を画す溝ということになるが、

図 2-22 97B区  
建物の復元  
プラン 1/100

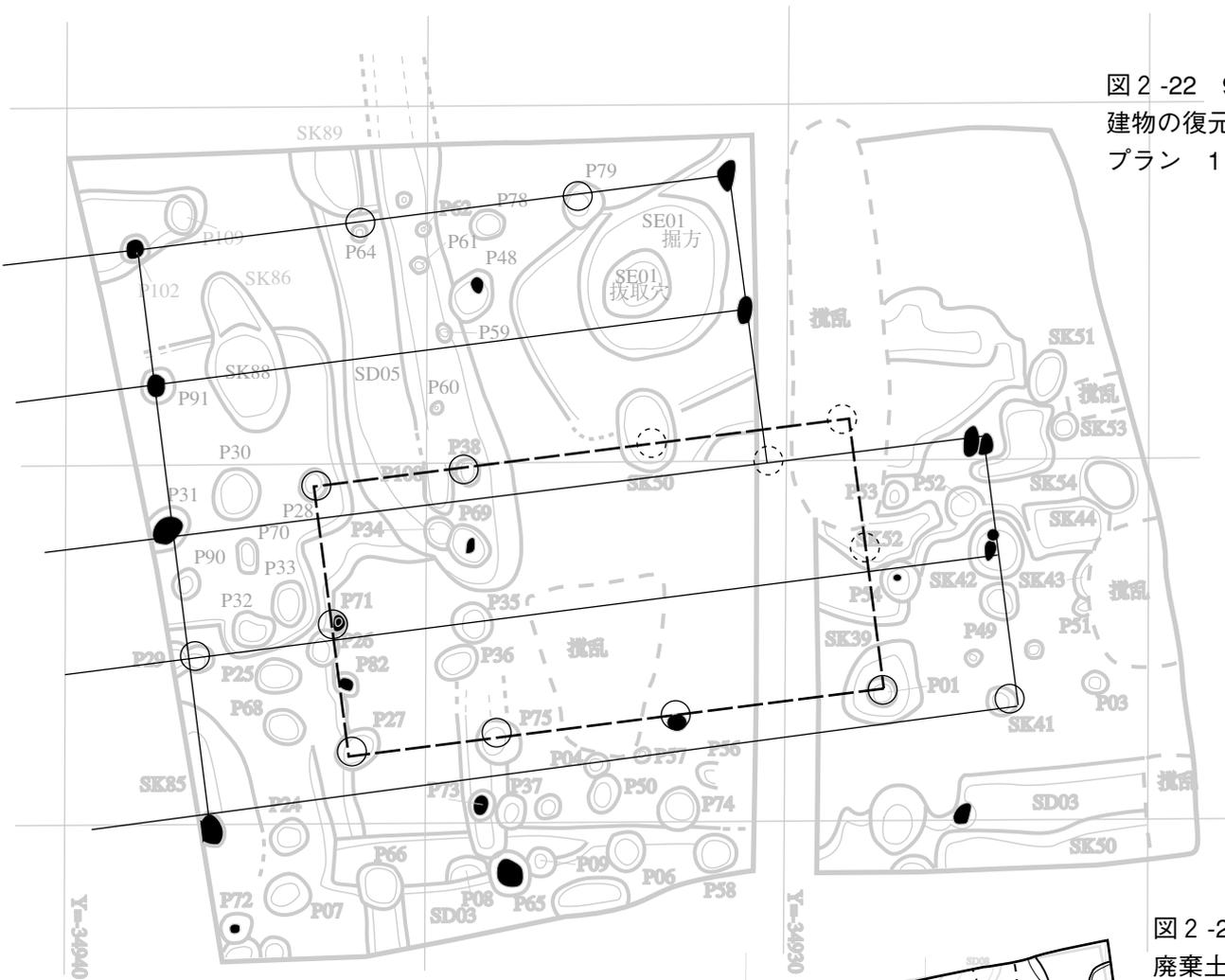
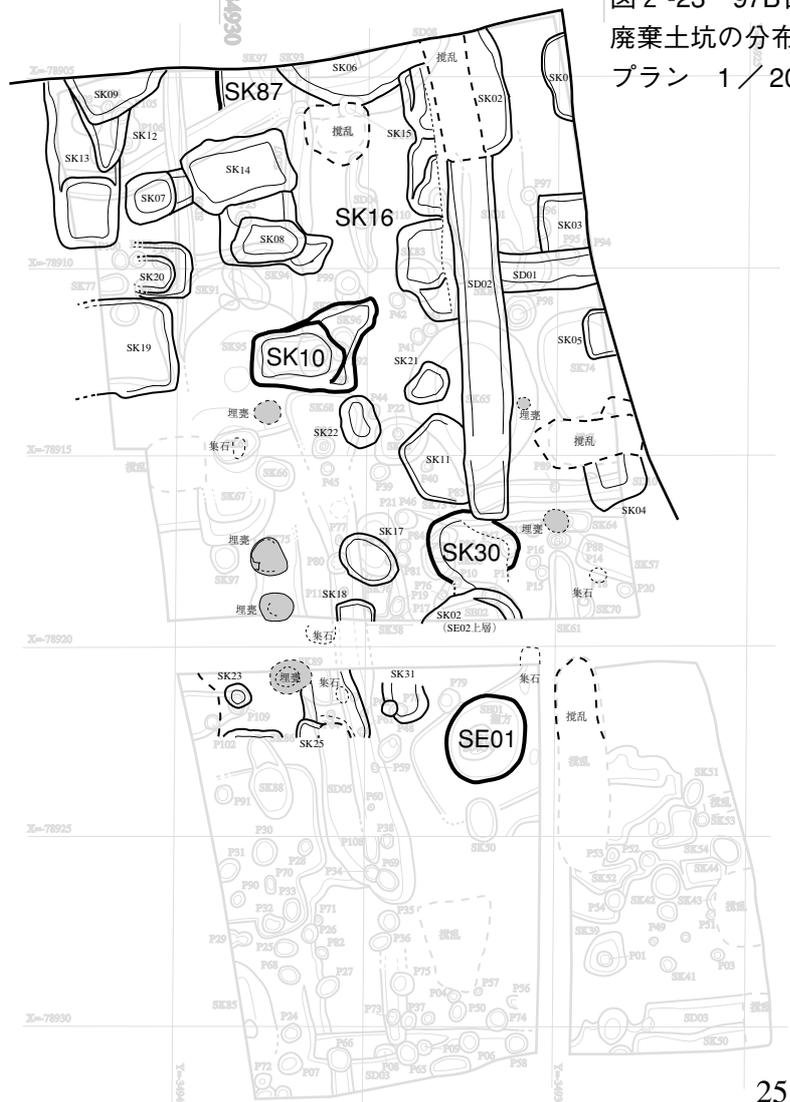


図 2-23 97B区  
廃棄土坑の分布  
プラン 1/200



むしろ心証寺の寺域を画すると考えるよりは、もともと存在した区画に心証寺が創建されたとも考えられる。この区画は南北70mほどであり、城域周辺に大規模寺院を配する織豊系城郭においてこの部分に寺院が置かれたことは十分にあり得るだろう。その成否は今後の課題である。

97B区における建物遺構の復元に関しては、調査区北部で推定した1棟以外には確定するものはない。柱通りから推定してみたものの、調査区内で完結する可能性は低く、全体像は不明であると言わざるを得ない。しかもSA01が建物に重複していることから、建物の所属時期もSA01以後ということになる。SE01の廃棄が建物建設に関連しているなら、建物には19世紀後半以降という年代が与えられる。

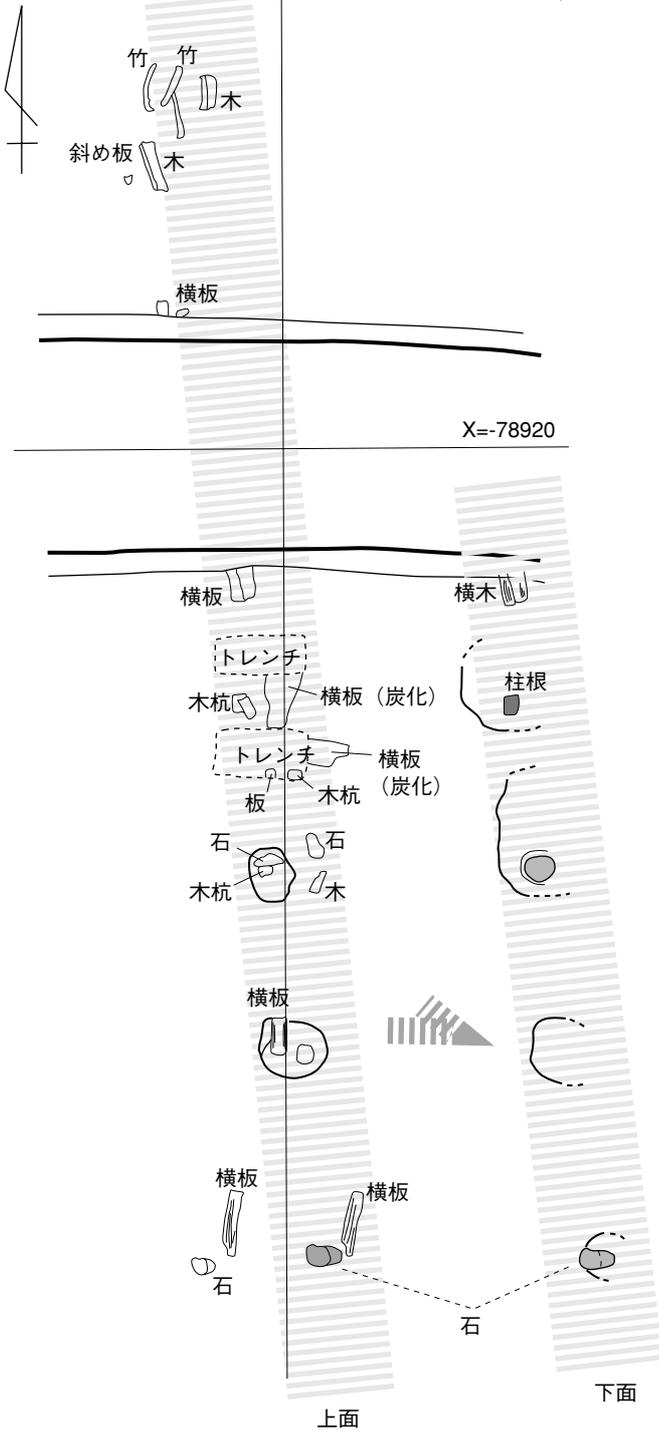
当初のSA01を基本とする屋敷地割については、それをもとにしたの景観復元について残念ながら難しいと言わざるを得ない。



97B-SA01

Y=-34935

図 2 -25 97B 区  
近世遺構  
プラン 1 / 4 0



廃棄土坑 97C-SK43



97B区では調査区南部で建物群が検出できた。根石が置かれた柱穴の規則的配列から推定したものであるが、廃棄土坑の少ないこともそのことを裏付けていよう。反対に北部に廃棄土坑が集中していたことは、その範囲が屋外であったことを示しているのであり、その点で空間利用についての成果が得られたといえる。

SA01 は溝状に掘られた基底部分に小柱穴が並び、柱根や根石、構築材の断片と思われる木片や竹片が遺存していたものである。軸線を合わせて水平に置かれた柱材も部分的に認められたが腐食が著しく全体を復元するにはいたらなかった。しかし、96BC区-SA01とは異なり水平方向に置かれた柱材があったことは、これらが塀の基礎である可能性を強く示していると考えられる。

97D区と97C区では旧河川の岸寄りを埋め立てて宅地化していった様相が整地層の状態から読み取れた。

97D区は調査区の5分の3が旧河川であったが、川沿いでの遺物出土状況に関して特徴が認められた。河川内堆積層には炭化物を含む安定した層が河岸から傾斜して堆積し、そこから出土した遺物は比較的時期がまとまっており、瀬戸美濃陶器から17世紀代前葉という年代が与えられた。その後は整地されて土坑などが掘削されることになる。

97C区では3面に分けて調査を進めた。しかし、遺構の重複の激しさとそれによる検出の困難さから、変遷過程

の詳細は掴みきれていない。

例えば井戸について言えば、上面の調査でSK(廃棄土坑)と認定したものが、下部にいたって桶組を検出したことによって井戸と確認した例がほとんどであった。96BC区や96H区では井戸からほとんど遺物が出土しなかった点と非常に対照的である。97B区では一部の井戸に廃棄が認められた程度であったから、97C区における多量の廃

棄は注目に値する。

井戸はその多くが調査区周囲の壁際で検出されており、安全面を考慮したため掘り下げを十分に行なうことはできなかった。逆に調査区中央付近で検出できた井戸が調査区内の井戸の中でもっとも新しかったことからいえば、今回の調査区の設定が旧宅地割(用地買収の単位)をもとにしている点で、近世の井戸の配列とのずれは重要な点

といえる。

96H区では調査区の北部と南部で2群(SE04・05・07、SE06・01・21)の井戸を検出した。北群の南には小ピットが並ぶ溝が2条(SD13・14)東西方向に走る。柵か塀の基礎とすれば井戸群が分離することとの関係が生じてくるが、上部構造については確定したことは言えない。

南群には現代の井戸も隣接して見つ

図2-26 96H区 近世井戸  
プラン・セクション 1/40

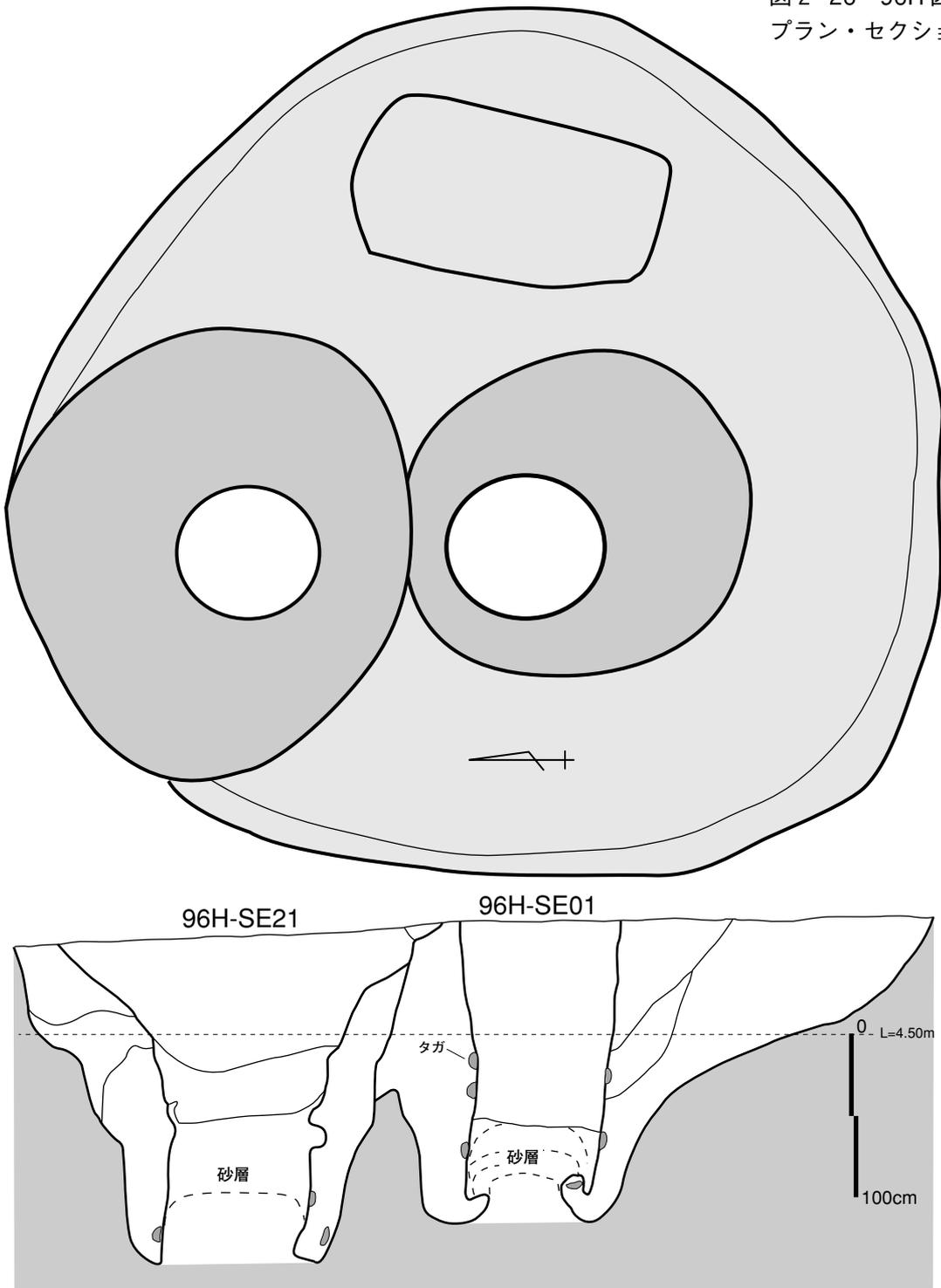
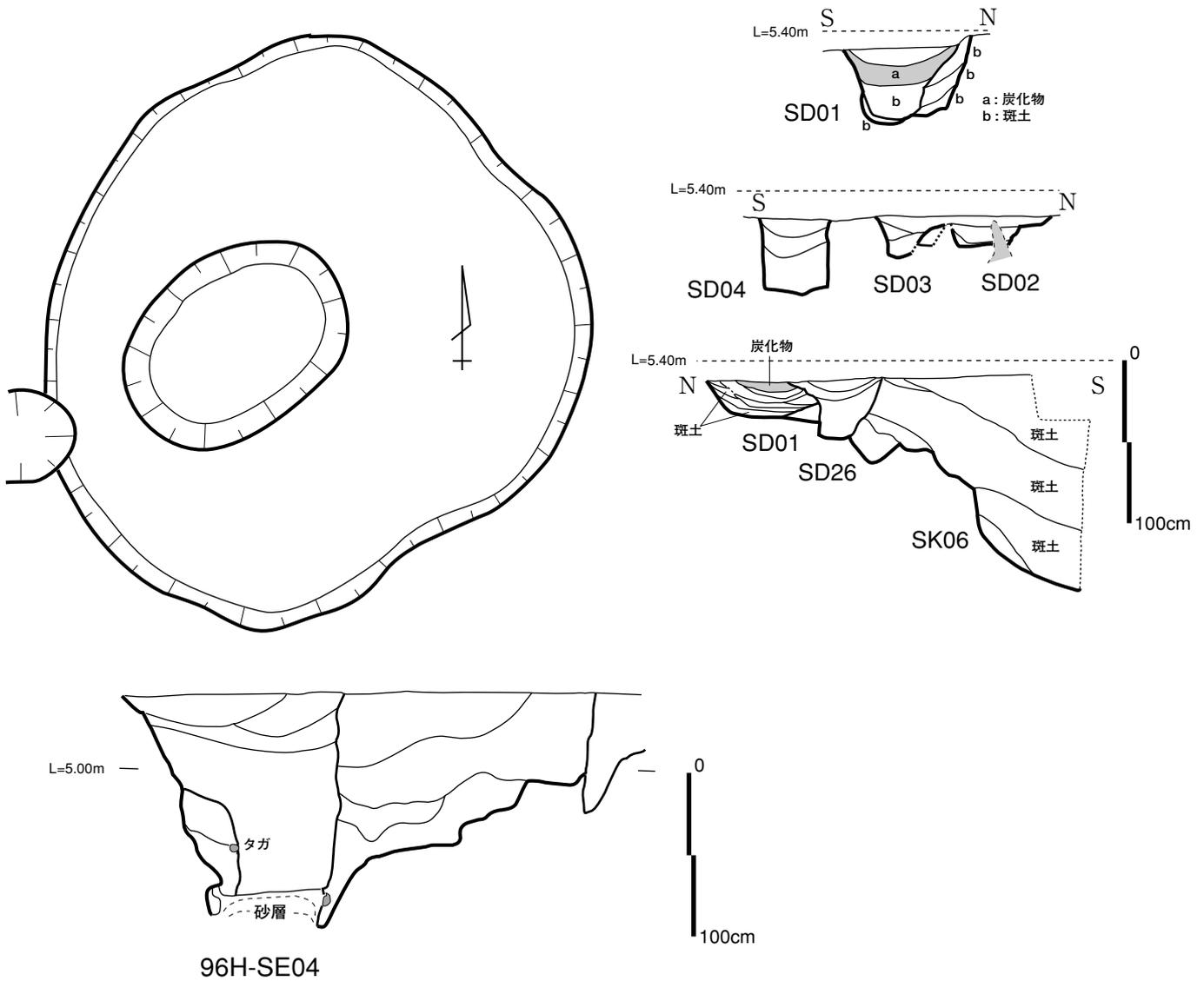


図2-27 96H区 近世遺構  
プラン・セクション 1 / 40



かっている。おそらく新しいグループであろう。南群の中でSE01は抜き穴の径が90cm強（三尺）あり、通常60cm（二尺）内外であったのと比べて大きなものであった。竹製のタガも幅が7cmほどもあり、突出した規模である。

96H区は97C区と異なり廃棄土坑の分布は調査区西部のSK03・05・07周辺の土坑群に限定されていた。井戸の周囲には建物の存在を示す柱穴や根石もなく、97B区とは様相が異なる。近世の建物が礎石建物を基本にしていたとするなら、その痕跡は認められなかった。屋外に位置するのであろうか。

96H区南部では東西に走る断続する断面箱形の溝（SD01）を検出した。溝内には炭化物の堆積層があった。掘り直しが認められたが、断続溝であることから水路的な機能は考えられない。区画施設であろう。SD01の南には卒塔婆や灯火具として使用された土師器皿がまとも出土した96G区NR01が展開しており、区画的な様相と無関係ではないだろう。16世紀代に属す。

96G区は現状では水田となっていたが、微高地縁辺を大きく削り取って水田造成が行われていたようで、耕作土を除去するとすぐに基盤の砂層があらわれた。

検出された遺構はSD01と調査区南

半を占めるNR01・02である。

SD01は地籍図に該当すると考えられる水路があることから、19世紀後半以降最近まで存在したようだ。

SD01の下層は18世紀代に属し、五輪塔の風輪や漆椀が出土した。水田造成は18世紀ということか。

ところで、五輪塔は花崗岩製で、また周辺から円礫がまとも出土していることから、近辺に五輪塔が立てられていた可能性が高い。

NR01は旧河川の流路が移動して湿地化する過程で、卒塔婆や陶器の皿、ロクロ成形の土師皿が投棄された層位を含んでいる。

土師皿のほとんどには黒色物質が付

着しており、油脂の炭化したものであろう。土師皿の出土状況は、正位・逆位の両者があるものの、いずれも傾きが小さい状態で出土したことから、水面に投棄された後に、水中を沈下して着底したものと考えられる。複数枚が重ねられた状態のまま出土したものもある。取り上げ後もはずれることなく密着したままのものもあった。

NR02はさらに先行する時期の河道であるが、時期は不明である。鎌倉時代にまで遡るのであろうか。

さて、NR01にともなう土師器皿や卒塔婆などの一部は原位置にあったと考えられる。また出土層位にも上下の幅が認められることから、廃棄行為は継続的に行われていたと考えられる。96A区でも卒塔婆が出土していることから、当時菟安賀遺跡南辺は川辺の儀礼空間となっていた可能性が高いと言えよう。



図 2 -28 96G 区 NR01 上段：上層遺物出土状況  
下段：砂層土師皿出土状況

## 第6節 遺物各説

### A. 陶磁器

(1) NR01炭化物層出土遺物について  
愛知県内で発掘調査された中世末から近世にかけての遺跡では、少ないながらも近世初頭の遺物が一つのまとまりとして捉えられる遺構が確認されている。ここでは、当遺跡NR炭化物層出土遺物について、県内出土資料と比較しながらその構成を概観してみる。

まず、NR01の炭化物層が堆積した時期について考えてみる。

確実に炭化物層中から出土した遺物(以下「炭化物層遺物」と、炭化物層を含むNR01出土遺物(以下「NR遺物」)を比較してみると、いずれにも共通するのはわずかに大窯期の製品が含まれることと、17世紀前～中葉までの遺物が主体であることである。これに対して相違点は、炭化物層遺物では、製造年代が17世紀後葉以降の遺物がほとんどみられないのに対し、NR遺物では少ないながらもみられる点である。

したがって、両者における下限遺物の時期差から、炭化物層の堆積した時期は遅くとも17世紀中葉までのことであり、それ以降もNR01に対してしばらく投棄行為が続いたと考えられる。

NR01が調査された97D区は、かつて尾張三宿の一つに上げられた荊安賀宿の街道に面して位置する。これをふまえて、炭化物層遺物の性格を考えてみたい。

荊安賀遺跡の所在する尾張地域は、全国的にも有数な「瀬戸・美濃」と呼称される一大生産地をひかえる。NR01炭化物層遺物では、当然のことながら地場産業である瀬戸・美濃産の陶器が大半を占める。この時期に比較し得る資料を県内の調査例に求めるならば、大脇城遺跡、名古屋城三の丸遺跡が上げられるが、いずれも宿場町としての荊安賀遺跡とは性格を異にしている。

大脇城遺跡は、城館～屋敷といった変遷の中で溝から出土した同時期資料

がみられるが、鍋など土器主体の遺物の中に天目茶碗、志野皿、わずかな肥前産磁器などが含まれていた。

名古屋城三の丸遺跡では、上級家臣団の役宅跡廃棄土坑などから出土した同時期資料がみられるが、瀬戸・美濃産の陶器とともに肥前産磁器も一定量含まれていた。

荊安賀遺跡のNR01炭化物層遺物では、磁器こそほとんど含まれないものの瀬戸・美濃産の多様な陶器が多く含まれており、名古屋城三の丸遺跡の居住者階層との違いを忘れさせるほどで、大脇城遺跡資料よりも多様で量も多い。

天目茶碗、志野皿などは炭化物層遺物の中で比較的多く認められたが、これらは当時、使用される場が限定されていたのか、日常的な使用であったのかも未だ解明されていない。

したがって、名古屋城三の丸遺跡資料との出土陶器構成の類似性・大脇城遺跡資料との較差は、宿場町なるがゆえの饗応的性格に起因するものかどうかを判断する材料とはならないが、当該期の比較資料としては興味深いものがある。あえて、居住者階層の差を表す材料を求めるならば、着目すべき点は肥前産磁器の組成に求められよう。

近世初期の尾張では、地場産業として大窯製品の終焉から連房式登窯製品が台頭する時期に相当するのだが、いずれも陶器である。作られ始めて間もない肥前産磁器は、この時期には全く異質の製品として遠隔地から運ばれてきたもので、日常雑器的に扱われたとは考えにくい。

これら肥前産磁器が、当該期の尾張では名古屋城三の丸遺跡資料のみで一定量検出されていることが、荊安賀遺跡との居住者の階層差を物語るのではないだろうか。(松田 訓)

## (2) 荇安賀遺跡出土の近世陶磁器・土器の様相

荇安賀遺跡で出土した近世の陶磁器・土器はコンテナ約150箱である。その大部分は瀬戸美濃の陶磁器であり、他に肥前系磁器、土器も目につく。出土遺物は、時期的には江戸時代全般にわたるが、18世紀後半代から19世紀中頃にかけてがもっとも多い。

主要遺構の出土陶磁器・土器の様相は以下の通りである。

### ● SD16 (98BC区)

遺物の出土量は非常に多い。陶磁器は、波佐見の三脚青磁染付鉢のようなものもみられるが、日常的に使用される瀬戸美濃の碗皿がほとんどであり、皿類に比べ碗類の占める割合が高い。碗類は高台端部が著しく摩滅している例が多く、かなり使い込んだ後に廃棄されたことを示している。

他の遺構から出土する瀬戸美濃陶器の碗や常滑の鉢や甕にも同様な例がみられる。これらの碗等には口縁端部全周が敲打により著しく剥離しているものも多く、この傾向は腰鍔茶碗に顕著である。なかには内面に煤が付着したり、被熱の痕跡がみられるものがあり、灰落し、火入れとして再使用されたことを示している。

また、破砕面が著しく摩滅している掌大の播鉢片が数点出土しており、砥石として再利用したとみられる。

大型品には瀬戸美濃の陶器の水甕があるが、甕、火鉢などは常滑製品の占める割合が高い。

SD16内には瀬戸美濃の磁器がみられず、瀬戸美濃の刷毛目碗などのような19世紀初頭の遺物が数点含まれている。さらに18世紀後半の特徴を示す陶磁器が主体を占めることから、遺構の時期は18世紀後半から19世紀初までの時期が考えられる。

### ● SD22 (98BC区)

出土陶磁器の特徴から遺構の時期はおおよそ18世紀代に収まる。陶磁器のなかで碗類と皿類の比率は碗の占める比率が高い。SD22の特色として次の2点が上げられる。

まず、他の遺構ではほとんどみられない関西系陶器や肥前系の京焼風陶器の碗が目につくことである。次に土器のなかで手捏成形の土師皿が多量に出土していることである。共にこの遺構に関わる居住者の性格を考える上で重要な点を示唆している。前者は居住者の嗜好を示す。後者については同様な出土パターンを示す例が清洲城下町遺跡の近世初頭の寺社地の区画溝内でもみられ、SD22も同様な性格を持つ可能性がある。

使用痕が残る例として、口縁部全周が敲打により剥離する瀬戸美濃の陶器碗が数点みられる他、掌大の播鉢片で、破砕面及び表面を研面として使用した痕跡を残すものがみられる。火鉢は瀬戸美濃のものもあるが、ほとんどが常滑製品である。

### ● SD01 (96D区)

遺構の埋土は三層に分層され、遺物の多くは上・中層から出土している。上層の遺物の上限は19世紀前半であり、中・下層では17世紀前半が主体を占め、18世紀までのものが混入する。

出土遺物のなかでの碗類と皿類の比率は皿が高く、中・下層では特にそれが顕著である。他の遺構に比べ中国磁器碗・皿の出土量が多く、瀬戸美濃の天目茶碗が碗類のなかで比率が高い。

特出するものとして志野鉄絵碗、御深井型押皿があり、御深井は同一意匠のものが3点出土している。

土器類のなかでは焙烙以外に内耳鍋・茶釜型鍋がある。碗類のなかで上層出土の尾呂茶碗の口縁には敲打痕がみられるものが数点みられる。

上層から常滑の甕、火鉢が出土している。

### ● SD02 (97A区)

瀬戸美濃の陶胎染付の広東碗はみられるが、瀬戸美濃の磁器はない。他に文様が粗雑化した型紙摺の陶器皿があり、遺構の帰属時期は前記したSD16(96BC区)とほぼ同じ18世紀後半から19世紀初の年代が考えられる。

碗類と皿類の比率は碗の方が高い。「97A-SD02-23」の広東碗のように底部端部が著しく摩滅し、口縁の剥離

が著しい碗が数点みられる。

土器のなかでロクロ成形の土師皿で底部穿孔されたものが多く出土しており、これには灯明皿として使用された痕跡が見られない点から、前記したSD22(98BC区)の手捏成形の土師皿同様、祭祀に関わるものと考えられる。

常滑製品として内面に刻み目を持つ脚付の鉢がみられる。

### ● SK10 (97B区)

廃棄土坑であり、所属時期は幕末から明治にかけてである。

碗類と皿類の比率は碗が高い。碗類は全て磁器であり、ほとんどが瀬戸美濃である。一方、皿類は瀬戸美濃の陶器が主体を占める。碗類のなかで瀬戸美濃の磁器が占める割合が非常に高くなる傾向はSK87(97B区)を始めとする荇安賀遺跡の他の同時期の遺構についてもいえる。なお、SK87(97B区)出土品には、「97B-K81-31」のような口縁に蓋が粘着した痕跡がある瀬戸美濃の磁器の急須もある。

大型品には甕、火鉢があり、常滑の占める割合が高い。

### ● NR01 (97D区)

この遺構の性格は既に前記している。ここでは遺構内の出土組成をみてみる。

碗類と皿類の比率は皿の比率が突出している。碗では天目茶碗が、皿では志野鉄絵皿及び織部皿が目につく。確認しうるだけで志野鉄絵皿は同一意匠のものが3点、織部皿は4点出土している。

常滑製品としては口縁が楕円形になる大型の鉢がある。

以上のことから、荇安賀遺跡の近世陶磁器・土器について次の3点が指摘できる。

1：他の尾張の近世遺跡と同様に、江戸時代初めから幕末前まで、煮炊具を除く中・小型品は瀬戸美濃の陶磁器がほとんどを占める。特に供膳具である碗皿類は特徴的な傾向を示し、肥前系の陶磁器は瀬戸美濃の補完物にすぎな

い。

関西系の陶器は一部の遺構において集中的にみられるものの、遺跡全体で占める割合は極めて低い。この点は18世紀後半以降、少量ながらも均一的に関西系の陶器がみられる名古屋城三の丸遺跡とは様相が異なる。

幕末になると、供膳具のなかで瀬戸美濃の磁器が飛躍的に増加し、特に碗のほとんどは瀬戸美濃の磁器が占める。甕、火鉢などの大型品は瀬戸美濃の陶器もあるが、江戸時代を通じて常滑製品の占める割合が高い。

2：江戸時代初めの17世紀代と江戸時代後期の18世紀後半以降では供膳具の組成の割合が異なる。前者では皿の占める比率が碗に比べ極めて高く、後者ではその傾向が逆転し、碗の比率が高くなる。

17世紀代では碗には天目茶碗、皿には織部皿、志野鉄絵皿、御深井の型打皿があり、御深井型打皿のように同一意匠が数枚セットで出土している例が目につく。それに対し18世紀後半以降では陶器の碗には腰錆茶碗、鎧茶碗、せんじ茶碗が、磁器には端反碗が多量にみられ、全体的に法量が小さくなる傾向がみられる。皿については陶器の染付皿が多数を占める。

3：18世紀後半以降の遺構から出土する瀬戸美濃の陶器には、本来の機能を終えた後、二次的に使用された痕跡がみられるものが目につく。その特徴的なものが瀬戸美濃の播鉢と腰錆茶碗である。

前者はほぼ掌大であり破砕面または表面の一部が極端に摩滅し、手持ちの砥石として使用したことがわかる。

後者は口縁部が敲打により著しく剥離し、内面に被熱の痕跡を残し、灰落しや火入れとして利用された可能性が高い。

その他、播鉢、鉢などのなかにも、底部を穿孔し、植木鉢として転用したものが散見された。

菟安賀遺跡出土の近世陶磁器は、瀬戸美濃の占める割合が高いという、尾

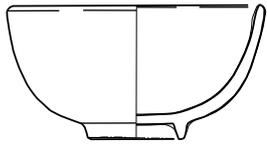
張の他の近世遺跡と同様な傾向を示している。

尾張藩の重臣の役宅跡である名古屋城三の丸遺跡のものと比べると、総出土量、関西系や肥前系の陶磁器の出土量、出土品の質の明確な差異がみられる。また、清洲宿の遺物とはほぼ同様な出土傾向を示すが、18世紀後半から幕末の碗の組成をみると、菟安賀遺跡が腰錆を代表とする小法量の「湯呑み」タイプが主流であるのに、清洲宿では柳茶碗・広東碗の「飯茶碗」タイプが主流である。この点については各遺跡の調査地点との比較検討を要する。

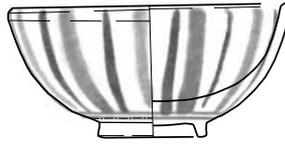
陶器の再利用・転用については、穿孔のある播鉢などのように植木鉢に利用される例は名古屋城三の丸遺跡、名古屋城下町、清洲宿などでもみられ、播鉢片の砥石利用は清洲宿で散見する。

ただ、陶器の碗を灰落しや火入れに利用する例は現在のところ、名古屋城三の丸遺跡、名古屋城下町、清洲宿ではみられない。こうした日常的に使用する碗まで徹底的に再利用することは近世における尾張周辺部に展開する宿、村落の生活様相の一端を示すものと考えられる。(佐藤公保)

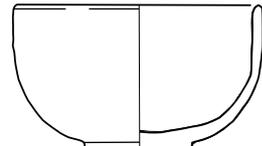
96BC-SD16 その1



1/1



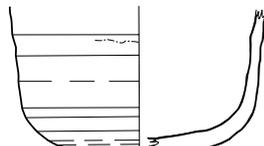
2/2



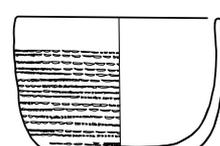
3/253



4/3



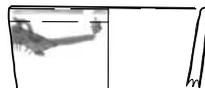
5/302



6/303



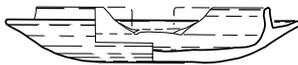
7/12



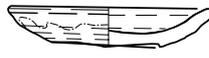
8/9



9/7



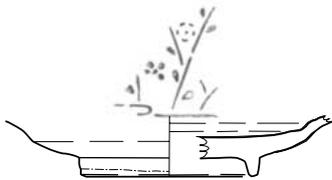
10/251



11/252



12/254



13/5



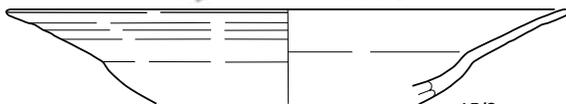
14/11



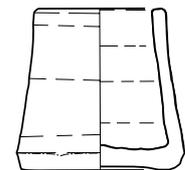
18/6



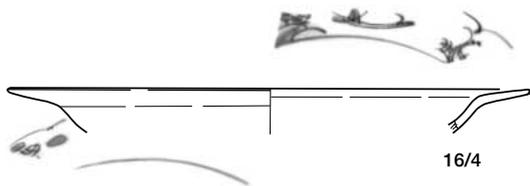
15/8



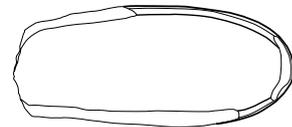
16/4



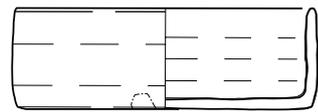
19/256



17/10

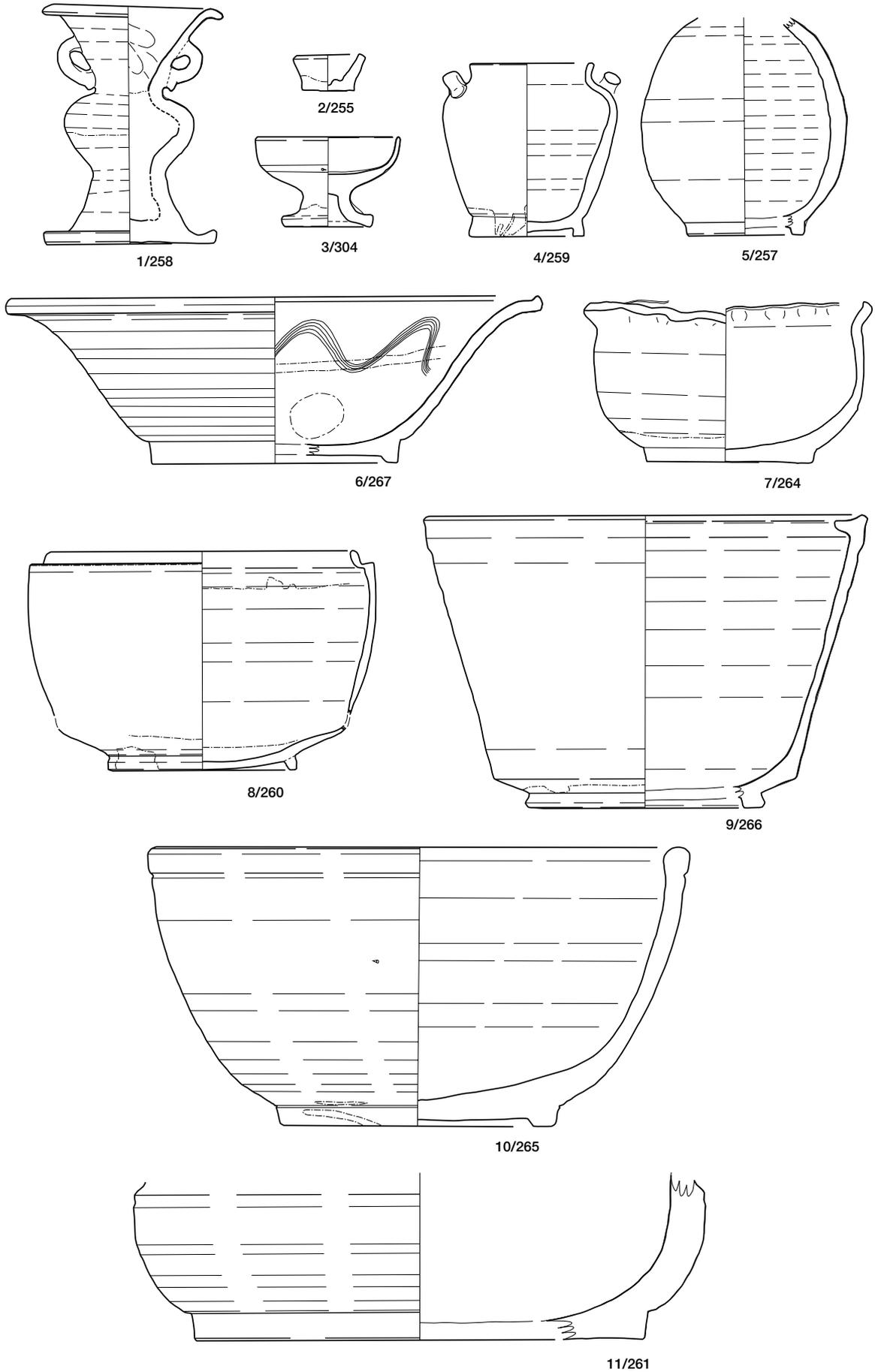


20/262



21/263

96BC-SD16 その2



96BC-SD16 その3

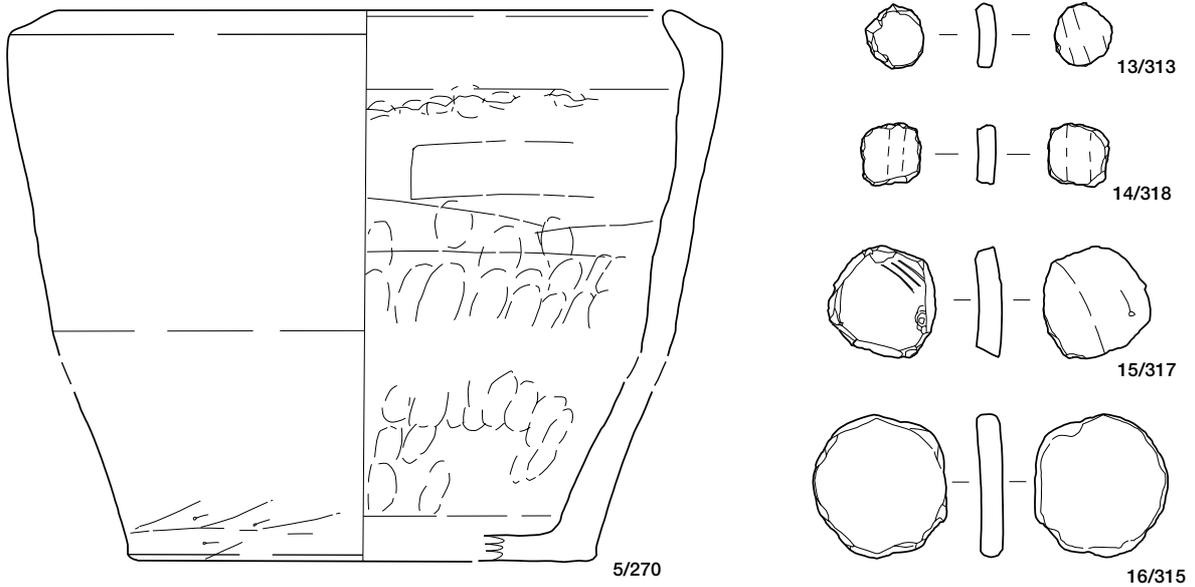
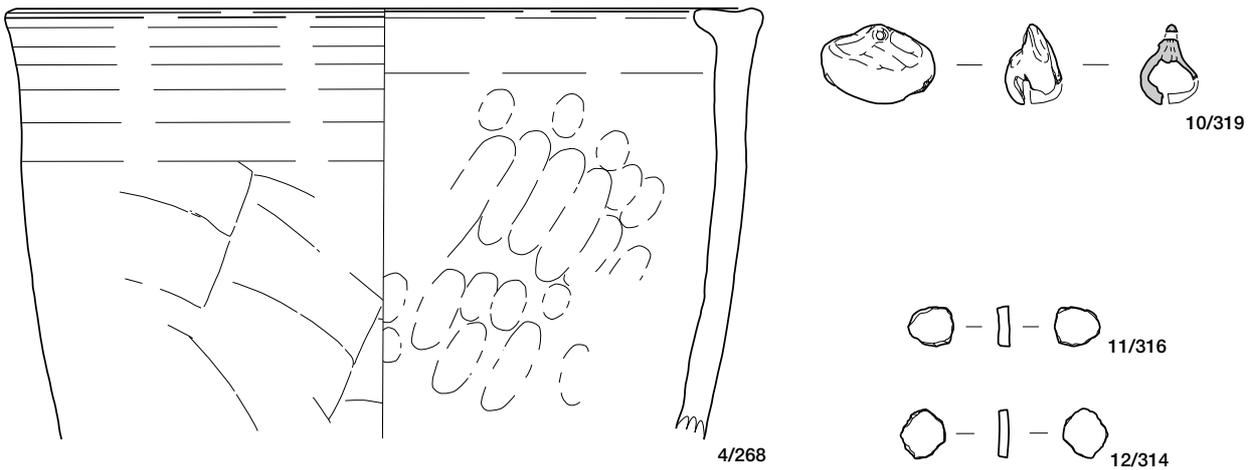
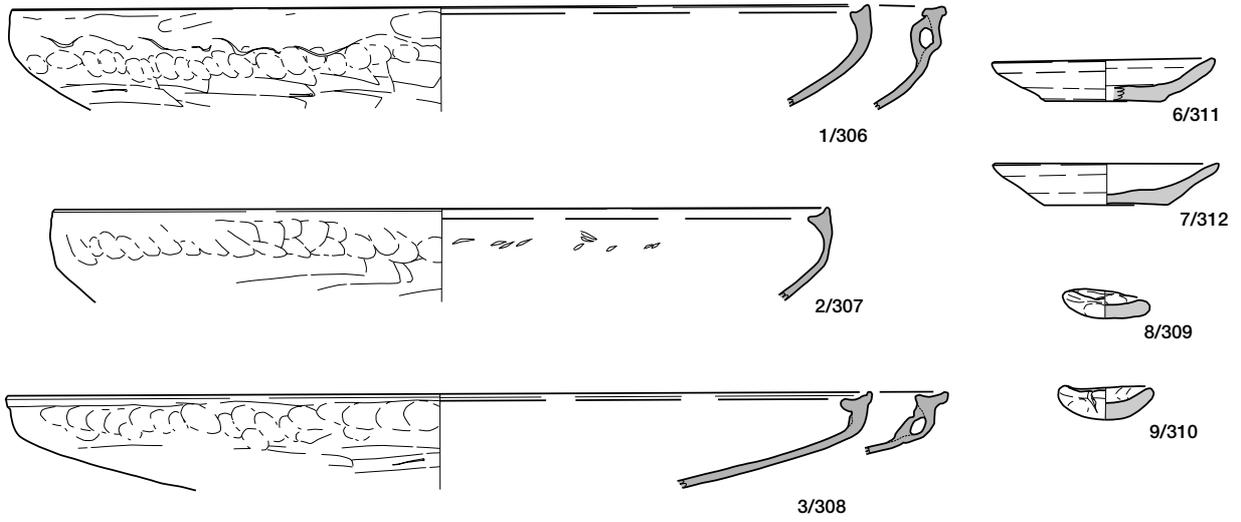
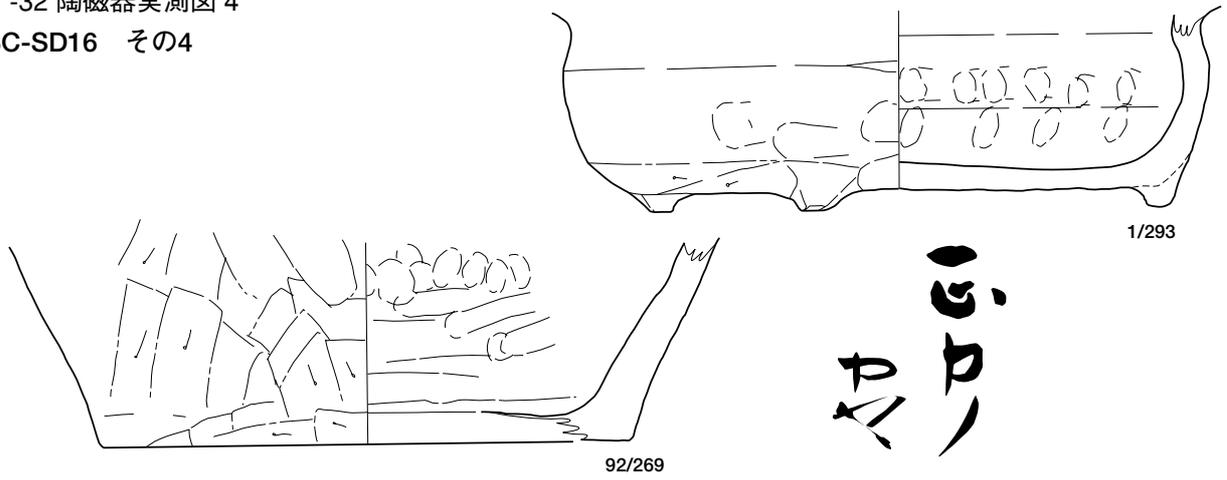
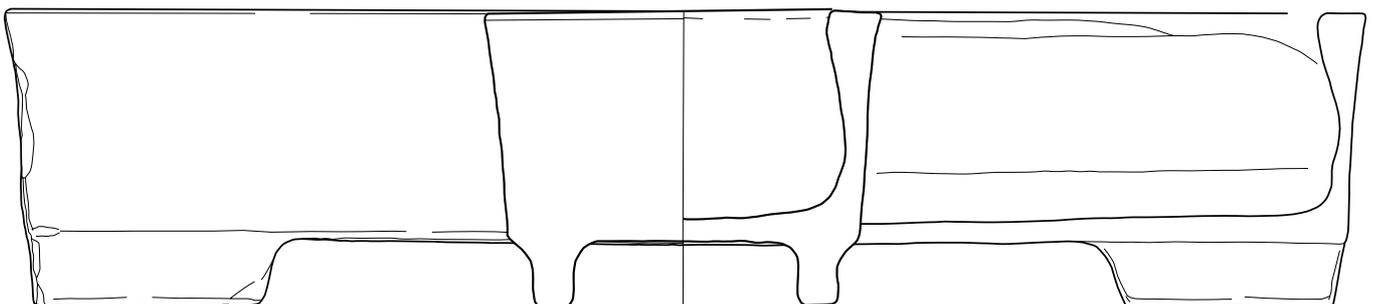
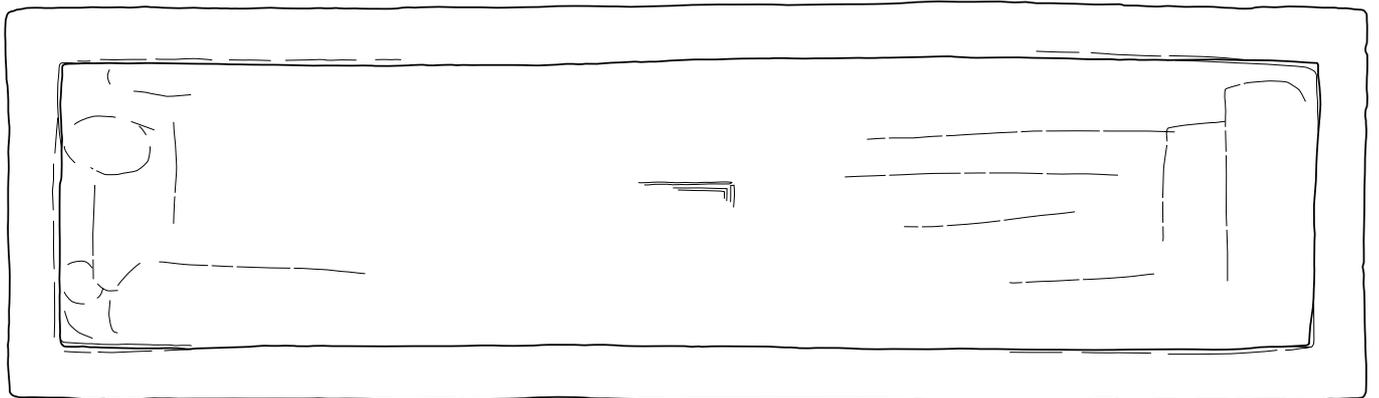
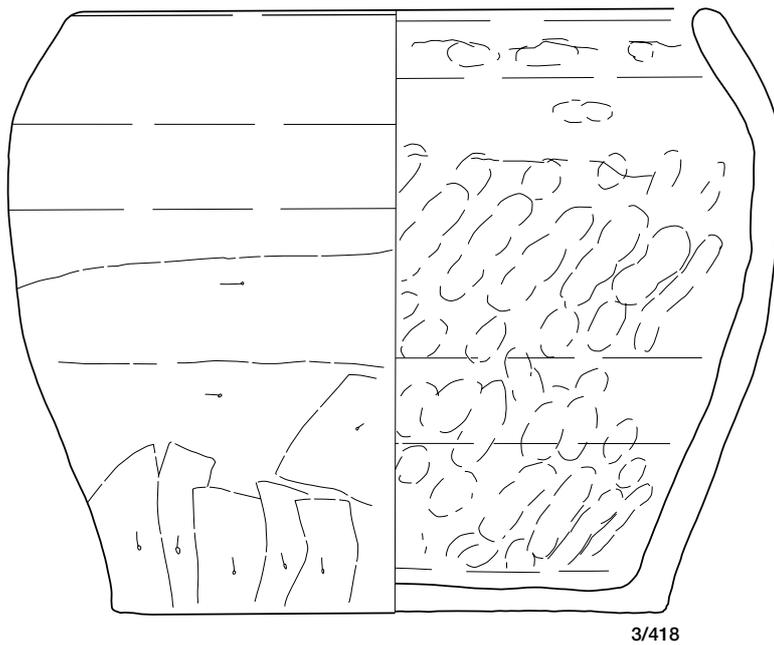


図 2 -32 陶磁器実測図 4

96BC-SD16 その4

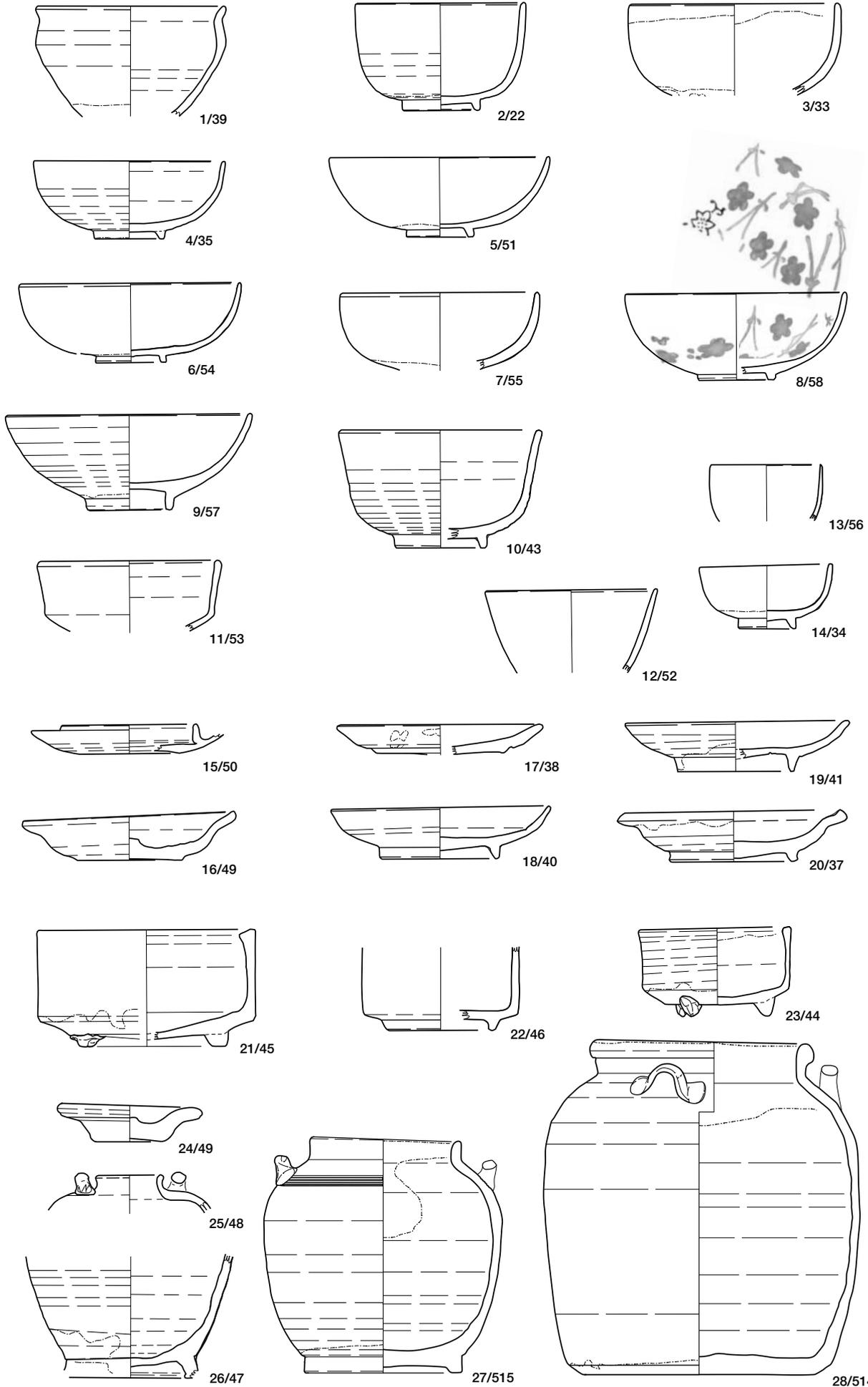


96BC-SD22 その5



4/87

96BC-SD22 その1



96BC-SD22 その2

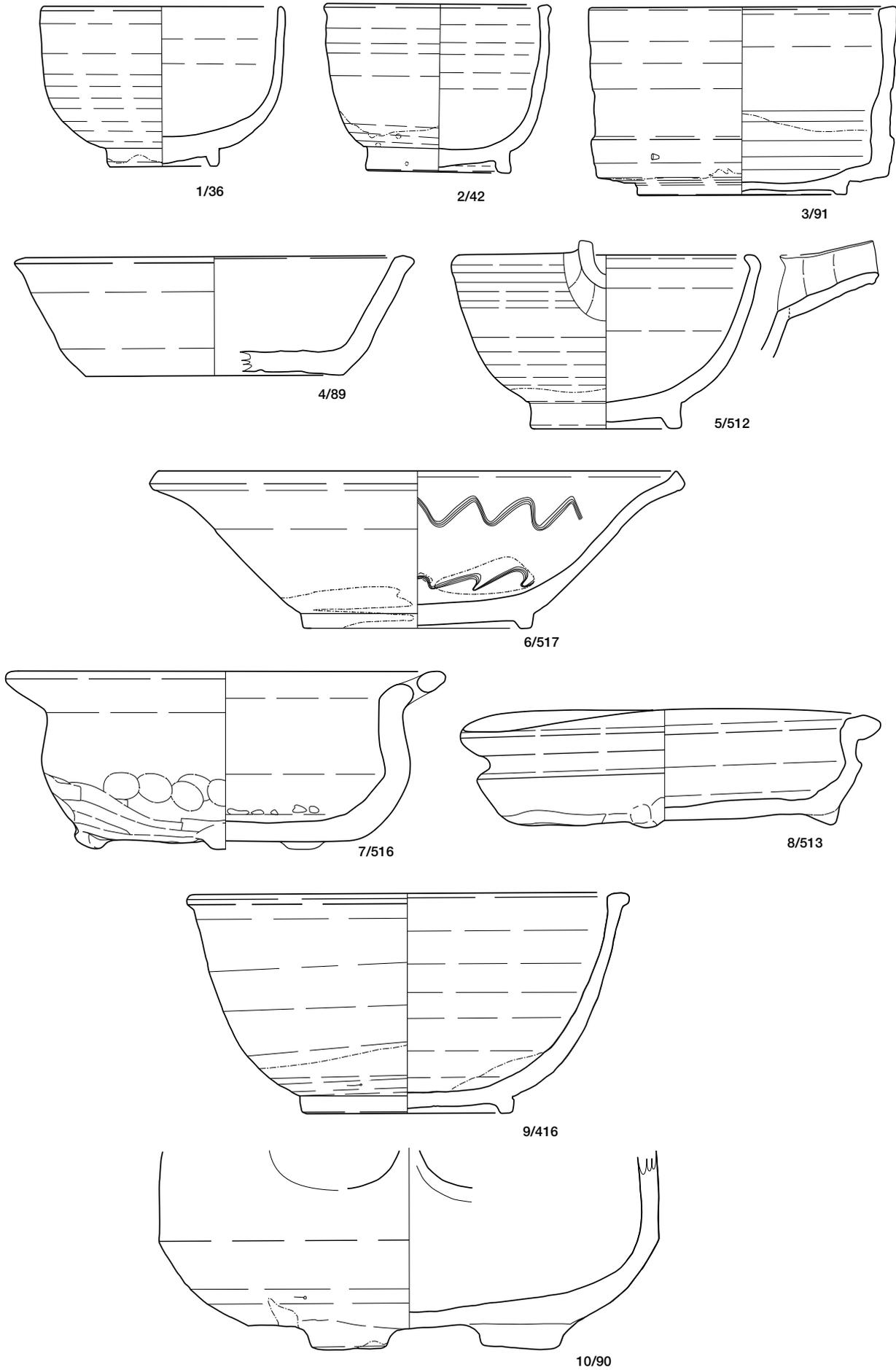
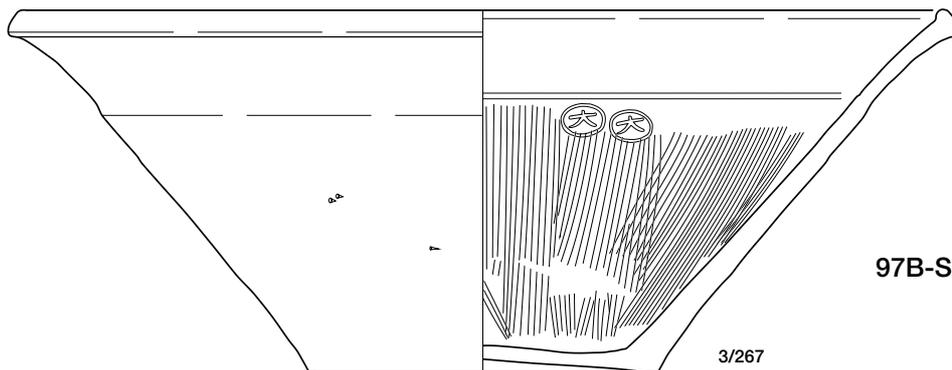
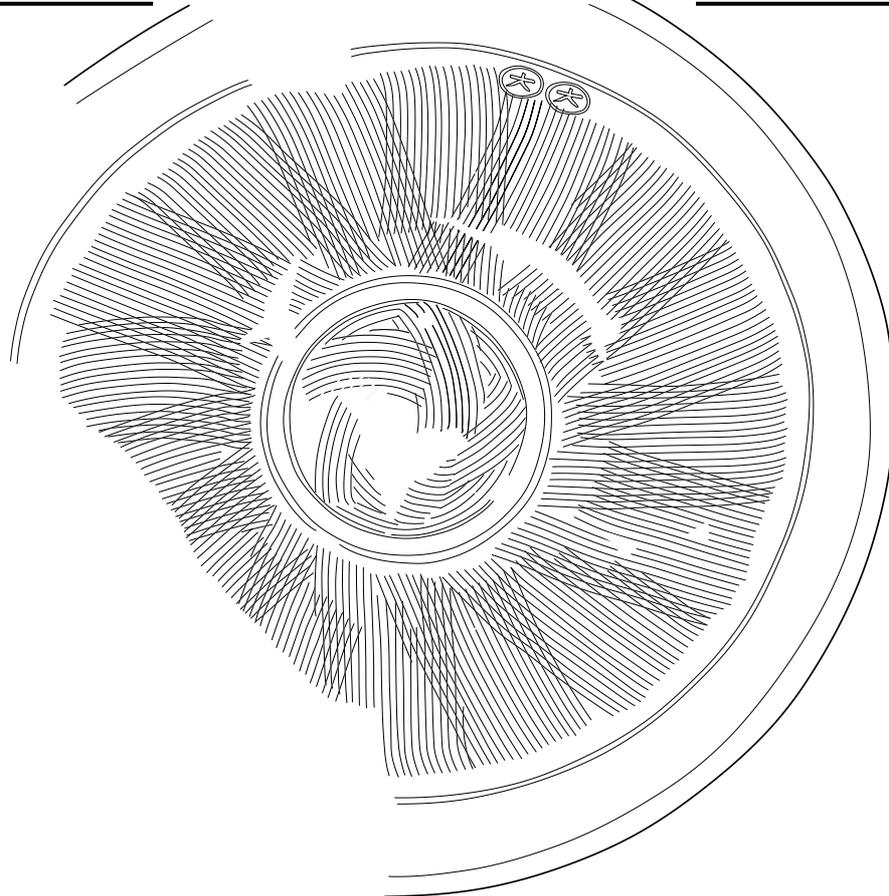
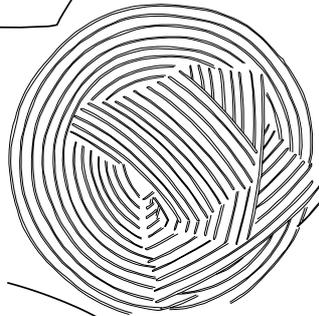
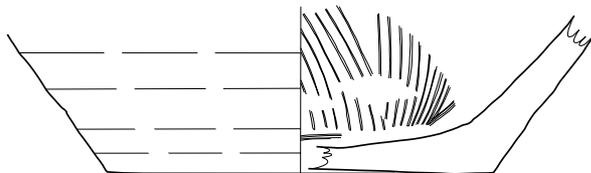
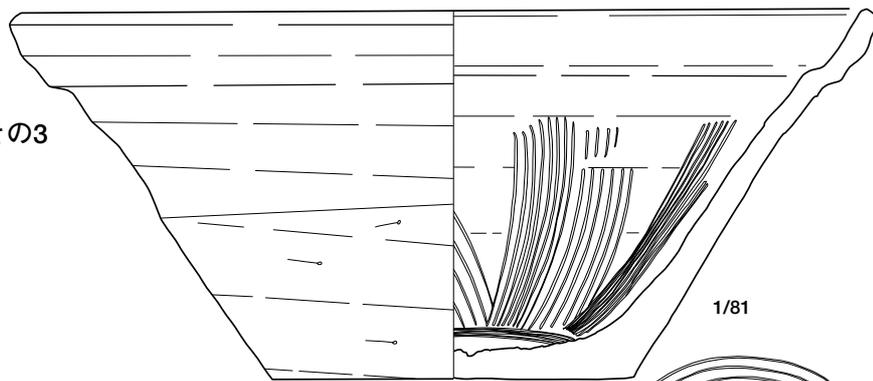


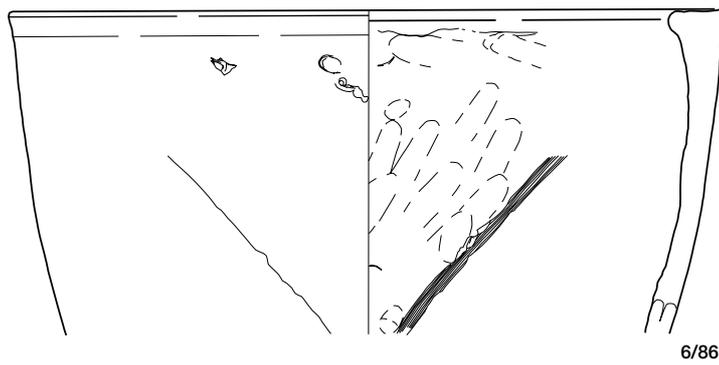
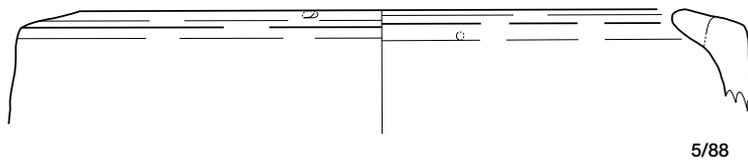
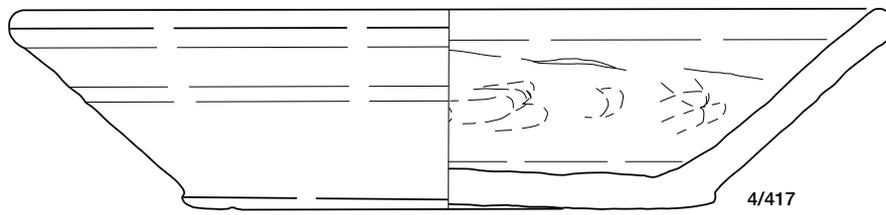
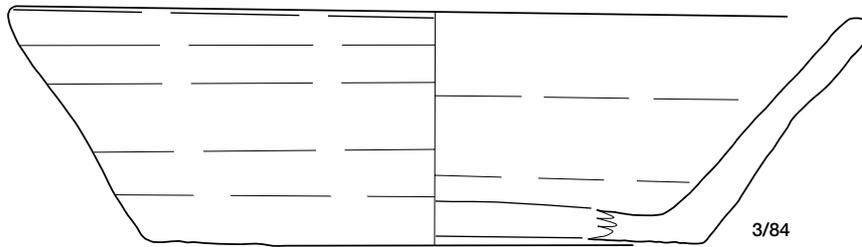
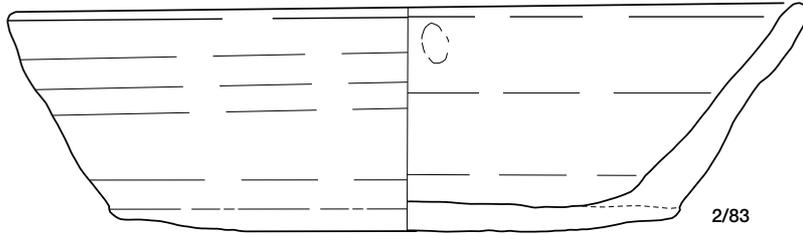
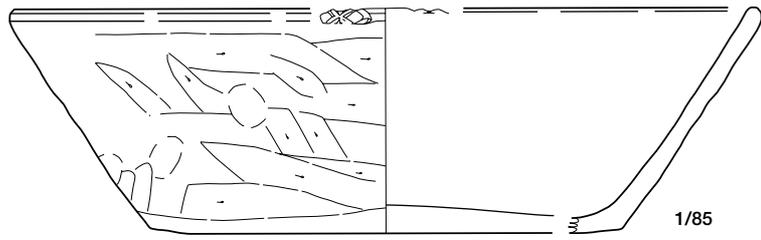
図 2 -35 陶磁器実測図 7

96BC-SD22 その3



97B-SK30

96BC-SD22 その4



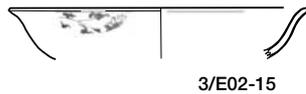
96BC-遺構



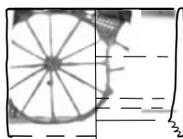
1/E02-16



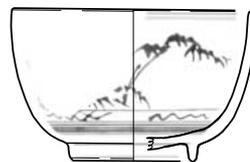
2/E02-14



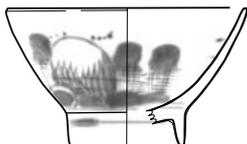
3/E02-15



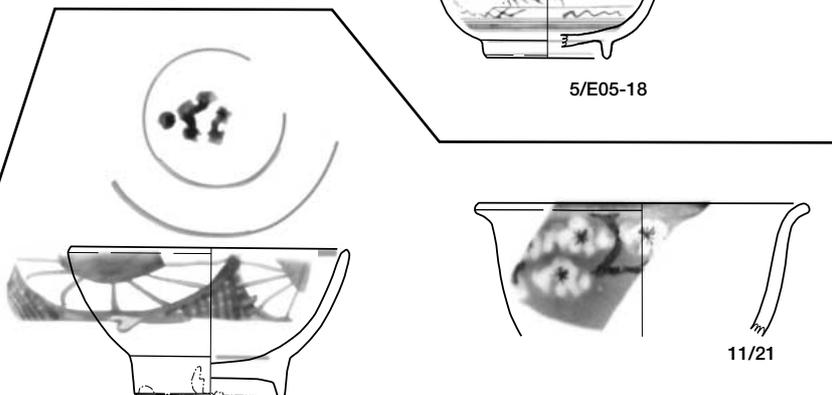
4/E04-17



5/E05-18



6/K07-13

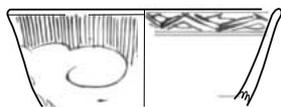


10/22



11/21

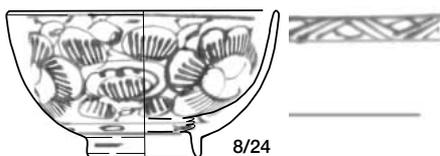
96BC-検出



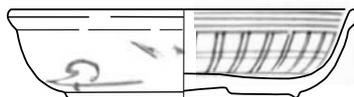
7/28



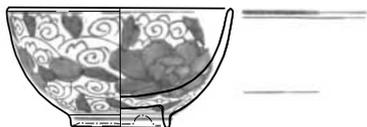
14/30



8/24



12/29



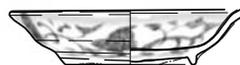
9/27



13/26



15/23



16/25



17/31

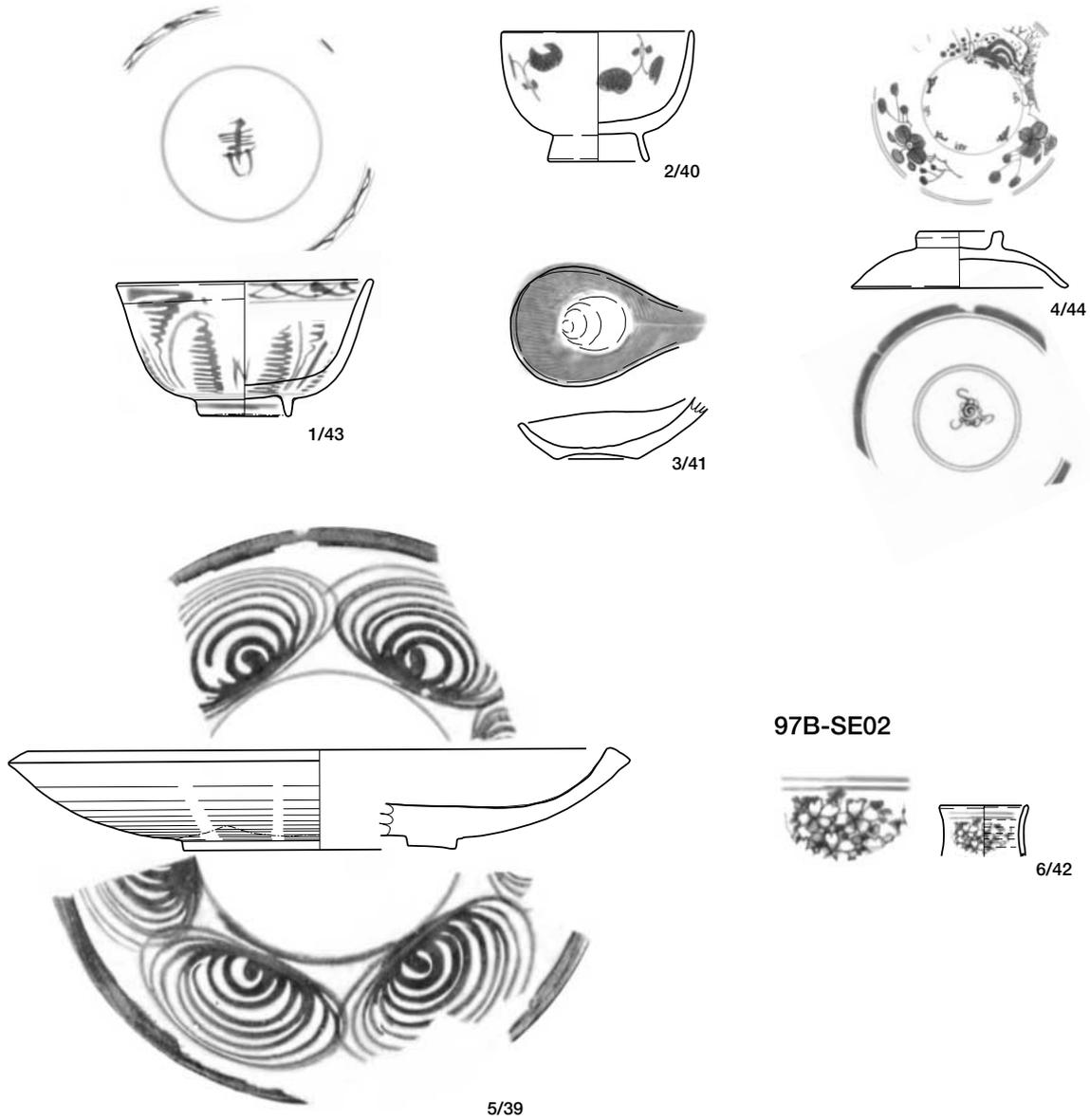


18/20

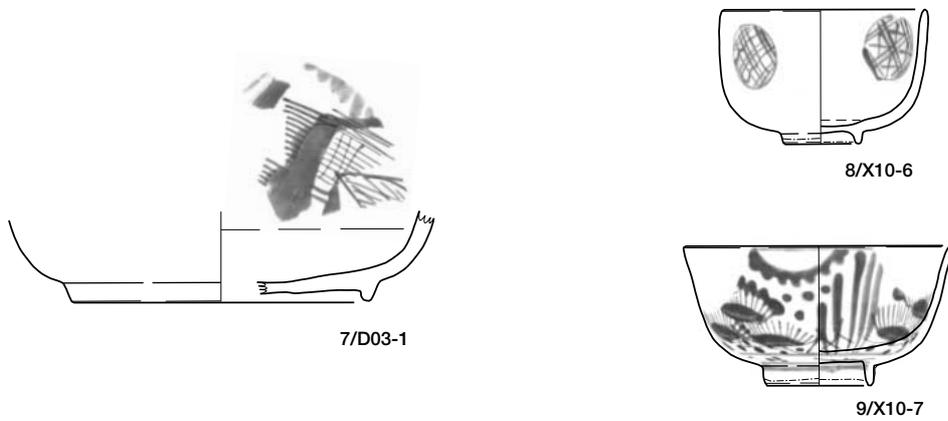


19/19

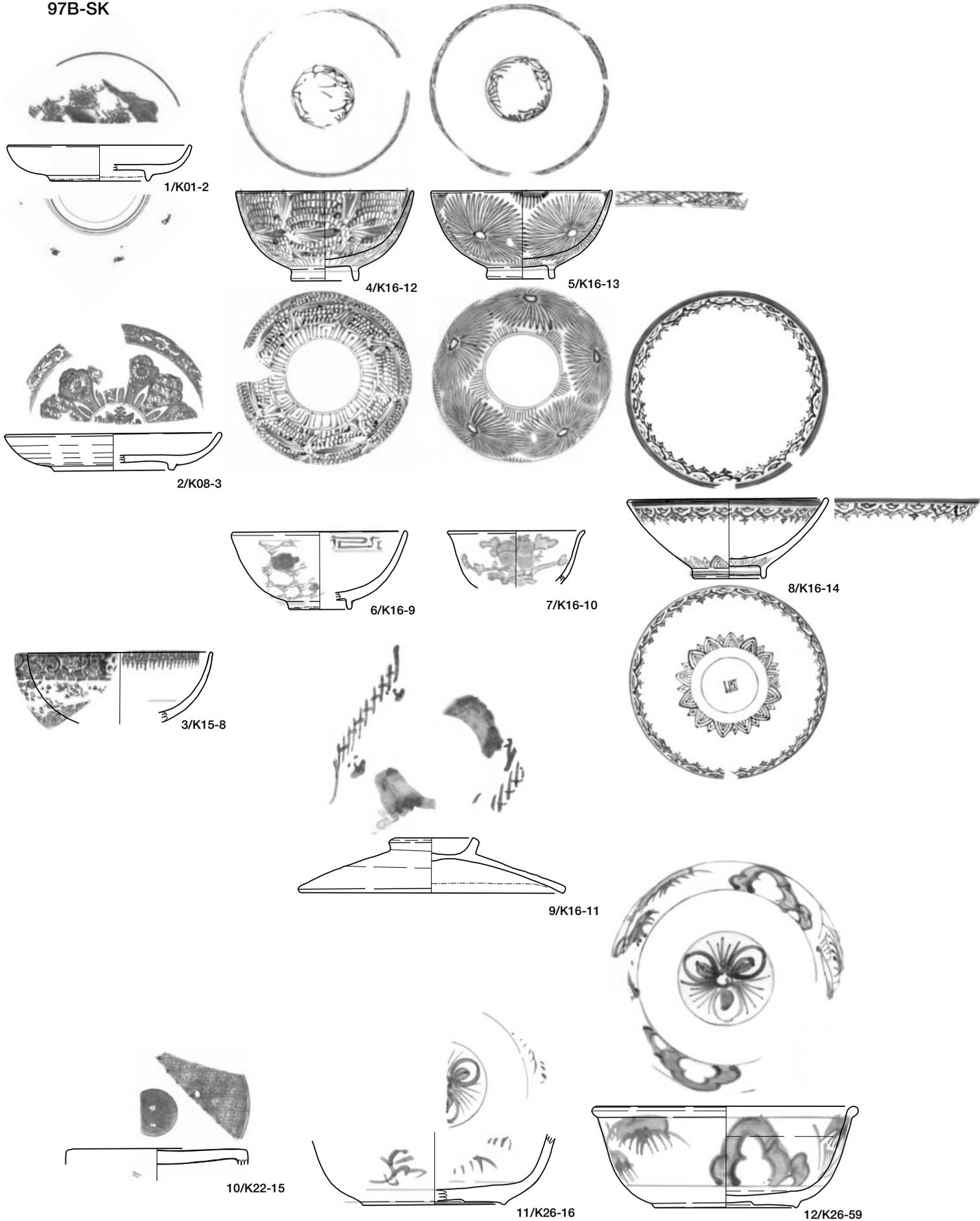
97B-SE01



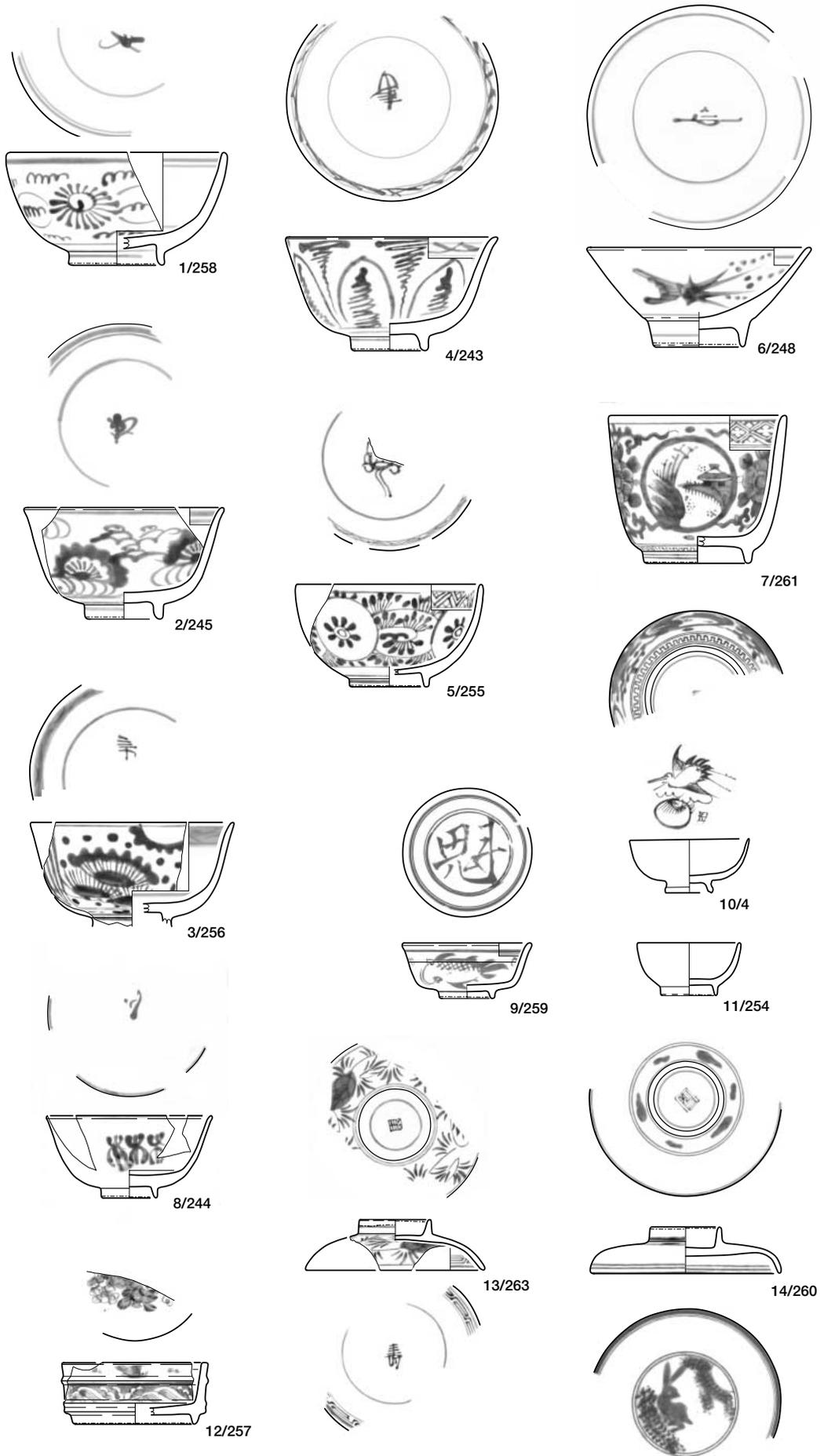
97B-遺構



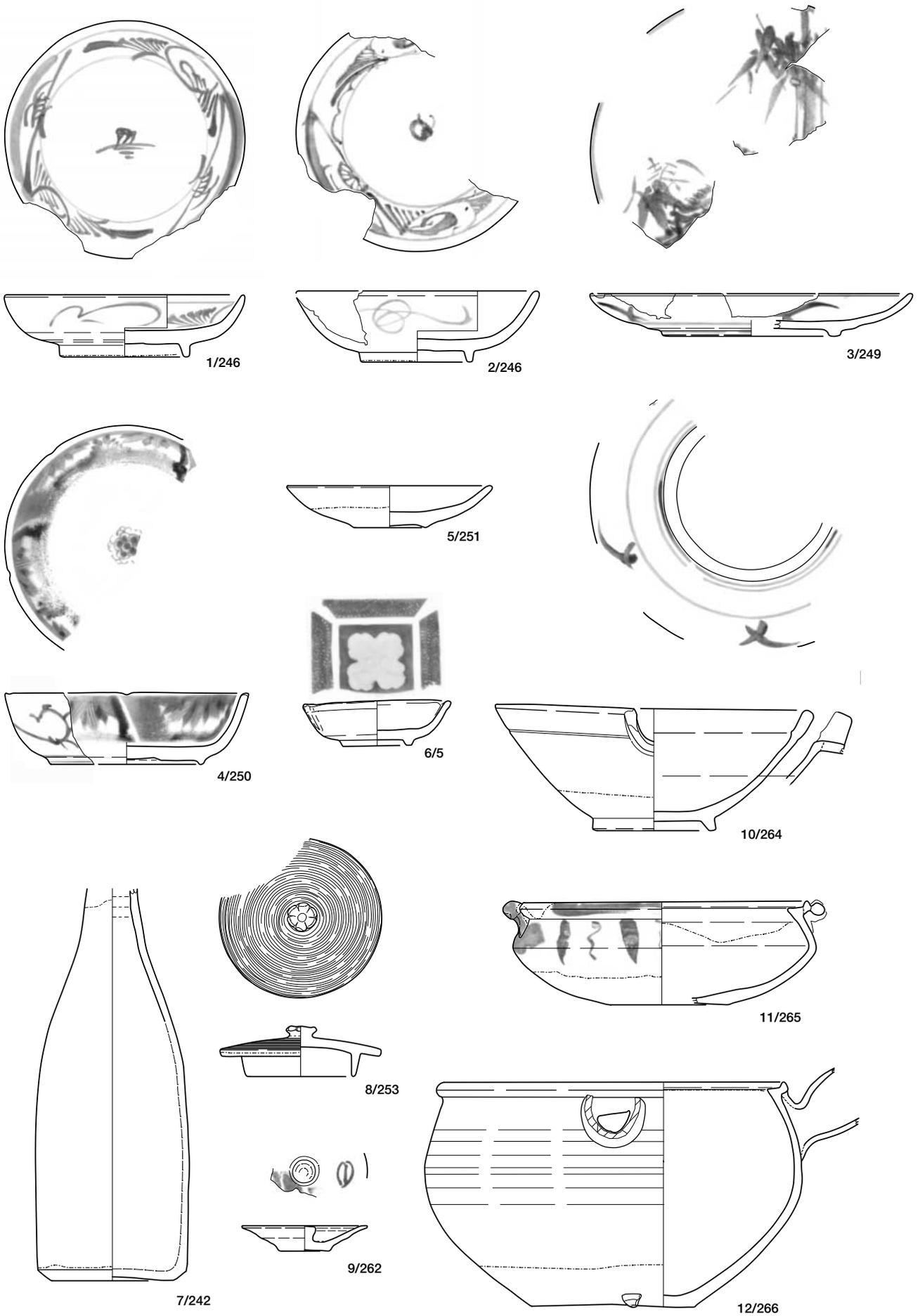
97B-SK



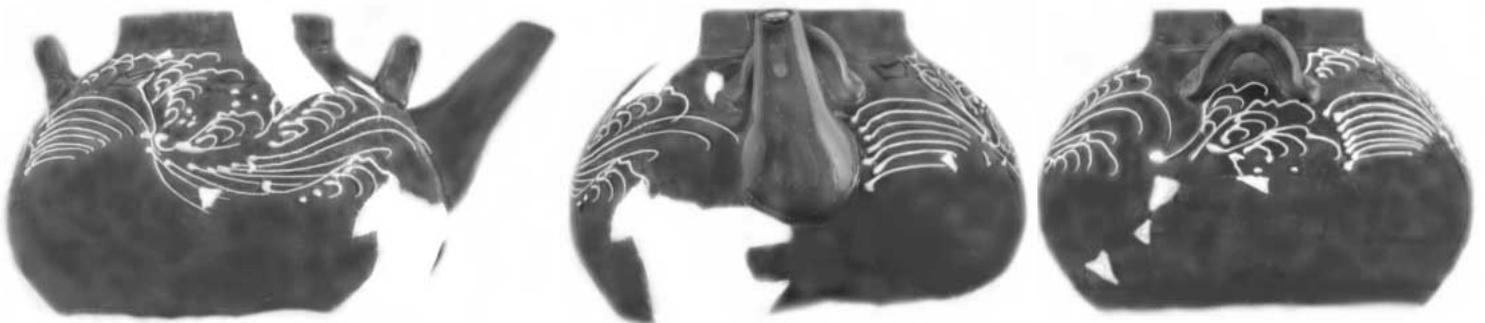
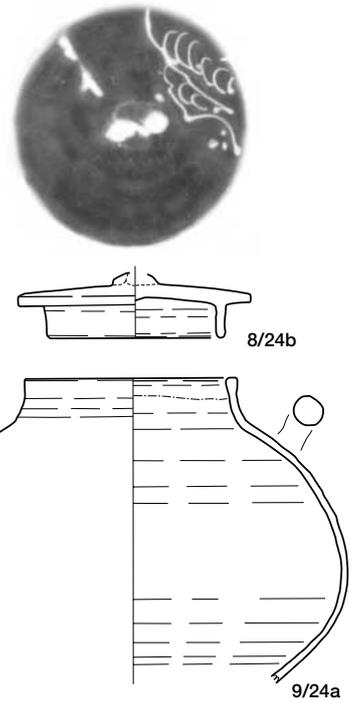
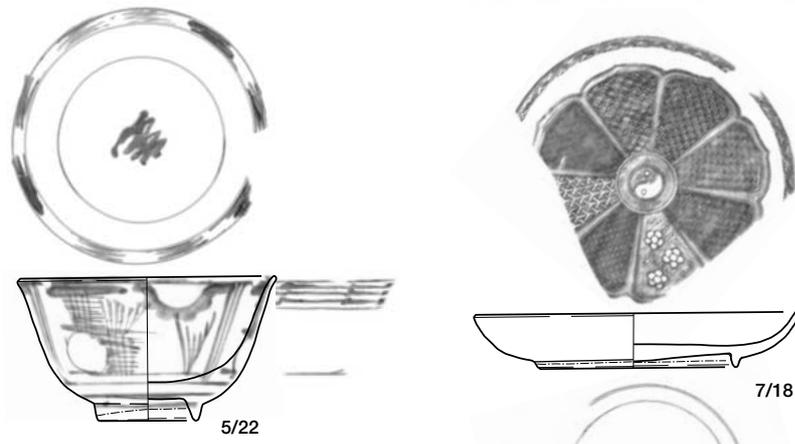
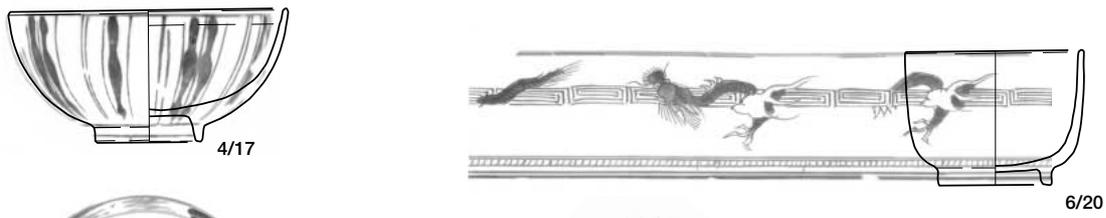
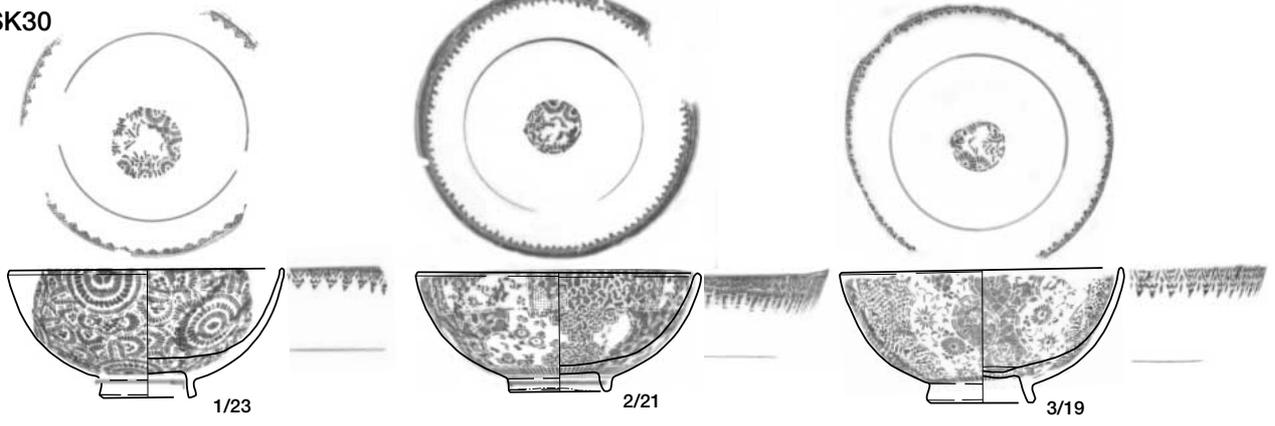
97B-SK10



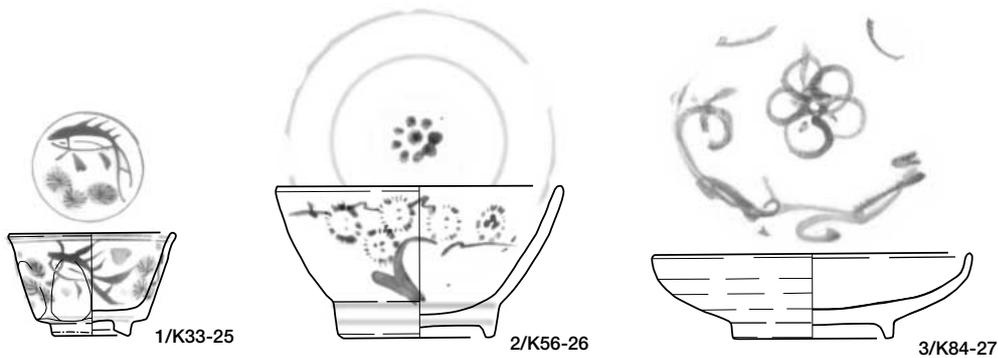
97B-SK10



97B-SK30



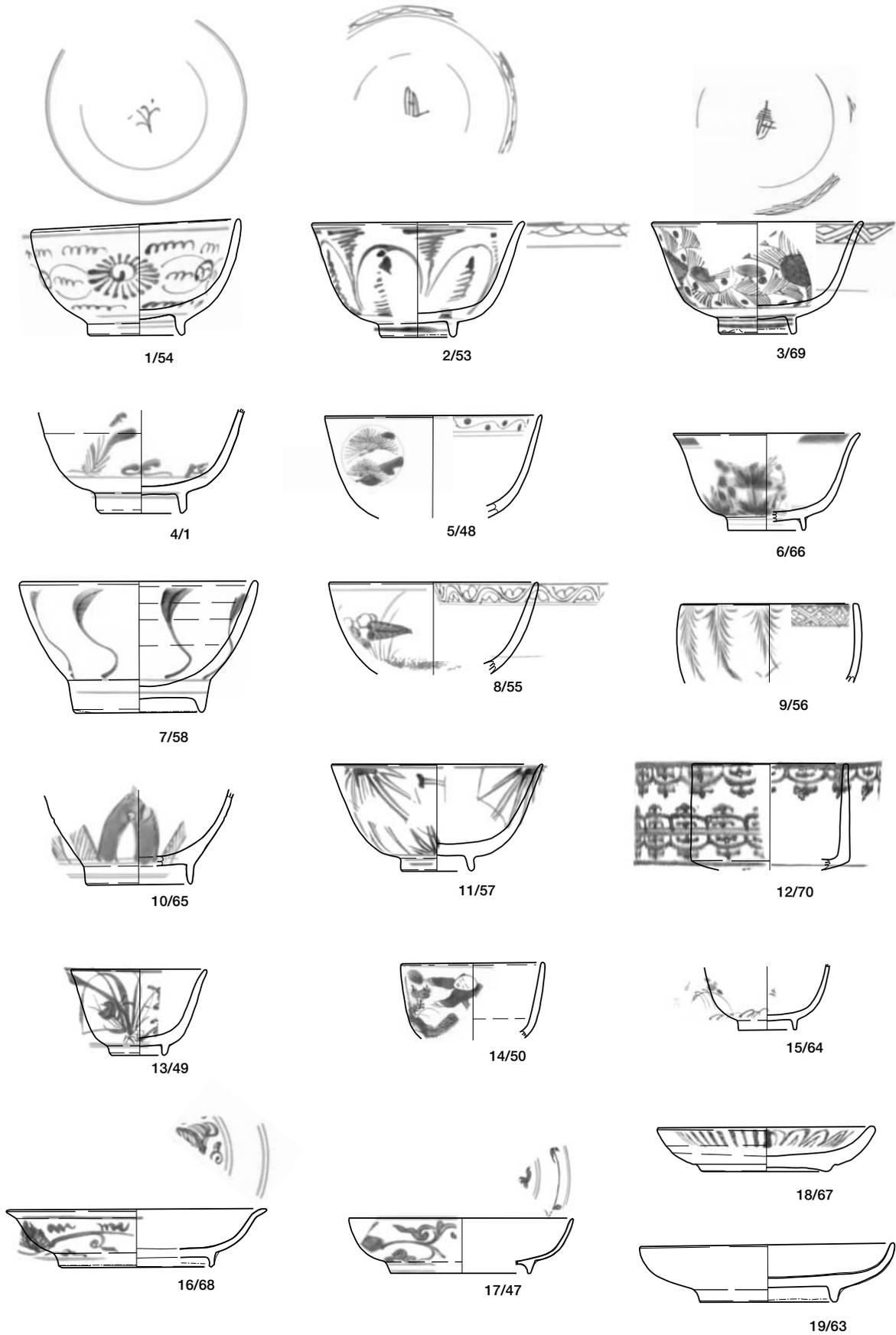
97B-SK



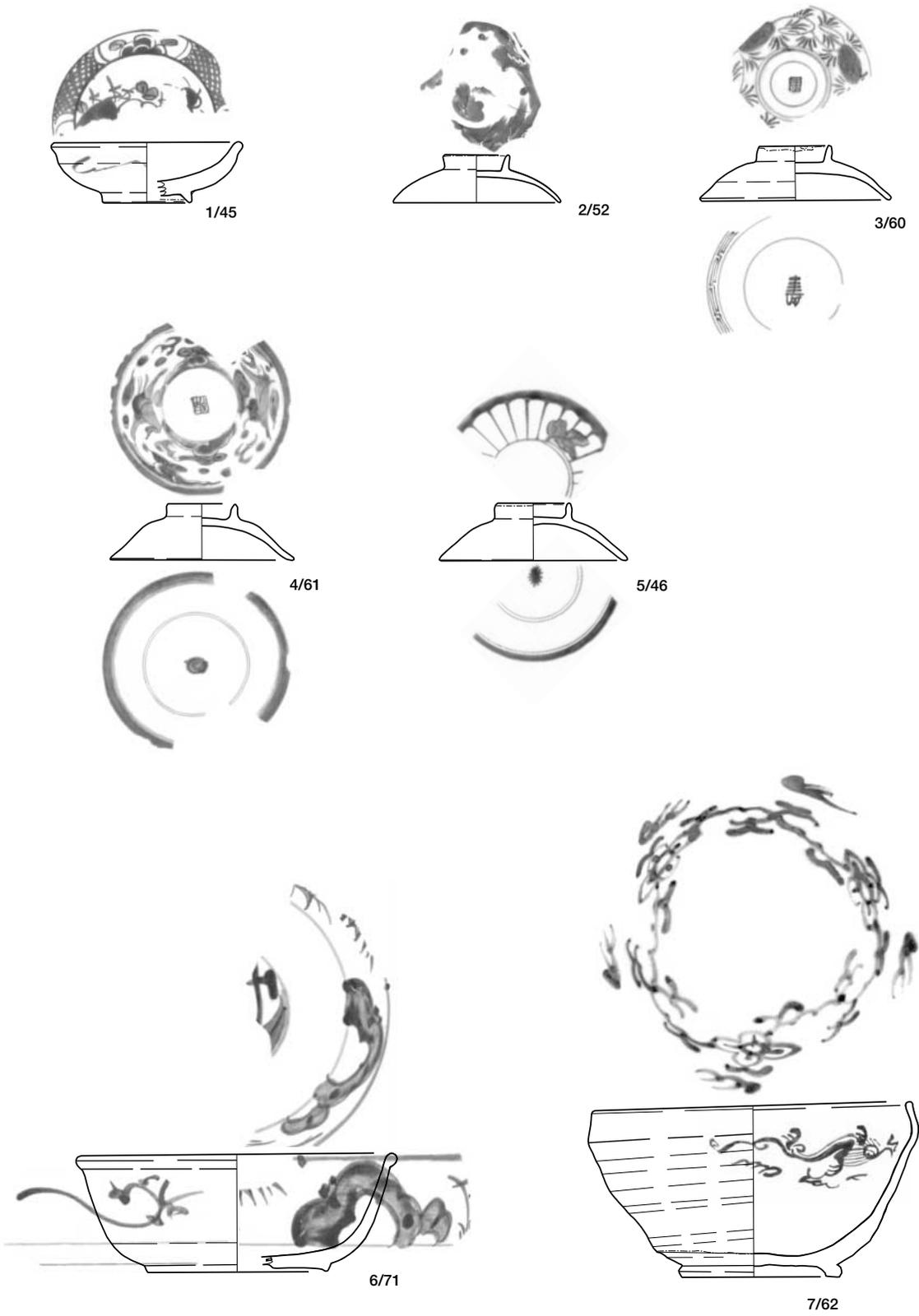
97B-SK87



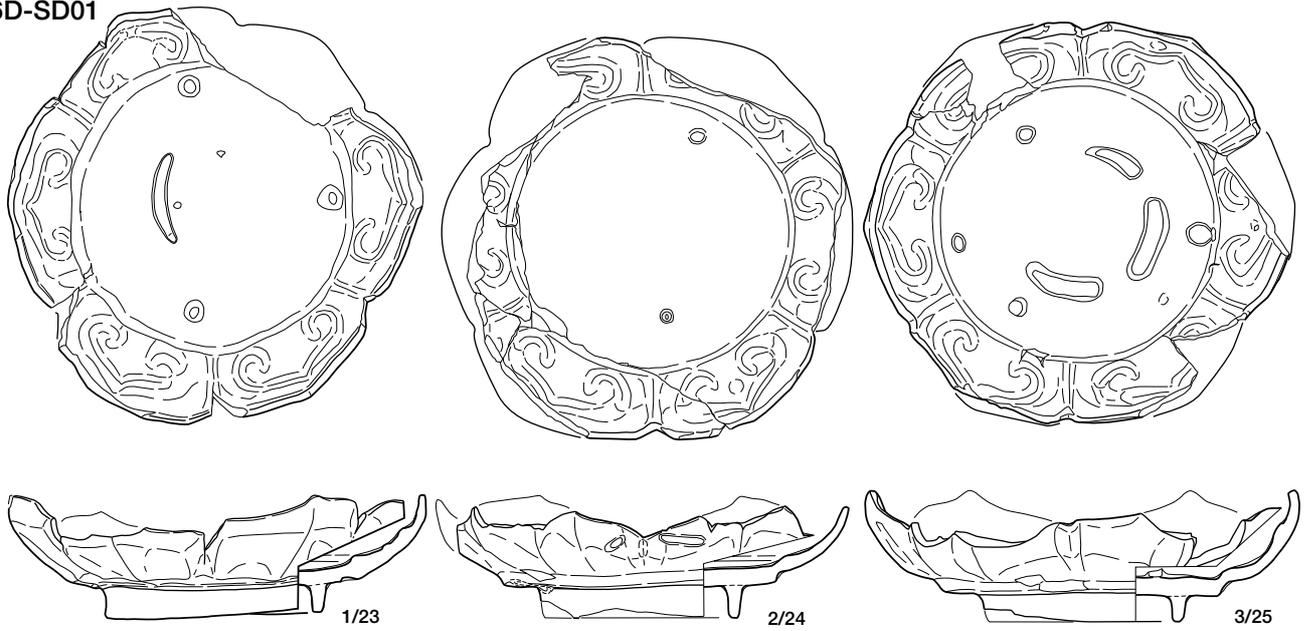
97B-検出



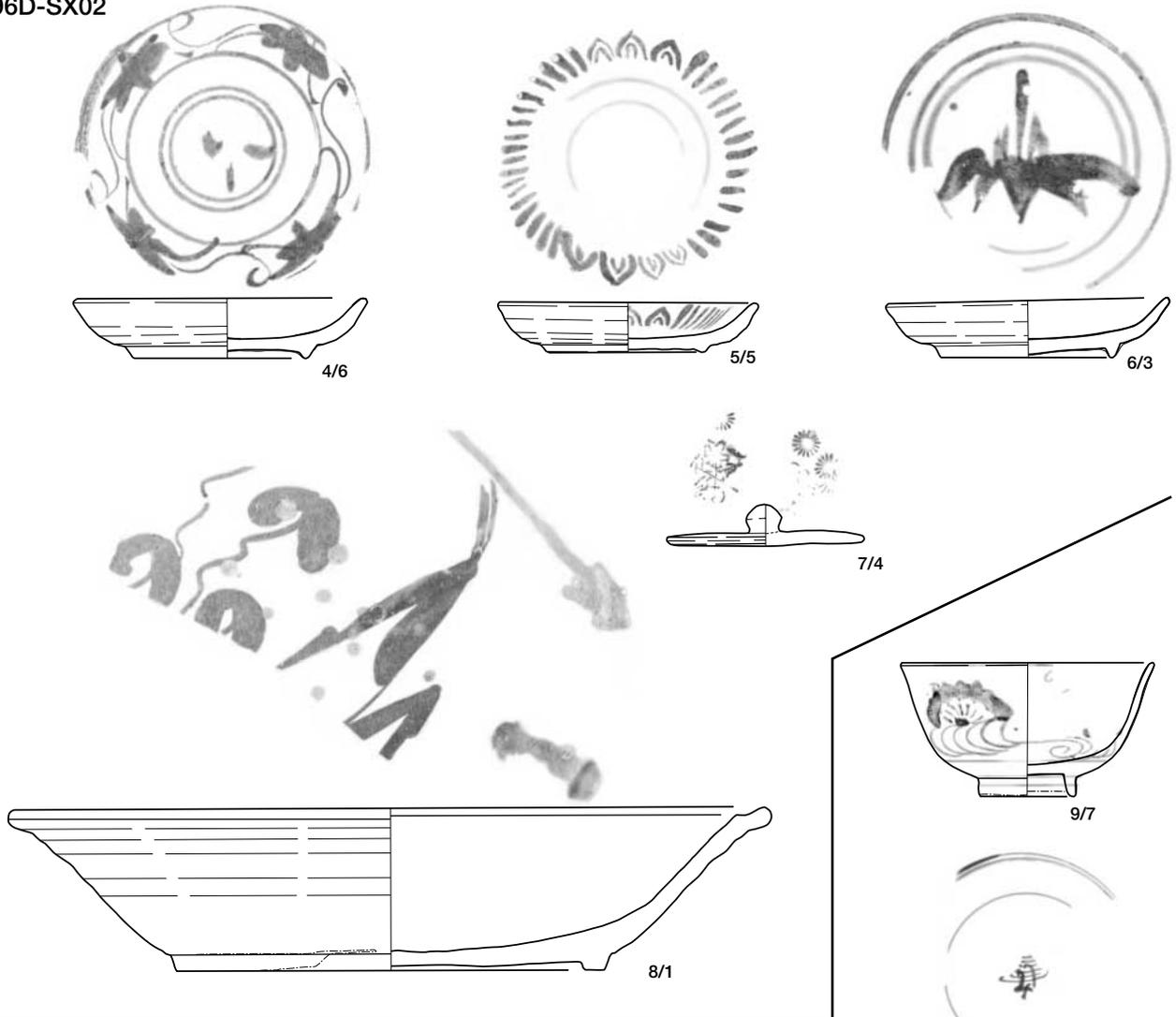
97B-検出



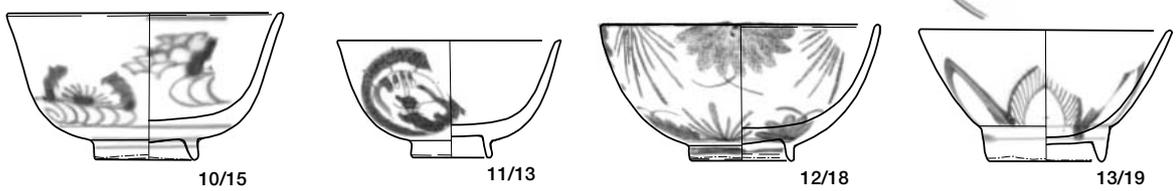
96D-SD01



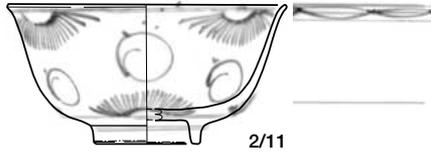
96D-SX02



96D-検出



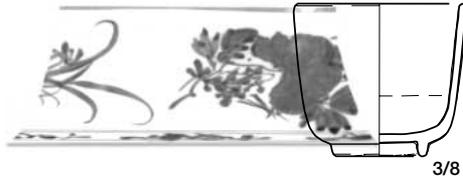
96D-検出



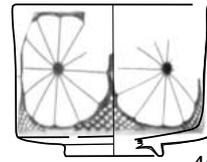
2/11



1/22



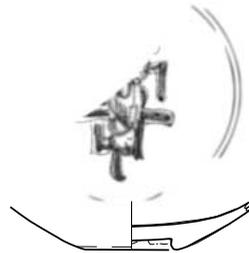
3/8



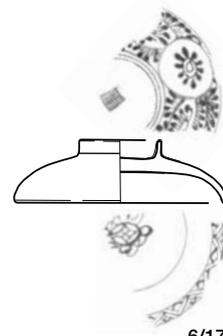
4/9



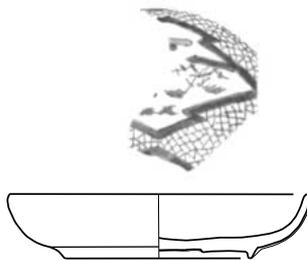
5/16



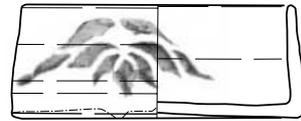
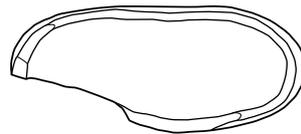
7/20



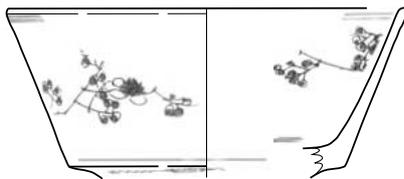
6/17



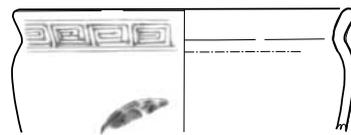
8/12



9/21

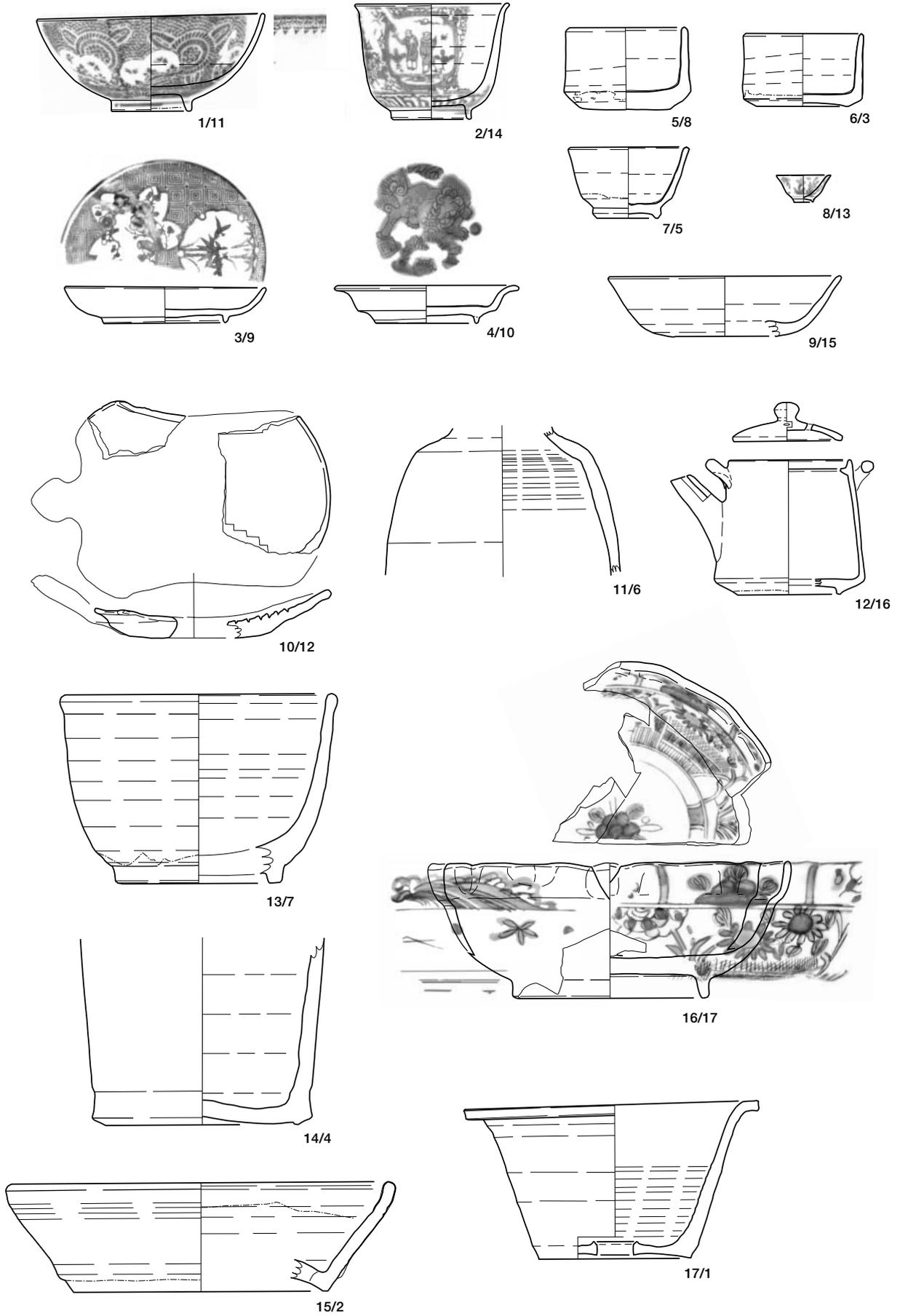


10/10

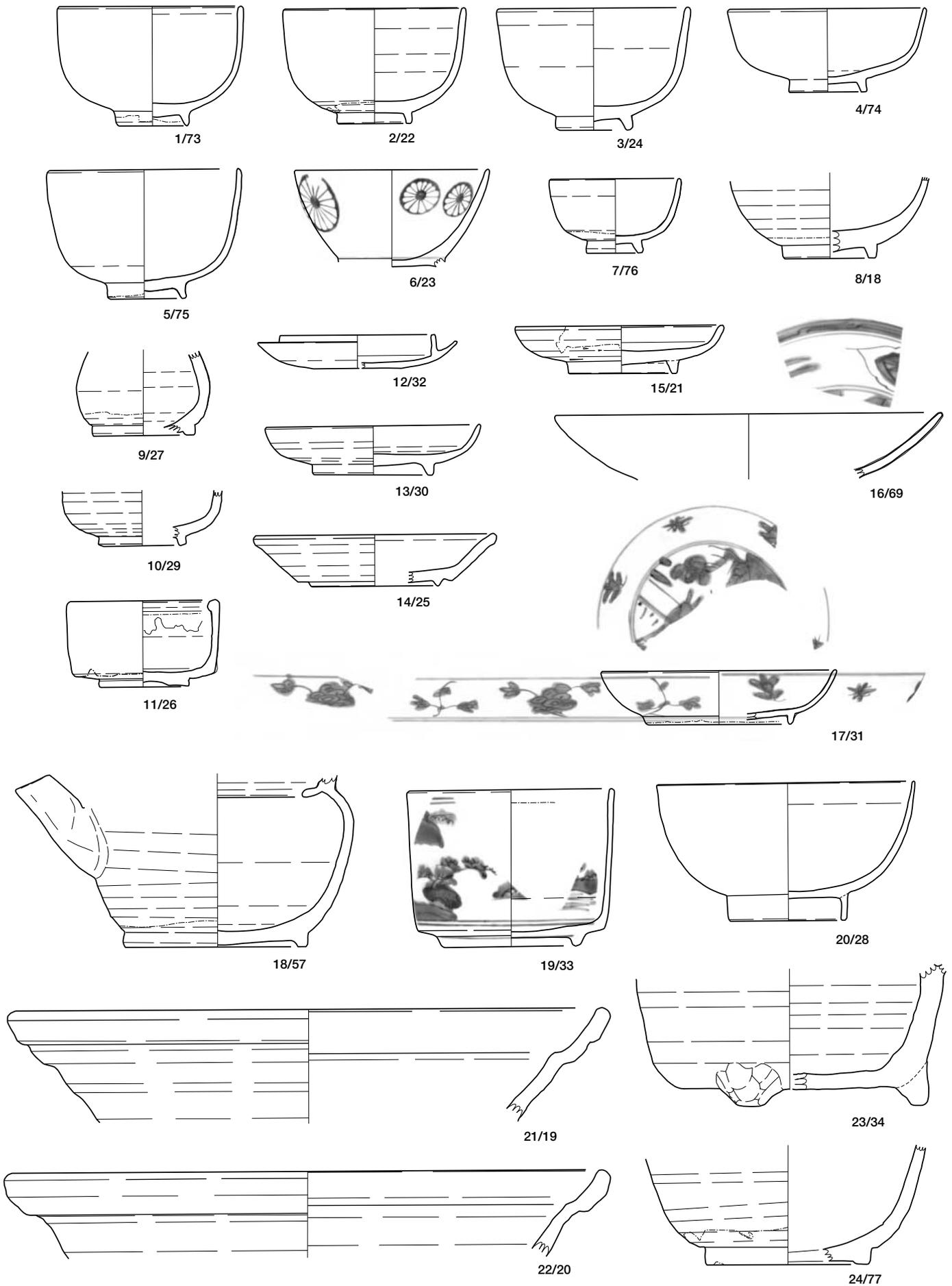


11/14

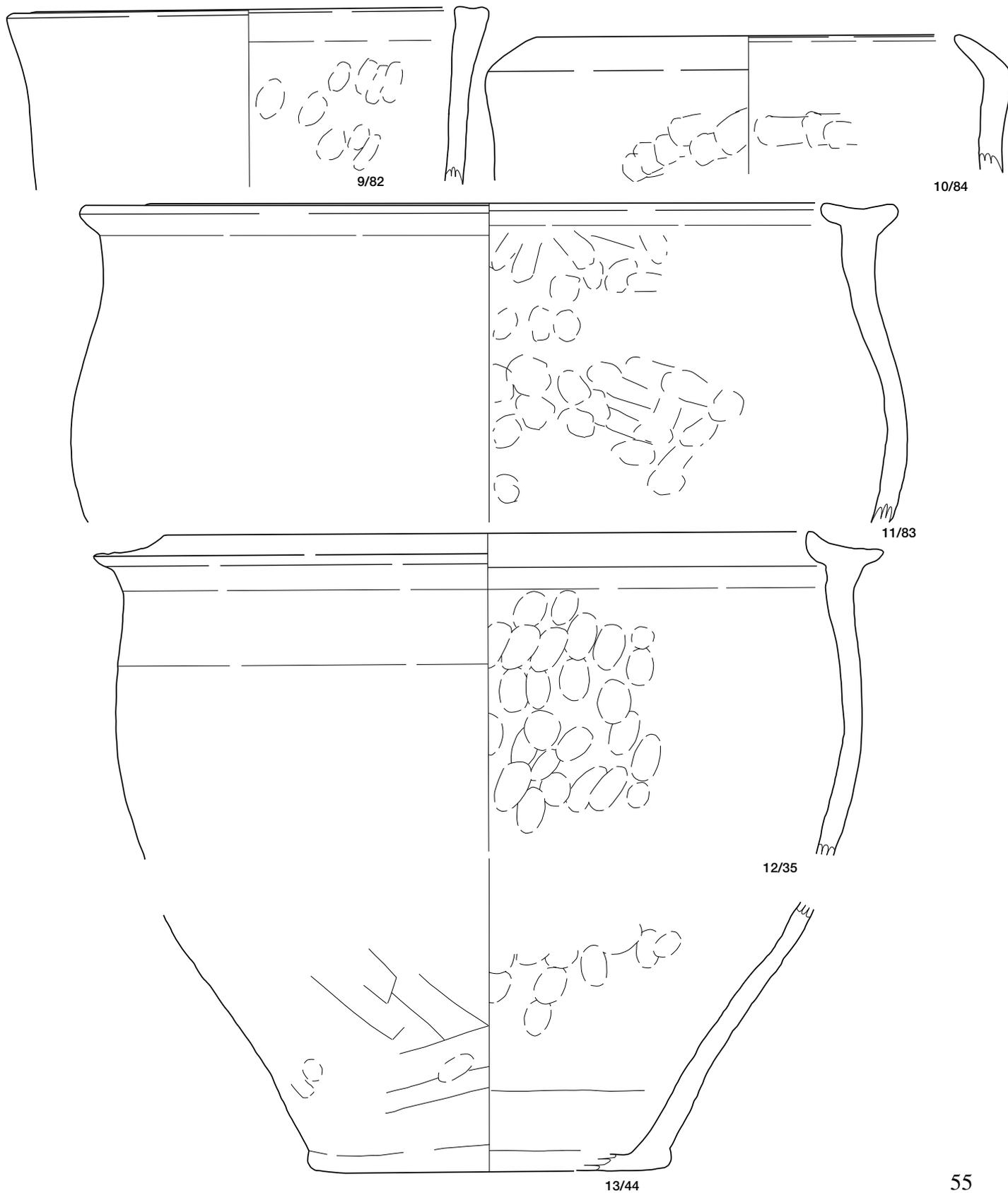
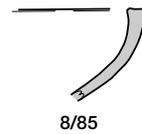
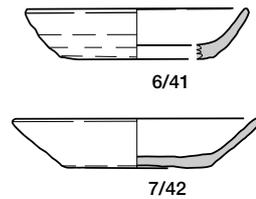
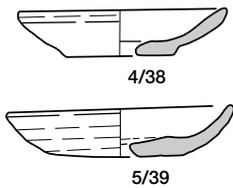
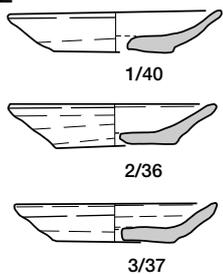
97A-SD01



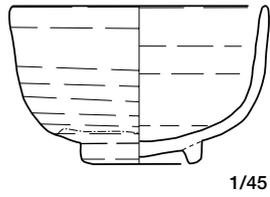
97A-SD02



97A-SD02

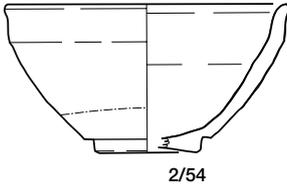


97A-SD03

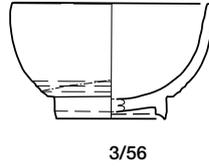


1/45

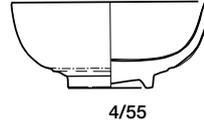
97A-SD07



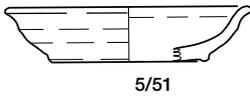
2/54



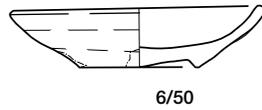
3/56



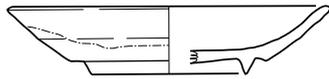
4/55



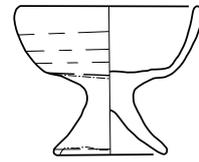
5/51



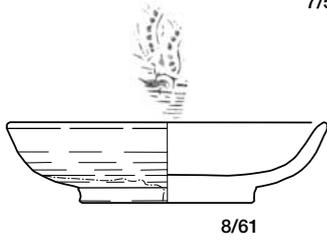
6/50



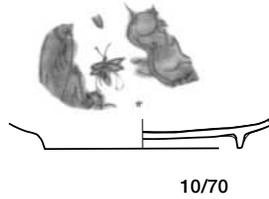
7/53



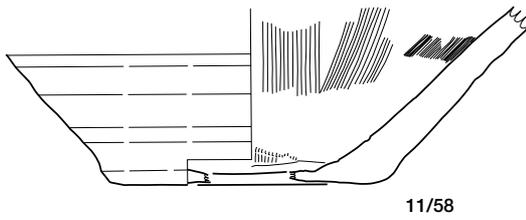
9/49



8/61



10/70

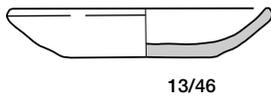


11/58

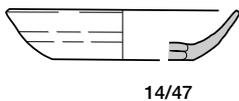


12/52

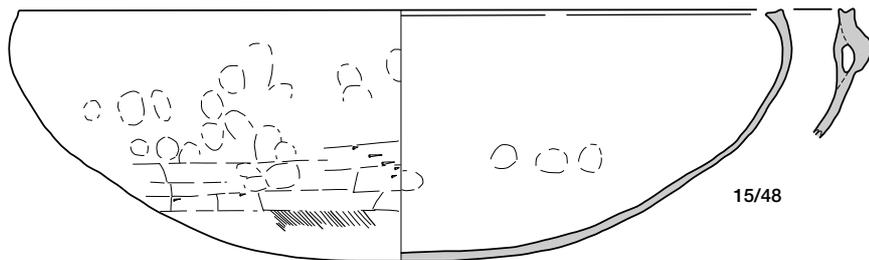
97A-SD06



13/46

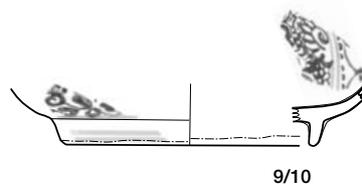
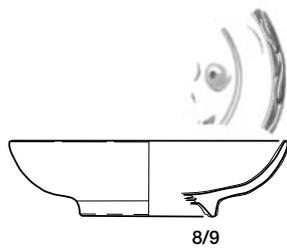
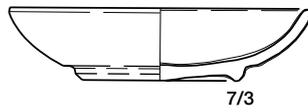
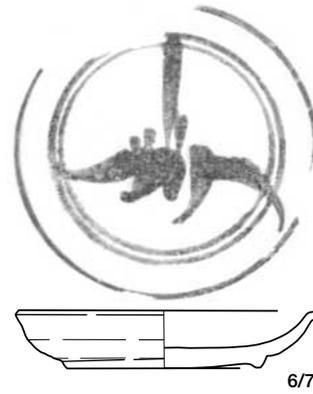
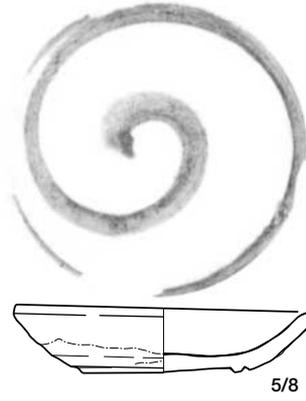
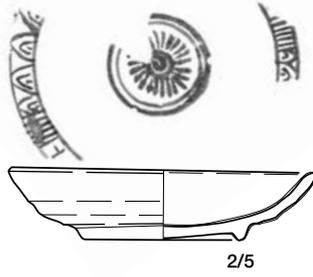
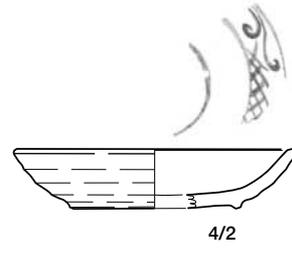
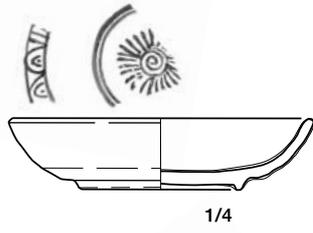


14/47

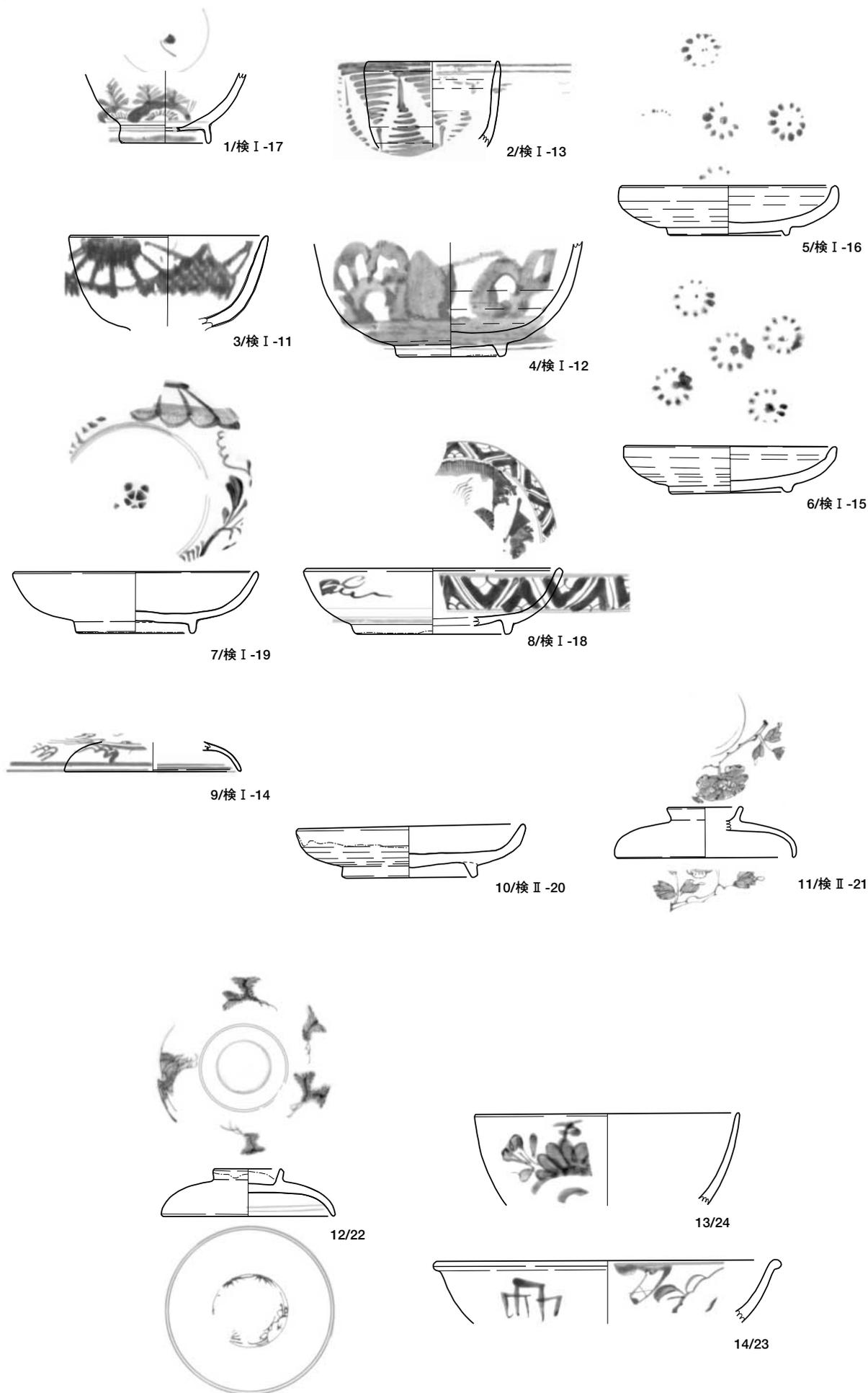


15/48

97D-NR01



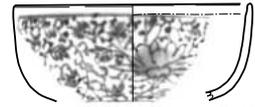
97D-検出



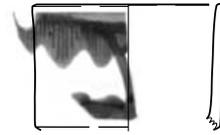
97C-SK



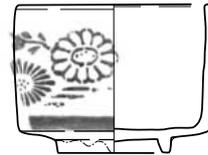
1/K15-5  
※最下層NR01出土資料と接合。  
本来は下層資料。



2/K26-6



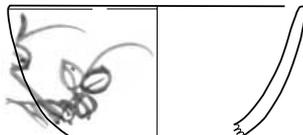
3/K26-7



4/K26-13



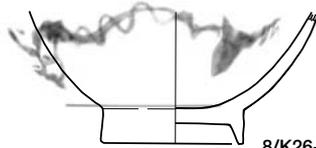
5/K26-14



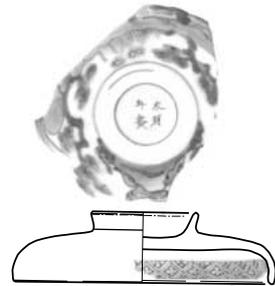
6/K26-9



7/K26-8



8/K26-12



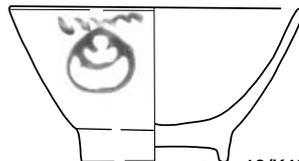
10/K26-10



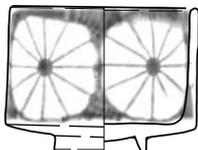
9/K26-11



11/K31-14



13/K42-37



12/K32-19

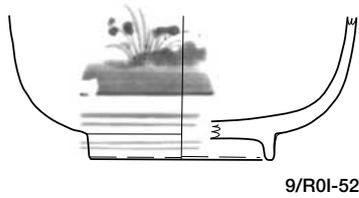
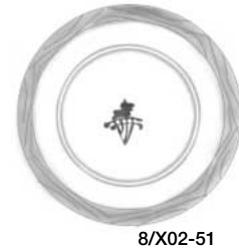
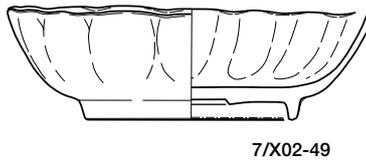
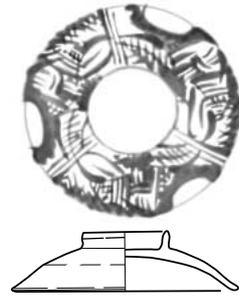
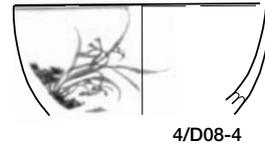
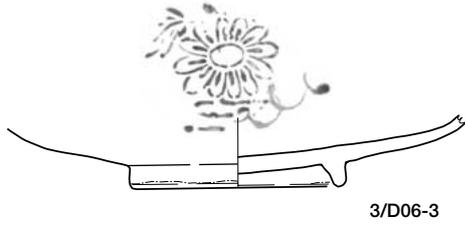
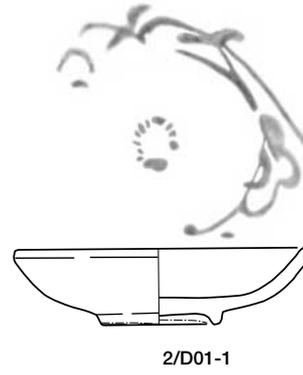
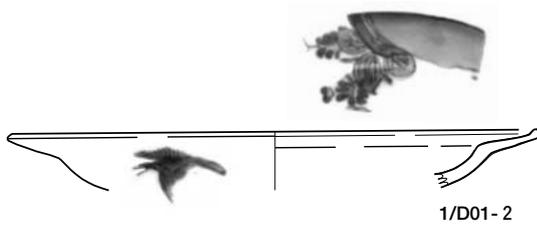


14/K42-40

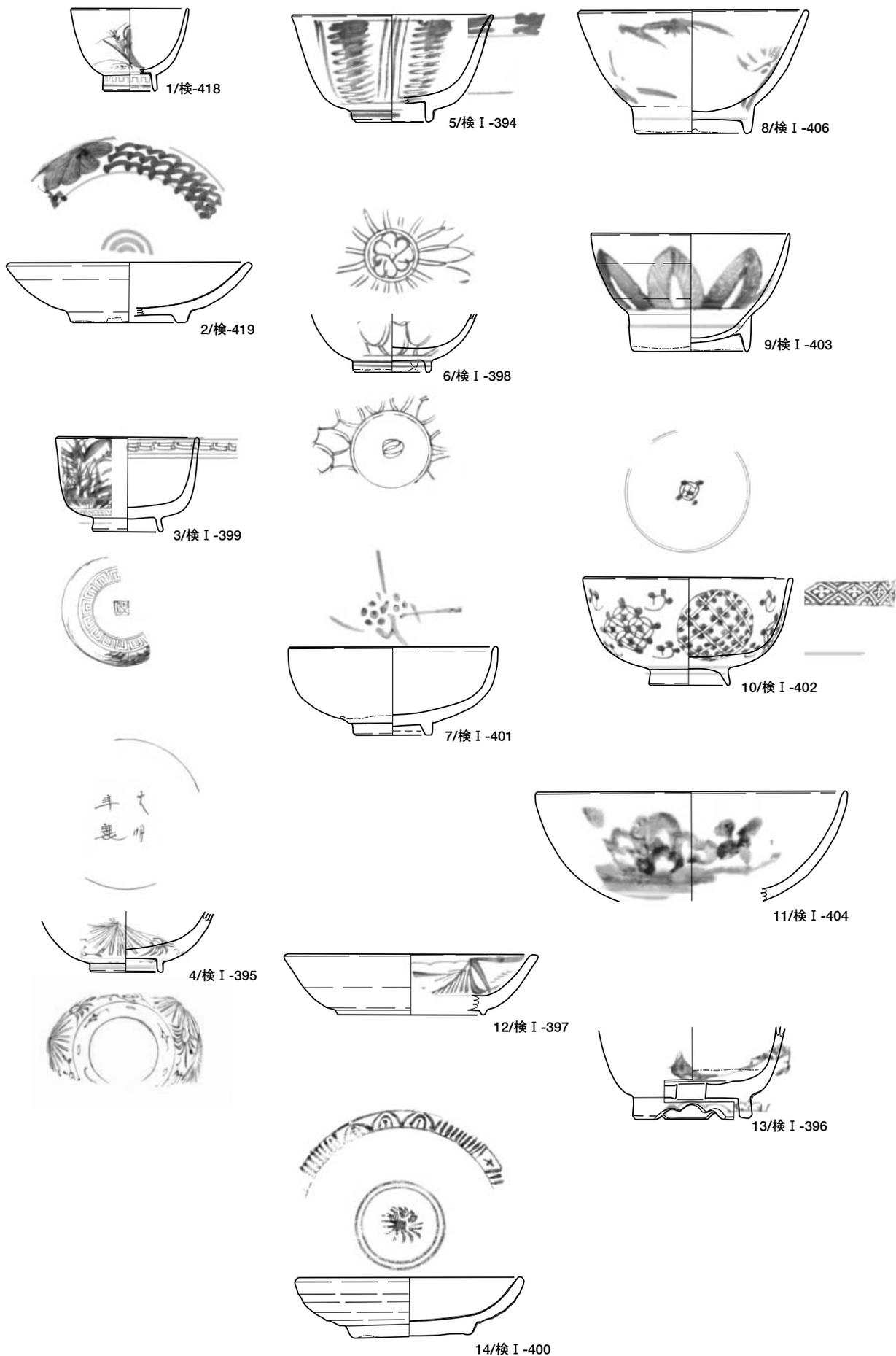
97C-SK39



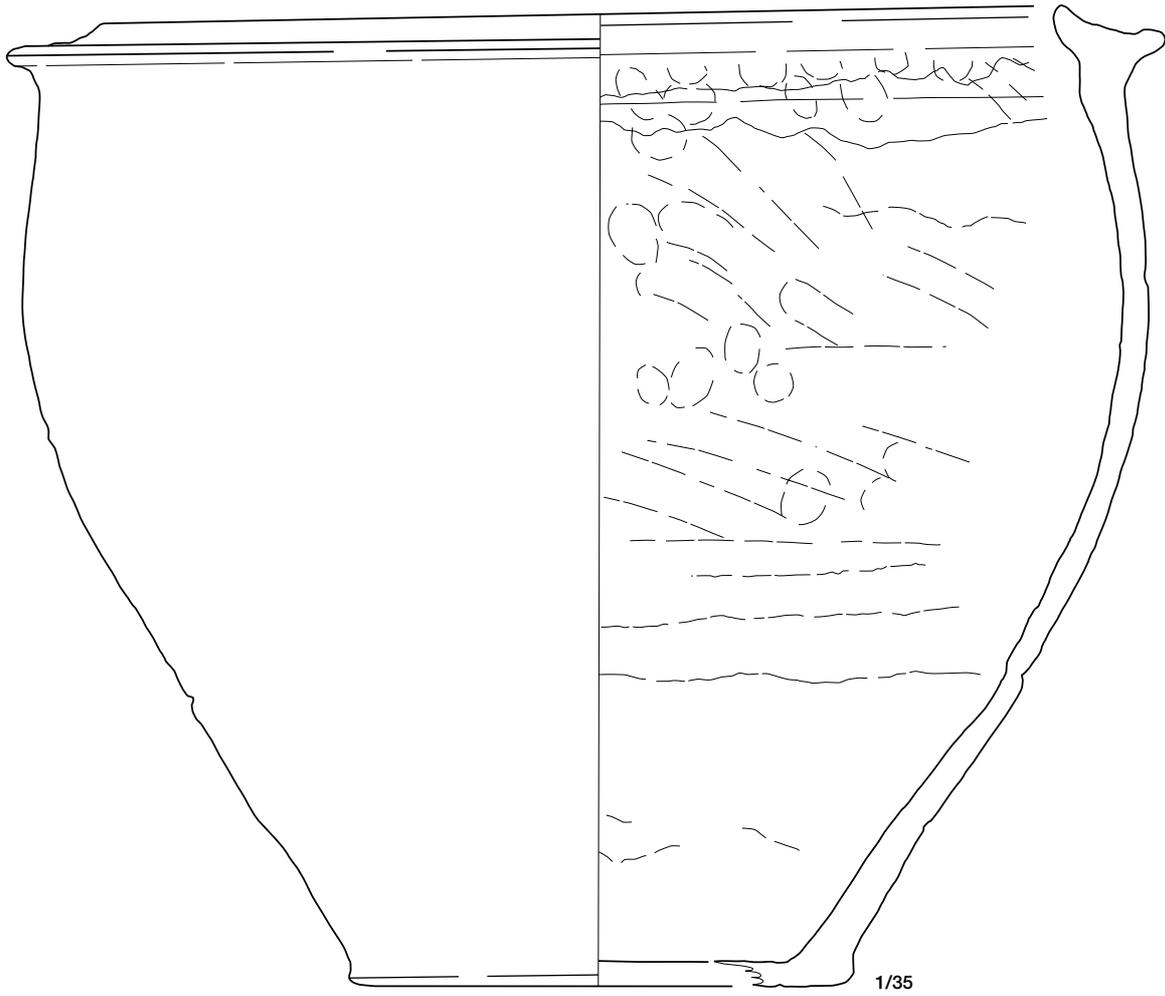
97C-遺構



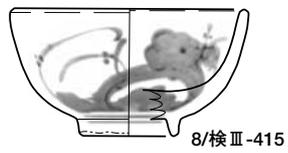
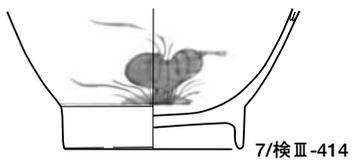
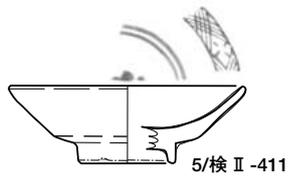
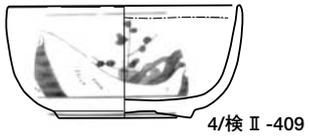
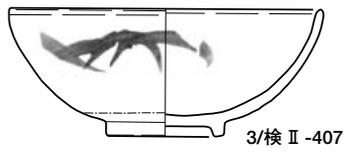
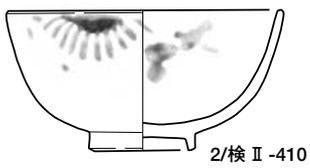
97C-検出



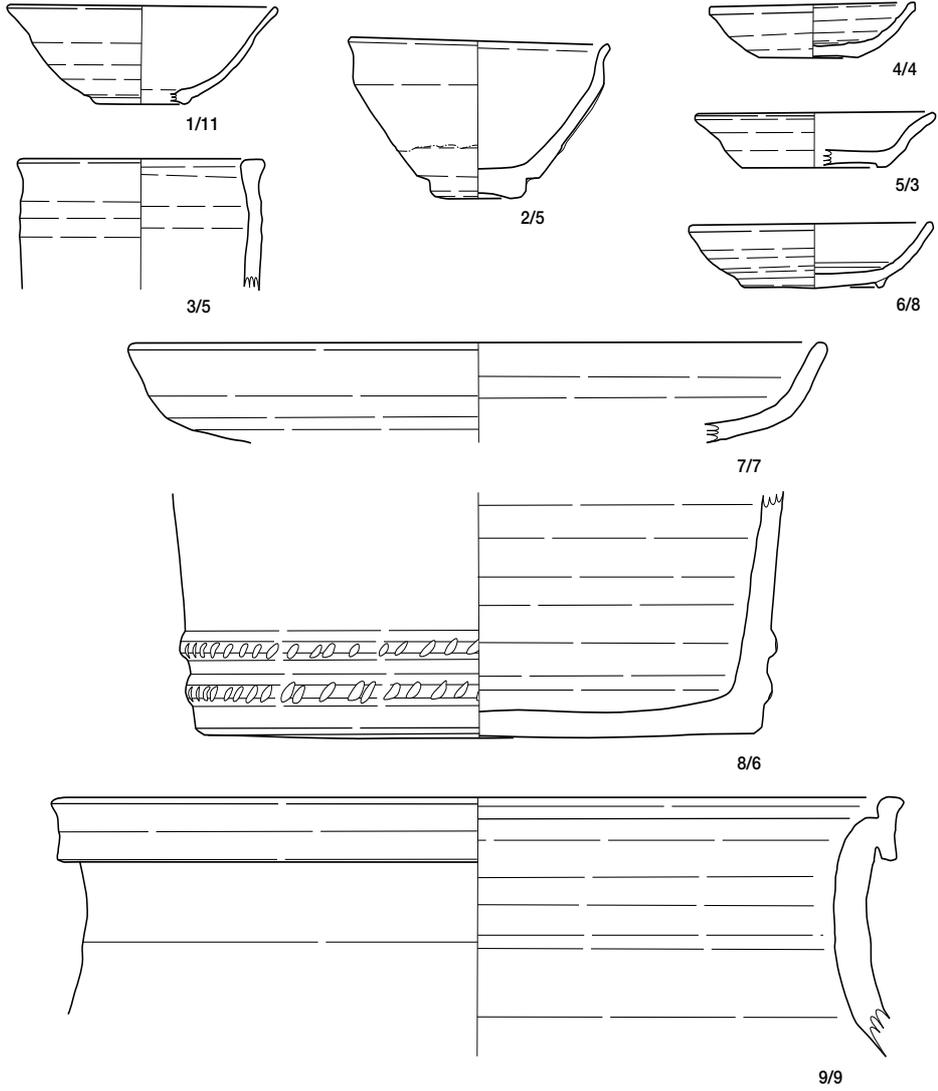
97A-SD02



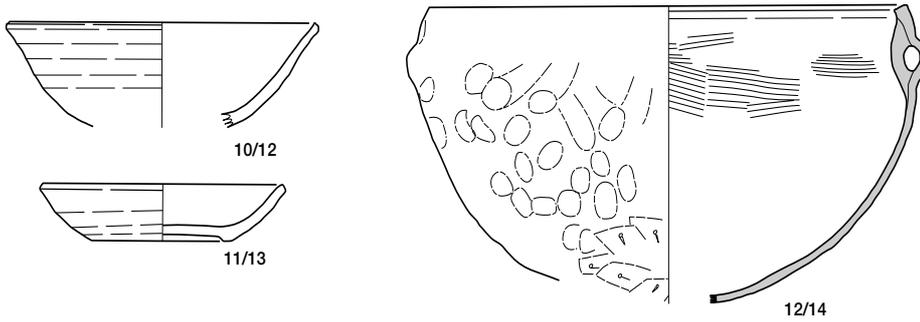
97C-検出



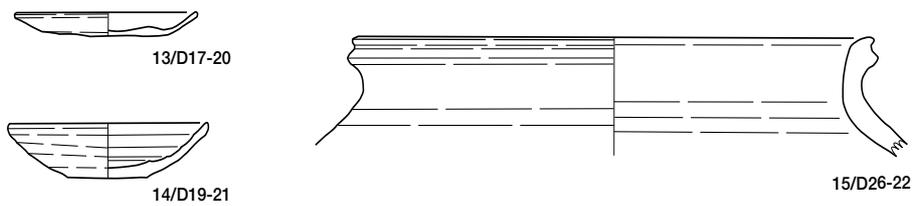
96H-SD01



96H-SD05



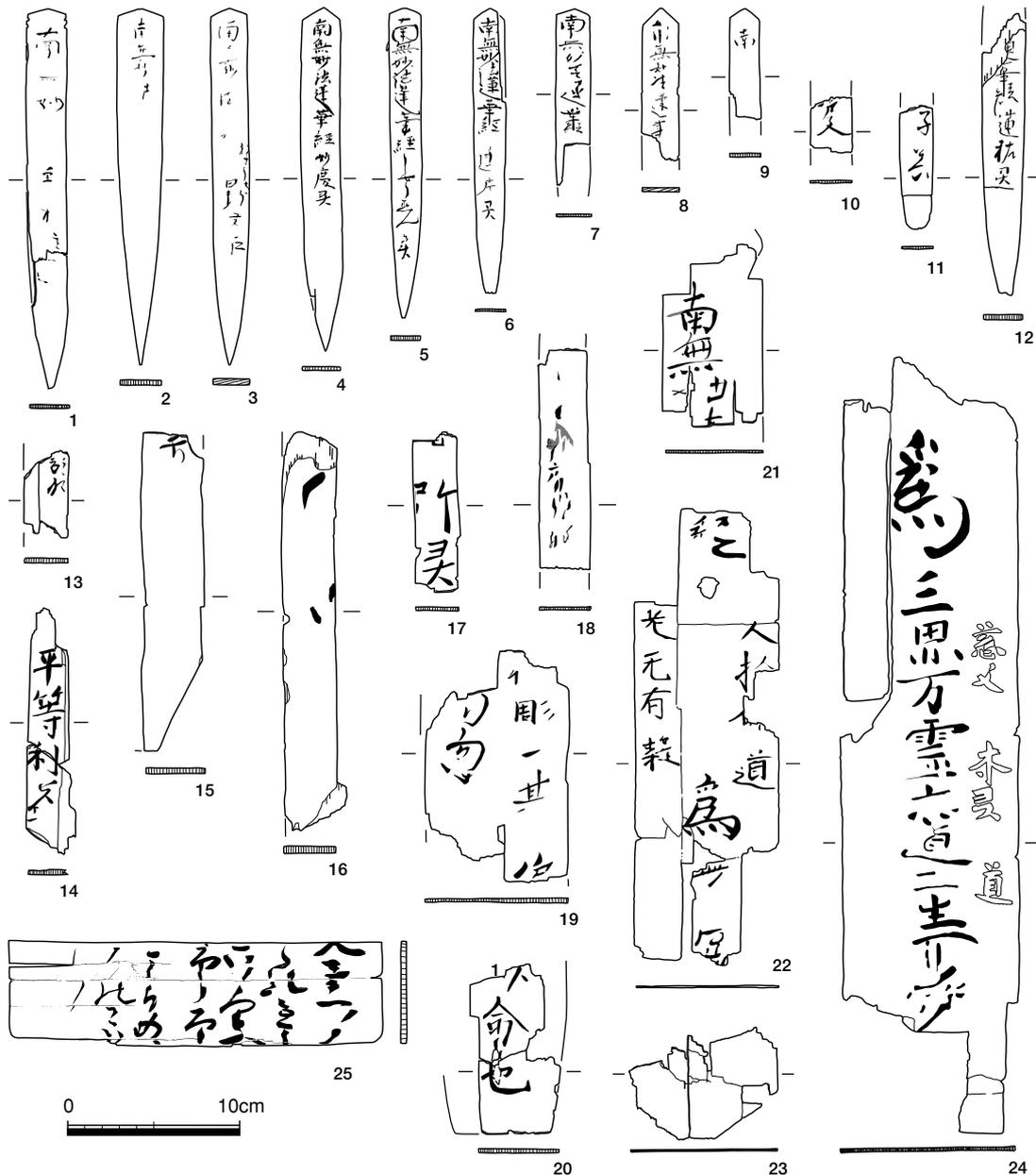
96H-SD



## B. 木製品

荊安賀遺跡出土木製品には、木胎漆器、曲物桶、結桶、折敷、箸、下駄、卒塔婆などの様々な種類の製品が認められる。ここでは卒塔婆などの木簡に関してのみ別項目を立てて報告を行い、その他の製品については遺構毎に記述を行う。なお、木胎漆器の分類は朝日西遺跡（鈴木1992）の分類に準拠し、高台が高い椀を椀A類、高台の低い椀を椀B類と表現する。その他の形状についてはその都度記述を進めていきたい。

図2-60 木製品実測図1  
木簡類



### (1) 木簡 (図2-60:1~25)

木簡には卒塔婆と消息の残簡と思われるものの二者が存在する。大半の資料は96G区NR01から出土した卒塔婆である。全て墨書は片面のみに施されていた。なお、木簡の釈読に際しては下村信博氏（名古屋市蓬左文庫）にご指導を仰いだ。

卒塔婆は規模と記述された文言から2類に分類することができる。

卒塔婆1類 (1~12) -- 全長が20cm前後、幅が4cm前後、厚さは0.2cm前後の大きさを測るもので、表面に「南無妙法蓮華經」の下に戒名を記し末尾に「靈」と記述するものである。裏面には全く墨書は認められない。頭部の形状は圭頭状にするものと、五輪

塔状に側面に刻みを入れるものの二者が認められる。下部の形状は体部下半ぐらいから尖らせている。形状と文言からあるいは位牌かもしれない一群である。

卒塔婆2類 (13~24) -- 全長は測定できないが、幅が10cmを超えるような大型のものである。ほとんどが残簡であるため規模と文言を特定することができない。下部の形状は角を斜めに切断した載頭三角形状となるものがある。

以上の分類をもとに個別に釈文と解説を加える。

1: 卒塔婆1類。釈文は「南□□ (無妙か) □□□□」である。

2: 卒塔婆1類。釈文は「南無妙□」

である。

3: 卒塔婆1類。釈文は「南無妙法蓮華經□□□(さうか)寺日□□□(新靈位か)」である。中央部の□□□寺は卒塔婆中軸よりも右側に記載され、寺院名+僧侶の戒名が書き込まれたものと思われる。文末も「靈位」と記載され他のものよりも格が高い人物を供養したものと想定される。

4: 卒塔婆1類。釈文は「南無妙法蓮華經妙慶靈」である。

5: 卒塔婆1類。釈文は「南無妙法蓮華經しやう恵ん靈」である。

6: 卒塔婆1類。釈文は「南無妙法蓮華經□□靈」である。

7: 卒塔婆1類。釈文は「南無妙□(法か)蓮華經□」で、下半部が欠損する。

8: 卒塔婆1類。釈文は「南無妙法蓮華□」で、下半部が欠損する。

9: 卒塔婆1類。釈文は「南□」で、下半部が欠損する。

10: 卒塔婆1類。釈文は「□□□」で、上下端部が欠損する。

11: 卒塔婆1類。釈文は「□子□」で、上半部が欠損する。

12: 卒塔婆1類。釈文は「□□華經蓮祐靈」で、上半部が欠損する。

13: 卒塔婆2類。釈文は「□□□」で、上下端部が欠損する。

14: 卒塔婆2類。釈文は「□平等利益□」で、上下端部が欠損する。

15: 卒塔婆2類。釈文は「□□」で、上半部が欠損する。

16: 卒塔婆2類。釈文は「□□□□」で、上下端部が欠損する。

17: 卒塔婆2類。釈文は「□□」で、上下端部が欠損する。

18: 卒塔婆2類。釈文は「□□靈□」で、上下端部が欠損する。

19: 卒塔婆2類。釈文は「□彫一□(其か)□□/□□(向か)□」で、上下端部が欠損する。

20: 卒塔婆2類。釈文は「□□命也」で、上半部が欠損する。

21: 卒塔婆2類。釈文は「南無□□(妙法か)□」で、上下端部が欠損する。

22: 卒塔婆2類。釈文は「經/人□□(捨か)□道/老无有□(疑か)/為□□」で、上下端部が欠損する。

23: 卒塔婆2類。上半部が欠損し、表面と裏面ともに墨書が認められないが、下端部の形状から卒塔婆と推測される。

24: 卒塔婆2類。表面「為三界万靈六道平等 慈父 □本靈 □道□□□/□□」で、上下端部が欠損する。為三界万靈六道平等は卒塔婆中軸に大書され、慈父以下の文言がその左右に記載されていたが、左側はほとんど読むことができなかった。左右に記載された文言はほとんど墨が流れていたが、墨書されていた部分が浮き上がって残存おり、この卒塔婆は長い間露天に晒されていたものと考えられる。

一方、25は消息と考えられる木簡の残欠である。卒塔婆とは異なり木目に対して直交方向に文字が記入され、内容も文章と考えられる。釈文は「□□□□(三ノカ)□/候様□(きか)□/□□/市□(堂か)□/てら□/□(然か)者□/□(事か)」である。

(2) 97D区NR01出土木製品(図2-61:1~35)

97D区NR01から出土した木製品には木胎漆器椀A類と椀B類と皿、曲物桶柄杓、曲物桶底板、箸、下駄などがある。

木胎漆器椀A類には高台裏の削り込みが浅いもの(1)と深いもの(2と3)がある。前者は内面を赤色漆で外面を黒色漆で塗布されたもの、後者は内外面ともに赤色漆が塗られた「根来手」と呼ばれるものである。両者とも施紋は確認されなかった。3は体部が穿孔され柄杓として転用された可能性がある。木胎漆器椀B類は内面を赤色漆で外面を黒色漆で塗布されたもので、体部外面と高台裏に赤色漆で紋様が施されている。5は草花紋、6と7は亀甲紋が描かれ、8は紋様のモチーフが不明である。9は木胎漆器小椀で内外面とも茶色の光沢のある漆が塗布されている。10と11は木胎漆器皿で、前者は高台裏を除く内外面ともに赤色漆が塗られたもの、後者は内面を赤色漆で外面を黒色漆で塗布されたものである。

これらの木胎漆器は、椀A類と椀B類の組み合わせが明瞭に残存するものの、草花紋を施した椀や茶色漆の小椀などが存在することから、16世紀後

半から17世紀にかけての時期に属する資料と考えられる。高台裏の削り込みが浅いとした1でも高台裏が約1cmほど削り込まれていることから、比較的新しいものと推察される。

一枚板で作成された小型の円板状木製品を曲物桶底板と推定して報告する。13は桜皮によって側板と接続させた曲物桶底板で、12、14、15はその痕跡を残さないものである。15は中央が穿孔された小型製品で両面に黒色塗布物が認められる。30は側板が半分程度欠損する曲物桶柄杓である。底板端部に円柱状の材が差し込まれて欠損していたことから、柄の先端を固定する補助材が使用されていたと推定される。

31は組物の板材と思われる。一辺が段差を持ち全体で8つの孔が穿たれている。桜皮によって綴じ合わされた痕跡も残るが、どのように組み合わせるとどのような製品が形づくられたのかは不明である。27~29は平面形が長方形の薄い板材の周囲に数ヶ所穿孔された有孔板材である。形状からみて折敷とは考えにくく、屋根材の一部の可能性も考えられる。

箸(19~26)は先端が細くなるように加工されたものばかりで、全長が残存する資料は全く認められなかった。16~18は火付木(火口)と考えられるもので、先端が焦げて欠損する。

下駄は一木作りの連歯下駄のみが存在する(32~34)。平面形は長楕円形で、幅がやや広いタイプである。32は歯部が著しく摩耗しており前歯部の上面から鉄釘が3ヶ所打ちつけられている。これは摩耗した歯部を別材で補填した痕跡と考えられる。35はへら状木製品である。

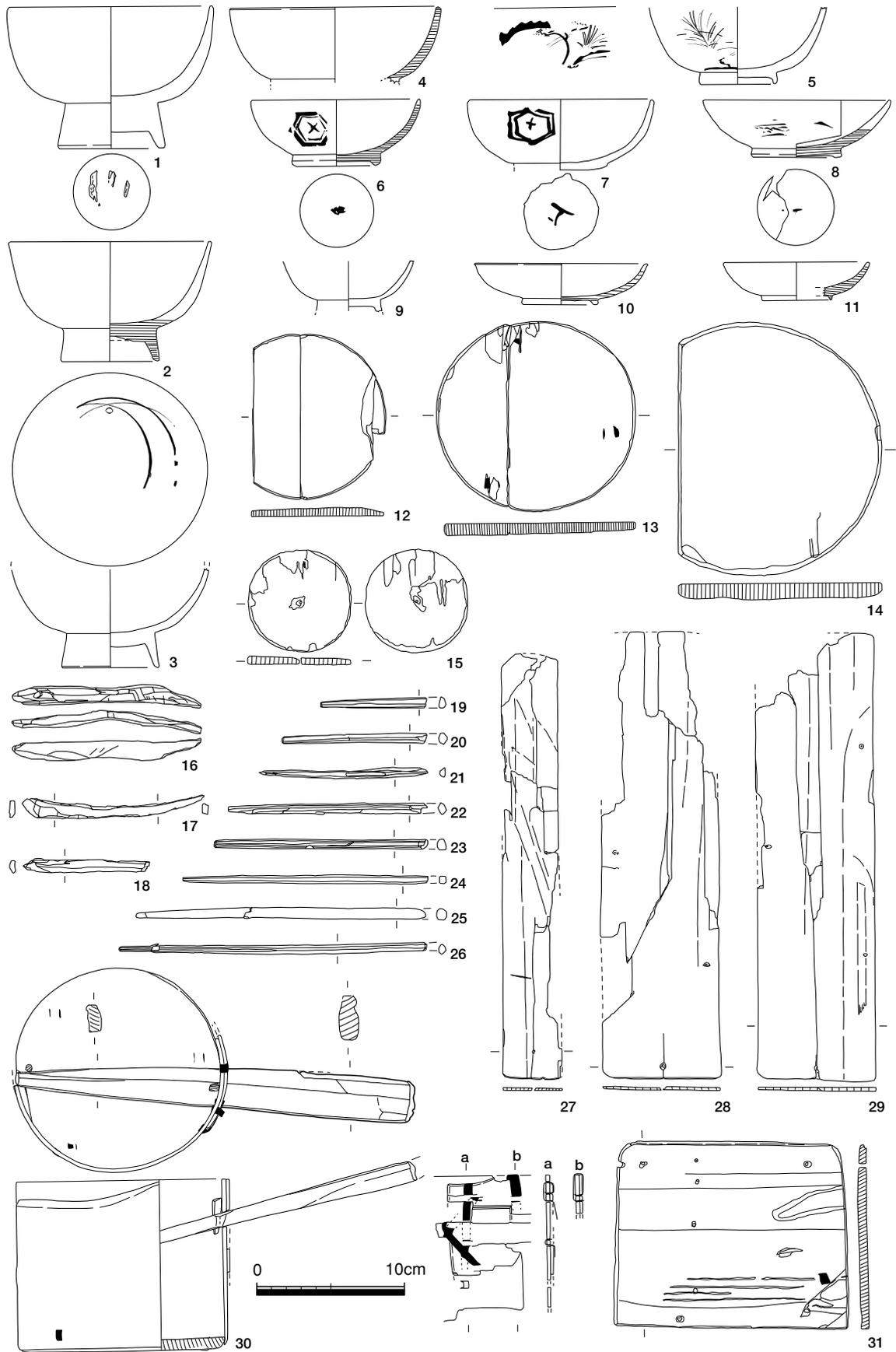
(3) 96G区NR01出土木製品(図2-63:36~103)

96G区NR01から出土した木製品には木胎漆器、曲物桶、結桶、箸、下駄などがある。

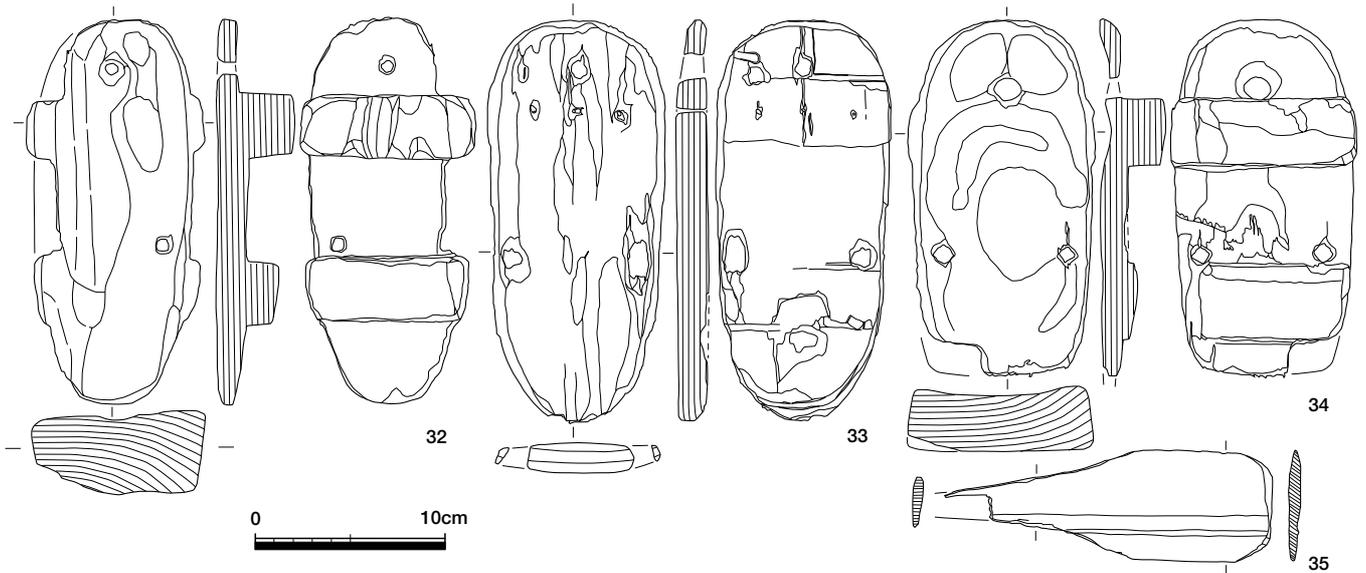
木胎漆器椀A類は、高台裏の削り込みの深さで浅いもの(36~38)、中程度のもの(39、41)、深いもの(42、43)に分類できる。36~40は内面を赤色漆で外面を黒色漆で塗布されたも

図2 -61 木製品実測図2 各種

97D区NR01(1)



97D区NR01(2)



ので、外面に赤色漆で紋様が施される。36は宝珠紋や雲紋などを組み合わせた紋様構成B類（鈴木1992：以下同様）、37は飛翔する鶴と地面にたたずむ亀を組み合わせた紋様構成A2b類に属する。38は丸に一紋を3つ重ねた紋様、39と40は草花紋が描かれている。41～43は高台裏を除く内外面とも赤色漆が施されたもので、43の外面は黒色漆で紋様が描かれていたように思われるが、遺存状態が不良で図化できなかつた。椀B類は高台裏（底部）に刻線が彫り込まれるものが多い（45～47）。皿は器壁が薄く口縁部が玉縁状になるものが多く、高台裏を除く内外面とも赤色漆が施されている。木胎漆器椀A類の高台裏の削り込みが深い42などの存在からみて、17世紀後半から18世紀にかけての資料が含まれる可能性も考えられる。

曲物桶も多様な形状が認められる。58は平面形が隅丸方形の板材上に曲物側板を綴じ合わせたもの、59は底板の外側に側板をはめ込み桜皮で縫い綴じ合わされたもの、60は底板縁辺に段差を設けその上に側板をはめ込み竹釘？によって固定したものである。62は柄杓の柄の先端を固定する補助具、61は十字に2枚重ね合わせてその上に曲物桶を乗せる運搬具の一部と思われる。一方、63は複数枚の板材を用いて円板状に作る結桶底板の一部と

考えられる。

箸は比較的多く出土しており全長が判明するものもいくつか存在する。この中で65はもっとも長く25cm弱である。下駄は一木作りの連歯下駄のみが存在し（79～82）、いずれも平面形は長楕円形で幅がやや広いタイプである。80は平面形の前端部が丸みを帯びるが、他は前端部が直線的である。81は歯部が摩耗して欠損したもので前歯部の上面から鉄釘が3ヶ所打たれている。摩耗した歯部を補充した痕跡と考えられる。82の表面には焼き印で流水紋？が押されている。

この他には用途がはっきりと分からない細長い板材が多く認められる（89～102）。99は先端を尖らせた杭状の材であるが、中央部にほぞ孔が施されており、もともとは建築部材であった可能性が考えられる。103は竹製編物が2～3重に重なった状態で出土したもので、竹製編物の容器であった可能性も考えられる。

(4) 96G区SD01出土木製品(図2-64:104～106)

96G区SD01から出土した木製品には木胎漆器がある。104は高台裏の削り込みの深さが中程度の木胎漆器椀A類である。105は筒形の体部を持ち、体部に一条の突帯を持つタイプの椀である。106は椀B類で外面に草花紋が描かれている。

(5) 96G区SD01下層出土木製品(図2-64:107～109)

96G区SD01下層から出土した木製品には木胎漆器などがある。107は体部のみが残存しており形状を明らかにできない木胎漆器椀である。外面は黒色漆上に灰色塗布物で丸に草花紋（桐紋？）が描かれている。葉の部分は葉脈が掻き落とし技法で表現されている。

(6) 96BC区SD29出土木製品(図2-65:110～132)

96BC区SD29から出土した木製品には木胎漆器、曲物桶、結桶、折敷、下駄などがある。

木胎漆器椀としては、椀A類（110）と椀B類（111～113）が存在する。全て内面を赤色漆で外面を黒色漆で塗布されたものである。111は高台裏部に線刻で円紋が2個重ねられて描かれている。曲物桶は底板（114、117）と側板（115）がある。114は、両端部には桜皮が残存し、かつ側面には3ヶ所釘穴が認められるものである。折敷は、方形板材の角を切り平面形が不等八角形になるもの（119、122）と、平面形が完全な四角形になるもの（121）がある。119は側板と底板が組み合せて出土した小型の折敷である。側板には雲形？の透かしが施されている。側板が組み合った面の裏側にも側板が接続していたと推定される痕跡が残存し

96G区NR01(1)

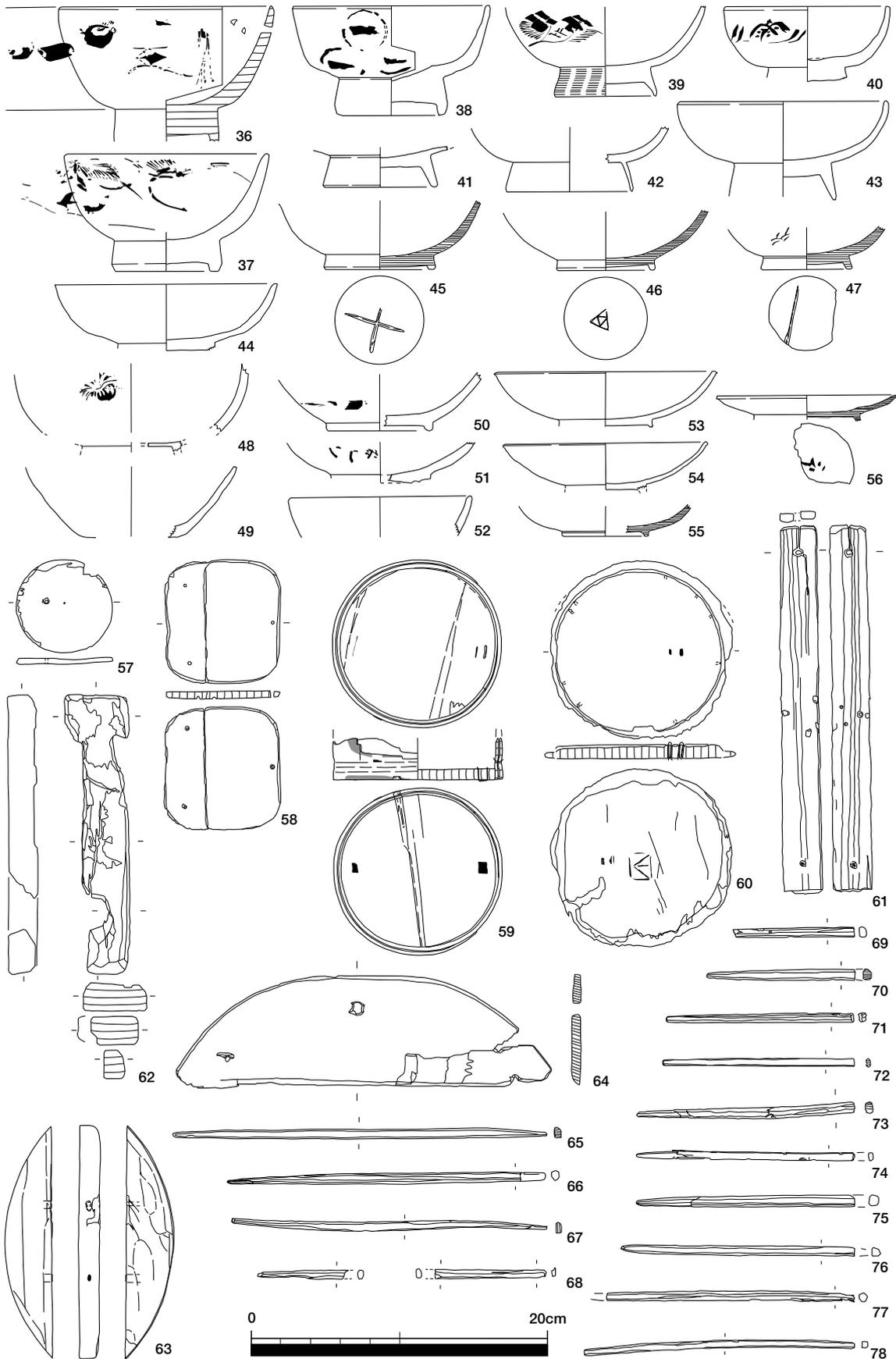
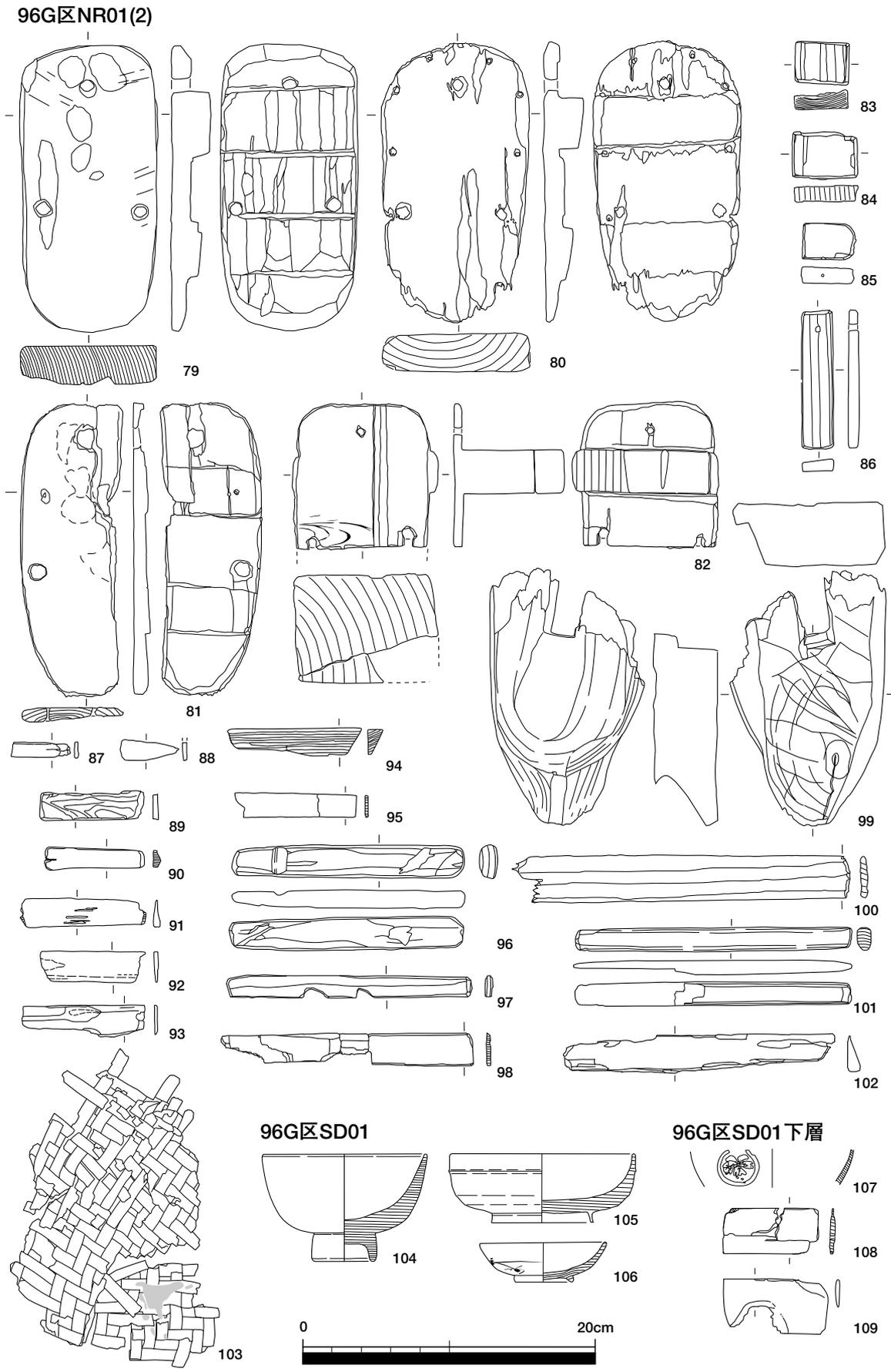
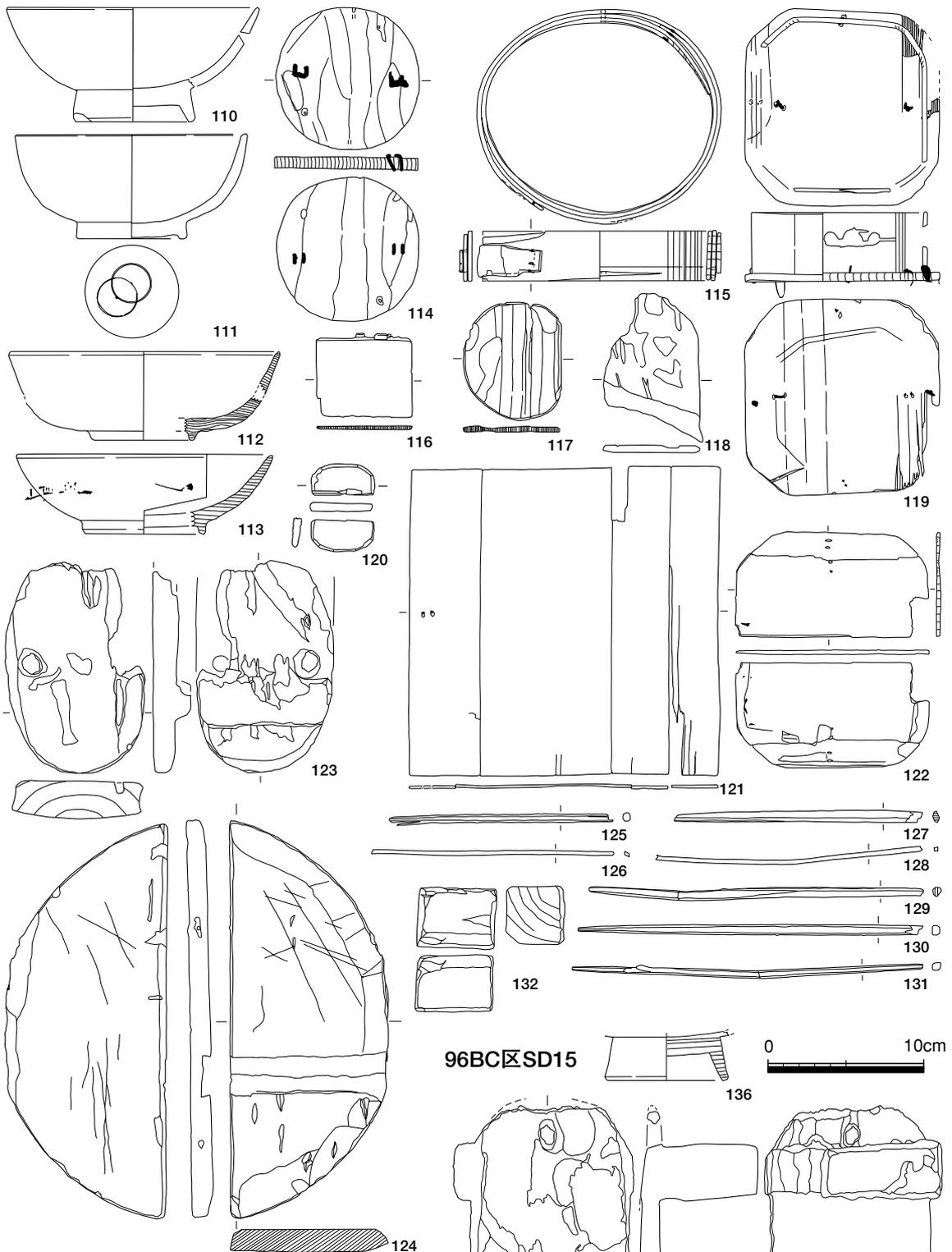


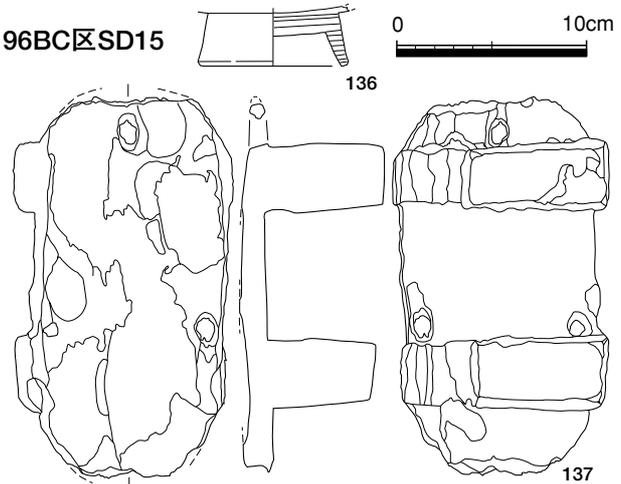
图2 -64 木製品実測図5 各種



96BC区SD29



96BC区SD15



96BC区SK02

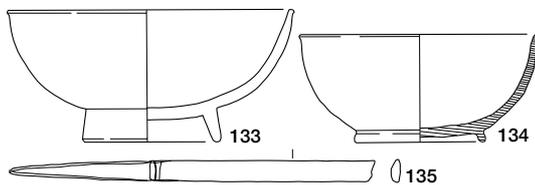
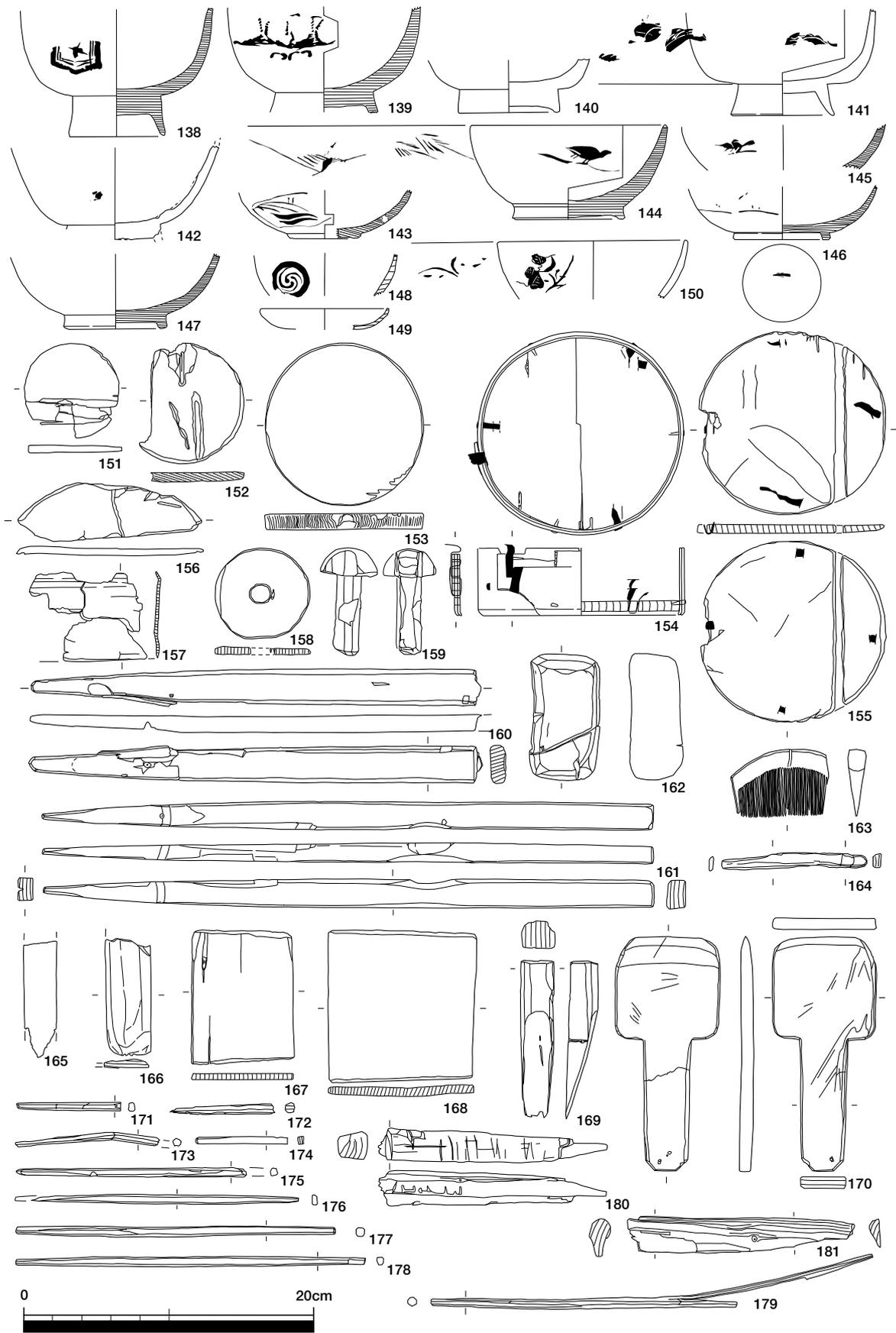
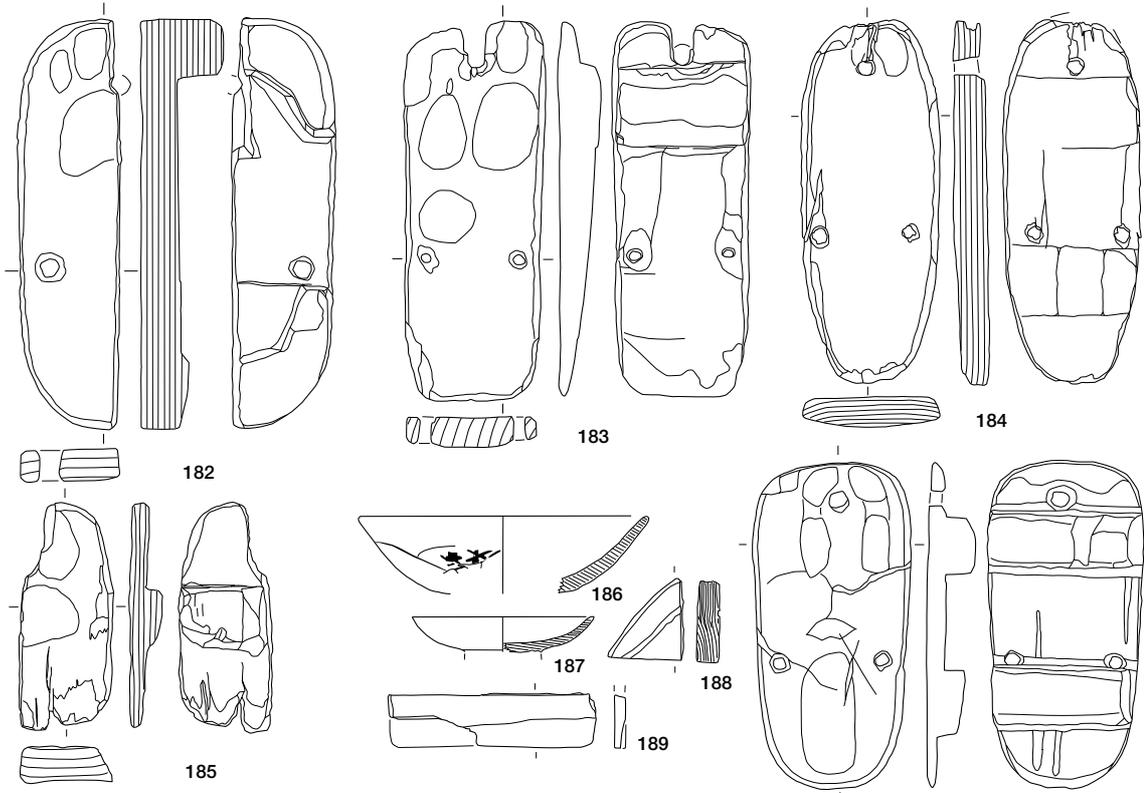


图2 -66 木製品実測図7 各種

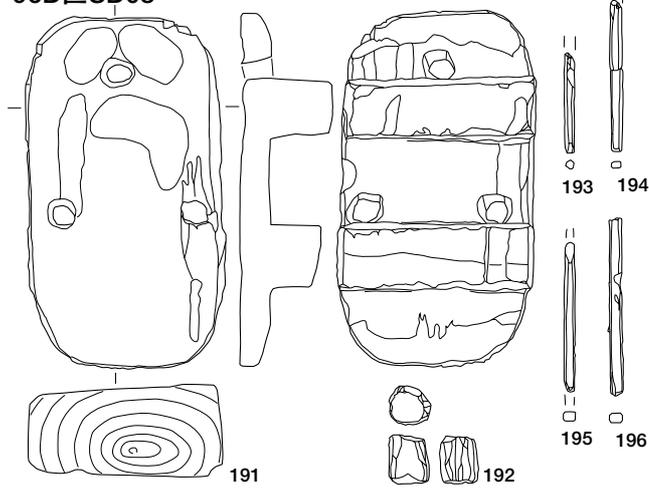
96D区SD01(1)



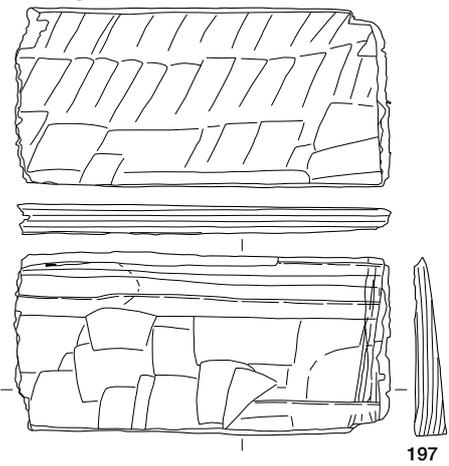
96D区SD01(2)



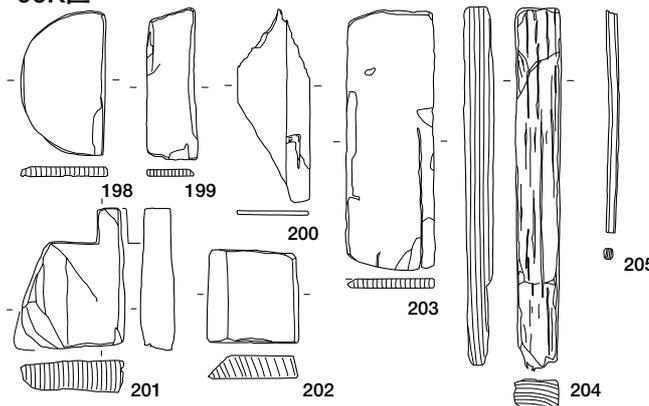
96D区SD08



96F区



96K区



97A区SD07

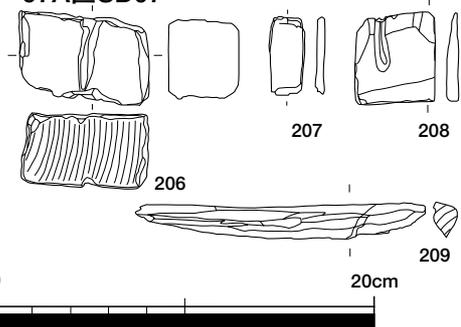
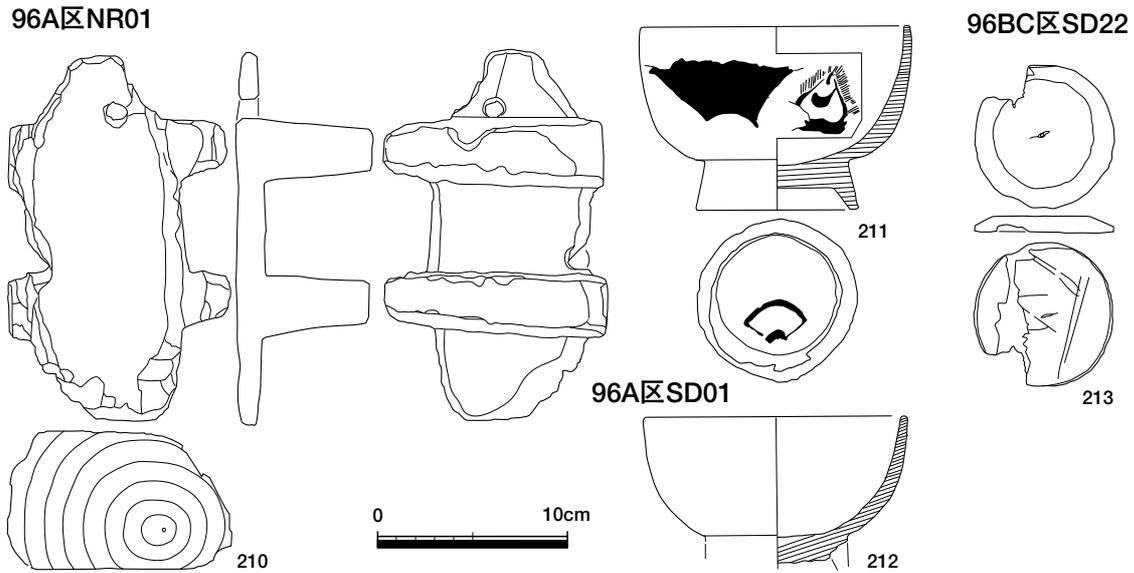


図2-68 木製品実測図9 各種



ており、遺存する側板が脚になる可能性も考えられる。121は数枚に折損していたが、ほぼ正方形の平面形に推定復元することができたものである。

箸状の木製品には断面形が多角形となる典型的な箸の形状をしたもの(129～131等)と、断面形が方形となるもの(126、128)がある。後者は長さが比較的短く細いため他の製品の部材の可能性が考えられる。前者の中で全長が判明するものは22cm前後のものである。

124は結桶(結樽)の底または蓋板と考えられるものである。上面の縁辺部が斜めに削り落とされ、中心からやや離れた位置に蟻抜ほぞの溝が設けられている。この溝に別材がはめ込まれ、蓋板のつまみあるいは底板の補強材となったものと考えられる。

(7) 96BC区SK02出土木製品(図2-65:133～135)

96BC区SK02から出土した木製品には木胎漆器と柄杓の柄などがある。

木胎漆器碗は碗A類(133)と碗B類(134)が存在する。両者とも高台裏を除く内外面を赤色漆で塗布されたものである。器壁の厚さが薄い製品で口縁端部が玉縁状になっている。

(8) 96BC区SD15出土木製品(図2-65:136・137)

96BC区SD15から出土した木製品には木胎漆器碗A類(136)と下駄(137)がある。

(9) 96D区SD01出土木製品(図2-66:138～185)

96D区SD01から出土した木製品には木胎漆器、曲物桶、下駄、箸などがある。

木胎漆器碗は碗A類(138～142)と碗B類(142～147)が存在する。この資料群は内面を赤色漆で外面を黒色漆で塗布されたものが多い。多くの資料で赤色漆による施紋が認められる。138は本遺跡では比較的多く認められる亀甲紋、143は蝙蝠扇紋、145は亀紋、150は草花紋がそれぞれ描かれている。139の紋様モチーフははっきりしないが、蓬葉紋の可能性が考えられる。144は鶴紋B2類と亀紋を組み合わせた紋様構成A2a類に該当し、亀紋の地面と足が丁寧に描かれている。148は内外面ともに赤色漆が塗布され、外面に右巻き三巴紋が描かれるが、三巴紋は濃い黒色漆で外郭の円紋は灰黒色塗布物で輪郭を描いた後その内側を茶色漆で塗って表現されていた。

曲物桶は、側板と底板が接合したものの(154)と底板のみが残存するもの(151～153、155)がある。また、曲物桶柄杓の柄と想定されるもの

(160、161)も存在する。曲物桶底板の規模は直径が8cm～14cmのもので、その中でも大きいものについては桜皮が縫い込まれている。154は桜皮が3ヶ所、161は4ヶ所に桜皮が残存している。

163は頭部が扇状となる横櫛で、朝日西遺跡で出土したものとほぼ同形のものである。159は頭部が半球形となる栓である。あるいは樽の飲み口に使用されたものだろうか。169は井戸結筒のタガ締めで使用される楔とほぼ同様の形状をしている。

下駄は一木作りの連歯下駄のみが存在する(182～185)。平面形はほぼ長方形となるもの(183)、隅丸長方形のもの(182)長楕円形のもの(184、185)がある。182は中割りのいわゆる馬下駄と呼ばれる形状のものである。歯部の断面形は箱形、平面形はU字状となっており、後歯はかなりすり減っている。183は平面形がやや幅狭い長方形で後歯部がすり減って残存していない。184は幅がやや狭いもので歯部は前後ともすり減ってほとんど残存しない。(鈴木正貴)

#### 文献

鈴木正貴1992「清須城下町から出土した漆器について」『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集。

表 2-1 主要木製品一覧表

番号	区	登録番号	遺構番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
1	96G	木簡03	NR01砂層上部	卒塔婆 1類	22.2	2.4	0.3	
2	96D	木簡04	SD01下層	卒塔婆 1類	20.8	2.6	0.3	
3	96G	木簡05	NR01	卒塔婆 1類	20.8	2.2	0.3	
4	96A	木簡02	NR01	卒塔婆 1類	20.1	1.3	0.3	
5	96G	木簡10	NR01灰色粘土層	卒塔婆 1類	18.1	1.9	0.3	
6	96G	木簡06	NR01砂層2の下	卒塔婆 1類	16.6	1.9	0.2	
7	96G	木簡15	NR01	卒塔婆 1類	残10.3	2	0.2	
8	96G	木簡16	NR01	卒塔婆 1類	残8.9	2.1	0.2	
9	96G	木簡17	NR01	卒塔婆 1類	残6.5	1.7	0.2	
10	96G	木簡18	NR01	卒塔婆 1類	残3.3	2.5	0.2	
11	96G	木簡12	NR01砂層2の下	卒塔婆 1類	残7.2	2	0.2	
12	96G	木簡08	NR01	卒塔婆 1類	残16.4	2.5	0.3	
13	96G	木簡13	NR01砂層2の下	卒塔婆 1類	残5.2	残2.5	0.3	
14	96G	木簡07	NR01砂層2の下	卒塔婆 2類	残14.4	残2.9	0.3	
15	96G	木簡09	NR01砂層上部	卒塔婆 2類	残18.6	残3.6	0.3	
16	96G	木簡01	NR01砂層上部	卒塔婆 2類	残23.2	残7.4	0.2	
17	96G	木簡23	NR01	卒塔婆 2類	残9.4	残2.6	0.2	
18	96K	木簡14	東西トレンチ	卒塔婆 2類	残12.8	残3.0	0.2	
19	96G	木簡24	NR01砂層上部	卒塔婆 2類	残13.6	残8.3	0.2	
20	96G	木簡22	NR01砂層上部	卒塔婆 2類	残9.9	残5.3	0.2	
21	96G	木簡21	NR01	卒塔婆 2類	残10.7	残5.8	0.2	
22	96G	木簡19	NR01	卒塔婆 2類	残26.6	残8.3	0.3	
23	96G	96G-W-74	NR01	卒塔婆 2類	残6.7	残8.6	0.3	
24	96G	木簡11	NR01	卒塔婆 2類	残45.5	10.2	0.3	
25	96G	木簡20	NR01	消息?	19.6	残6.1	0.3	

番号	区	登録番号	遺構番号	器種	口径	器高	底径	内面	外面	備考
1	97D	97D-W-07	NR01炭化層を含む	木胎漆器椀A	推13.9	9.7	7.2	赤色漆	黒色漆	
2	97D	97D-W-04	NR01	木胎漆器椀A	13.6	8.2	6.6	赤色漆	赤色漆	
3	97D	97D-W-03	NR01	木胎漆器椀A		残6.7	6.6	赤色漆	赤色漆	文様黒色漆
4	97D	97D-W-02	NR01炭化物含み2	木胎漆器椀	推14.3			赤色漆	黒色漆	
5	97D	97D-W-05	NR01	木胎漆器椀B		残5.3	5.3	黒色漆	黒色漆	文様明灰色漆
6	97D	97D-W-10	NR01	木胎漆器椀B	11.4	4.6	6.0	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
7	97D	97D-W-01	NR01炭化物含み2	木胎漆器椀B	12.7	残4.9		赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
8	97D	97D-W-09	NR01	木胎漆器椀B	12.7	3.9	6.1	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
9	97D	97D-W-25	NR01	木胎漆器椀F		残3.5		赤色漆	赤色漆	
10	97D	97D-W-06	NR01	木胎漆器椀F	推11.8	2.9	推5.2	赤色漆	赤色漆、底部黒色漆	
11	97D	97D-W-08	NR01	木胎漆器椀D	推9.9	残2.6		赤色漆	黒色漆	
12	97D	97D-W-21	NR01	曲物桶底板	直径11.3		最大厚0.6			
13	97D	97D-W-23	NR01炭化層を含む	曲物桶底板	13.4		最大厚0.8			
14	97D	97D-W-27	NR01	曲物桶底板	直径17.2		最大厚1.1			
15	97D	97D-W-14	NR01炭化物含み	曲物桶底板	残径6.9		最大厚0.5			
16	97D	97D-W-17	NR01	火付木	残長12.8	最大巾1.3	最大厚0.8			
17	97D	97D-W-32	NR01炭化層を含む	火付木	残長12.4	最大巾1.2	最大厚0.5			
18	97D	97D-W-33	NR01炭化層を含む	火付木	残長8.5	最大巾0.9	最大厚0.5			
19	97D	97D-W-28	NR01	箸	残長7.1	最大巾0.7	最大厚0.5			
20	97D	97D-W-29	NR01	箸	残長9.8	最大巾0.7	最大厚0.6			23と同一か?
21	97D	97D-W-22	NR01炭化物含み2	箸?	残長11.4	最大巾0.7	最大厚0.5			
22	97D	97D-W-11	NR01炭化物含み2	箸	残長13.5	最大巾0.7	中央部厚0.6			
23	97D	97D-W-30	NR01	箸	残長14.4	最大巾0.7	最大厚0.7			20と同一か?
24	97D	97D-W-13	NR01炭化物含み2	箸	残長16.5	最大巾0.6	中央部厚0.5			
25	97D	97D-W-12	NR01炭化物含み2	箸	残長19.5	最大巾0.8	中央部厚0.6			
26	97D	97D-W-34	NR01炭化層を含む	箸	残長20.7	最大巾0.6	最大厚0.6			
27	97D	97D-W-26-3	NR01炭化層を含む	折敷底板	全長28.9	最大巾4.0	最大厚0.2			
28	97D	97D-W-26-1	NR01炭化層を含む	折敷底板	全長30.4	最大巾8.1	最大厚0.3			
29	97D	97D-W-26-2	NR01炭化層を含む	折敷底板	全長30.4	最大巾8.0	最大厚0.3			
30	97D	97D-W-20	NR01炭化物含み	曲物桶柄杓	14.2	11.6				
31	97D	97D-W-24	NR01	折敷底板	残長15.7	残短12.6	最大厚0.6			
32	97D	97D-W-19	NR01炭化層を含む	連歯下駄	残長20.3	最大巾9.4	最大厚4.2			
33	97D	97D-W-15	NR01	連歯下駄	残長21.3	最大巾9.2	最大厚1.5			
34	97D	97D-W-16	NR01東西トレンチ	連歯下駄	残長18.8	最大巾9.8	最大厚3.1			
35	97C	97C-W-1	NR01粘土	杓子	残長17.2	最大巾5.8	最大厚0.6			
36	96G	96G-W-36	NR01灰色シルト層	木胎漆器椀A	推14.3	残9.2		赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
37	96G	96G-W-26	NR01灰色シルト層	木胎漆器椀A	13.7	8.0	7.3	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
38	96G	96G-W-24	NR01灰色シルト層	木胎漆器椀A	13.1	7.5	7.6	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
39	96G	96G-W-33	NR01砂層上部	木胎漆器椀A		残6.1	6.9	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
40	96G	96G-W-22	NR01灰色シルト層	木胎漆器椀A	11.1	残5.1		赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
41	96G	96G-W-40	NR01	木胎漆器椀A		残2.8	7.7	赤色漆	赤色漆	
42	96G	96G-W-19	NR01砂層上部	木胎漆器椀A		残4.4	推8.4	赤色漆	赤色漆	
43	96G	96G-W-25	NR01灰色シルト層	木胎漆器椀A	13.8	残6.7		赤色漆	赤色漆、底部黒色漆	
44	96G	96G-W-27	NR01灰色シルト層	木胎漆器椀B	15.0	残4.5		赤色漆	黒色漆	
45	96G	96G-W-54	NR01	木胎漆器椀B		残4.7	7.3	赤色漆	黒色漆、底部黒色漆	
46	96G	96G-W-53	NR01	木胎漆器椀B		残4.1	推6.6	赤色漆	赤色漆、底部黒色漆	
47	96G	96G-W-42	NR01	木胎漆器椀B		残2.9	6.1	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
48	96G	96G-W-81	NR01	木胎漆器椀				赤色漆	赤色漆、底部黒色漆	文様黒色漆
49	96G	96G-W-35	NR01砂層上部	木胎漆器椀				赤色漆	黒色漆	
50	96G	96G-W-48	NR01砂層上部	木胎漆器椀B		残3.9	7.2	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
51	96G	96G-W-41	NR01	木胎漆器椀B		残2.8		赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
52	96G	96G-W-46	NR01砂層上部	木胎漆器椀	11.9	残2.8		赤色漆	黒色漆	
53	96G	96G-W-21	NR01灰色シルト層	木胎漆器椀D	15.0	残3.8		赤色漆	赤色漆、底部黒色漆	

番号	区	登録番号	遺構番号	器種	口径	器高	底径	内面	外面	備考
54	96G	96G-W-23	NR01灰色シルト層	木胎漆器椀F	13.5	残3.2		赤色漆	赤漆、底面黒漆	
55	96G	96G-W-20	NR01砂層上部	木胎漆器椀D		残2.1	推5.0	赤色漆	赤色漆	
56	96G	96G-W-17	NR01砂層上部	木胎漆器椀D	12.1	残1.8		赤色漆	赤漆、底面黒漆	文様赤色漆
57	96G	96G-W-55	NR01	曲物桶底板	最大径6.5		最大厚0.4			
58	96G	96G-W-16	NR01砂層上部	曲物桶底板	残長軸8.4	残短軸7.8	厚0.5			
59	96G	96G-W-38	NR01	曲物桶	10.4	残2.8				11.4
60	96G	96G-W-28	NR01灰色シルト層	曲物桶底板	直径12.5		最大厚1.0			
61	96G	96G-W-04	NR01	曲物桶受け台	残長24.9	最大巾2.65	中央部厚0.4			
62	96G	96G-W-76	NR01	杓子固定部	全長18.9	最大巾4.3	最大厚2.0			
63	96G	96G-W-45	NR01砂層上部	結桶底板	推径22.2		最大厚1.5			
64	96G	96G-W-37	NR01	曲物桶底板?	残長辺25.2	残短辺7.5	最大厚0.6			
65	96G	96G-W-05	NR01灰色粘土層	箸	残長25.2	最大巾0.7	中央部厚0.5			
66	96G	96G-W-01	NR01	箸	残長22.4	最大巾0.7	中央部厚0.6			
67	96G	96G-W-06	NR01灰色粘土層	箸	残長21.2	最大巾0.7	中央部厚0.4			
68	96G	96G-W-02	NR01	箸	残長13.3	最大巾0.6	基部厚0.4			
69	96G	96G-W-09	NR01	箸	残長8.1	最大巾0.8	基部厚0.4			
70	96G	96G-W-10	NR01	箸	残長10.0	最大巾0.7	基部厚0.7			
71	96G	96G-W-07	NR01灰色粘土層	箸	残長12.6	最大巾0.7	中央部厚0.5			
72	96G	96G-W-13	NR01	箸	残長12.9	巾0.6	中央部厚0.4			
73	96G	96G-W-03	NR01	箸	残長14.6	最大巾0.8	中央部厚0.5			
74	96G	96G-W-49	NR01砂層下部	箸	残長14.7	最大巾0.9	最大厚0.7			
75	96G	96G-W-39	NR01	箸	残長14.6	最大巾0.5	最大厚0.3			
76	96G	96G-W-12	NR01	箸	残長15.7	最大巾0.7	中央部厚0.6			
77	96G	96G-W-11	NR01	箸	残長16.7	最大巾0.6	中央部厚0.6			
78	96G	96G-W-08	NR01灰色粘土層	箸	残長18.5	最大巾0.5	中央部厚0.4			
79	96G	96G-W-51	NR01砂層上部	連菌下駄	残長19.7	最大巾9.4	最大厚2.6			
80	96G	96G-W-18	NR01砂層上部	連菌下駄	残長19.3	最大巾10.1	最大厚2.9			
81	96G	96G-W-32	NR01砂層上部	連菌下駄	残長20.0	最大巾6.7	最大厚1.4			
82	96G	96G-W-47	NR01砂層上部	連菌下駄	残長9.9	最大巾9.9	最大厚7.5		焼印	
83	96G	96G-W-79	NR01砂層上部	不明板材	残長2.8	最大巾3.7	最大厚1.3			
84	96G	96G-W-80	NR01	不明板材	残長辺4.4	残短辺3.3	最大厚1.2			
85	96G	96G-W-71	NR01砂層上部	箱物部材?	残長3.6	最大巾2.5	最大厚1.2			
86	96G	96G-W-70	NR01砂層上部	箱物部材?	残長9.5	最大巾2.2	最大厚0.8			
87	96G	96G-W-52	NR01砂層上部	火付木	残長4.0	最大巾1.0	最大厚0.3			
88	96G	96G-W-67	NR01	不明板材	残長4.0	最大巾1.4				
89	96G	96G-W-64	NR01	不明板材	残長7.0	最大巾2.0	最大厚0.3			
90	96G	96G-W-14	NR01	不明板材	残長6.8	最大巾1.6	最大厚1.7		黒色漆	
91	96G	96G-W-65	NR01	不明板材	残長8.6	最大巾2.0	最大厚0.5			
92	96G	96G-W-66	NR01	不明板材	残長7.3	最大巾2.2	最大厚0.3			
93	96G	96G-W-63	NR01	不明板材	残長8.3	最大巾2.2	最大厚0.3			
94	96G	96G-W-62	NR01	不明板材	残長9.2	最大巾1.9	最大厚0.8			
95	96G	96G-W-69	NR01	不明板材	残長8.3	最大巾1.7	最大厚0.2			
96	96G	96G-W-50	NR01砂層上部	不明棒材	残長15.9	最大巾2.3	最大厚1.2			
97	96G	96G-W-72	NR01砂層下部	不明板材	残長16.7	最大巾1.5	最大厚0.7			
98	96G	96G-W-75	NR01砂層上部	不明板材	残長17.1	最大巾2.2	最大厚0.4			
99	96G	96G-W-44	NR01	不明板材	残長17.5	最大巾10.5	最大厚4.4			
100	96G	96G-W-34	NR01砂層上部	不明板材	残長23.1	最大巾3.3	最大厚0.6			
101	96G	96G-W-59	NR01	不明棒材	残長18.8	最大巾1.6	最大厚1.1			
102	96G	96G-W-73	NR01砂層上部	不明板材	残長17.8	最大巾2.6	最大厚0.9			
103	96BC	96BC-W-31	NR01	筭(ざる)	残長19.9				布が付着	
104	96G	96G-W-58	SD01	木胎漆器椀A	推11.3	7.4	4.5	赤色漆	黒色漆	
105	96G	96G-W-56	SD01	木胎漆器椀E	12.4	残4.8		赤色漆	黒色漆	
106	96G	96G-W-57	SD01	木胎漆器椀B	8.8	2.8	4.4	赤色漆	黒色漆	文様灰色漆
107	96G	96G-W-31	SD01下層	木胎漆器椀	推11.3	残2.6		赤色漆	黒色漆	文様灰色漆
108	96G	96G-W-15	SD01下層	不明板材	残長7.1	最大巾3.8	最大厚0.4			
109	96G	96G-W-15	SD01下層	不明板材	残長6.5	最大巾3.8	最大厚0.4			
110	96BC	96BC-W-22	SD29	木胎漆器椀A	推16.0	推7.5	7.8	赤色漆	黒色漆	
111	96BC	96BC-W-27	SD29	木胎漆器椀B	推14.8	推6.8	6.0	赤色漆	黒色漆	
112	96BC	96BC-W-18	SD29	木胎漆器椀B	推17.3		推6.5	赤色漆	黒色漆	
113	96BC	96BC-W-21	SD29	木胎漆器椀B	推16.3	5.2	7.6	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
114	96BC	96BC-W-05	SD29	曲物桶底板	残径9.3		最大厚0.9			
115	96BC	96BC-W-23	SD29	曲物桶側板	長径15.7	3.3	短径13.9			
116	96BC	96BC-W-16	SD29	曲物桶側板?	残長辺6.1	残短辺5.4	最大厚0.2			
117	96BC	96BC-W-28	SD29	曲物桶底板	直径7.7		最大厚0.4			
118	96BC	96BC-W-06	SD29	曲物桶底板?	残長9.7	最大巾6.2	最大厚0.5			
119	96BC	96BC-W-30	SD29	折敷	全長12.6	残4.4	最大巾12.5			
120	96BC	96BC-W-29	SD29	不明板材	残長4.1	最大巾2.0	最大厚0.6			
121	96BC	96BC-W-15	SD29	折敷底板	残長辺19.9	残短辺19.6	厚0.2			
122	96BC	96BC-W-24	SD29	折敷底板	残長辺12.4	残短辺6.8	最大厚0.4			
123	96BC	96BC-W-20	SD29	連菌下駄	残長13.5	最大巾8.6	最大厚2.4			
124	96BC	96BC-W-19	SD29	結桶底板	残長25.7	最大巾10.1	最大厚1.5			
125	96BC	96BC-W-11	SD29	箸	残長14.0	最大巾0.5	中央部厚0.5			
126	96BC	96BC-W-14	SD29	箸	残長15.4	最大巾0.3	厚0.2			
127	96BC	96BC-W-12	SD29	箸	残長15.7	最大巾0.8	厚0.4			
128	96BC	96BC-W-13	SD29	箸	残長17.1	最大巾0.3	厚0.2			
129	96BC	96BC-W-09	SD29	箸	残長21.3	最大巾0.7	厚0.6			
130	96BC	96BC-W-08	SD29	箸	残長22.0	最大巾0.7	中央部厚0.6			
131	96BC	96BC-W-10	SD29	箸	残長22.4	最大巾0.6	厚0.4			
132	96BC	96BC-W-07	SD29	不明角材	残長辺5.0	残短辺3.9	残奥行3.7			
133	96BC	96BC-W-03	SX02	木胎漆器椀A	推15.0	推7.0	7.3	赤色漆	赤漆、底面黒漆	

番号	区	登録番号	遺構番号	器種	口径	器高	底径	内面	外面	備考
134	96BC	96BC-W-02	SX02	木胎漆器椀B	推12.4	推5.7	推6.8	赤色漆	純漆、底面黒漆	
135	96BC	96BC-W-04	SX02	柄杓柄	残長19.0	最大巾1.2	最大厚0.5			
136	96BC	96BC-W-17	SD15下層	木胎漆器椀A		残3.1	7.4	赤色漆	黒色漆	
137	96BC	96BC-W-25	SD15下層	連齒下駄	残長19.7	最大巾11.4	最大厚7.9			
138	96D	96Da-W-34	SD01中層	木胎漆器椀A		残8.9	6.6	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
139	96D	96Da-W-04	SD01中層	木胎漆器椀A		残7.5		赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
140	96D	96Da-W-01	SD01上層	木胎漆器椀A		残3.7	7.0	赤色漆	黒色漆	
141	96D	96Da-W-59	SD01中層	木胎漆器椀A		残7.4	6.9	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
142	96D	96Da-W-37	SD01中層	木胎漆器椀B	推14.2	残6.5		赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
143	96D	96Da-W-10	SD01上層	木胎漆器椀B		残3.4	推定5.2	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
144	96D	96Da-W-28	SD01d中層	木胎漆器椀B	13.2	6.5	7.7	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
145	96D	96Da-W-26	SD01下層	木胎漆器椀B				赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
146	96D	96Da-W-08	SD01下層	木胎漆器椀B		3.7	6.7	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
147	96D	96Da-W-27	SD01斑土層	木胎漆器椀B		残5.2	7.1	赤色漆	黒色漆	
148	96D	96Da-W-05	SD01中層	木胎漆器椀				赤色漆	赤色漆	文様黒色漆
149	96D	96Da-W-09	SD01上層	木胎漆器蓋?	推9.0	残1.4		黒色漆	黒色漆	
150	96D	96Da-W-31	SD01e下層	木胎漆器椀	推13.1	残4.1		赤色漆	赤色漆	文様黒色漆
151	96D	96Da-W-21	SD01中層	曲物桶底板	直径6.4		最大厚0.5			157と同一か
152	96D	96Da-W-02	SD01上層	曲物桶底板	直径8.4		最大厚0.7			
153	96D	96Da-W-52	SD01上層	曲物桶底板	直径11.2		最大厚1.2			
154	96D	96Da-W-13	SD01中層	曲物桶	13.4	残4.7	14.1			
155	96D	96Da-W-22	SD01中層	曲物桶底板	残存径12.7		最大厚0.7			
156	96D	96Da-W-35	SD01中層	曲物桶底板	推径21.4		最大厚0.6	黒色塗布物	黒色漆?	
157	96D	96Da-W-43	SD01中層	曲物桶側板	推径11.5	残5.9	最大厚0.2			151と同一か
158	96D	96Da-W-32	SD01	穿孔円盤	直径6.4		厚0.5			
159	96D	96Da-W-55	SD01上層	栓	残長7.5	最大巾3.9	最大厚2.9			
160	96D	96Da-W-07	SD01下層	柄杓柄	残長30.9	最大巾2.5	最大厚1.2			
161	96D	96Da-W-14	SD01中層	柄杓柄	残長41.7	最大巾1.9	最大厚1.4			
162	96D	96Da-W-45	SD01中層	不明材	残長刃8.3	残短辺4.5	最大厚3.1			
163	96D	96Da-W-46	SD01下層	横櫛	残長6.7	最大巾4.6	最大厚1.2			
164	96D	96Da-W-03	SD01上層	火付木	残長10.1	最大巾1.1	最大厚0.6			
165	96D	96Da-W-40	SD01中層	不明板材	残長8.0	最大巾2.3	厚0.2			
166	96D	96Da-W-56	SD01	不明板材	残長8.0	最大巾3.1	最大厚0.5			
167	96D	96Da-W-42	SD01中層	不明板材	残長9.3	最大巾7.1	最大厚0.5			
168	96D	96Da-W-30	SD01e下層	不明板材	残長軸10.4	残短軸10.1	中央部厚0.6			
169	96D	96Da-W-54	SD01上層	楔	残長10.8	最大巾2.3	最大厚2.0			
170	96D	96Da-W-25	SD01下層	籠状木製品	残長16.4	巾7.1	最大厚0.9			
171	96D	96Da-W-16	SD01下層	箸	残長7.1	最大巾0.6	基部厚0.4			
172	96D	96Da-W-41	SD01中層	箸	残長7.1	最大巾0.7	基部厚0.7			
173	96D	96Da-W-29	SD01e下層	箸	残長10.0	最大巾0.6	基部厚0.5			
174	96D	96Da-W-17	SD01下層	箸?	残長6.4	巾0.5	基部厚0.4			
175	96D	96Da-W-58	SD01上層	箸	残長15.8	最大巾0.6	最大厚0.6			
176	96D	96Da-W-18	SD01下層	箸	残長18.2	最大巾0.7	中央部厚0.3			
177	96D	96Da-W-53	SD01上層	箸	残長21.9	最大巾0.7	最大厚0.7			
178	96D	96Da-W-15	SD01下層	箸	残長23.9	最大巾0.7	中央部厚0.5			
179	96D	96Da-W-19	SD01下層	箸	残長30.5	最大巾0.8	中央部厚0.8			
180	96D	96Da-W-44	SD01中層	不明材	残長15.6	最大巾2.4	最大厚2.2			
181	96D	96Da-W-38	SD01中層	不明材	残長15.3	最大巾2.5	最大厚1.2			
182	96D	96Da-W-36	SD01中層	連齒下駄	残長21.8	最大巾5.3	最大厚4.3			
183	96D	96Da-W-12	SD01中層	連齒下駄	残長20.2	最大巾7.4	最大厚2.4			
184	96D	96Da-W-20	SD01東壁	連齒下駄	残長19.1	最大巾7.3	最大厚1.8			
185	96D	96Da-W-11	SD01上層	連齒下駄	残長12.3	最大巾4.8	最大厚1.7			
186	96D	96Db-W-04	SD01下層	木胎漆器椀B	推15.2	残4.1		赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
187	96D	96Db-W-05	SD01下層	木胎漆器椀D	推9.5	残1.9		赤色漆	純漆、底面黒漆	
188	96D	96Db-W-02	SD01下層	不明板材	残長軸4.3	残短軸3.9	厚1.1			
189	96D	96Db-W-03	SD01下層	不明板材	残長10.9	最大巾2.9	厚0.7			
190	96D	96Db-W-01	SD01下層	連齒下駄	残長17.3	最大巾8.2	最大厚2.5			
191	96D	96Da-W-39	SD08	連齒下駄	残長18.6	最大巾10.3	最大厚4.7			
192	96D	96Da-W-51	SD08	栓	残長2.7	最大巾2.1	最大厚2.1			
193	96D	96Da-W-50	SD08	箸	残長5.3	最大巾0.5	最大厚0.5			
194	96D	96Da-W-47	SD08	箸	残長8.1	最大巾0.6	最大厚0.6			193と同一か
195	96D	96Da-W-48	SD08	箸	残長7.9	最大巾0.6	最大厚0.5			193と同一か
196	96D	96Da-W-49	SD08	箸	残長9.4	最大巾0.7	最大厚0.6			193と同一か
197	96F	96F-W-01	SK08下層	不明板材	残長19.8	最大巾9.4	最大厚1.8			
198	96K	96K-W-04	検1	曲物桶底板	直径7.5		最大厚0.5			
199	96K	96K-W-07	検1	不明板材	残長8.1	最大巾2.7	最大厚0.4			
200	96K	96K-W-08	検1	不明板材	残長10.3	最大巾3.8	最大厚0.2			
201	96K	96K-W-02	検1	差齒下駄の齒	残長7.3	最大巾5.4	最大厚1.8			
202	96K	96K-W-03	検1	不明板材	残長4.8		最大厚1.2			
203	96K	96K-W-05	検1	曲物桶底板?	残長刃13.8	残短辺4.6	最大厚0.6			
204	96K	96K-W-01	検1	不明角材	残長19.1	最大巾2.3	厚1.5			
205	96K	96K-W-06	検1	箸?	残長11.7	最大巾0.6	中央部厚0.6			
206	97A	97A-W-02	SD07最下層	不明角材	残長刃6.8	残短辺4.2	厚3.7			
207	97A	97A-W-04	SD07最下層	不明角材	残長4.1	最大巾1.9	最大厚0.5			
208	97A	97A-W-03	SD07最下層	不明角材	残長4.7	最大巾4.2	最大厚0.6			
209	97A	97A-W-01	SD07最下層	火付木	残長15.2	最大巾1.8	最大厚1.4			
210	96A	96A-W-03	NR01	連齒下駄	残長18.8	最大巾11.7	最大厚7.3			
211	96A	96A-W-01	NR01	木胎漆器椀A	推12.1	9.5	推8.6	赤色漆	黒色漆	文様赤色漆
212	96A	96A-W-02	SD01	木胎漆器椀A	推13.7	残7.6		赤色漆	黒色漆	
213	96BC	96BC-W-26	SD22下層	蓋	残径7.3		最大厚0.9		中央部に黒漆付	

## C. 苅安賀遺跡出土木製品の樹種同定

### 1. はじめに

当遺跡は一宮市に所在する日光川左岸の低湿地遺跡である。戦国時代から江戸時代は周辺地の中でも中心的な農村集落であった。ここでは、当時の人為的に掘られた溝(SD)や旧河道から出土した漆器・箸・木簡・下駄などの木製品55点の樹種同定を報告する。この調査は今まであまり事例がない、中世以降の農村集落地で生活に使われていた樹種の実態を、発掘試料から明らかにしてゆく目的で実施された。

当遺跡の南東には、戦国時代から江戸初期には清洲城下町であり、その後は宿場町や村落に変化した清洲城下町遺跡(1995・1990)や朝日西遺跡(1992)などがある。そこでは木材樹種利用の情報が蓄積されつつある。従って当遺跡から出土した木製品の樹種調査は、都市化と農村地との格差が広がる初期において、どのような木製品の樹種に違いがあったのか、木材利用はどのような状況であったのかを理解してゆく、基礎的資料のひとつとなる。

### 2. 樹種同定の方法

材の組織標本は、木製品の損傷している面を利用し片刃の剃刀を用いて、材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柾目)の3方向を薄く剥ぎ取りスライドガラスの上に並べ、ガムクロラール(抱水クロラール・アラビヤゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液)で封入し、永久プレパラートを作成した。光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し同定を行った。

### 3. 結果

同定結果の一覧を表2-2に示した。

検出された樹種(分類群)は、針葉樹のアカマツ・コウヤマキ・ヒノキ・サワラの4分類群と、落葉広葉樹のクマシデ属イヌシデ節・ブナ属・クリ・カエデ属・トチノキの5分類群であった。

以下に同定の根拠となった材組織の観察結果を分類配列順に記載する。

(1)アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図2-69 1a-1c (サンプル17)

主要な軸方向要素は仮道管で、早材から晩材への移行は緩やかな針葉樹材。横断面は僅かしか採取できず垂直樹脂道は不明だが、接線断面で水平樹脂道が確認された。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端に放射仮道管がありその内壁には鋸歯状の肥厚が顕著である。放射仮道管のみが数層配列した部分では、特に鋸歯状肥厚は鋭い。

アカマツは暖帯から温帯下部の低地から山地の陽光地に生育し、人間活動の活発な周囲には普通に見られ、二次林を形成する。材は耐水性に優れ、丈夫で長持ちする。

(2)コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 図版2-69 2a-2c(サンプル16)

早材から晩材への移行は緩やかな針葉樹材。分野壁孔は窓状、マツ属とは異なり放射仮道管は無い。放射組織は5細胞高以下の背の低いものが多く、放射柔細胞の壁は薄い。

コウヤマキは日本特産、1属1種の常緑高木の針葉樹である。本州の福島県以南・四国・九州の宮崎県の暖帯上部から温帯の山地に分布し、特に長野県の本曾、和歌山県の高野山に多い。材は耐久性・耐水性・耐蟻性に優れる。

(3)ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版2-69 3a-3c (サンプル53)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は極めて少ない。横断面において、晩材部の仮道管の輪郭は偏平で角がやや丸く、細胞壁の肥厚はあまり目立たない。分野壁孔はヒノキ型、その孔口は細く、1分野に主に2個が整然と配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育する。材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれる。

(4)サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図2-70 4a-4c(サンプル35)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は極めて少ない。横断面において、晩材部の仮道

管の輪郭は矩形で整っている、細胞壁の肥厚は厚い。分野壁孔はヒノキ型、その孔口は大きく楕円形に開いており、1分野に主に2個が水平に配列する。早材部の分野壁孔の開口が、ヒノキより大きく水平に近いことから、サワラと同定した。

サワラはヒノキより分布域は狭くおもな分布域は東北部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。材はヒノキよりやや軽軟で劣るといわれる。

(5)クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図2-70 5a-5c(サンプル49)

2~数個の小型の管孔が放射方向に複合し、全体的にも放射方向に配列する放射孔材。管孔の分布はややまばらで、放射組織が密に集合する部分が見られる。道管の壁孔は交互状に密在、穿孔は単一。放射組織はほぼ同性、1~3細胞幅、道管との壁孔はやや大きい。穿孔は単一であることから、イヌシデ節と同定した。なおクマシデ節は穿孔が主に階段状である点で区別している。

クマシデ属は暖帯および温帯の丘陵から山地に生育する高木または低木の落葉広葉樹である。イヌシデ節には山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。材は固くて丈夫である。

(6)ブナ属 *Fagus* ブナ科 図2-70 6a-6c(サンプル45)

丸みをおびた小型の管孔が密在し、年輪界付近では極めて小型の管孔となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は単穿孔と横棒数が10~20本の階段穿孔が混在する。放射組織は同性に近い異性、1~3細胞幅のものとは細胞幅が広く細胞高も高い放射組織も多く、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

ブナ属は冷温帯の極相林を形成する主要樹種で、大木となる落葉広葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低い所から生育しているイヌブナの2種がある。材は建築材から漆器まで用途が広い。

(7)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図2-71 7a-7c(サンプル40)

年輪の始めに大型の管孔が1~2層配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔の孔口は大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉広葉樹である。材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

(8)カエデ属 *Acer* カエデ科 図2-71 8a-8c(サンプル3)

小型の管孔が単独または2~3個が複合してやや疎らだが均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山野や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹で、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

(9)トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図2-71 9a-9c(サンプル44)

小型の管孔が単独または2~数個が複合して散在し、年輪界付近でやや径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性、層階状配列が特徴的、道管の壁孔は交互状に密在する。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉広葉樹である。材は軽軟・緻密で加工し易いが、木理は不規則で耐久性は低く狂いがやすい。

#### 4. まとめ

当遺跡の漆椀は出土時期により、戦国時代末~江戸時代初期、江戸時代前半、江戸時代後半、江戸時代末~明治時代初頭の4期に分類された。各時期ごとに樹種を集計して比較したが、今回の調査からは明瞭な樹種利用の違いは認められなかった。また城下町が発達していた清洲城下町遺跡(1990、1995)と朝日遺跡(1992)から出土した漆椀の樹種とも比較して、時期的にも全

体的にも際立った相違点は見られなかった。トチノキとブナ属が多く特にトチノキが多い全体的な傾向は、農村でも城下町や宿場町においても同様であった。しかし、農村地の資料は非常に少ないので、今後も詳細な時期別の調査を積み重ねたのちに、再度比較する価値があると思われる。

当遺跡から出土した箸の樹種は、ヒノキ属のヒノキとサワラであった。この2種の箸は手に持った感触は軽く柔らかで、材の色は白く仕上がり面は滑らかで折れにくく、きつい木の香りもしないなど、箸材に適している。清洲城下町遺跡(1990)の箸2点もヒノキ属であった。また、江戸城下の溜池遺跡から出土した箸81点は、ヒノキが61点と圧倒的に多く、ほかにスギ・サワラ・ヒノキ属・ネズコ・カラマツ属・タケ亜科が検出されている(松葉、1999)。箸は東西をとわずヒノキやサワラのヒノキ属、とりわけヒノキの材が選択使用されている。当遺跡の箸は、全体的にはヒノキとサワラがほぼ半々ずつ出土したが、時期別に見ると戦国時代末から江戸時代初期ではサワラの方がヒノキより多い。そして、江戸時代前半や江戸時代後半では、江戸城下の溜池遺跡などと同様にヒノキが多くなるように読み取れる。サワラは中部地方の山地を中心に分布する。江戸城下の溜池遺跡から出土した箸に比べ、当遺跡でサワラの占める割合が高いのは生育地に近いことと関連しているのかも知れない。しかし、時期により樹種選択性がヒノキに偏って行った可能性も考えられる。なお江戸城下の遺跡では、ヒノキ属が圧倒的に多いがそれに供伴して少数ながらスギの箸が検出されている(パリノ・サーヴェイ株式会社、1988、能城修一、1992、松葉、1999など)。当地域周辺は、紀伊半島や東海地方などスギが豊富な生育地に近い。しかしスギは、箸材ばかりではなくほかの木製品からも現在の時点ではヒノキほど普通に使用されていた形跡はない。

墨書や木簡の板はすべてヒノキで、これも朝日西遺跡(1992)から出土した木簡や人形の樹種と同様な樹種選択であった。下駄3点は、2点がヒノキで

1点はコウヤマキで作られていた。今までに下駄の材質調査が多く蓄積されている江戸城下の遺跡では、針葉樹と広葉樹の様々な樹種が報告されている(能城、1992、山田、1993、松葉、1999、パリノ・サーヴェイ、1988、小日置、1995)。これらの樹種は、針葉樹ではヒノキが最も多くほかにヒノキ属・マツ属・モミ属など、広葉樹はケヤキ・クリ・アカガシ亜属・トネリコ属・モクレン属などである。しかし、当遺跡から検出されたコウヤマキはこれらの資料からは見出せなかった。コウヤマキは木曾山中や紀伊半島に多く生育地していることから、コウヤマキの利用は当地域に特徴的な木材利用であるのかも知れない。

全体的な当遺跡の木製品樹種は、漆椀にはトチノキ・ブナ属が圧倒的に多くこのほかにも複数の落葉広葉樹材が使用され、箸・曲物・木簡・下駄などには針葉樹材の特にヒノキが多用されていた。中心的農村地での樹種利用として捕えられた当遺跡のこのような傾向は、城下町が発達した清洲城下町遺跡や朝日西遺跡の同時期の同様な木製品の樹種利用と非常によく一致していた。また、江戸城下の遺跡ともほぼ同様で、戦国時代以降から江戸時代には全国的に似たような樹種選択が広まっていたようである。(植田弥生)

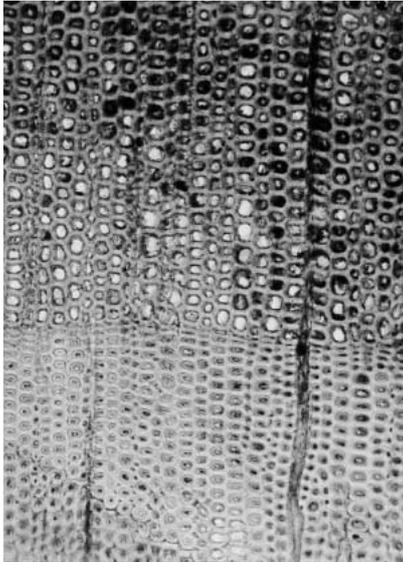
#### 引用文献

- 『朝日西遺跡』1992 「朝日西遺跡関連出土木製品材質同定」財団法人愛知県埋蔵文化財センター。
- 『清洲城下町遺跡』1990 「材質(樹種)同定」財団法人愛知県埋蔵文化財センター。
- 『清洲城下町遺跡 V』1995 「清須城下町出土漆器資料の製作技法」財団法人愛知県埋蔵文化財センター。
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史」、『植生史研究 特別第1号』植生史研究会。
- 能城修一 1992 「新宿区細工町遺跡から出土した木製品の樹種」『細工町遺跡』新宿区厚生部遺跡調査会。
- 松葉礼子 1999 「溜池遺跡・汐留遺跡・

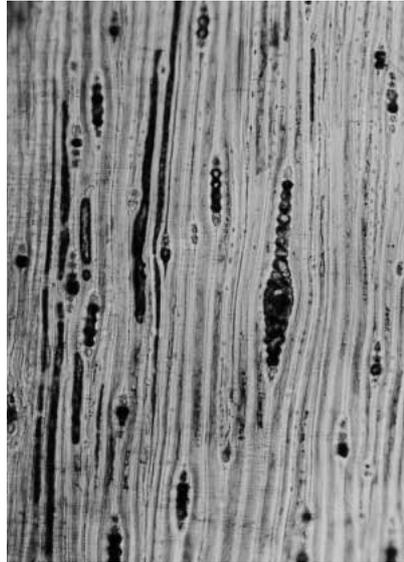
墨田区三遺跡から出土した木製品の樹種 「木製品の樹種同定」『東京都千代田区 田町遺跡査会。から類推される近世江戸城周辺の木材消費 紀尾井町遺跡報告・本文編』千代田区 紀尾井町遺跡調査会。費」『植生史研究 第7巻 第2号』日本 紀尾井町遺跡調査会。植生史学会。 小日置晴展 1995 「飯田町遺跡出土の パリノ・サーヴェイ株式会社 1988 木製品等について」『飯田町遺跡』飯

表 2 -2 樹種同定一覧表

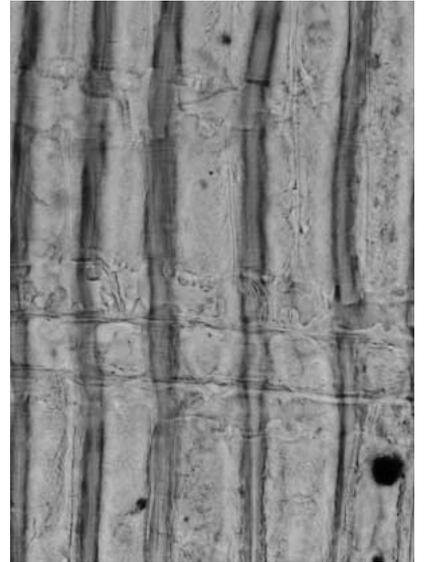
サンプル	登録番号	調査区	グリット	遺構名	時期	器種	樹種
1	97D-W-1	97D	XB3b	NR01(炭化材含み)	江戸時代前半	漆椀	トチノキ
2	97D-W-2	97D	XB3b	NR01(炭化材含み)	江戸時代前半	漆椀	トチノキ
3	97D-W-3	97D	XB2b	NR01	江戸時代前半	漆椀	カエデ属
4	97D-W-4	97D	XB5b	NR01	江戸時代前半	漆椀	ブナ属
5	97D-W-5	97D	XB3b	NR01	江戸時代前半	漆椀	トチノキ
6	97D-W-6	97D	XB3b	NR01	江戸時代前半	漆椀	ブナ属
7	97D-W-7	97D	XB3b	NR01(炭化材含む)	江戸時代前半	漆椀	ブナ属
8	97D-W-8	97D	XB3a	NR01	江戸時代前半	漆椀	トチノキ
9	97D-W-9	97D	XB3b	NR01	江戸時代前半	漆椀	ブナ属
10	97D-W-10	97D	XB4b	NR01	江戸時代前半	漆椀	トチノキ
11	97D-W-11	97D	XB3b	NR01(炭化材含み2)	江戸時代前半	箸	サワラ
12	97D-W-12	97D	XB3b	NR01(炭化材含み2)	江戸時代前半	箸	ヒノキ
13	97D-W-13	97D	XB3b	NR01(炭化材含み2)	江戸時代前半	箸	ヒノキ
14	97D-W-14	97D	XB3b	NR01(炭化材含み2)	江戸時代前半	曲物底	ヒノキ
15	97D-W-15	97D	XB2b	NR01	江戸時代前半	下駄	ヒノキ
16	97D-W-16	97D	XB3b	NR01(東西トレンチ)	江戸時代前半	下駄	コウヤマキ
17	97D-W-17	97D	XB3b	NR01	江戸時代前半	火移棒切れ	アカマツ
18	97D-W-18	97D	XB5a	NR01	江戸時代前半	墨書	ヒノキ
19	97D-W-19	97D	XB3b	NR01	江戸時代前半	下駄	ヒノキ
20	96G-W-1	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	箸	サワラ
21	96G-W-2A	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	箸	ヒノキ
22	96G-W-3	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	箸	ヒノキ
23	96G-W-4	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	組み合わせ部材	サワラ
24	96G-W-5	96G	IB7h	NR01(灰色粘土層)	戦国時代末～江戸時代初期	箸	サワラ
25	96G-W-6	96G	IB7i	NR01(灰色粘土層)	戦国時代末～江戸時代初期	箸	ヒノキ
26	96G-W-7	96G	IB7i	NR01(灰色粘土層)	戦国時代末～江戸時代初期	箸	ヒノキ
27	96G-W-8	96G	IB7i	NR01(灰色粘土層)	戦国時代末～江戸時代初期	箸	ヒノキ
28	96G-W-9	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	箸	サワラ
29	96G-W-10	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	箸	サワラ
30	96G-W-11	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	箸	サワラ
31	96G-W-12	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	箸	サワラ
32	96G-W-13	96G	IB8h	NR01	戦国時代末～江戸時代初期	箸	サワラ
33	96Da-W-18	96Da	IXA19m	SD01(下層)	江戸時代後半	箸	ヒノキ
34	96Da-W-15	96Da	IXA19m	SD01(下層)	江戸時代後半	箸	ヒノキ
35	96Da-W-16	96Da	IXA19m	SD01(下層)	江戸時代後半	箸	サワラ
36	96Da-W-17	96Da	IXA19m	SD01(下層)	江戸時代後半	箸?	ヒノキ
37	96Da-W-19	96Da	IXA19m	SD01(下層)	江戸時代後半	菜箸	ヒノキ
38	96Da-W-14	96Da	IXA19m	SD01(下層)	江戸時代後半	ヒシヤクの柄	ヒノキ
39	96Da-W-7	96Da	IXA19l	SD01(下層)	江戸時代後半	ヒシヤクの柄	ヒノキ
40	96G-W-48	96G	IB8h	NR01(砂層上部)	戦国時代末～江戸時代初期	漆椀	クリ
41	96G-W-24	96G	IB7h	NR01(灰色シルト層)	戦国時代末～江戸時代初期	漆椀	トチノキ
42	96G-W-21	96G	IB7h	NR01(灰色シルト層)	戦国時代末～江戸時代初期	漆椀	トチノキ
43	96Da-W-20	96Da	IXA19m	SD01(東壁)	江戸時代後半	下駄	ヒノキ
44	96Da-W-8	96Da	IXA19l	SD01(下層)	江戸時代後半	漆椀	トチノキ
45	96BC-W-17	96BC	XA18p	SD15(下層)	江戸時代後半	漆椀	ブナ属
46	96G-W-56	96G		SD01	江戸時代末～明治初頭	漆椀	トチノキ
47	96G-W-57	96G		SD01	江戸時代末～明治初頭	漆椀	トチノキ
48	96Da-W-27	96Da	XA20l	SD01(班土層)	江戸時代後半	漆椀	ブナ属
49	96BC-W-22	96BC	XA13p	SD29	江戸時代後半	漆椀	イヌシデ節
50	96BC-W-21	96BC	XA13p	SD29	江戸時代後半	漆椀	トチノキ
51	96A-W-2	96A	IA8t	SD01	江戸時代後半	漆椀	ブナ属
52	木簡24	96G	IB7i	NR01(砂層上部)	戦国時代末～江戸時代初期	木簡	ヒノキ
53	木簡9	96G	IB8h	NR01(砂層上部)	戦国時代末～江戸時代初期	木簡	ヒノキ
54	木簡1	96G	IB7h	NR01(砂層上部)	戦国時代末～江戸時代初期	木簡	ヒノキ
55	木簡2	96A	IA6t	NR01	江戸時代前半	木簡	ヒノキ



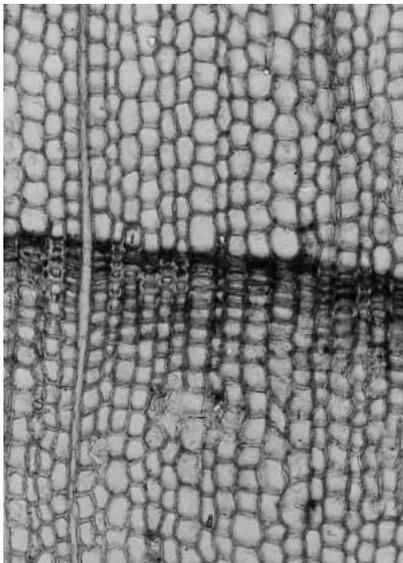
1a アカマツ (横断面)  
サンプル 17 bar : 0.2mm



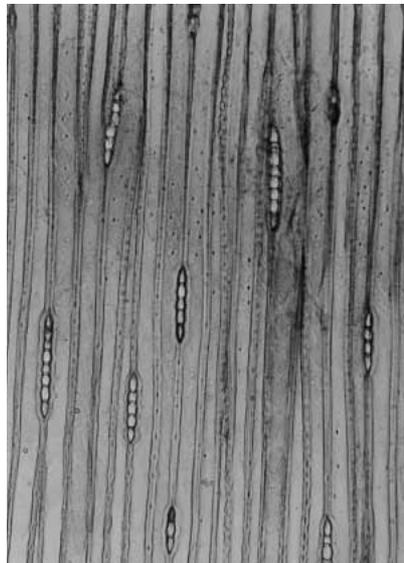
1b アカマツ (放射断面)  
サンプル 17 bar : 0.2mm



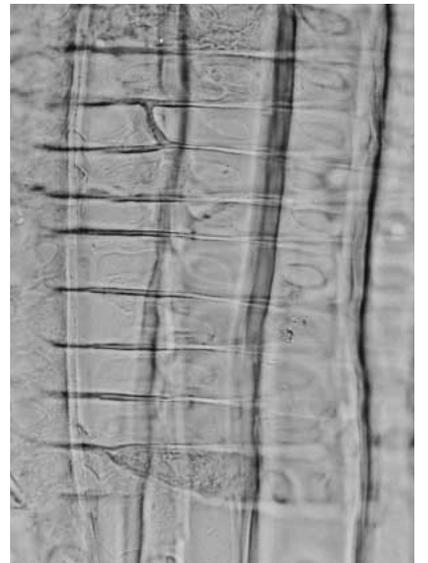
1c アカマツ (放射断面)  
サンプル 17 bar : 0.05mm



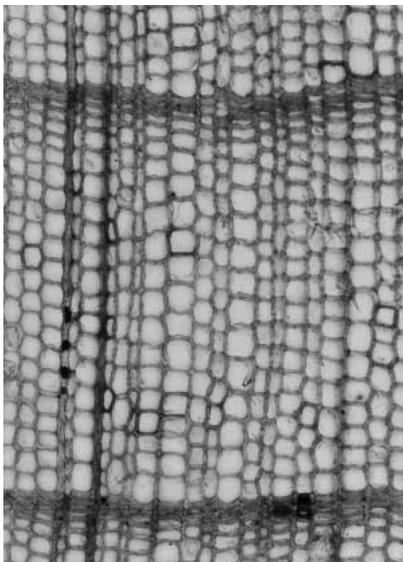
2a コウヤマキ (横断面)  
サンプル 16 bar : 0.2mm



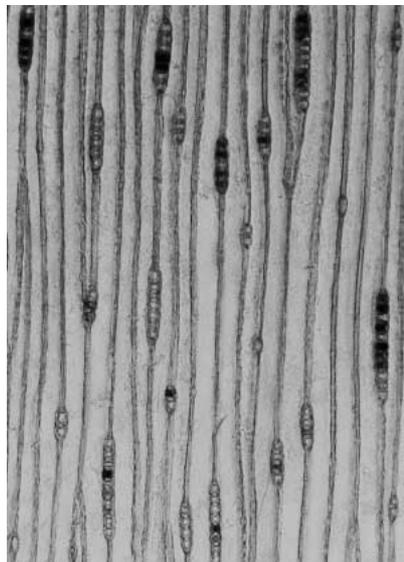
2b コウヤマキ (接線断面)  
サンプル 16 bar : 0.2mm



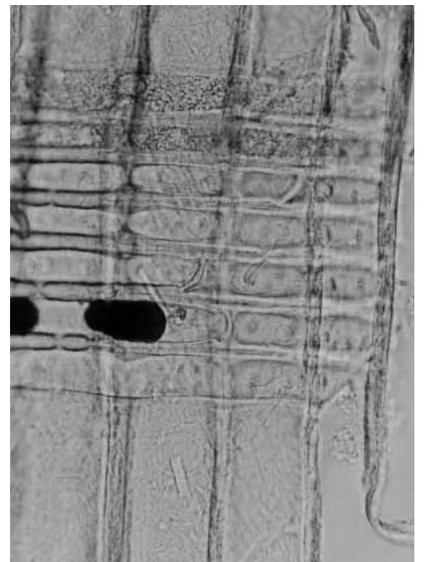
2c コウヤマキ (放射断面)  
サンプル 16 bar : 0.05mm



3a ヒノキ (横断面)  
サンプル 53 bar : 0.2mm

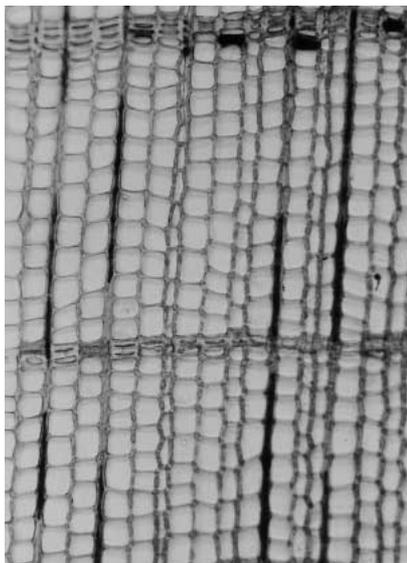


3b ヒノキ (接線断面)  
サンプル 53 bar : 0.2mm

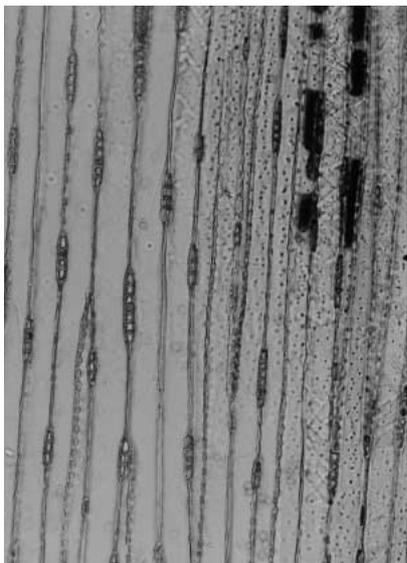


3c ヒノキ (放射断面)  
サンプル 53 bar : 0.05mm

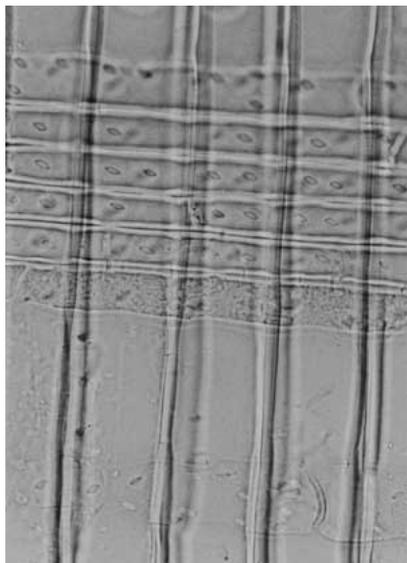
図 2 -70 樹種顕微鏡写真 2



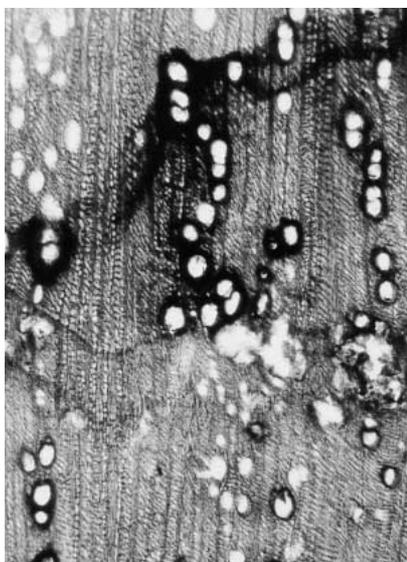
4a サワラ (横断面)  
サンプル 35 bar : 0.2mm



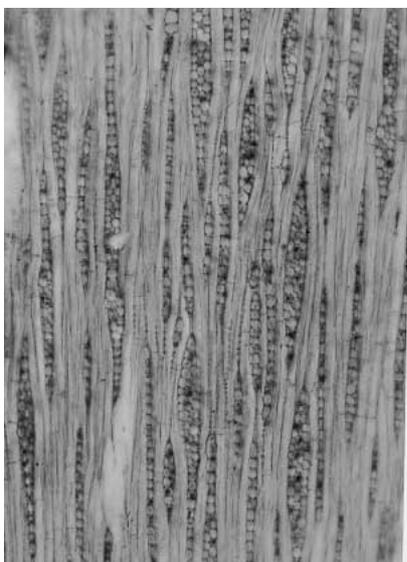
4b サワラ (接線断面)  
サンプル 35 bar : 0.2mm



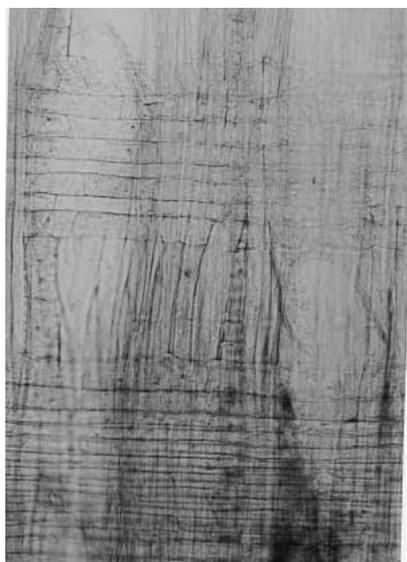
4c サワラ (放射断面)  
サンプル 35 bar : 0.05mm



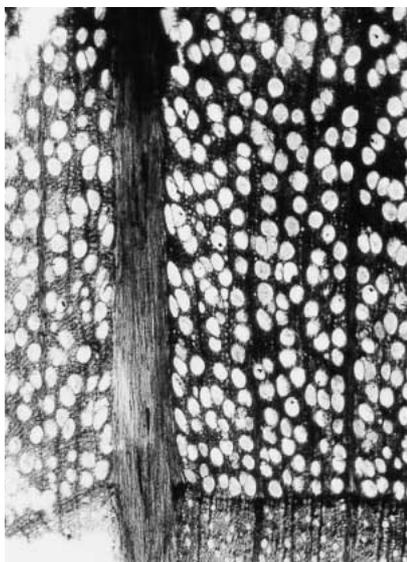
5a イヌシデ節 (横断面)  
サンプル 49 bar : 0.5mm



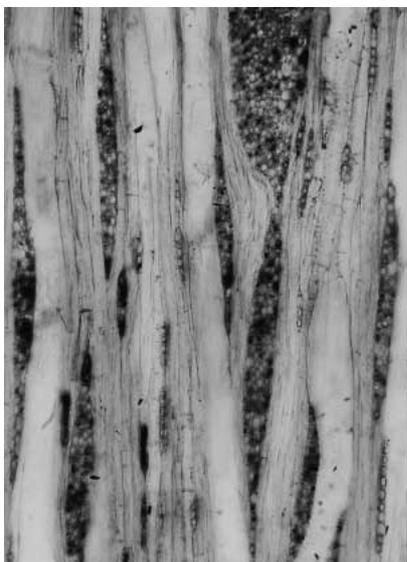
5b イヌシデ節 (接線断面)  
サンプル 49 bar : 0.2mm



5c イヌシデ節 (放射断面)  
サンプル 49 bar : 0.1mm



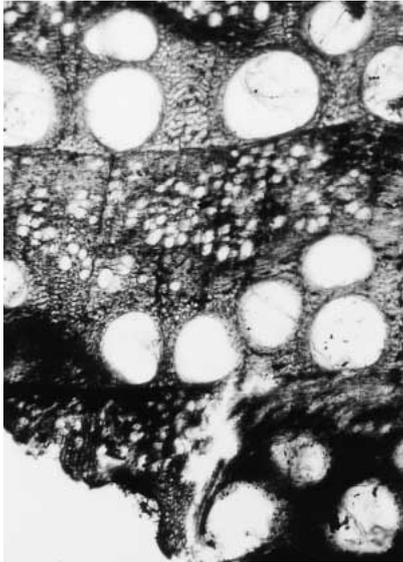
6a ブナ属 (横断面)  
サンプル 45 bar : 0.5mm



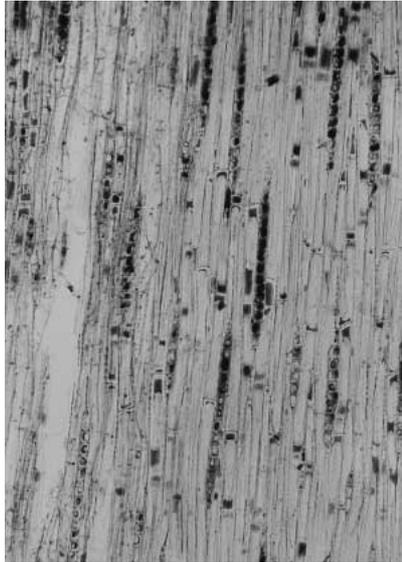
6b ブナ属 (接線断面)  
サンプル 45 bar : 0.2mm



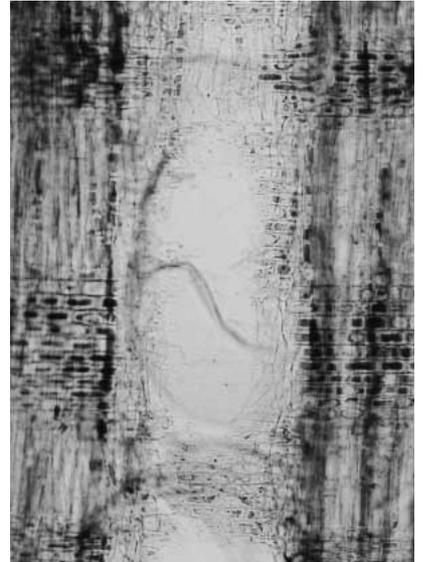
6c ブナ属 (放射断面)  
サンプル 45 bar : 0.1mm



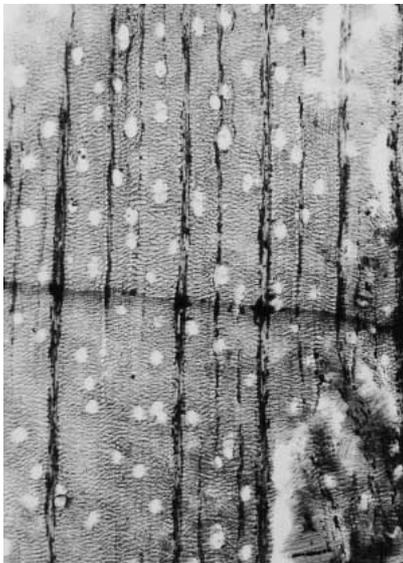
7a クリ (横断面)  
サンプル 40 bar : 0.5mm



7b クリ (接線断面)  
サンプル 40 bar : 0.2mm



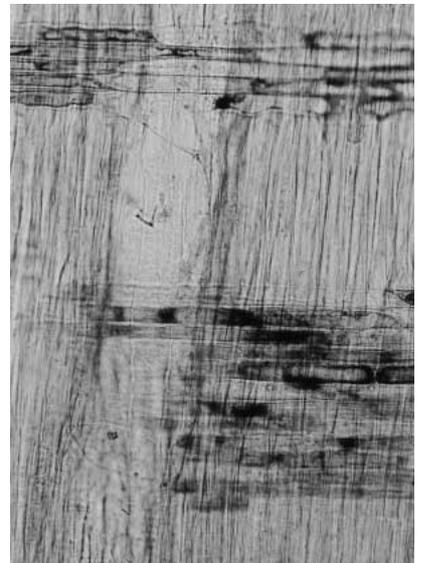
7c クリ (放射断面)  
サンプル 40 bar : 0.2mm



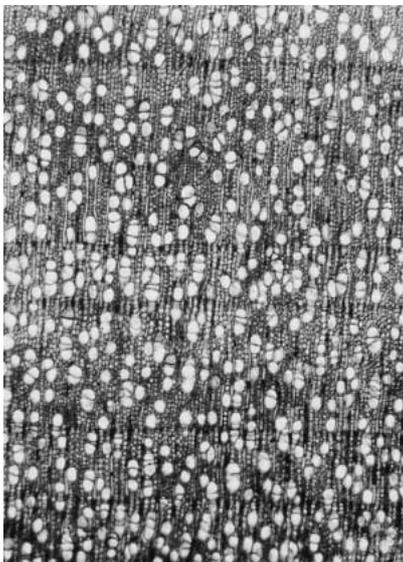
8a カエデ属 (横断面)  
サンプル 3 bar : 0.5mm



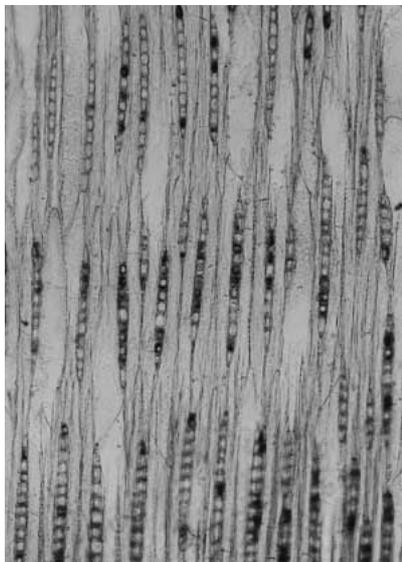
8b カエデ属 (放射断面)  
サンプル 3 bar : 0.1mm



8c カエデ属 (放射断面)  
サンプル 3 bar : 0.1mm



9a トチノキ (横断面)  
サンプル 44 bar : 0.5mm



9b トチノキ (接線断面)  
サンプル 44 bar : 0.2mm



9c トチノキ (放射断面)  
サンプル 44 bar : 0.1mm

## D. 金属製品・金属関連遺物

荊安賀遺跡の金属製品と金属関連遺物は全部で約790点存在する。遺構出土資料もそれなりの量が出土しているが、ここでは金属製品は種類ごとに、金属関連遺物については遺構や出土分布状況からみたまとまりごとに記述を進めていく。

### (1) 鉄製品 (図2-72:15~34)

鉄製品には庖丁、鎌、刀子などの刃物類と釘、鏝などの建築資材と鍋などの容器などが存在する。

15は刃部が四又に分かれた熊手状の工具である。刃部は約3分の1が欠損しているが、幅は約16cmと復元できる。枝分かれした各刃部の先端はやや幅が広がっている。16と17は庖丁である。刃部と柄部の両端が欠損し全体の形状を把握することができないが、刃部の幅は16は約6cm、17は約5cmを測る。18は火打鎌である。頭部が欠損し孔が存在したか否かが判然としないが、刃部の両端は弓なりに彎曲している。24~26は曲刃鎌である。25と26で見られるように柄部の根元部分は蕨手状になっていた。25は刃部の長さが約13cmを測り、わずかに彎曲しながら先端に向かって細くなっている。27はほぼ完形の刀子刃部で、全長は19.5cm、刃部の最大幅は1.2cmを測る。

釘(20~23)は断面が方形で、頭部は平坦に広げた部分を折り返した通常の形状を呈したもののばかりである。後述する棒状含鉄遺物にしたものが釘である可能性が高いので、図示したものの以外にも多くの釘が存在した可能性がある。28は先端部が直角に折れ曲がった細長い板状の鉄製品でおそらく鏝になると考えられる。

34は下端部が欠損しているが平面形が五角形状になる板状鉄製品で、容器(鍋か?)の一部とも考えられるものである。33は半円状に大きく彎曲した棒状鉄製品で把手と考えられる。

### (2) 銅製品 (図2-73:35~41、45~67)

銅製品には、煙管、刀子柄部、銭貨

などがある。

35は円筒状の製品で下端が折れ曲がって潰れている。37と38は煙管の吸口、39は煙管の雁首、40は刀子柄部の一部である。41は直角に折れ曲がった延板状銅製品で表面が塗布物により金色に発色している。

銭貨には渡来銭と国内銭があり、後者の方が多い。渡来銭は北宋銭が大半を占めるが、1157年に建国された金の通貨の正隆元寶(53)も認められる。国内銭には寛永通寶(54~64)、一分銀(65)、天保通寶(67)など多様な種類が認められる。寛永通寶には古寛永通寶(54)、文銭(55)、新寛永通寶(56~64)がある。

### (3) 鍛冶関連遺物 (図2-72:1~14)

荊安賀遺跡から出土した鍛冶関連遺物には、鉄滓、羽口、炉壁などがあり、その内訳は別表の通りである。これらの資料については、これまで筆者が行ってきた分析と同様な肉眼観察と簡易な検査を行い、その結果を一部内容を省略して表にまとめた。なお、その観察や分析方法については別稿(鈴木・蔭山2000)を参照されたい。

鍛冶関連遺物は大きく椀型鉄滓、流動滓、再結合鉄滓、含鉄遺物、鉄塊系遺物などがある。今回は比較的椀型鉄滓がまとまって出土した97C区SD08出土鍛冶関連遺物を取り上げることとする。この97C区SD08から出土した椀型鉄滓は形状から4類に分類できる。

**椀型鉄滓A**-- 質感が重く全体の形状が小型なもの(1)。滓が溜る炉床部の窪みが小さいものと想定される。1は下面の起伏がやや激しく見え、上面に白い石が下面に植物質痕が認められる。

**椀型鉄滓B**-- 質感が重い重複椀型鉄滓(2、3)。重複した下位の鉄滓は椀型鉄滓Aのように全体の形状が小型であり、上位の鉄滓は上に行くに従って広がっているものである。3は最大で四重に重複した椀型鉄滓である。最下段の鉄滓の大きさはほぼ椀型鉄滓Aに近いものとなっている。2は部分的に欠けた2分の1分割重複椀型鉄滓である。下位の鉄滓は一方に片寄せた状態で重複している。上面には白い石の他

に鍛造剥片と呼ばれる光沢のある小片が溶融せずに表面に付着している。下面には炭化物の付着が認められる。

**椀型鉄滓C**-- 質感が重く滓が皿型に広がるもの(4・6)。滓が溜る炉床部の窪みが広いものと想定される。4は部分的に欠けた2分の1分割椀型鉄滓で、上面が盛り上がっている。

**椀型鉄滓D**-- 椀型鉄滓A~Cとは異なり質感が軽いもの(5)。5は下面の起伏が大きく上面は平坦な形状をしたものである。表面の固着が激しいがそれでも気泡を多く観察することができる。

**流動鉄滓A**-- 質感の重い流動鉄滓である(7)。7はほぼ完形の流動鉄滓で円柱状の形状を呈している。

**流動鉄滓B**-- 質感の軽い流動鉄滓である(8)。8は白い石を大きく噛み込んだ流動鉄滓で表面が気泡のため凸凹した状態となっている。

97C区SD08出土資料からみる鍛冶関連資料群の組成をみると、質感の重い椀型鉄滓と流動鉄滓Aが多いことから、一部精錬鍛冶工程の存在が予測されるものの基本的には鍛錬鍛冶工程が行われたものと現状では理解しておく。そして、椀型鉄滓AとCの相違はおそらく炉の規模が相違するために起るものと考え、これらの資料が供伴することから一工房に複数の炉が存在した可能性を考えてもよいかもしれない。

次にこの他の鍛冶関連資料を紹介しておく。12は非常に質感の重く密度が4g/ccを超えるものである。数回に渡り破割りされており、その破断面を観察するとほとんど気泡が認められないものである。14は少なくとも4回以上重複した椀型鉄滓でその結果厚さは5cmを超える異質なものである。質感は軽く密度も2.3g/ccと低い数値となっている。9は羽口の破片である。内径は計測できないが外径は約14cmを測る。10は被熱され著しく風化した砂岩の切石の断片である。表面は黒色に変色している。

### (4) 銅製品製作関連遺物 (図2-73:42~44)

銅製品製作関連遺物にはとりべ等が

ある。42は土製品のとりべで口縁部が内傾する。内面に薄く銅滓が付着し赤く発色している。外面にも口縁部付近に銅滓が付着する。43は瀬戸美濃窯産

陶器灰釉皿で、内面に厚く銅滓が付着する。皿そのものは大窯第2段階くらいに位置付けられる製品である。44は流動滓で赤褐色を呈している。

文献

鈴木正貴・蔭山誠一 2000 「愛知県における鉄器生産を考える（4）-朝日西遺跡を中心に-」『研究紀要第1号』。

表2-3 金属製品一覧表

番号	区	整理番号	遺構番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ
1	97C	97C003-7	SD08	鉄関連遺物	椀型鉄滓A類	5.6	5.1	1.9
2	97C	97C003-3	SD08	鉄関連遺物	椀型鉄滓B類	8.8	5.1	1.9
3	97C	97C010-1	SD08	鉄関連遺物	椀型鉄滓B類	9.8	6.8	3.7
4	97C	97C003-2	SD08	鉄関連遺物	椀型鉄滓C類	8	5.7	3.2
5	97C	97C009-1	SD08	鉄関連遺物	椀型鉄滓D類	10.1	9	3.2
6	97C	97C010-5	SD08	鉄関連遺物	椀型鉄滓D類	5	4.9	3.3
7	97C	97C004	SD08	鉄関連遺物	流動鉄滓A	2.9	2	1.6
8	97C	97C003-11	SD08	鉄関連遺物	流動鉄滓B	3.5	2.3	1.6
9	96F	96F011	SD02	鉄関連遺物	羽口	6.3	6.1	2.5
10	97C	97C074	検Ⅱ	鉄関連遺物	炉壁	9.6	9.5	3.1
11	96L	96L002	SD06	鉄関連遺物	鉄塊系遺物	2.8	1.9	1.4
12	96BC	96BC046	検Ⅰ	鉄関連遺物	椀型鉄滓	5.3	2.6	1.6
13	96BC	96BC067	検Ⅰ	鉄関連遺物	椀型鉄滓	6.8	4.9	2.4
14	97B	97B015	SK71	鉄関連遺物	椀型鉄滓	13.5	9	8.8
15	97B	98-72	SD01	鉄製品	熊手状工具	11.4	10.5	2.1
16	96Da	96D045	検Ⅱ	鉄製品	包丁	14.1	7	3.2
17	97D	97D007	検Ⅰ	鉄製品	包丁	13.2	5.4	2.4
18	97C	97C043	検Ⅰ	鉄製品	火打鎌	13.3	5.7	0.8
19	97B	98-74	SK56	鉄製品	リング状製品	4.3	4.1	1.1
20	96H	96H011	SK28	鉄製品	釘	5.7	2.2	1.2
21	96BC	96BC023	SD16	鉄製品	釘	3.1	1.5	0.9
22	96Da	96D007	SX02	鉄製品	釘(含鉄遺物)	9.4	1.9	1.8
23	96BC	96BC032	SD22	鉄製品	釘	5.8	0.6	0.4
24	97A	97A011	SD02上層	鉄製品	曲刃鎌	10.8	4	3
25	96Da	96D029	検Ⅰ	鉄製品	曲刃鎌	13.5	4.2	3
26	97B	97B037	検Ⅱ	鉄製品	曲刃鎌	15.2	4.1	1.8
27	96Da	96D010	SD01中層	鉄製品	刀子刃部	19.6	1.2	0.3
28	97C	97C045	検Ⅰ	鉄製品	鏝	7	1.3	0.7
29	97B	97B018	SX10	鉄製品	棒状製品	7	0.3	0.3
30	96BC	96BC033	SD22ベルト	鉄製品	棒状製品	7.7	2.1	2
31	97C	97C046	検Ⅰ	鉄製品	棒状製品	5.9	4.8	2.5
32	96G	96G006	NR01	鉄製品	円盤状製品	3.6	3.3	2
33	97C	97C045	検Ⅰ	鉄製品	把手	11.3	1.5	1.1
34	97B	97B039	検Ⅱ	鉄製品	容器部材	4.4	3.2	0.5
35	97B	97B009	SK33	銅製品	筒状製品	2.3	2.2	1.5
36	97B	98-77	検Ⅰ	銅製品	板状製品	3.9	3.1	0.2
37	96G	96G002	SD01	銅製品	煙管吸口	5.5	1.1	1.1
38	96G	96G003	SD01	銅製品	煙管吸口	7.4	1	1
39	96BC	96BC044	SD38	銅製品	煙管雁首	6.4	1	0.8
40	97B	98-78	検Ⅰ	銅製品	刀子柄部	3.5	1.8	0.2
41	97C	97C017	SK18	銅製品	棒状製品	4.1	0.8	0.2
42	97D	97D018	検Ⅱ	銅関連遺物	とりべ	3.6	3	0.9
43	97D	97D018	検Ⅱ	銅関連遺物	とりべ	4	3.9	1.3
44	97D	97D018	検Ⅱ	銅関連遺物	流動銅滓	2.5	1.9	1.8
45	97D	97D-M-4	検Ⅱ	銭貨(銅銭)	開元通寶	2.4	2.4	0.1
46	96D	96Da-M-2	SD01中層	銭貨(銅銭)	開元通寶	2.4	2.4	0.1
47	97B	97B-M-5	検Ⅰ	銭貨(銅銭)	熙寧元寶	2.4	2.4	0.1
48	97D	97D-M-5	検Ⅱ	銭貨(銅銭)	熙寧元寶	2.4	2.4	0.1
49	96D	96D-M-1	SD01	銭貨(銅銭)	元豊通寶	2.5	2.5	0.1
50	96H	96H007	SK18	銭貨(銅銭)	元豊通寶	2.4	2.4	0.1
51	96H	96H007	SK18	銭貨(銅銭)	元祐通寶	2.4	2.4	0.1
52	97D	97D-M-1	NR01炭化層	銭貨(銅銭)	元祐通寶	2.5	2.5	0.1
53	97B	97B-M-3	検Ⅱ	銭貨(銅銭)	正隆元寶	2.2	2.2	0.1
54	96C	96BC020	SD14上層	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.5	2.5	0.1
55	96BC	96BC027	SD16	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.5	2.5	0.1
56	96BC	96BC020	SD14上層	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.5	2.5	0.1
57	96BC	96BC065	検Ⅰ	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.3	2.2	0.1
58	96H	96H024	SE04	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.5	2.5	0.1
59	96C	96BC020	SD14上層	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.5	2.5	0.1
60	97B	97B-M-4	検Ⅰ	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.4	2.4	0.1
61	97B	97B-M-1	SK10	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.4	2.4	0.1
62	96D	96D034	検Ⅰ	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.2	2	0.1
63	97D	97D-M-3	検Ⅰ	銭貨(銅銭)	寛永通寶	2.5	1.6	0.1
64	97C	97C-M-1	検Ⅱ	銭貨(銅銭)	寛永通寶	1.7	1.5	0.1
65	97B	97B-M-2	検Ⅰ	銭貨(銀貨)	一分銀	2.3	0.7	0.2
66	97A	97A-M-1	検Ⅰ	銭貨(銅銭)	十銭	0.8	0.8	0.1
67	96BC	96BC-M-1	SE01掘形	銭貨(銅銭)	天保通寶	5	1.3	0.2

图2 -72 各種金属製品実測图 1

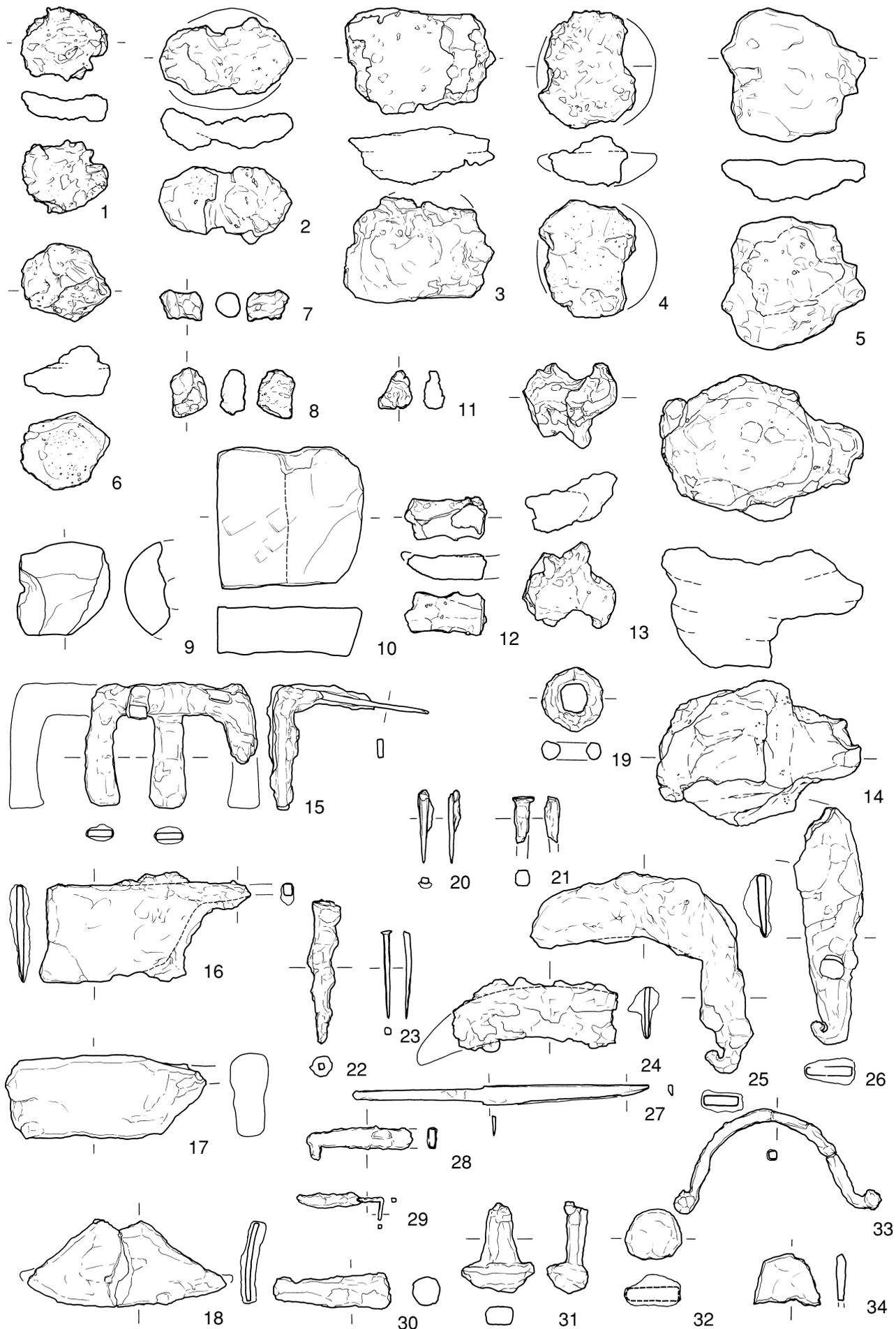
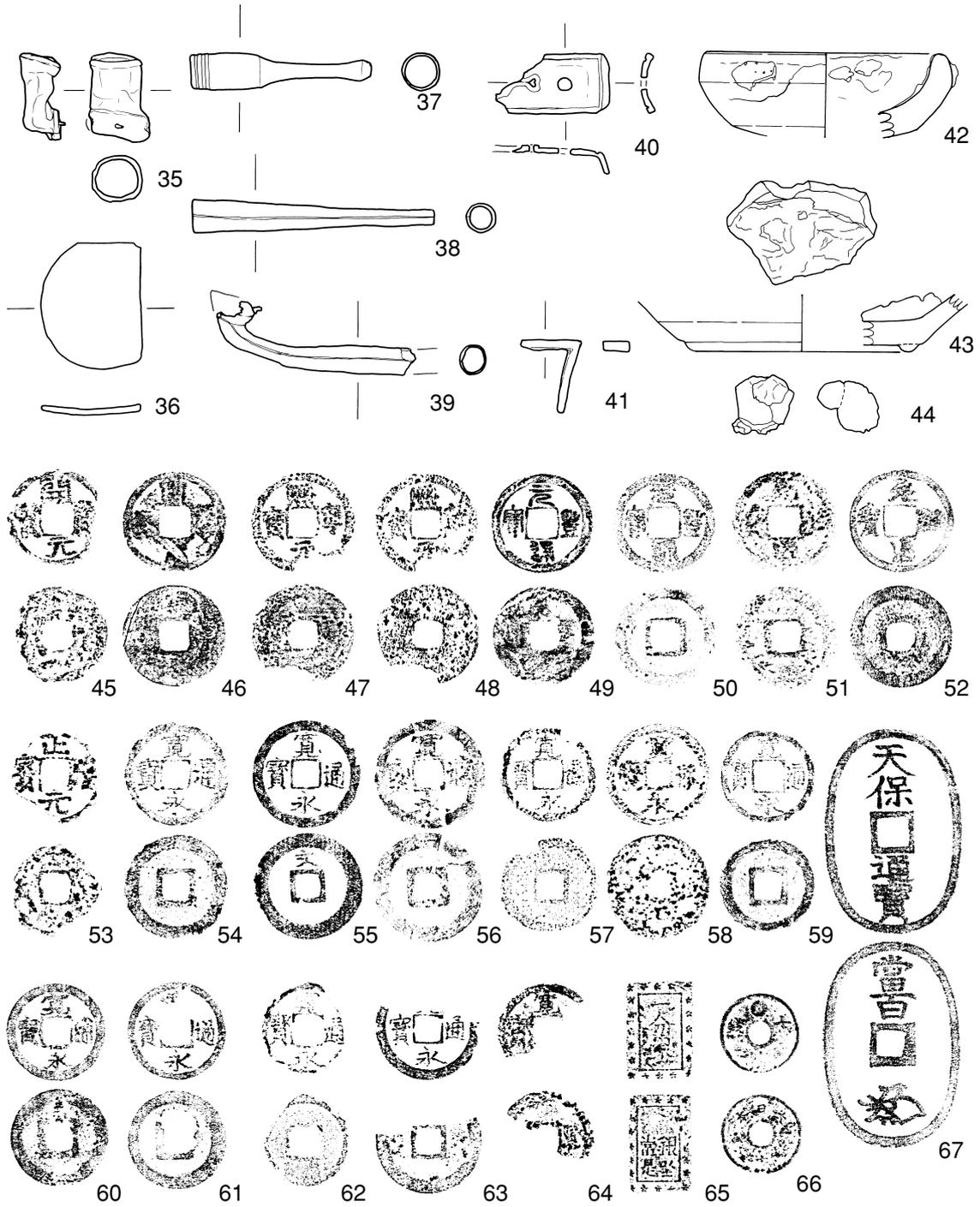


图 2 -73 各種金属製品実測図 2



## E. 石製品

### a. 火打石

荊安賀遺跡では火打石関係資料が多量に出土している。種別としては、原石、製品、剥片、碎片がある。そのほとんどはチャートであり、灰色を呈するものが多い。産地の特定については今後の課題である。以下は図化したものについて特徴を記載する。

#### 火打石観察表

※火打石の部分呼称は、図の配置に対応（左面、正面、右面、裏面の順。剥片は、表面、右側縁、裏面）

#### 96BC-D04-2

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：4.9cm 最大幅：4.6cm 最大厚：2.6cm 重量：68.76g

やや大型の火打ち石である。使用痕は、上面から右面にかけて顕著で、非常に多くの潰れが観察できる。

#### 96BC-E11-12

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：2.8cm 最大幅：3.1cm 最大厚：2.6cm 重量：24.33g

使用痕は、正面の稜線および左面縁辺・裏面左縁辺に顕著である。

#### 96BC-22

火打ち石（剥片状） 石材：チャート  
最大長：3.0cm 最大幅：3.6cm 最大厚：2.0cm 重量：13.85g

全体が三角形を呈する。使用痕は、右縁辺部に顕著な集中を見せる。

#### 97B-K56-5

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：3.4cm 最大幅：2.1cm 最大厚：1.5cm 重量：12.90g

使用痕は、上部・下部の縁辺、右面下部に顕著である。

#### 97B-K56-6

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：2.0cm 最大幅：1.6cm 最大厚：1.9cm 重量：6.21g

使用痕は、上面左縁辺、正面の稜線に集中して観察される。

#### 97B-K56-7

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：2.9cm 最大幅：3.5cm 最大厚：2.3cm 重量：30.76g

使用痕は、全面にわたって突出部縁辺に観察される。

#### 97B-K56-9

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：3.4cm 最大幅：2.3cm 最大厚：2.0cm 重量：14.86g

使用痕は、裏面の各縁辺部に顕著な集中が観察できる。

#### 97B-K56-10

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：1.9cm 最大幅：2.4cm 最大

厚：1.0cm 重量：3.29g

使用痕はあまり顕著ではない。正面右側に散見される。

#### 97B-K56-11

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：2.4cm 最大幅：2.4cm 最大厚：2.2cm 重量：16.08g

使用痕は、ほぼ全稜線部に観察できるが、上面および左面に顕著である。

#### 96D-6

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：4.4cm 最大幅：1.9cm 最大厚：1.4cm 重量：10.77g

使用痕は、左面および上部左縁辺に集中し、裏面右縁辺にも観察される。

#### 96D-7

剥片 石材：チャート 最大長：2.2cm  
最大幅：2.1cm 最大厚：0.5cm 重量：2.19g

使用痕は明確ではない。火打ち石整形時に剥離された可能性がある。

#### 96D-8

剥片 石材：チャート 最大長：2.5cm  
最大幅：1.4cm 最大厚：0.6cm 重量：2.21g

使用痕は、正面稜線上および裏面左縁辺部に集中して観察できる。

#### 96D-9

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：3.0cm 最大幅：4.0cm 最大厚：1.9cm 重量：30.81g

使用痕は、左右の側縁に顕著であるが、上面縁辺部にも観察される。

#### 96D-10

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：4.4cm 最大幅：4.2cm 最大厚：2.2cm 重量：35.94g

正面に自然面を残し、使用痕は、全周縁部にわたって顕著である。

#### 96D-22

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：5.9cm 最大幅：3.0cm 最大厚：2.4cm 重量：43.22g

やや縦長・尖頭の形状を呈する。使用痕は、裏面および左面の抉れ部に顕著である。

#### 96F-D02-10

剥片 石材：チャート 最大長：2.0cm  
最大幅：1.4cm 最大厚：0.5cm 重量：1.20g

使用痕は明確ではない。火打ち石整形時に剥離された可能性がある。

#### 96F-D16-15

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：4.7cm 最大幅：2.3cm 最大厚：1.9cm 重量：24.48g

使用痕は、下部の突出部に集中し、各面稜線部に若干観察できる。

#### 97D-R01-1

剥片 石材：チャート 最大長：2.7cm  
最大幅：3.1cm 最大厚：1.0cm 重量：8.43g

裏面に大きく節理面を残す。使用痕は、明確でない。

#### 97C-K43-16

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：2.2cm 最大幅：2.1cm 最大厚：1.8cm 重量：8.56g

使用痕は、正面の稜線および右面縁辺に集中。上・下面の正面側にも若干見られる。

#### 97C-K51-18

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：3.3cm 最大幅：2.5cm 最大厚：2.0cm 重量：16.38g

使用痕は、正面の稜線および右面縁辺に集中し、上面にも若干観察できる。

#### 97C-30

剥片 石材：チャート 最大長：2.5cm  
最大幅：1.7cm 最大厚：0.8cm 重量：2.48g

尖頭形を呈する。表裏両面からの調整によって、尖頭部を作り出している。

#### 97C-34

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：3.9cm 最大幅：2.9cm 最大厚：1.6cm 重量：14.64g

使用痕は、上部縁辺部から右側縁にかけて顕著な集中が観察できる。

#### 97C-42

火打ち石（剥片状） 石材：チャート  
最大長：4.9cm 最大幅：4.5cm 最大厚：1.5cm 重量：35.74g

上下および正面・裏面に節理面が残る。使用痕は、左右両側縁および下部に顕著。

#### 96H-K16-6

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：2.5cm 最大幅：2.4cm 最大厚：2.4cm 重量：13.48g

使用痕は、正面稜線および右側縁に顕著であり、上面・左面にも若干観察される。

#### 96G-3

火打ち石（石核状） 石材：チャート  
最大長：5.0cm 最大幅：2.5cm 最大厚：2.4cm 重量：32.17g

正面および裏面に節理面を残す。使用痕はあまり顕著ではないが、上端部に小剥離が集中している。

#### 96G-4

剥片 石材：チャート 最大長：2.4cm  
最大幅：2.9cm 最大厚：0.8cm 重量：4.58g

使用痕は、表面稜線上全周に顕著であるが、使用程度は軽微である。

图 2 -74 火打石实测图 1

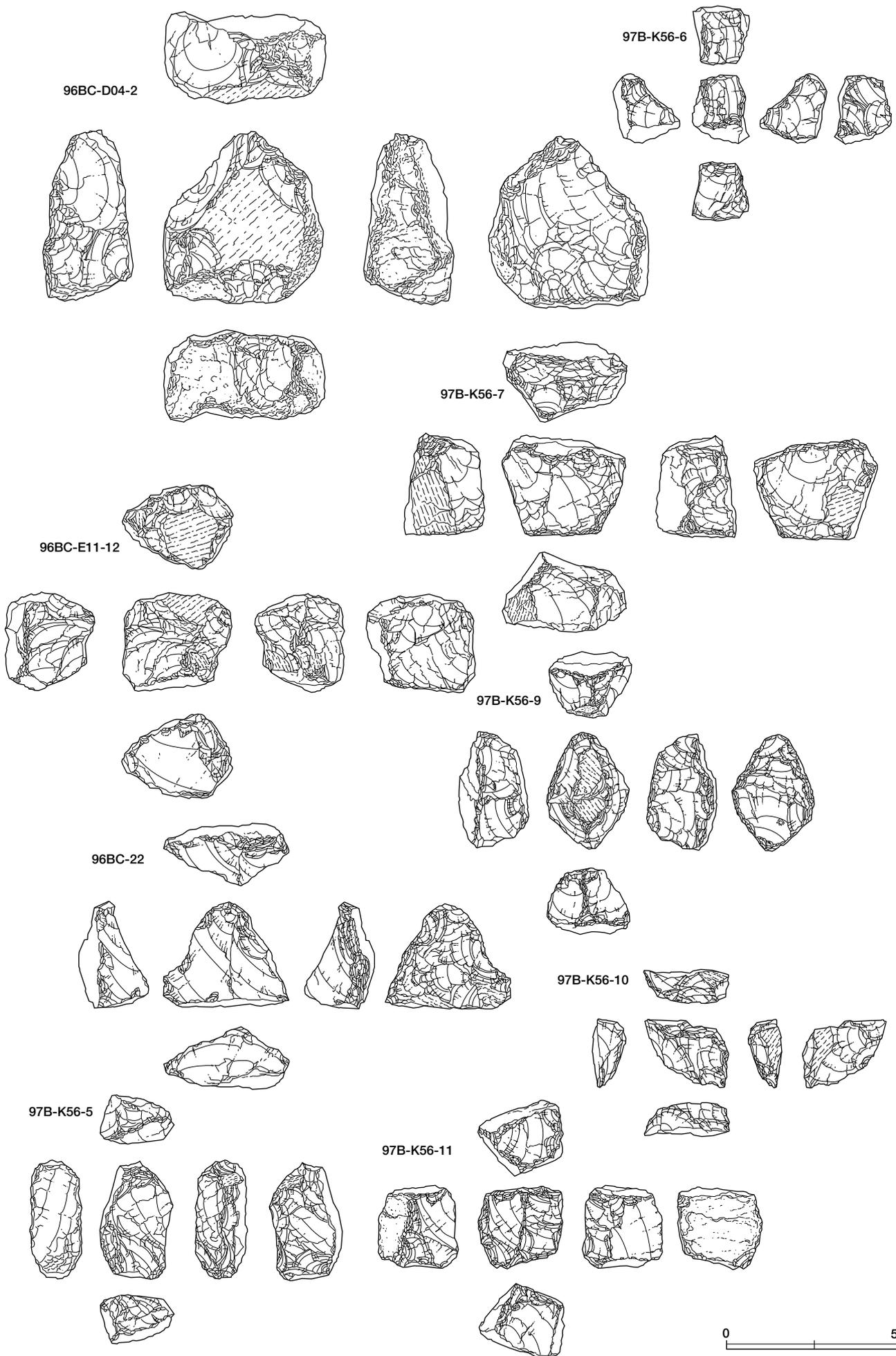
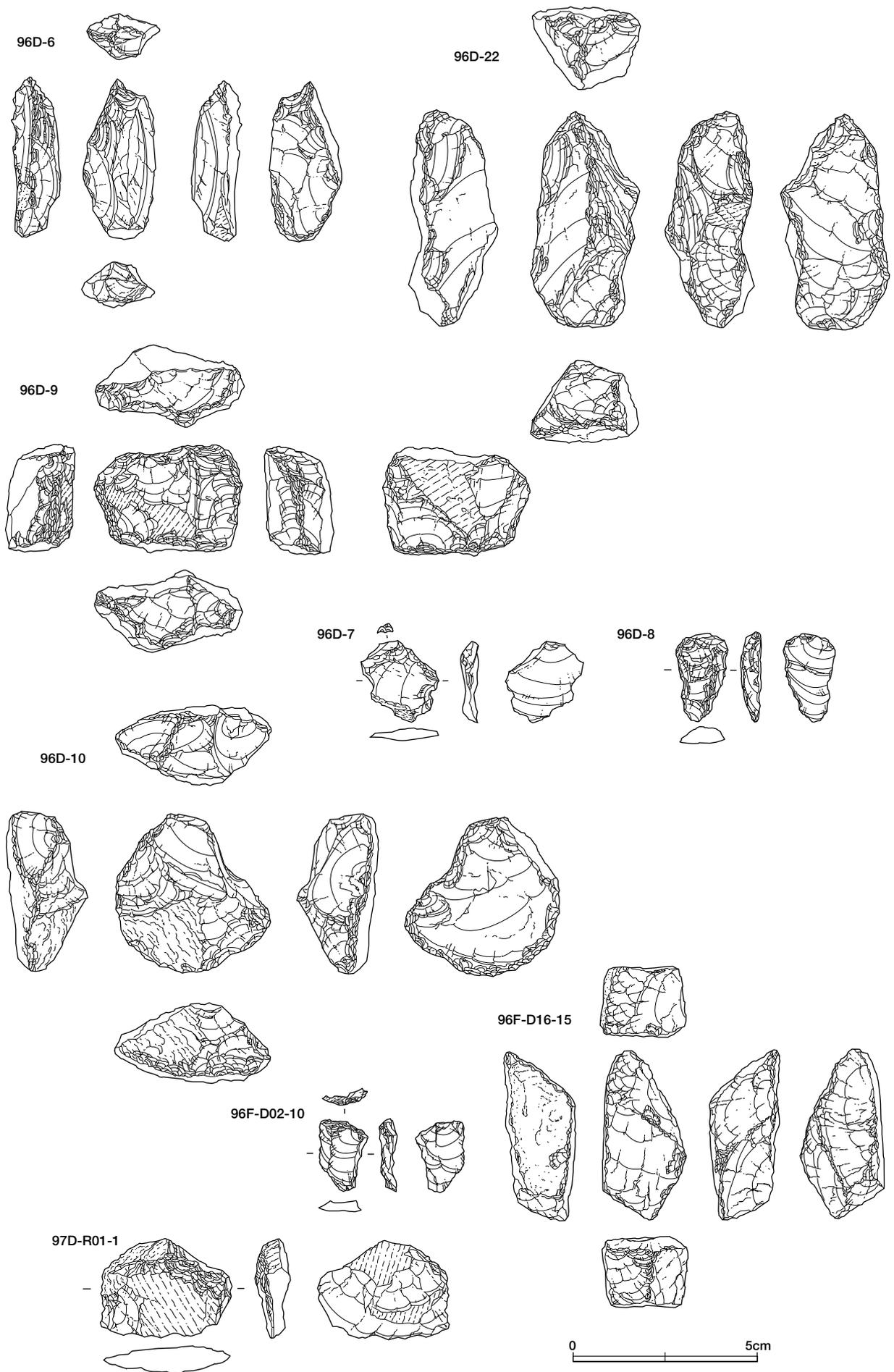
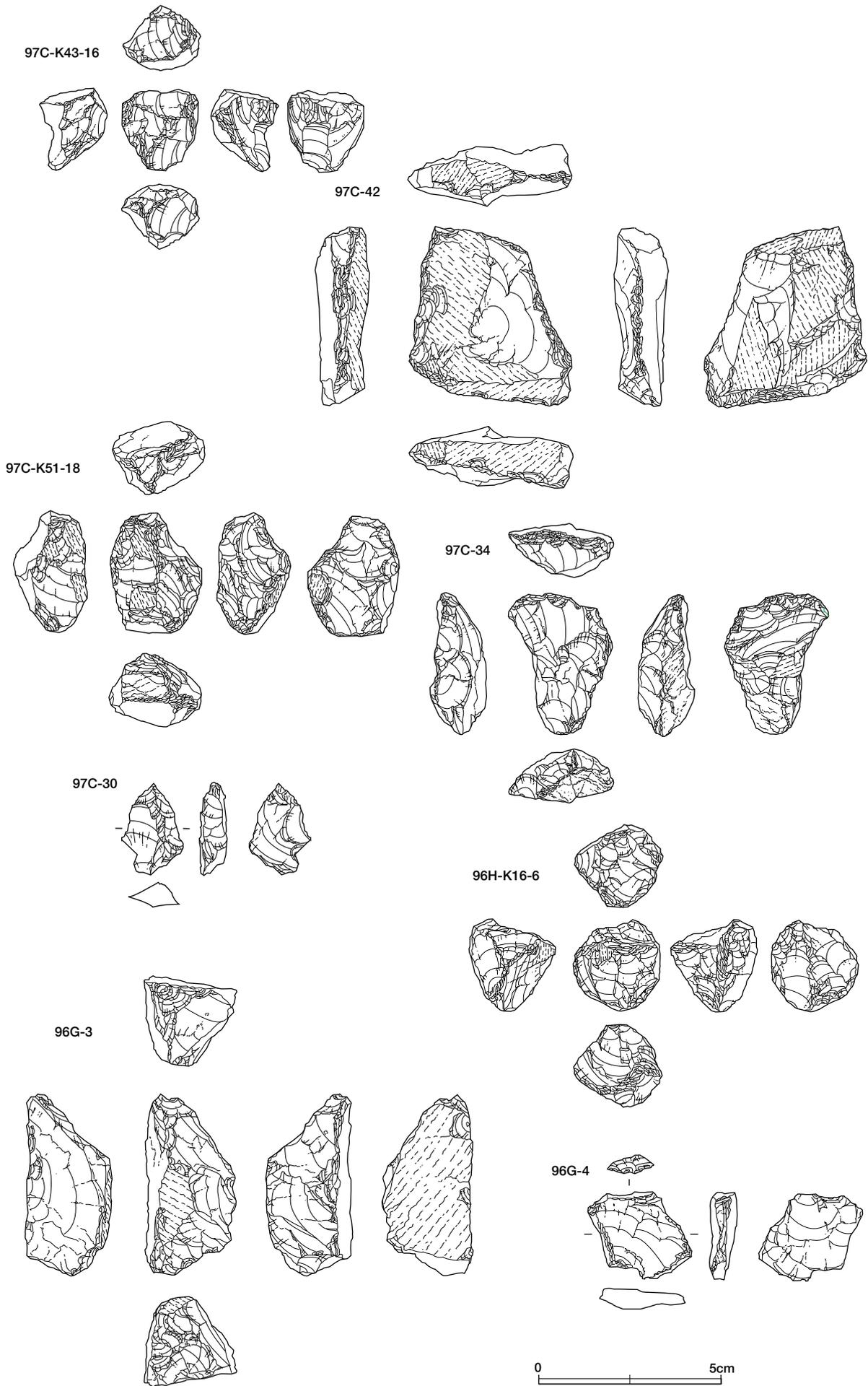


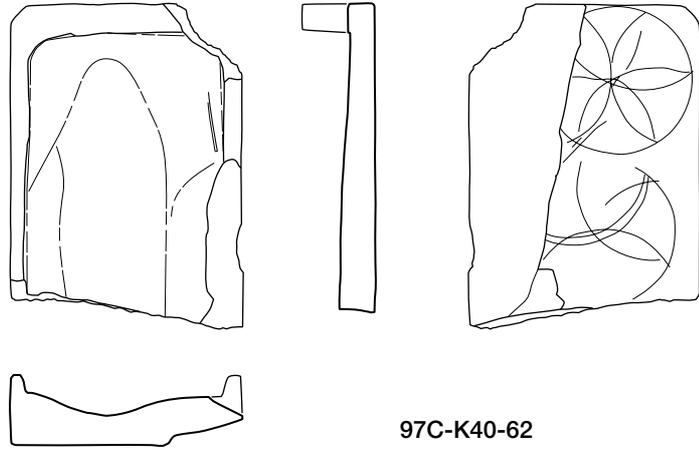
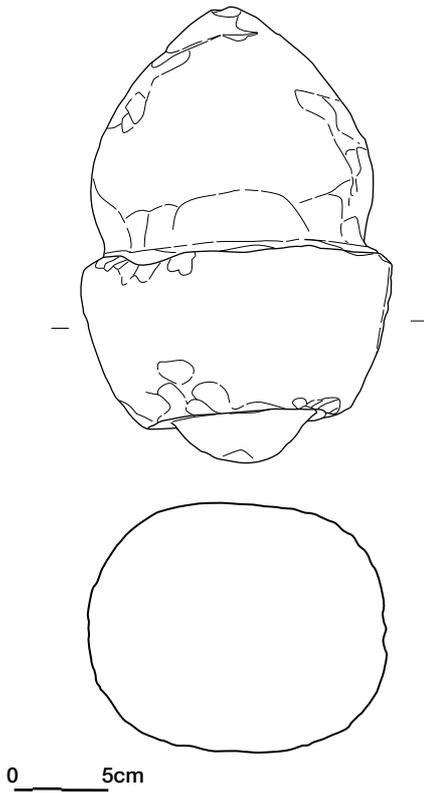
图 2 -75 火打石实测图 2



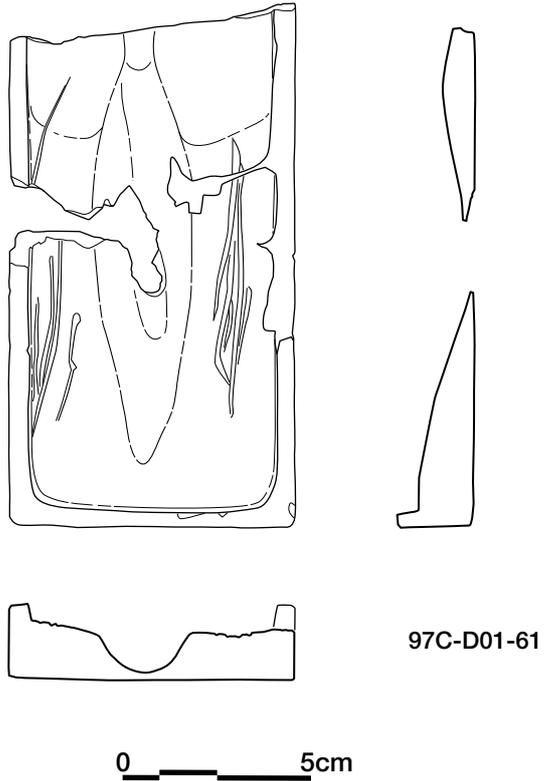
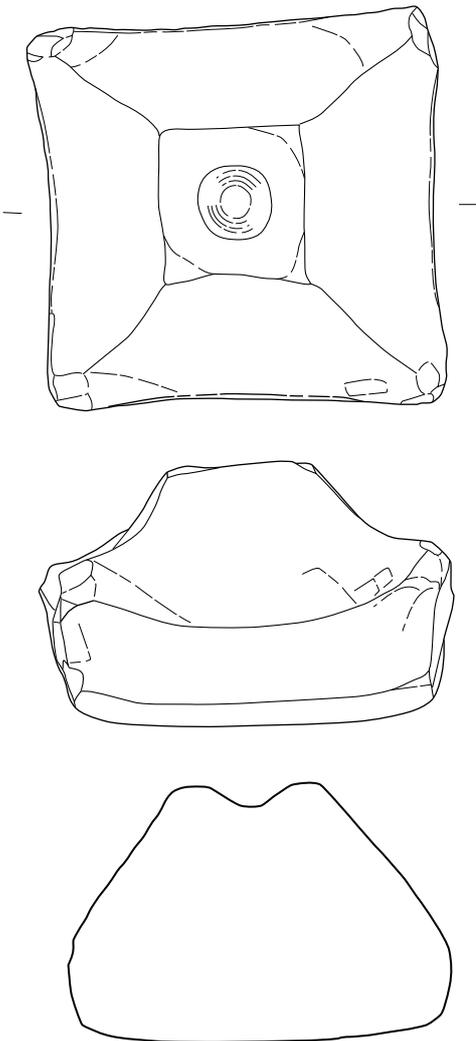


96G-D01-5

図 2 -77 五輪塔・硯実測図



97C-K23-63



**b. 五輪塔**

五輪塔は97C区と96G区から各1点ずつ出土した。どちらも花崗岩製である。川沿いの地区からの出土という点で共通している。

**c. 硯**

近世遺構から出土したものがほとん

どである。破損品が多く、またかなり使い込まれたものもある。粘板岩製が多いようだ。

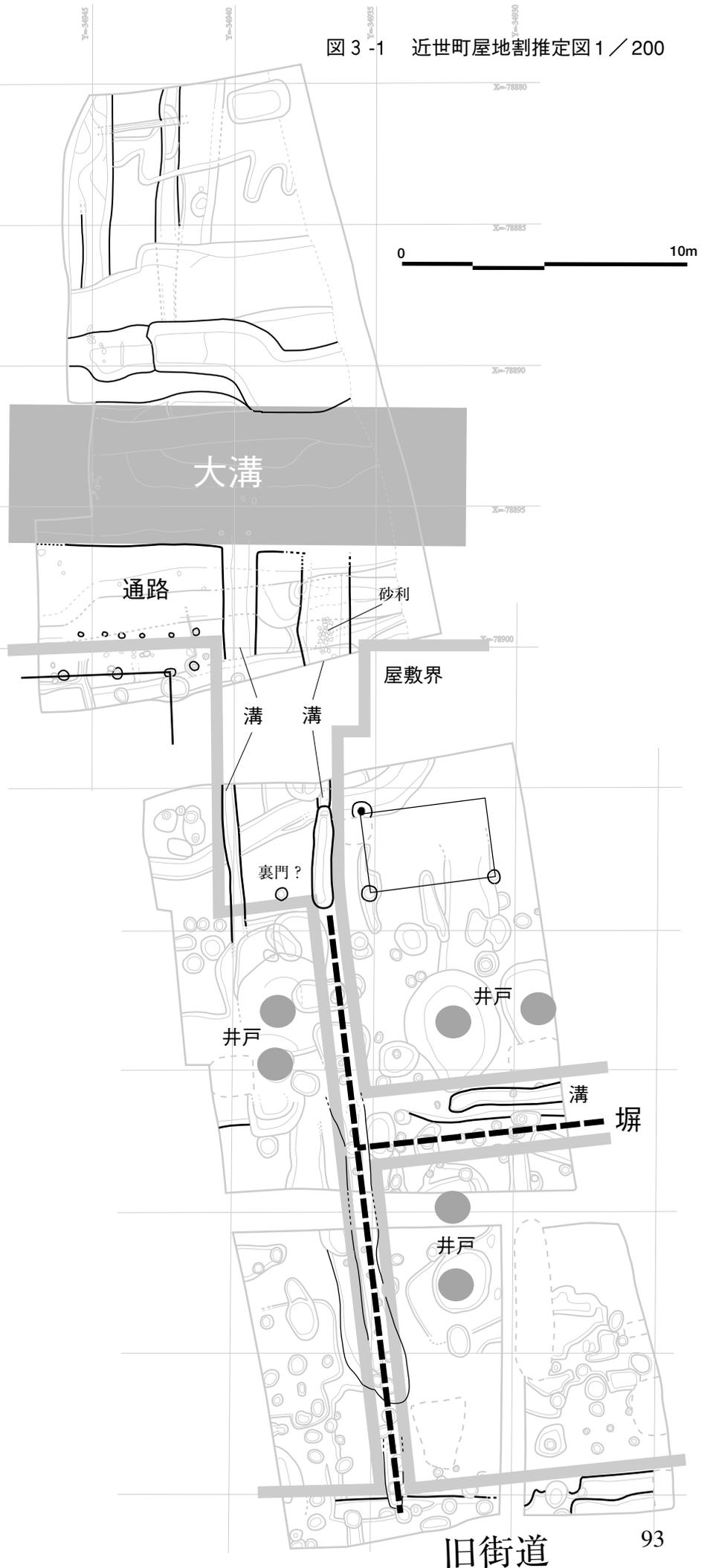
**d. 石臼**

いずれも破片である。花崗岩製と凝灰岩製とがある。

### 第 3 章 まとめ

今回の調査では以下の点が明らかになった。

- ① 荻安賀遺跡の立地する微高地は弥生時代前期まで遡り、弥生時代の遺構が展開する可能性が認められた。
- ② 古墳時代については、北の八王子遺跡の南限を 96F 区・96L 区で確認した。せいぜい南下しても 97A 区までであろう。96H 区で検出した自然地形は旧河川の侵食底面の痕跡と考えられ、この点から周辺に集落が存在する可能性は低いであろう。ただし、赤彩二重口縁壺片が出土したことから、北川田遺跡を含めて墓域が展開していた可能性が高い。
- ③ 古代は旧河川東部に展開する可能性がある。
- ④ 中世は遺構の残りは悪かったが、散居的な農村景観が復元できる可能性がある。おそらく八王子遺跡が密集域であり、その周辺の様相ということになる。
- ⑤ 戦国時代から江戸時代初期にかけては、幅 4 m から 7 m 程度の大溝が東西南北の方向に掘削され、96D 区 SD01、96F 区 SD15・16 などは荻安賀城関連の堀であった可能性が高い。
- ⑥ 96G 区の旧河川沿いの区域では土師皿や卒塔婆がまとまった出土しており、戦国時代から江戸時代初期にかけて祭りの場であったと考えられる。
- ⑦ 97B 区から 96D 区では、江戸時代の屋敷地の様子が明らかになった。96D 区 SD01 沿いには通路があり、それにつながる通路、堀による区画、こういったものが推定される。しかし、建物についてはよくわからなかった。
- ⑧ 上記の屋敷地割は 96BC 区でも認められたが、それが大きく改変されたのが江戸末から明治にかけてである。廃棄土坑（井戸）はおおむね 19 世紀後半であり、その段階で新たな地割設定が行われたと考えられる。今回の調査区がいずれも旧地割をまたがっているような印象を与えているのも、こうしたことに起因するからであろう。



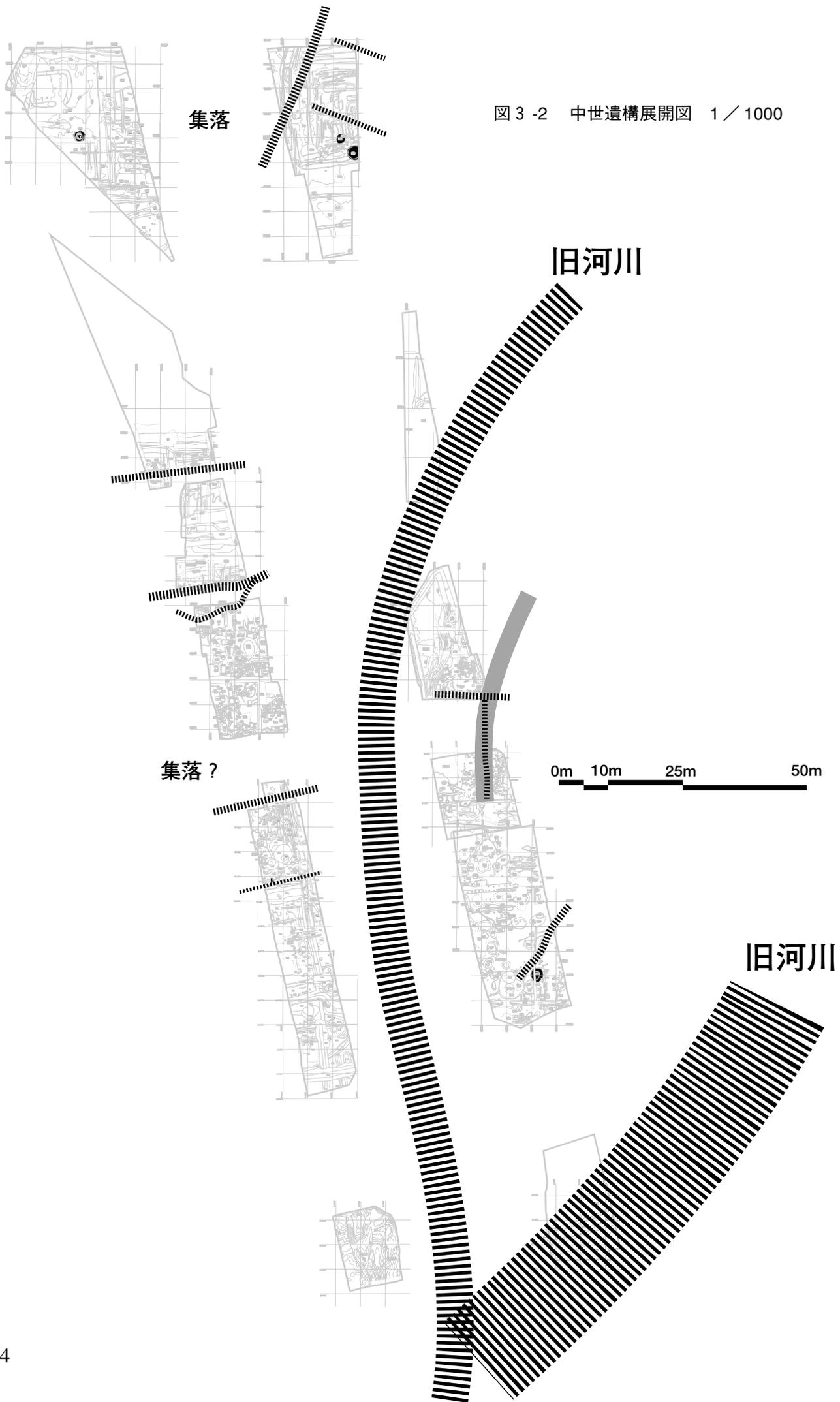


图 3 -2 中世遺構展開図 1 / 1000

外堀？

図 3 -3 戦国遺構展開図 1 / 1000

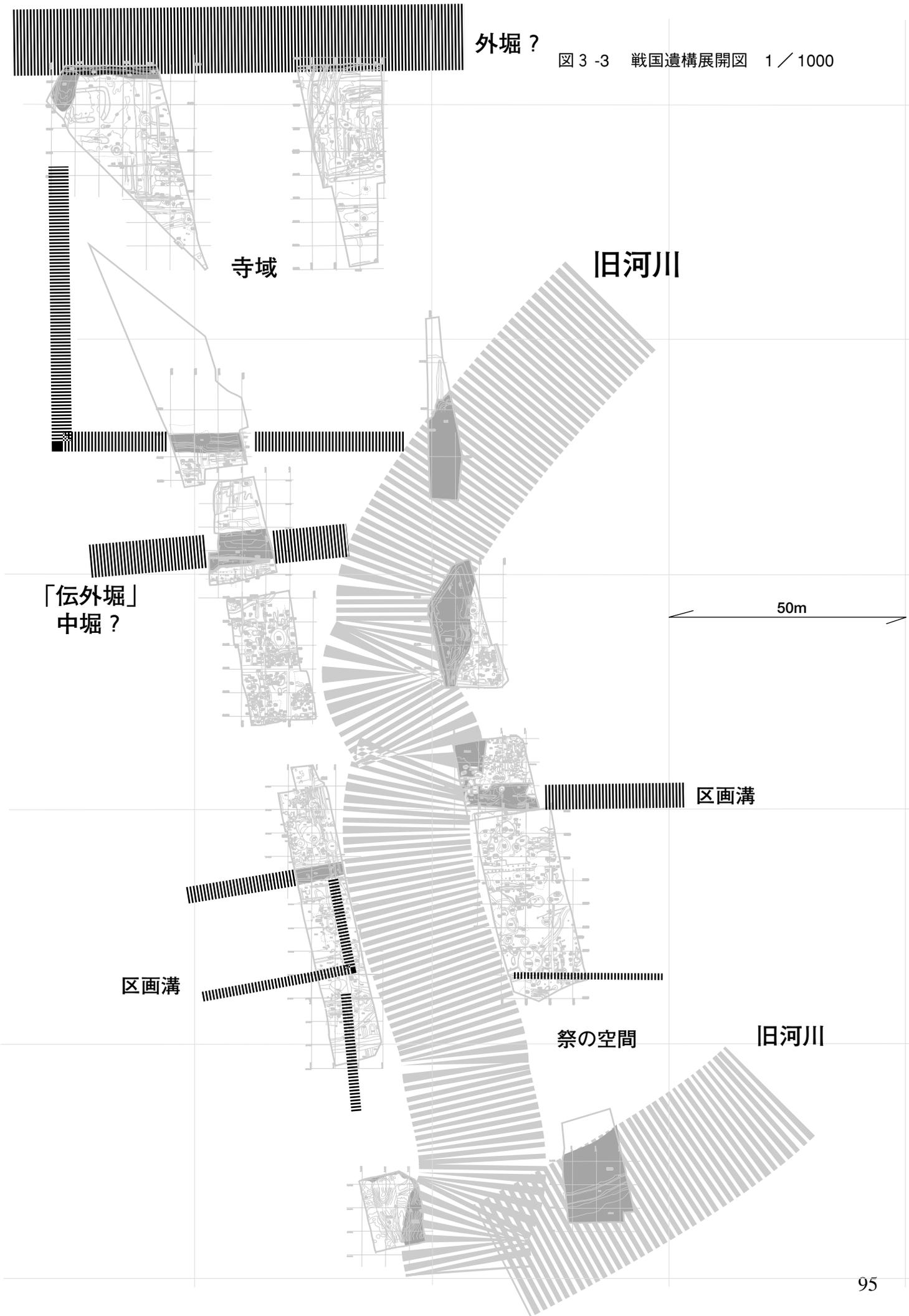
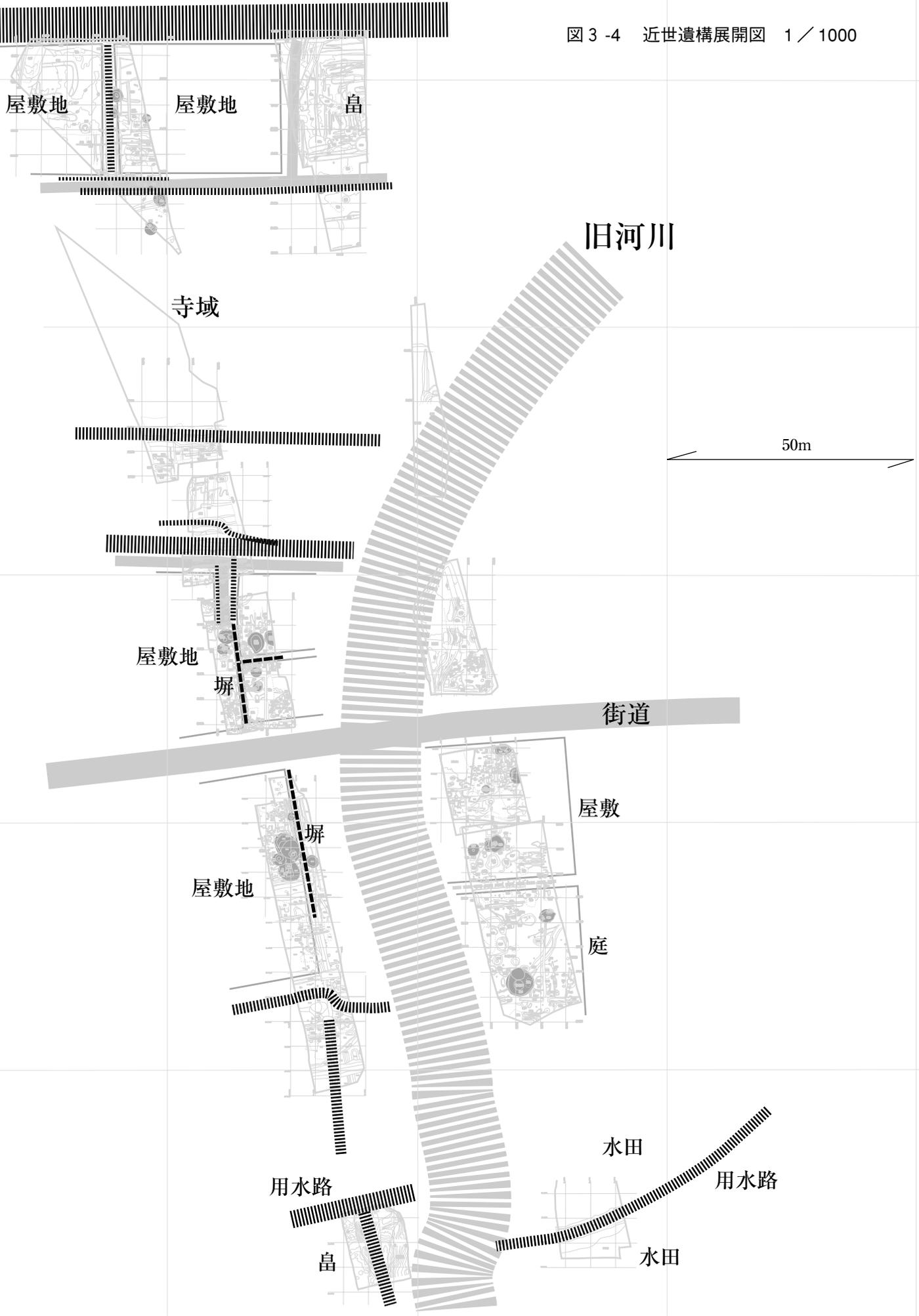


图 3 -4 近世遺構展開図 1 / 1000



# 付論

# 荊安賀遺跡における鉄器生産を考える

鈴木正貴・蔭山誠一

## 1 はじめに

筆者らは愛知県における鉄器生産というテーマを設定し、集落遺跡から出土する鉄資料について整理分析を行ってきた。その結果、鉄資料の出土状況から分布のまとまり「群」を見出し、群の鉄資料組成から鉄器生産工程の想定を試み、これまで鉄器生産遺構が確認されていなかった多くの集落遺跡の中でも鉄器生産を行っていた可能性があることを指摘した。ここでは荊安賀遺跡出土資料を素材にして若干の検討を試みたい。

## 2 金属関連資料の観察

### (1) 分析の方法

遺跡から出土する金属関連資料には、金属の原材料、加工に伴って生成される滓、炉材や鞆の羽口などの遺構の一部、加工に必要な容媒材や燃料、道具類および製品や未製品がある。これらの資料については、これまで筆者らが行ってきた分析と同様の肉眼観察と簡易な検査を行い、その結果を一部内容を省略して表にまとめた。なお、その観察や分析方法については別稿(鈴木・蔭山2000)を参照されたい。

### (2) 鉄資料の分類

鉄資料に関して、形状および様々な属性から椀型滓、流動滓、再結合滓、鉄塊系遺物、含鉄遺物に分けた。以下に分類を説明する。

**鉄滓**……製鉄や鍛冶の鉄加工の各段階で、原料および半加工品、廃棄物を炉の中で溶融させた際に生じる非鉄成分が多い滓部分。

**椀型滓**……鍛冶の段階に炉の底の部分に生まれる鉄滓。炉の底の形を反映した平面が円形で断面が椀型の形状とな

る。椀型滓は破割りされたものが多く、これらは残存する部分の割合から2分の1分割椀型滓、4分の1分割椀型滓、8分の1分割椀型滓、などと区分した。遺物報告の中では97C区SD08から出土した椀型滓を想定される炉の形状をもとに分類を試みたが、ここでは上面の表面形状で大きく4類に細分して検討を進めて行きたい。

椀型滓aは滓の上表面の起伏が少ない平坦なもの(上面の形状が「平」としたもの)、椀型滓bは滓の上表面の起伏が少なくやや盛り上がっているもの(上面の形状が「平盛」としたもの)、椀型滓cは滓の上表面の起伏があり大きく上に盛り上がっているもの(上面の形状が「中盛」としたもの)、椀型滓dの上表面の起伏が激しく認められるもの(上面の形状が「凸凹」としたもの)である。

**流動滓**……一般には流動状の鉄滓で製鉄炉や鍛冶炉の内外で生成された鉄滓をいうが、今回も椀型滓と再結合滓以外の鉄滓を全て含んだものを指しており、椀型滓よりも小型のものが多い。ガラス質の状態から、流動滓はAとBに区分できる。

**流動滓A**……重く色調が黒～黒褐色のガラス質を包含し、比較的気泡が小さく少ないもの。観察表のガラス質の項目で0または1としたものがこれに該当する。

**流動滓B**……軽く色調が灰色がかった黒～暗灰色のガラス質を包含し、比較的気泡が大きく多いもの。ガラス質の項目で2としたものがこれに該当する。

**再結合滓**……鉄滓や鉄製品、半製品、小石粒などが熱の他に水分や土圧などで再び付着した鉄滓状のもので、椀型滓や流動滓のように構造的な形態をしていない。

**鉄塊系遺物**……いわゆる鉄塊で、表面観察では鉄分の錆膨れによる表面のひび割れが生じているのが特徴である。着磁度の高いものが多く、金属反応が認められるものもある。

**含鉄遺物**……鉄製品や半製品の錆膨れした鉄滓状のもので、そのほとんどが刀子や釘、鉄片などが錆膨れしたものである。形状から棒状、扁平、礫状に区分した。着磁度は比較的弱く、金属反応は認められないものが多い。

## 3 荊安賀遺跡の鉄資料の組成

荊安賀遺跡では776点の金属関連資料が出土しており、これらの出土分布状況を検討すると、便宜上14ヶ所の分布のまとまりを見出すことができる(図1)。しかし、多くの調査区で一定量の金属関連資料が出土しているため、今回提示した分布のまとまりは結果として調査区単位になっているからいがある。このため、厳密な意味で「資料群」と評価することは難しいまとまりではあるが、それでもなお金属関連資料組成が異なっているので、暫定的にこのまとまりを認め分析を進めることとしたい(表1)。

### (1) 96F区北群

調査区の北西端に広がる分布域で、全てSD15とSD16から出土した資料群である。遺構の時期からこれらの資料群は前者が16～17C、後者が17～18Cに属すると推測される。鉄資料の内訳は椀型滓と流動滓Bが各々半数づつ存在する。

### (2) 96F区南群

96F区の南半部に広がる小規模な分布域で、SD02やSD05などから出土した資料群である。遺構の時期からこれらの資料群は18～19Cに属すると推測される。内訳は椀型滓、流動滓A、炉壁などが少量存在する程度である。

### (3) 97 A区群

97 A区の南端に分布する資料群で、鉄資料はS D 02とS D 07などから出土している。遺構の時期からこれらの資料群は17～18Cに属すると推測される。内訳は椀型滓が約22%、流動滓が約9%、含鉄遺物が22%を占め、この他に鉄製品や炉壁等が存在する。流動滓は流動滓Aが1点、流動滓Bが2点と両者が認められる。

### (4) 96 D区北群

96 D区の北半部に分布する少量の鉄資料を96 D区南群と分けて資料群とする。大半の遺物が包含層から出土しており、時期を特定することはできない。内訳は椀型滓が1点、流動滓Bが1点、含鉄遺物が4点などである。

### (5) 96 D区南群

96 D区の南半部に広がる分布域を持つ資料群で、全部で92点の金属関連資料が存在する。戦国時代から江戸時代の溝などから出土する資料もあり、この時期に属するものと考えられる。内訳は椀型滓が約41%、流動滓が約7%、含鉄遺物が約32%、炉壁等が約8%を占めている。流動滓は流動滓Aと流動滓Bが各々半数認められる。

### (6) 97 B区群

97 B区の比較的南寄りの部分に分布する資料群である。鉄資料は様々な遺構から出土しており、これらの資料群の時期を特定することはできない。内訳は椀型滓が約23%、流動滓Bが約2%、含鉄遺物が約29%を占め、この他に炉壁等がある。

### (7) 96 B C区北群

96 B C区では調査区全体に金属関連資料が広がっているが、その中でも北半と南半に分布の偏りがみられる。ここでは北群と南群にわけて考えてみる。96 B C区北群は、椀型滓等が井戸から出土していることから、18～19Cに属すると推測される。全部で92点の金属関連資料が存在し、その内訳は椀型滓が約38%、流動滓が約9%、含鉄遺物が約20%を占め、この他に炉壁等がある。流動滓は流動滓Aが5点、流動滓Bが3点となっている。

### (8) 96 B C区南群

96 B C区の南半に広がる資料群で、多くの資料がS D 16、S D 17、S D 22

等から出土した。時期は18～19Cに属すると推測される。内訳は椀型滓が約34%、流動滓が約9%、含鉄遺物が約28%を占め、この他に炉壁等がある。流動滓は流動滓Aが3点、流動滓Bが1点となっている。

### (9) 96 A区群

調査区の南西端に所在する96 A区に分布する資料群である。半数がS D 01から出土しており、これらの資料群は16C～17Cに属すると推測される。内訳は椀型滓が6点、流動滓Bが2点、銅製品が1点存在する。

### (10) 96 L区群

調査区の北東端に所在する96 L区の北半部に分布する資料群である。鉄資料の内訳は椀型滓が約35%、流動滓が約31%、含鉄遺物が約15%を占め、この他に炉壁等がある。流動滓は流動滓Aと流動滓Bが各々半数認められる。

### (11) 97 D区群

97 D区の南端に広がる資料群で、南接する巨大な資料群の97 C区群に関連するものかも知れない。内訳は椀型滓が約48%、流動滓が約12%、含鉄遺物が約10%を占め、この他に炉壁等がある。流動滓は流動滓Aが1点、流動滓Bが3点となっている。

### (12) 97 C区群

97 C区全体から96 H区北端まで分布する資料群を一括して97 C区群として取り扱う。S D 08から比較的多量の資料が出土しており、これらの資料群は17～18Cに属すると推測される。金属関連資料は全部で264点と荊安賀遺跡の中では最も大きな規模の資料群である。内訳は椀型滓が145点(約55%)と大量に存在し、以下流動滓が約7%、含鉄遺物が約21%、炉壁が約6%を占めている。流動滓は流動滓Aが7点、流動滓Bが11点となっている。

### (13) 96 H区群

96 H区の南半部に広がる分布域で、S X 02等の遺構から出土した資料群である。遺構の時期からこれらの資料群は16～17Cに属すると推測される。内訳は椀型滓が約27%、流動滓が約45%、含鉄遺物が約9%等があり、流動滓は流動滓Aが2点、流動滓Bが23点と、流動滓Bが非常に多く認められる

資料群である。

### (14) 96 G区群

調査区の南東端に所在する調査区全体に分布する資料群で、多くの資料がN R 01から出土したものである。遺構の時期からこれらの資料群は16～17Cに属すると推測される。内訳は椀型滓が約55%、流動滓が約18%、含鉄遺物が約9%を占め、流動滓は流動滓Aと流動滓Bが各々半数認められる。

## 4 考察

### (1) 椀型滓の密度について

かつて検討した朝日西遺跡の分析(鈴木・蔭山2000)では、密度が椀型滓の分類に有効な指標になる可能性を指摘した。今回も最初に、荊安賀遺跡の資料について、椀型滓の密度を検討する。

まず、上表面の形状による椀型滓の分類と密度の対応関係について検討する。上面の形状が「平」の椀型滓aは、密度が2.51～3.00g/ccの範囲で最も多く分布し、次いで3.01～3.50g/ccの範囲が多くなっている。上面の形状が「平盛」の椀型滓b、および滓上面の形状が「中盛」の椀型滓cは、出土点数が少ないものの、密度は2.51～3.50g/ccの範囲で取まっている。これらに対して、上面の形状が「凸凹」となる椀型滓dは、密度が2.51～3.00g/ccの範囲で最も多く分布し、次いで2.01～2.50g/ccの範囲、1.51～2.00g/ccの範囲の順で多くなっている。椀型滓aには密度が2.00g/cc以下のものが全く存在しないことから、少なくとも椀型滓aと椀型滓dでは、密度の分布が明らかに異なっていることがわかる。

このことから、上表面の形状と密度にはある程度の相関関係があることが追認されよう。つまり、1)色調が黒～黒褐色のガラス質を包含し、比較的気泡が小さく少なく、上表面の形状が比較的平坦な椀型滓は、密度が重くなり、一方、2)色調が灰色がかった黒～暗灰色のガラス質を包含し、比較的気泡が大きく多く、上表面の形状が比較的凸凹した椀型滓は、密度が軽くなるとまとめることができる。

鉄資料組成	96F区北群	96F区南群	97A区群	96D区北群	96D区南群	97B区群	96BC区北群	96BC区南群	96A区群	96L区群	97D区群	97C区群	96H区群	96G区群	その他	合計
椀型鉄滓	8	2	7	1	38	12	35	16	6	9	20	145	15	12	6	332
流動鉄滓A	0	1	1	0	3	0	5	3	0	4	1	7	2	2	1	30
流動鉄滓B	8	0	2	1	3	1	3	1	2	4	4	11	23	3	1	67
棒状含鉄遺物	0	0	5	3	19	10	10	13	0	4	2	33	3	1	1	104
扁平含鉄遺物	0	0	2	1	7	4	2	0	0	0	2	14	2	1	0	35
礫状含鉄遺物	0	0	0	0	3	1	6	0	0	0	0	9	0	0	0	19
鉄製品等	0	0	10	0	9	20	12	7	0	1	3	19	8	1	0	90
炉壁等	0	1	4	0	7	1	11	4	0	2	2	17	1	2	0	52
その他	0	2	1	1	3	3	8	3	1	2	8	9	1	3	2	47
合計	16	6	32	7	92	52	92	47	9	26	42	264	55	25	11	776
椀型鉄滓 密度組成	96F区北群	96F区南群	97A区群	96D区北群	96D区南群	97B区群	96BC区北群	96BC区南群	96A区群	96L区群	97D区群	97C区群	96H区群	96G区群	その他	合計
0.51～1.00							1									1
1.01～1.50					1			1	1			2		1		6
1.51～2.00	3				6	1	2	1		1		17		3	1	35
2.01～2.50	4	1			8	3	10	5	1	2	6	47	4	2	2	95
2.51～3.00			4	1	20	7	13	5	2	5	12	62	8	3	3	145
3.01～3.50	1		3		3		6	2	2	1	2	12	3	1		36
3.51～4.00		1				1	3	2				4		1		12
4.01～4.50												1		1		2
合計	8	2	7	1	38	12	35	16	6	9	20	145	15	12	6	332
群の分類	2B	1B	3	2A	3	2A	3	1B	2B	3	2B	3	2B	3		

表1 各群の鉄資料組成表

ところで、今回の資料群の中で、鍛冶工程を特定するに注目すべき遺物が存在する。それは滓の中に鍛造剥片をかみ込むものあるいは表面に鍛造剥片が付着する椀型滓である(例えば第72図3など)。こうした椀型滓を含む資料群では、鍛錬鍛冶工程を含む鉄器生産工程が行われていたことが推定されよう。鍛造剥片が付着する椀型滓は、荊安賀遺跡では全部で7点確認されており、96D区南群で2点、96BC区北群で1点、97C区群で4点存在する。このうち、上面の形状が判明する5点全部が椀型滓aに属しており、表面の起伏が少ないものに多く認められるようである。鍛造剥片が付着する椀型滓と密度との関係は、1点のみ密度が2.00g/cc以下となるものがある他は2.51～3.50g/ccの範囲で収まっている。

以上の検討から、密度が重く表面の形状が比較的平坦な椀型滓は、鍛錬鍛

	椀型滓a	椀型滓b	椀型滓c	椀型滓d
0.51～1.00				2
1.01～1.50				
1.51～2.00				12
2.01～2.50	9			17
2.51～3.00	36	2	1	27
3.01～3.50	15		1	5
3.51～4.00	2			1
4.01～4.50				
合計	62	2	2	64

表2 椀型滓の密度分布

	椀型滓a	椀型滓b	椀型滓c	椀型滓d
96F区北群				3
96F区南群				
97A区群	3			1
96D区北群				
96D区南群	10	1	1	8
97B区群	3			2
96BC区北群	6	1		8
96BC区南群	3			3
96A区群	2			1
96L区群	1			1
97D区群	1			9
97C区群	28			26
96H区群	3		1	1
96G区群	2			
その他				1
合計	62	2	2	64

表3 各群の椀型滓組成表

冶工程を含む鉄器生産工程が行われていたことが推定されよう。門間沼遺跡で予察した傾向(蔭山・鈴木1999)は蓋然性が高くなってきたと言えよう。

## (2) 鉄資料組成の分類

次に、荏安賀遺跡の各群の鉄資料組成を類型化してみる。これまでに流動滓や含鉄遺物の量比に着目して大きく4類に分類してきたが、ここでもこの視点をそのまま採用する。

**1類**……流動滓Aのみ、または流動滓Aの方が流動滓Bよりも凌駕するもの。

**1A類**……金属関連資料における含鉄遺物、鉄製品、鉄塊系遺物、鉄片の合計(以下「含鉄遺物など」と略称する)の割合が5割を超えるもの。今回はこれに該当する資料群は存在しなかった。

**1B類**……金属関連資料における含鉄遺物などの割合が5割以下となるもの。96F区南群と96BC区南群が該当する。96F区南群は全体量が少ないため詳細は不明である。96BC区南群は密度が3.00g/cc以上になる椀型滓が比較的多く、鍛錬鍛冶工程を含む鉄器生産工程を想定してもよいかも知れない。

**2類**……流動滓Bのみ、または流動滓Bの方が流動滓Aよりも凌駕するもの。

**2A類**……金属関連資料における含鉄遺物などの割合が5割を超えるもの。96D区北群、97B区群がこれに該当する。これまでは流動滓Bが主体となる資料群で含鉄遺物などの割合が多くなるものは存在しなかった。ここでは、96D区北群は資料群の規模が小さいこと、97B区群は鉄製品が多く他の要因が大きく影響されたと思われることから、例外的なものとして捉えておきたい。

**2B類**……金属関連資料における含鉄遺物などの割合が5割以下となるもの。96F区北群、96A区群、97D区群、96H区群が該当する。他の群と比べて椀型滓の密度分布が特に小さい方に片寄るといふ顕著な傾向を指摘することはできないが、密度が3.00g/cc以上になる椀型滓は少ない傾向を読み取ることができる。従って、従来の理

解のとおり、鍛錬ではない精錬鍛冶に伴うものの可能性を考えておきたい。

**3類**……流動滓Aと流動滓Bがほぼ同数となるもの。97A区群、96D区南群、96BC区北群、96L区群、97C区群、96G区群が該当する。この中で、96D区南群と96BC区北群と97C区群では鍛造剥片が付着する椀型滓が存在しており、鍛錬鍛冶工程を含む鉄器生産工程が行われていたことが推定される。ただし、荏安賀遺跡の3類の資料群は全て含鉄遺物などの割合が低い点が特徴であり、朝日西遺跡の3類とはその様相が大きく異なっている。

**4類**……流動滓が全くないもの。今回はこれに該当する資料群は存在しなかった。

## 5 まとめ

門間沼遺跡や朝日西遺跡の成果を受けて、荏安賀遺跡の椀型滓の密度を中心とした分析と鉄資料組成の分類を試みた。この結果、椀型滓の上面の形状と密度には対応関係があること、鍛造剥片が付着する椀型滓は密度がやや重く表面の形状が比較的平坦なものであること、このため密度が重く表面の形状が比較的平坦な椀型滓は、鍛錬鍛冶工程を含む鉄器生産工程が行われていたこと、流動滓Aと流動滓Bがほぼ同数となる資料群は鍛錬鍛冶工程を含む鉄器生産工程が行われていたことなどを想定した。

最後に荏安賀遺跡全体としてみると、次の2点の特徴を指摘することができる。それは、椀型滓にはかなり高い確率で白い石が付着していることと、どのような流動滓の組成であっても共通して含鉄遺物などが比較的少ないことである。後者の、含鉄遺物がなぜ少ないのかはさらに検討が必要と思われるが、今回の事例からみて含鉄遺物の割合では鉄器生産工程を推定することが困難な遺跡があるということが言えそうである。もともと含鉄遺物の多くは鉄製品であったと考えられ、その量の多少で生産工程を考察することに若干の無理があったかも知れない。

このため含鉄遺物を生産工程にとつ

て意味のある指標にするためには、含鉄遺物の内容をもっと検討する必要があるだろう。

なお、本稿は資料の調査と検討を鈴木と蔭山が共同で行い、鈴木が原稿を執筆した。

## 引用・参考文献

蔭山誠一・鈴木正貴1999「門間沼遺跡における古代・中世の鉄器生産を考える」『門間沼遺跡』。

鈴木正貴・蔭山誠一2000「愛知県における鉄器生産を考える(4)一朝日西遺跡を中心に」『研究紀要第1号』。

蔭山誠一・鈴木正貴・堀木真美子2001「愛知県における鉄器生産を考える(5)」『研究紀要第2号』。

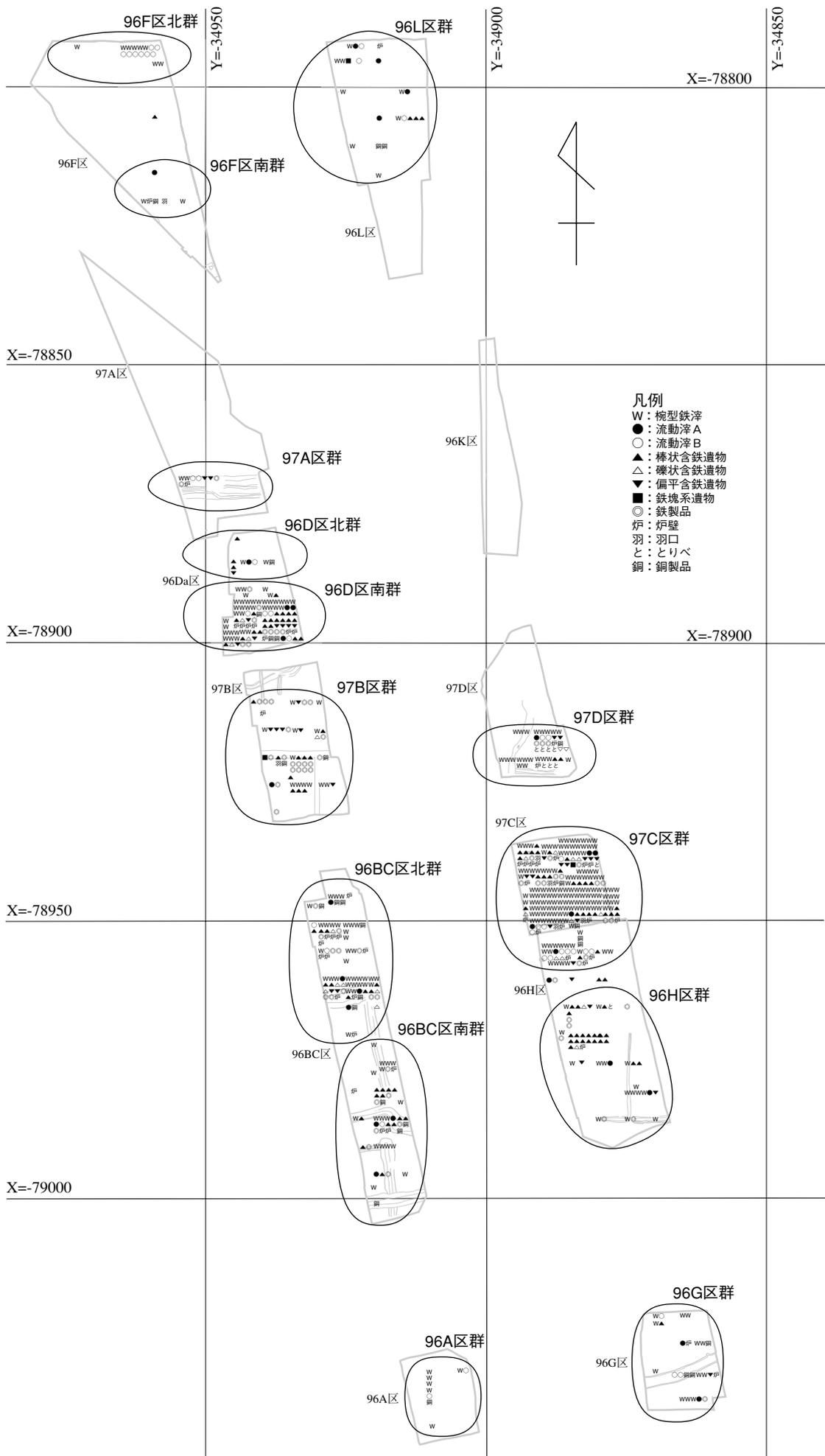
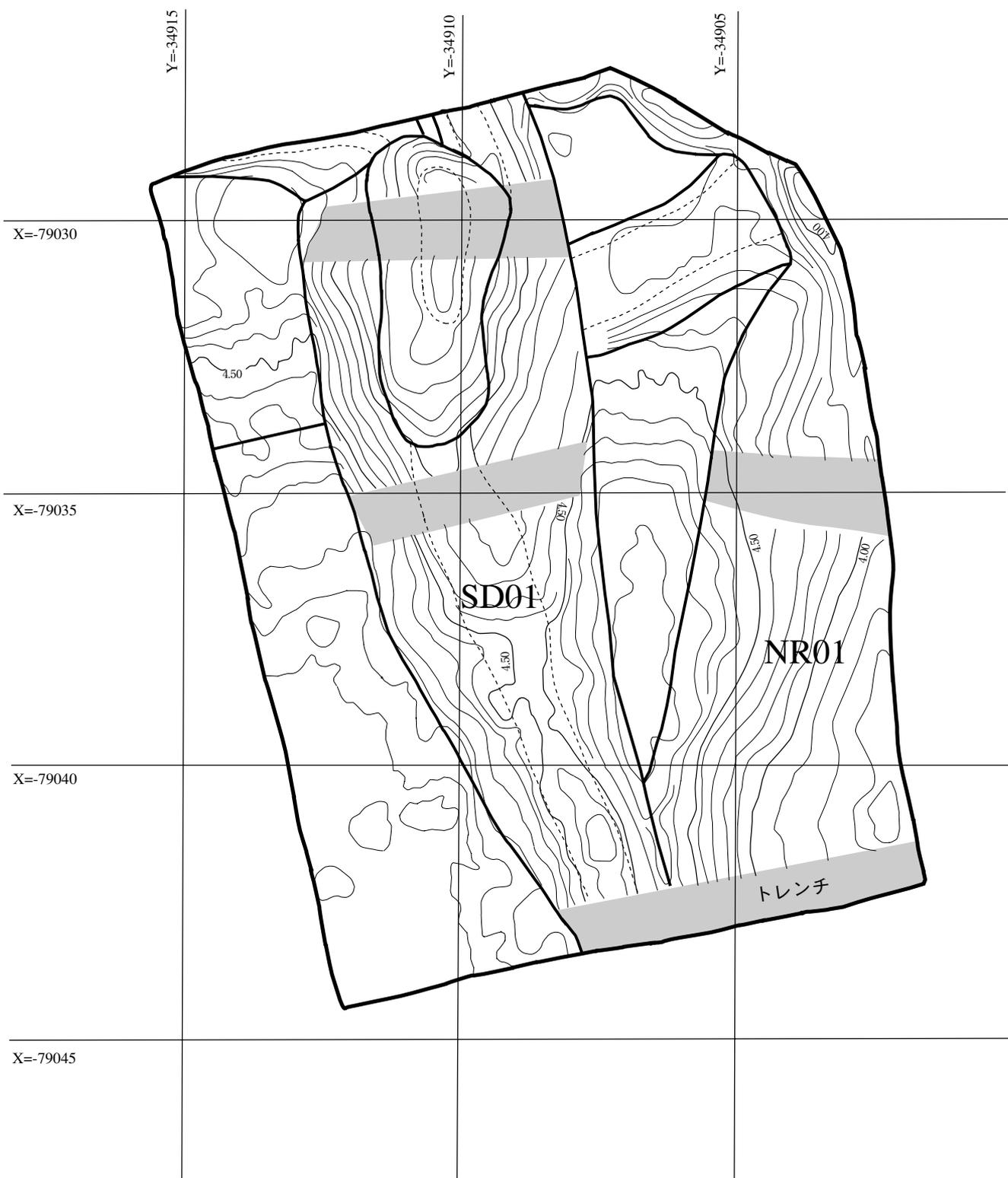
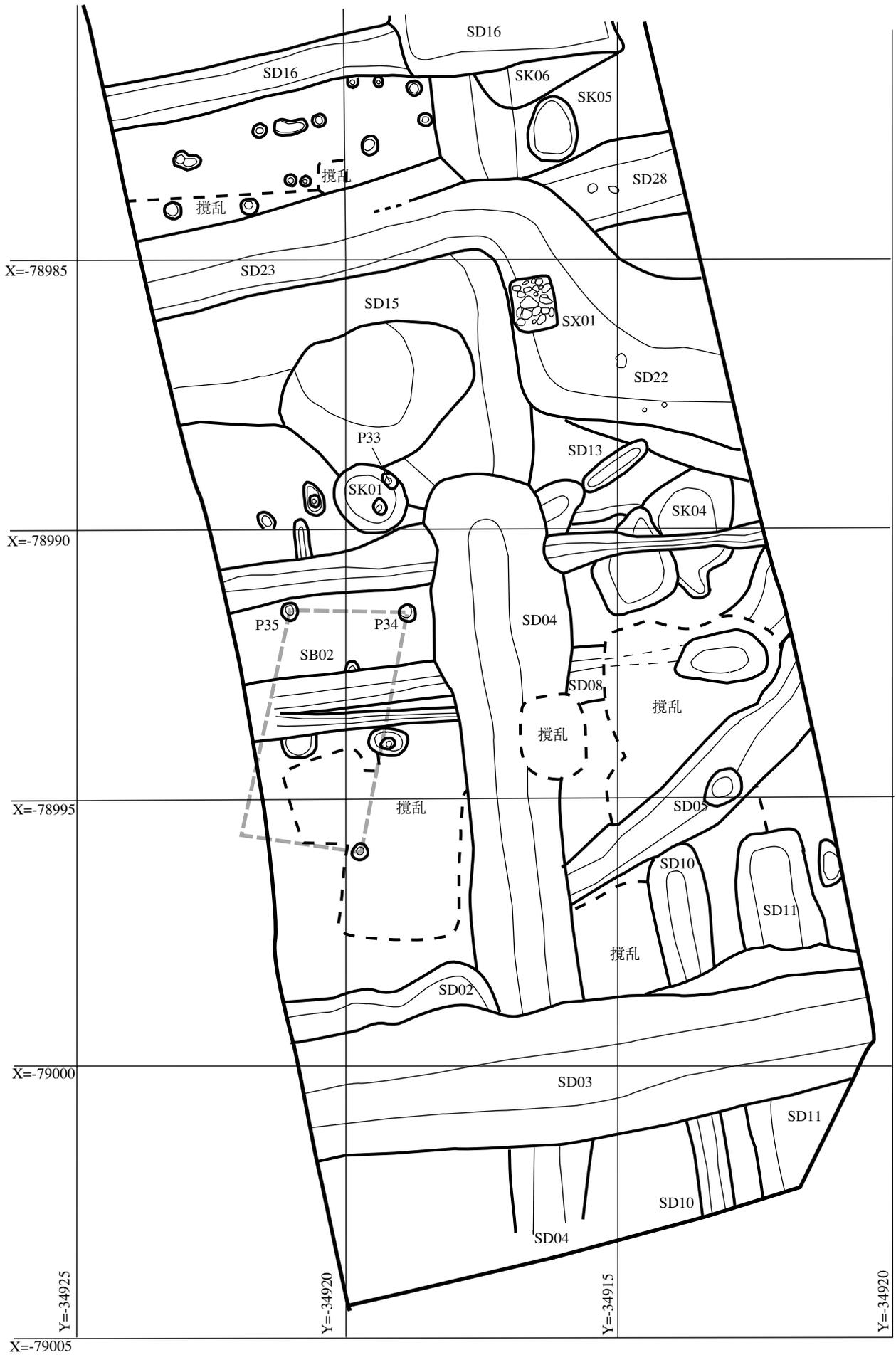


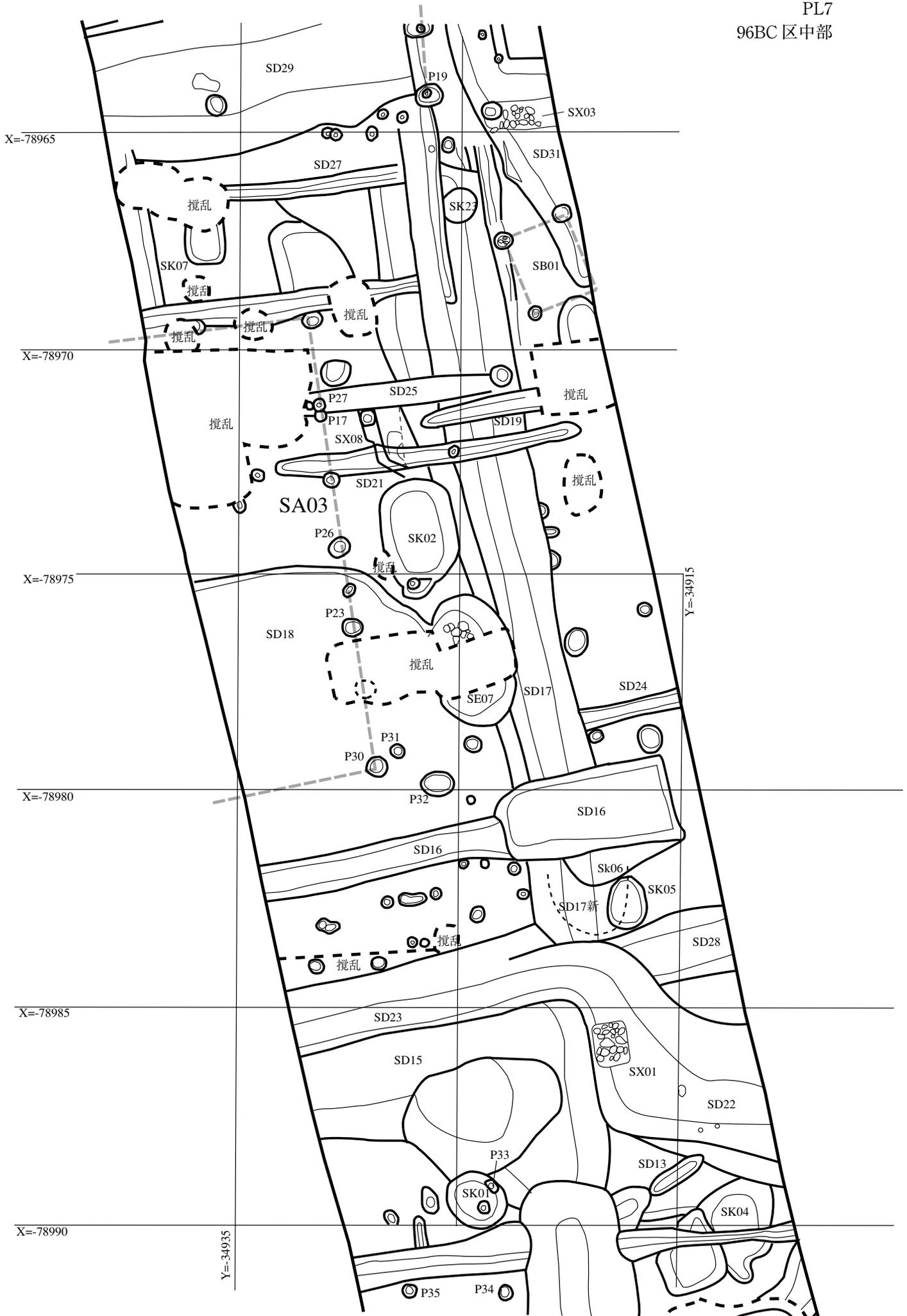
図1 荻安賀遺跡における鉄資料の分布

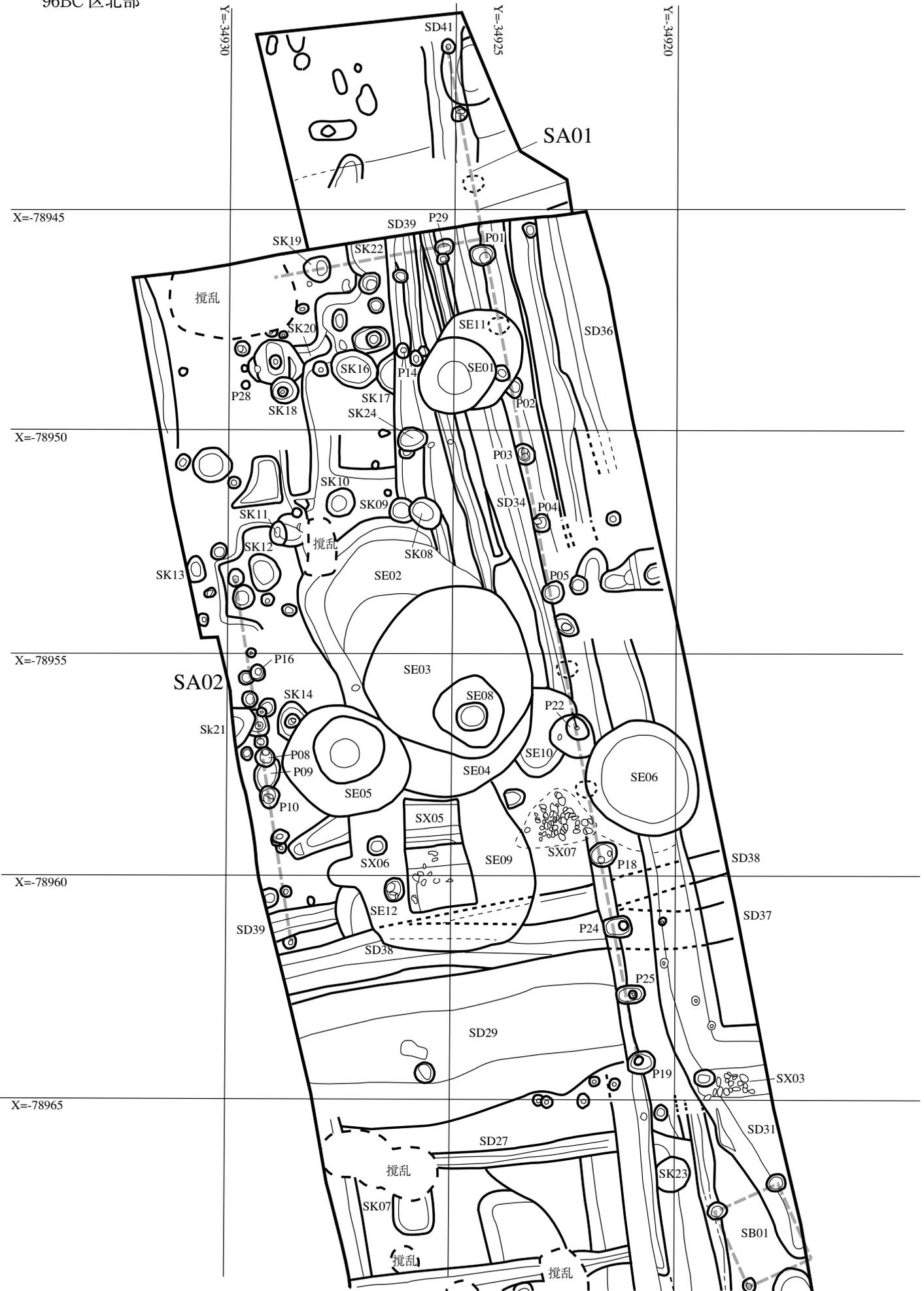
# 図版

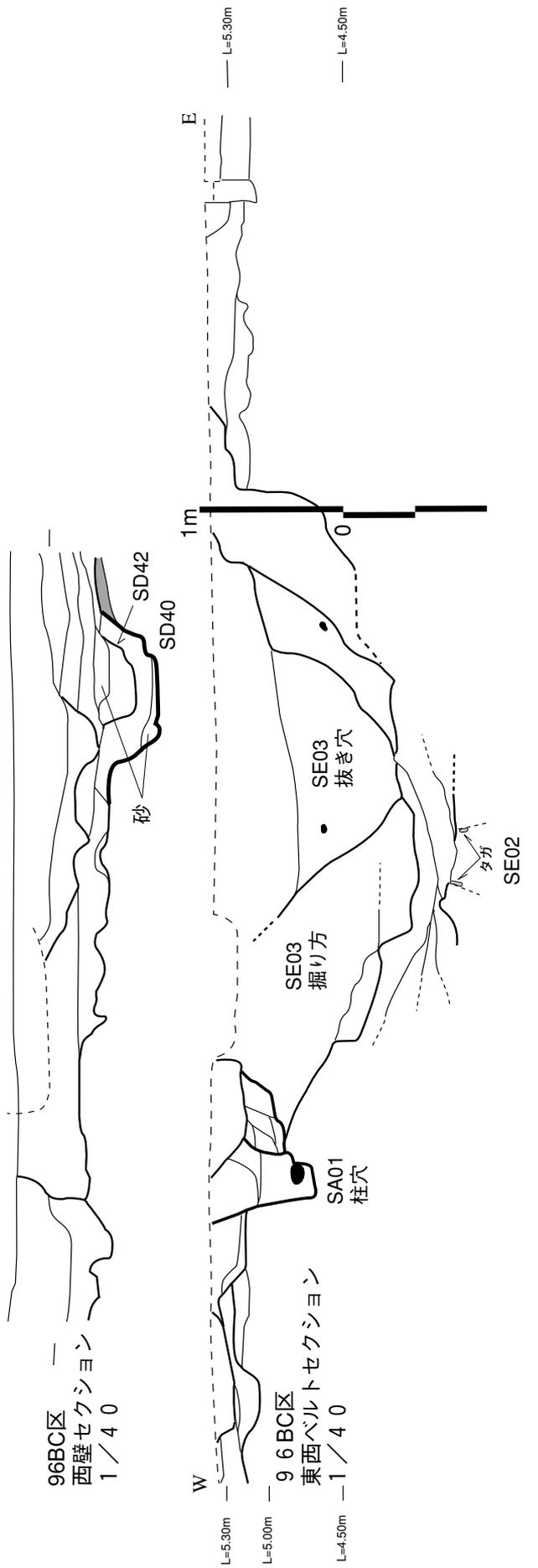
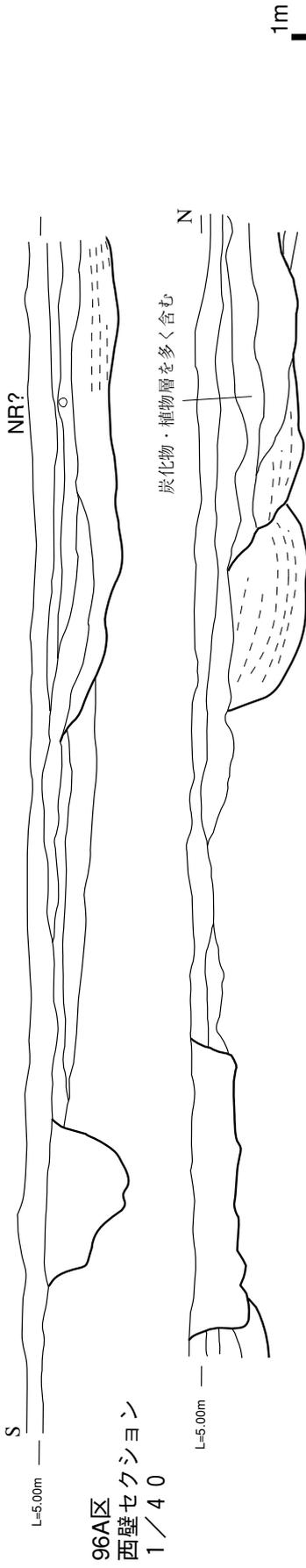






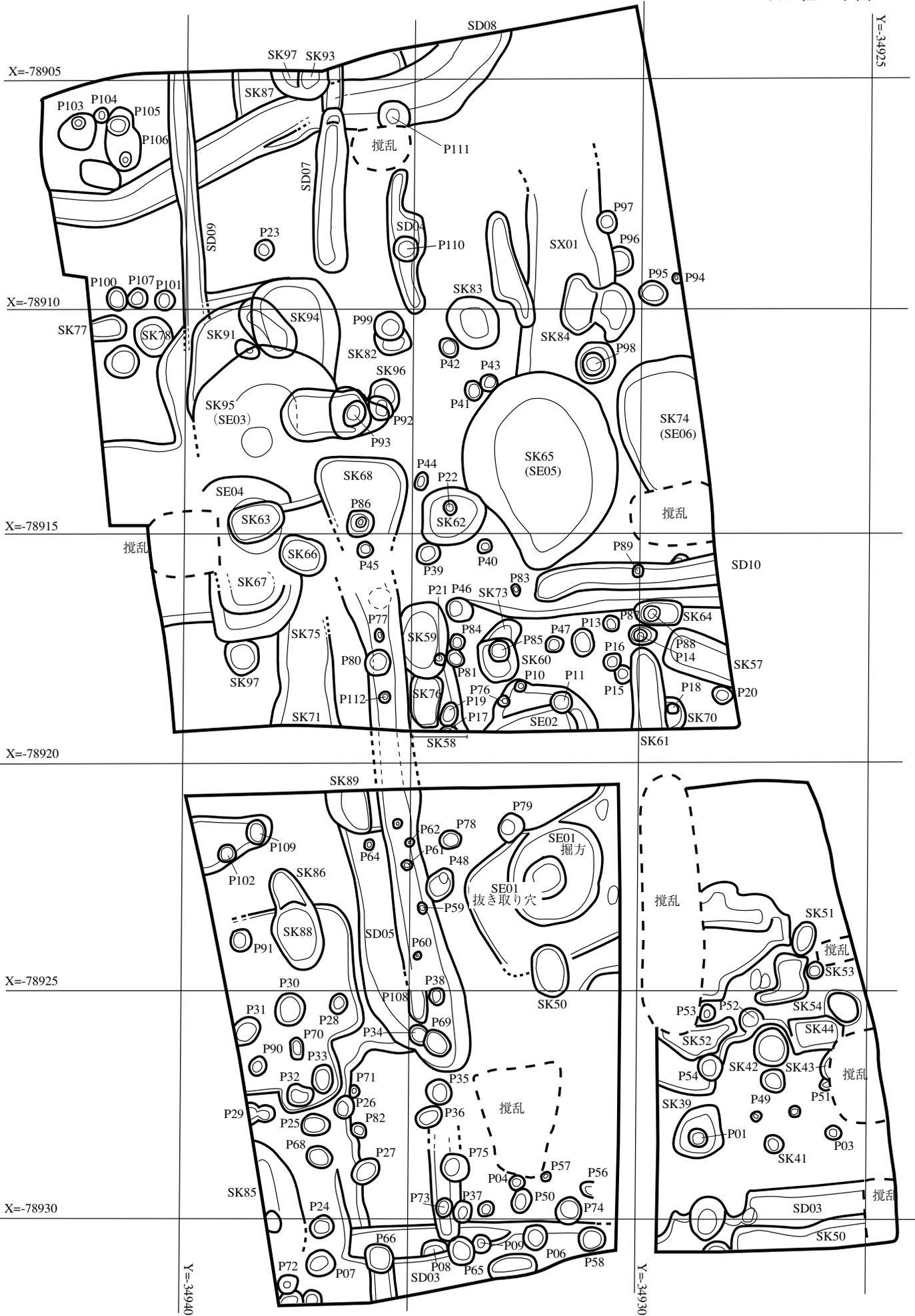




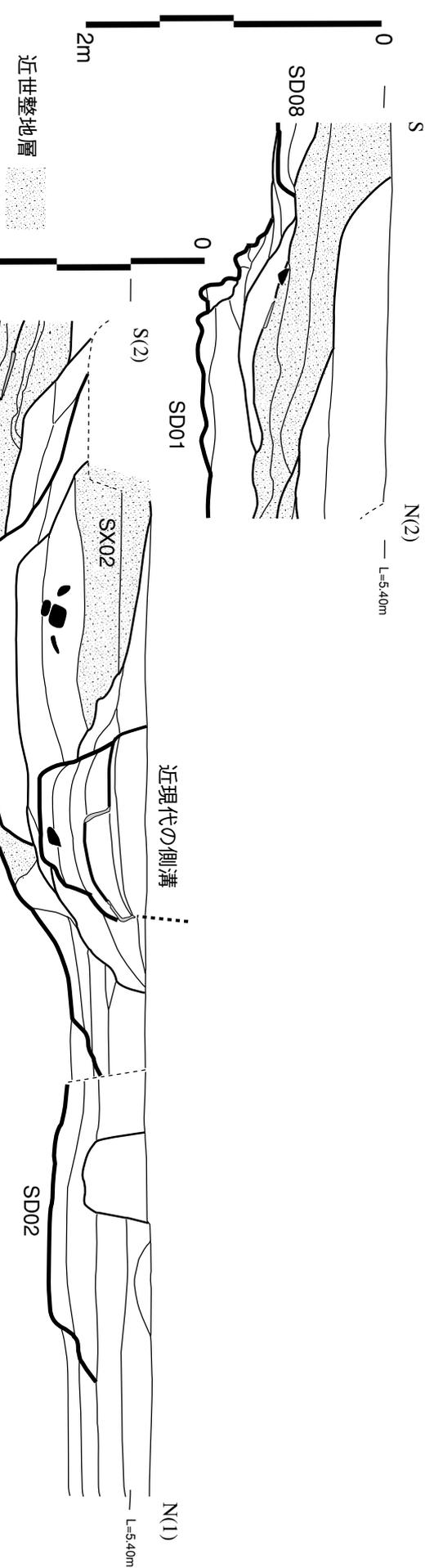
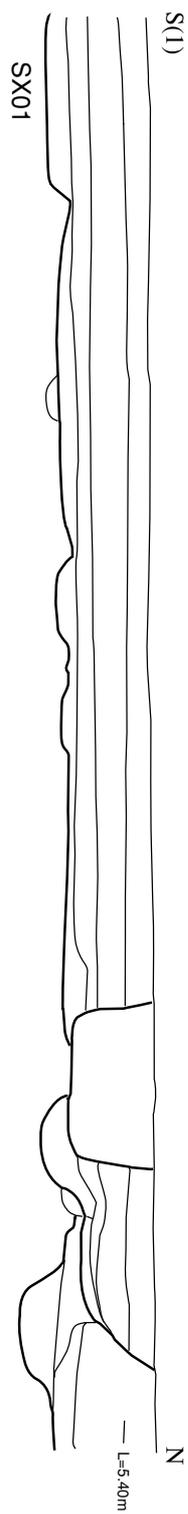


PL10  
97B区 上面

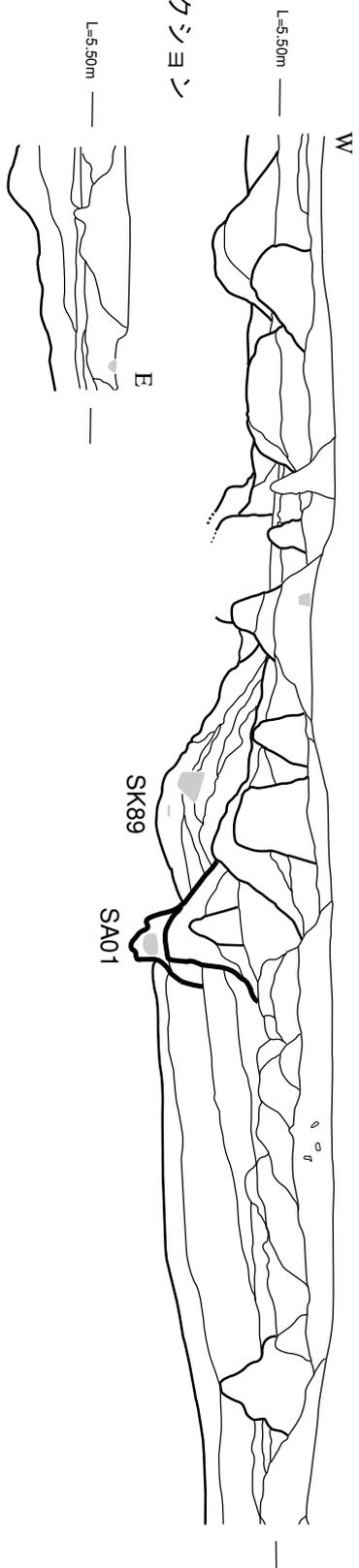


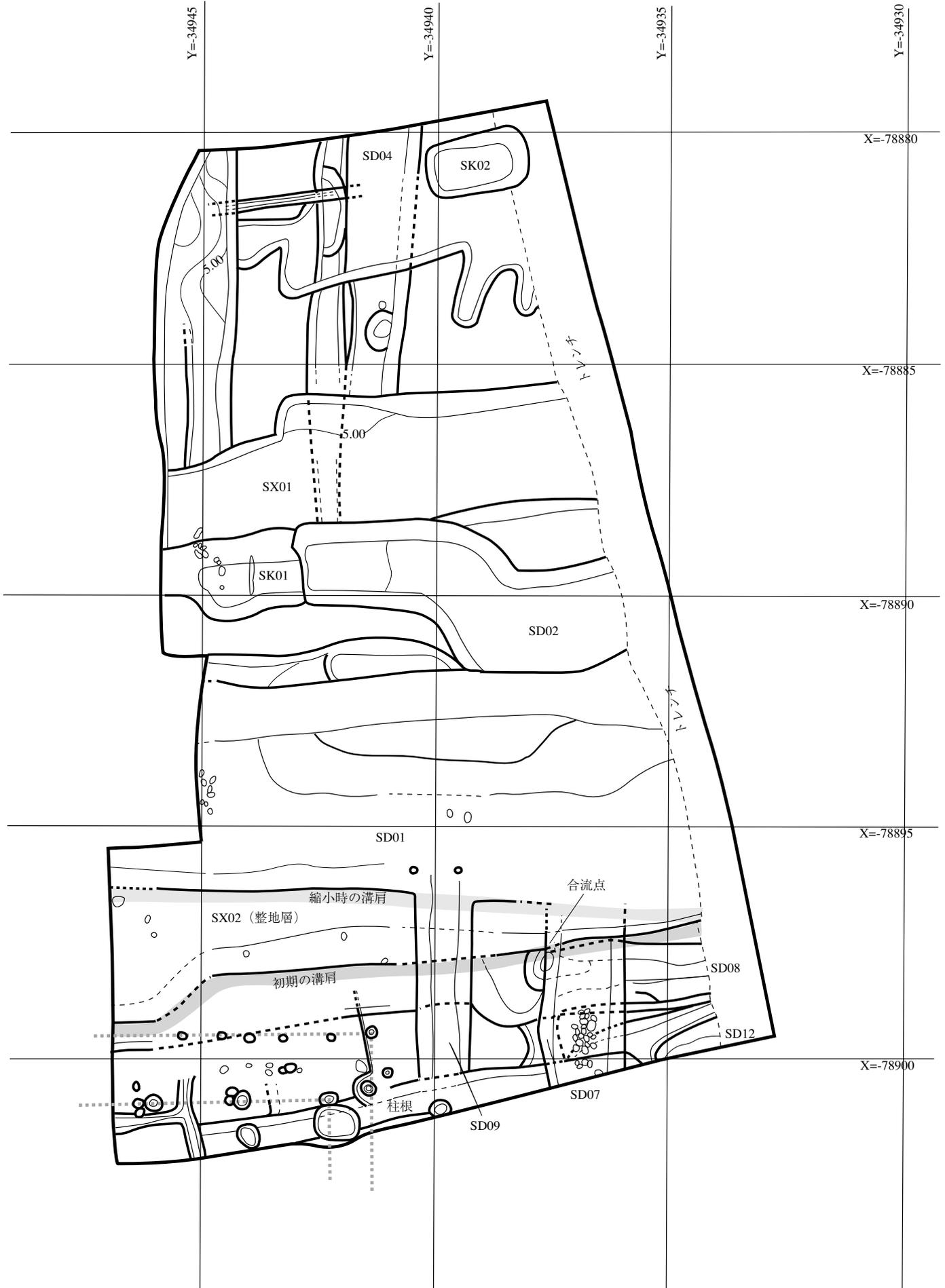


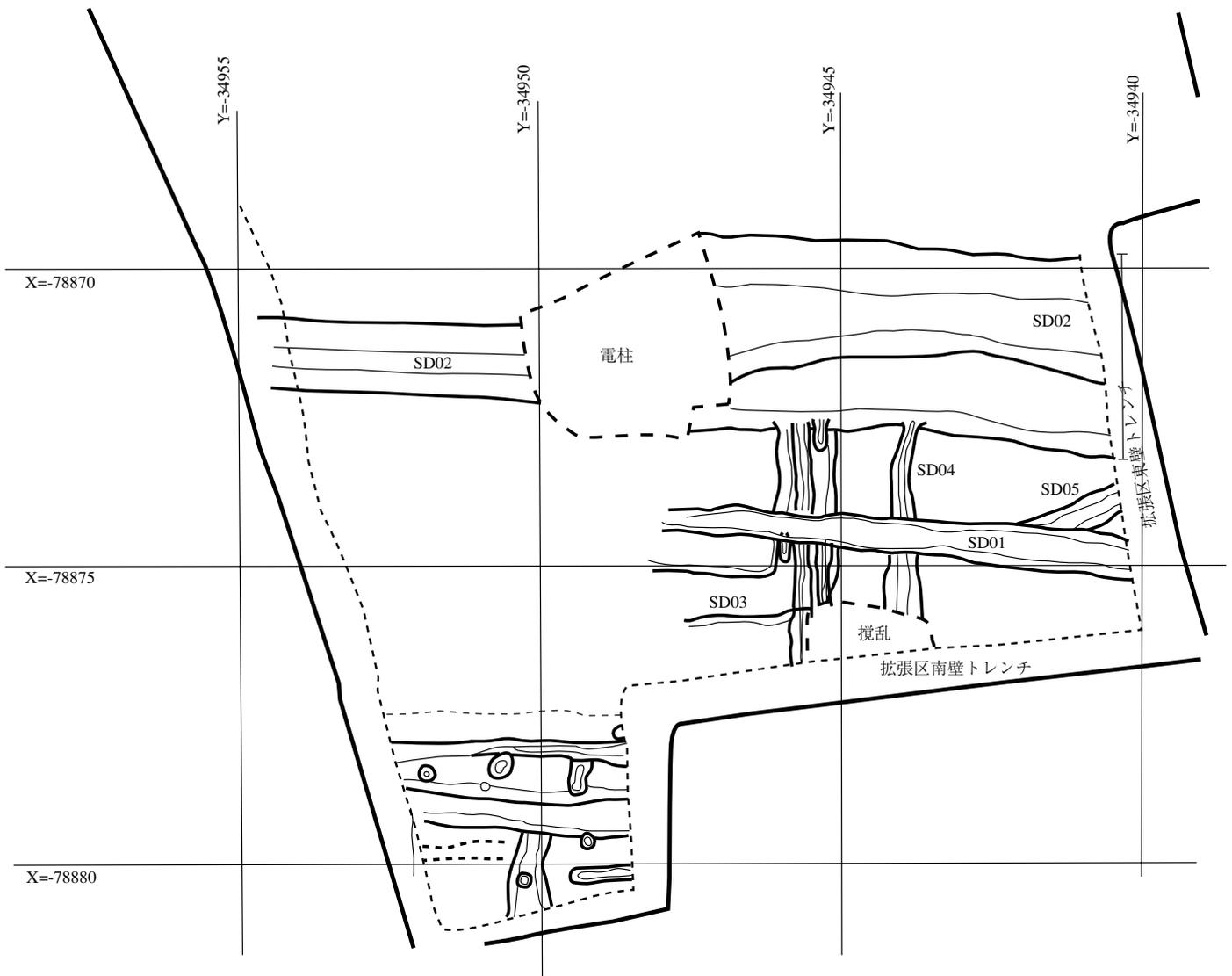
96D区  
西壁セクション(北側)  
1/40

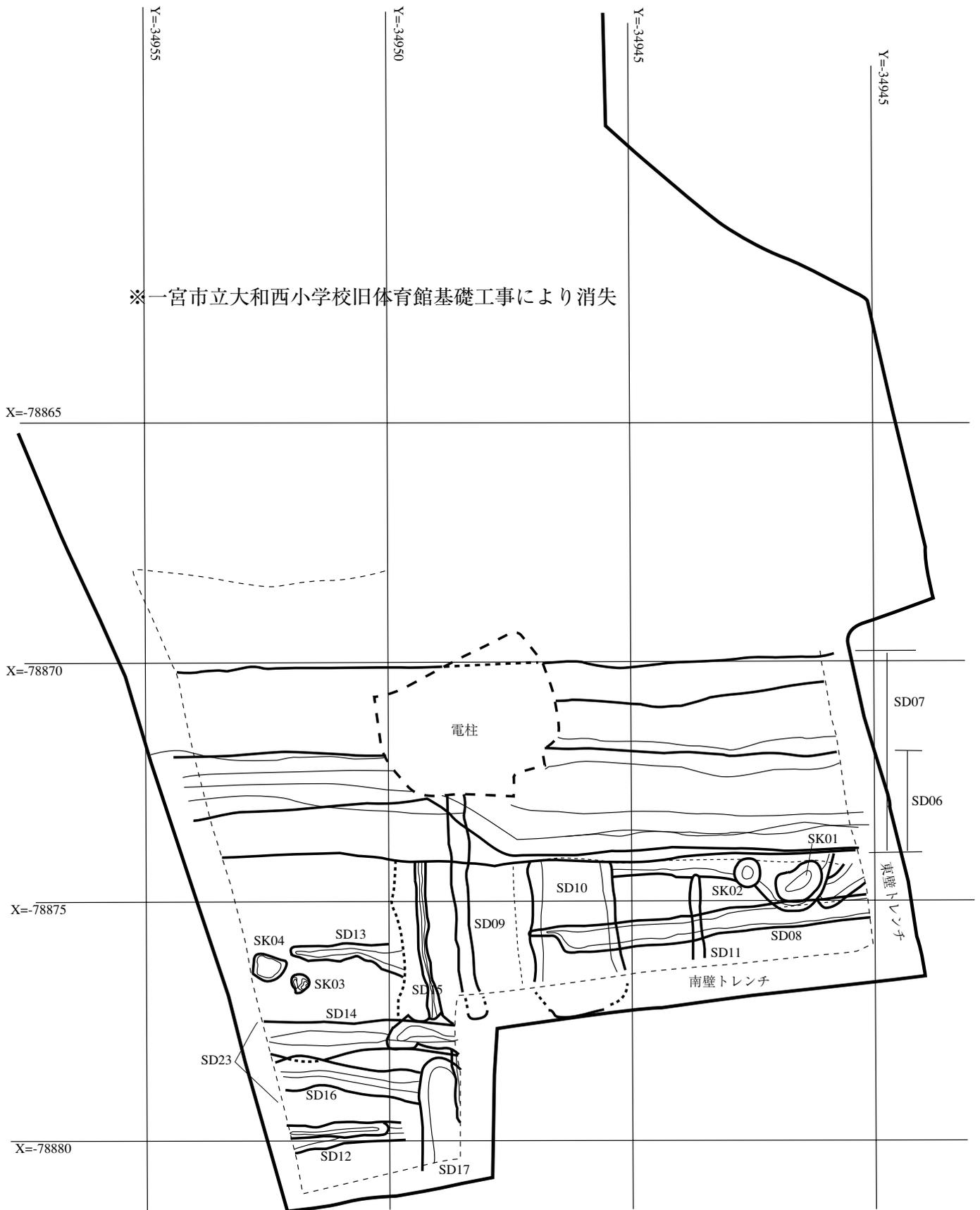


97B区  
東西ベルト南壁セクション  
1/40

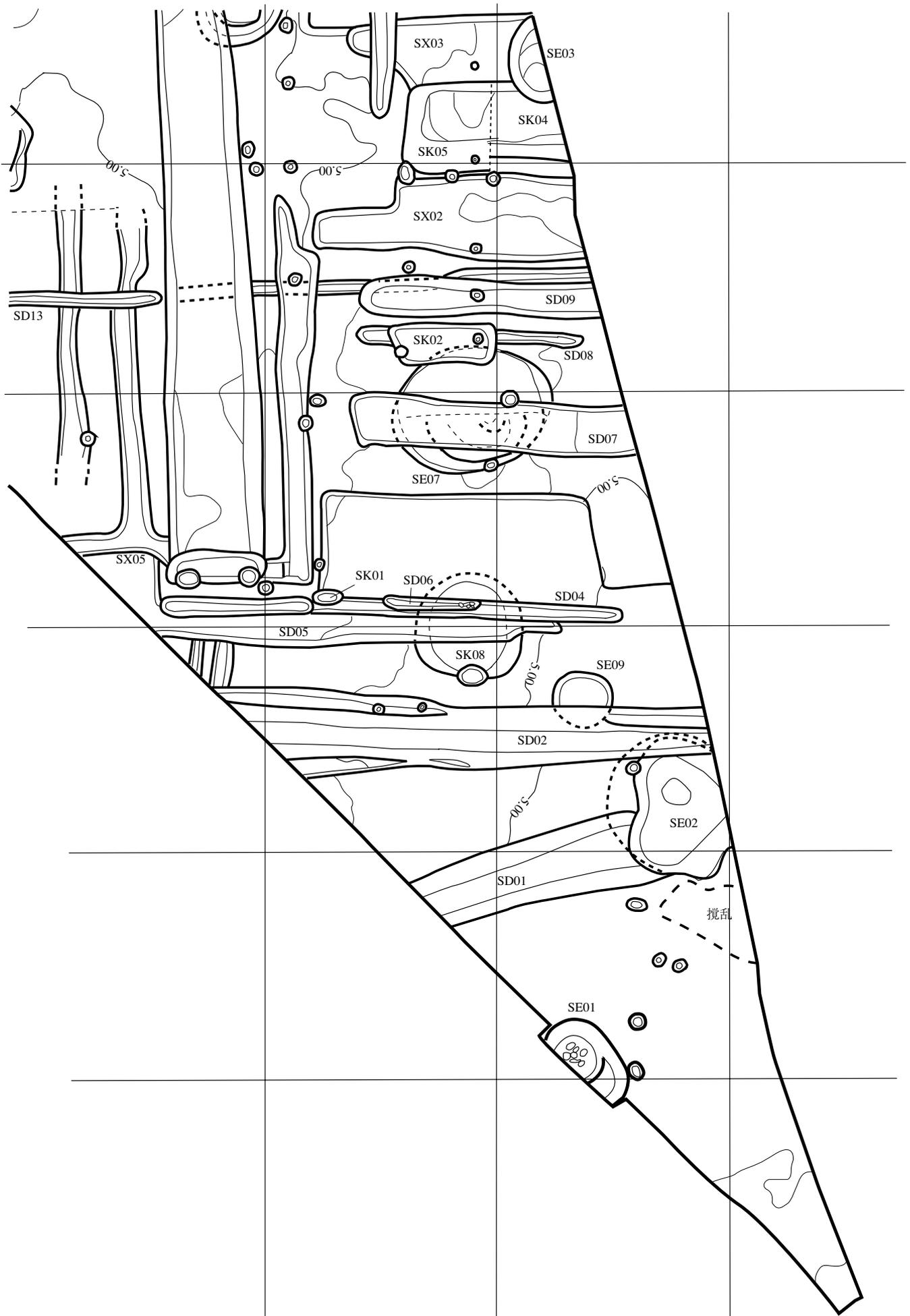




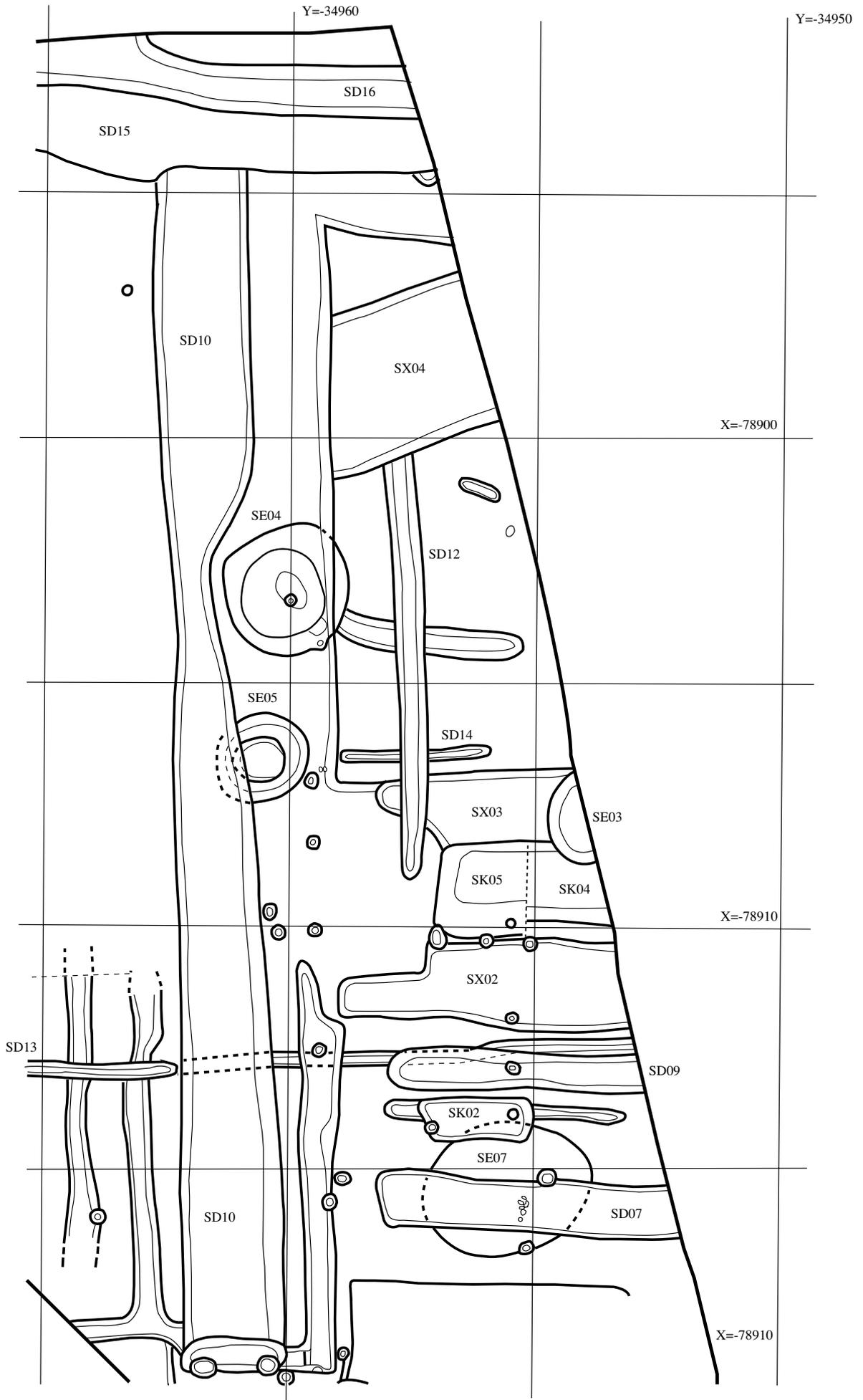




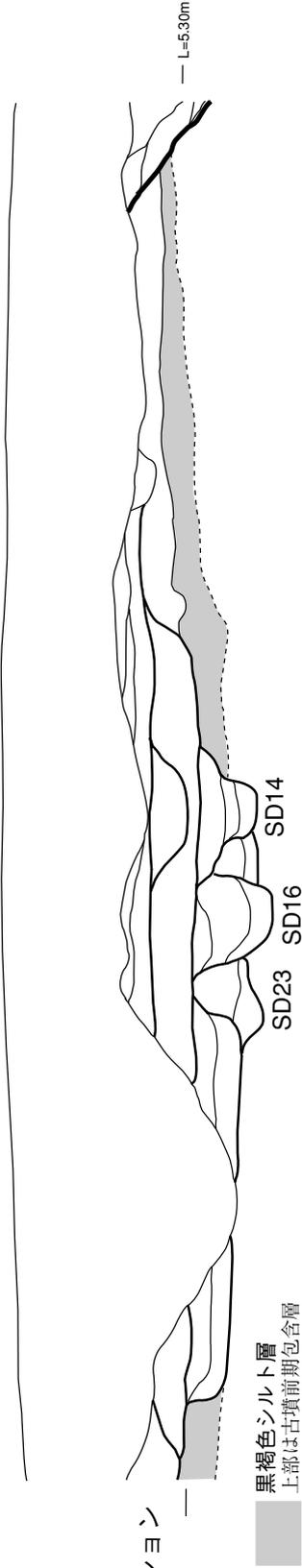
PL16  
96F 区南部





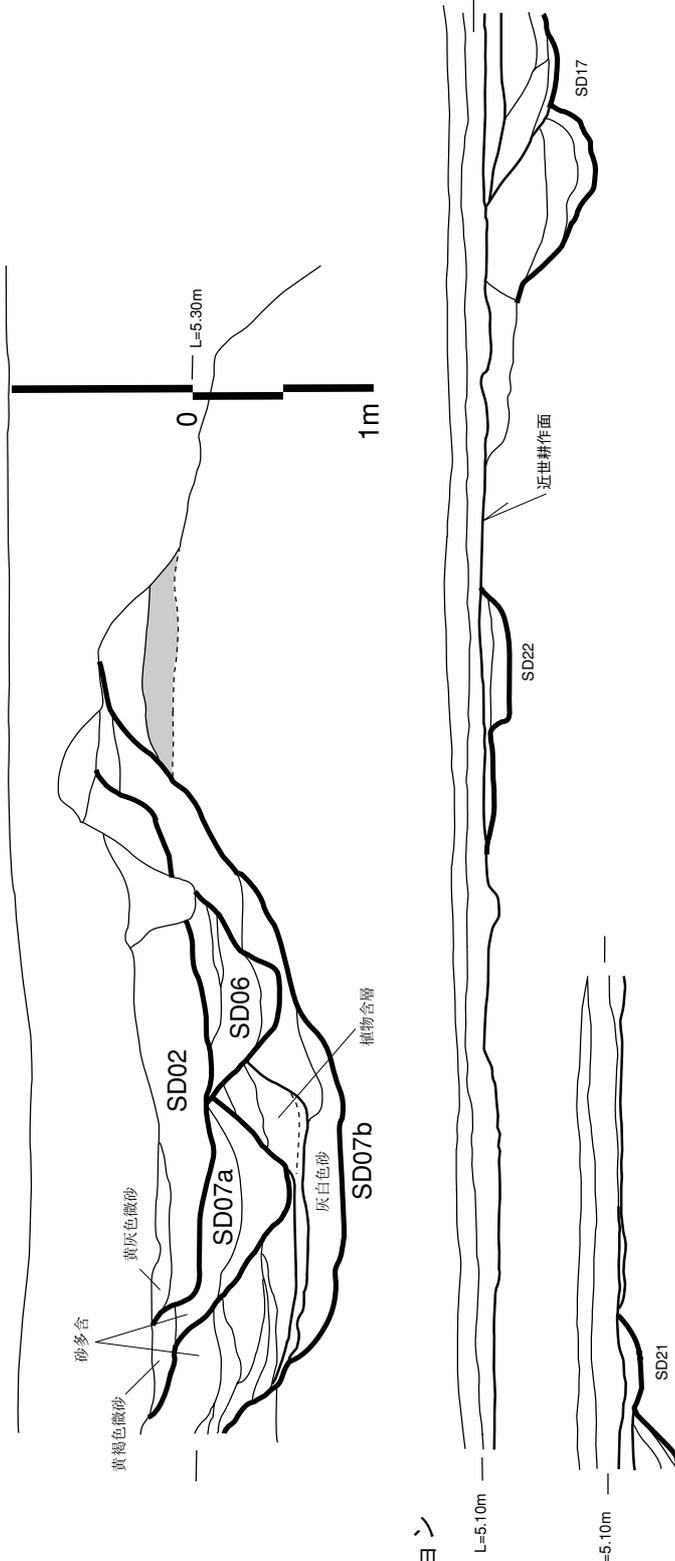


97A区  
西壁セクション  
1 / 40



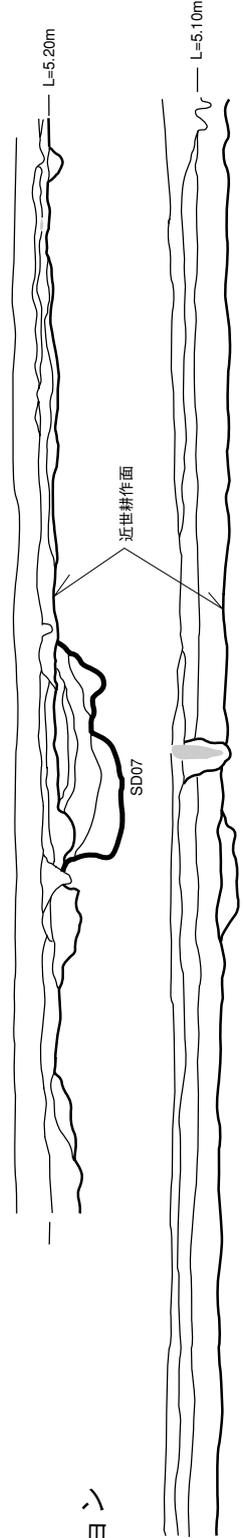
黒褐色シルト層  
上部は古墳前期包合層

96F区  
西壁セクション  
1 / 40



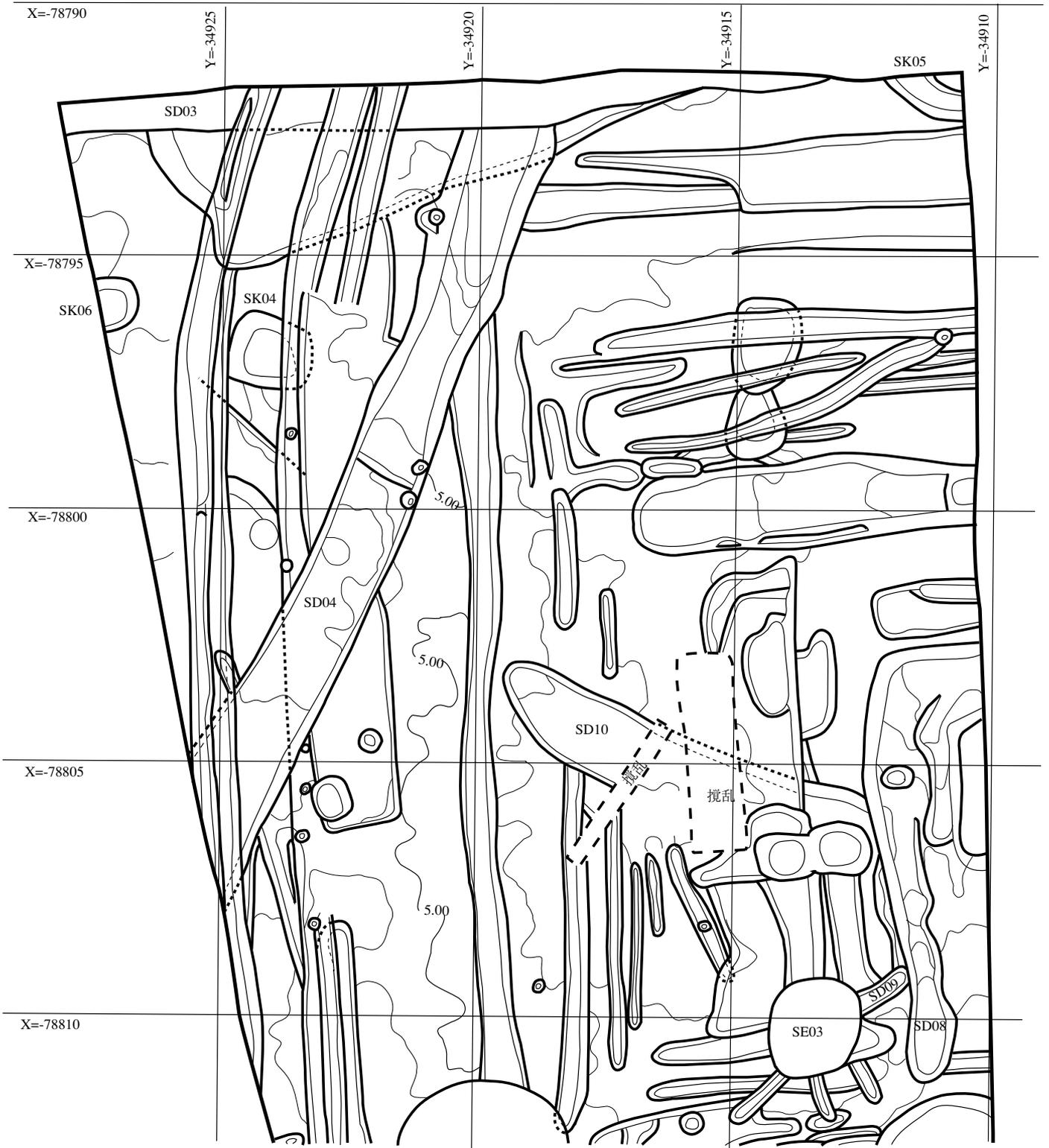
砂多含  
黄褐色微砂  
黄灰色微砂  
灰白色砂  
植物含層

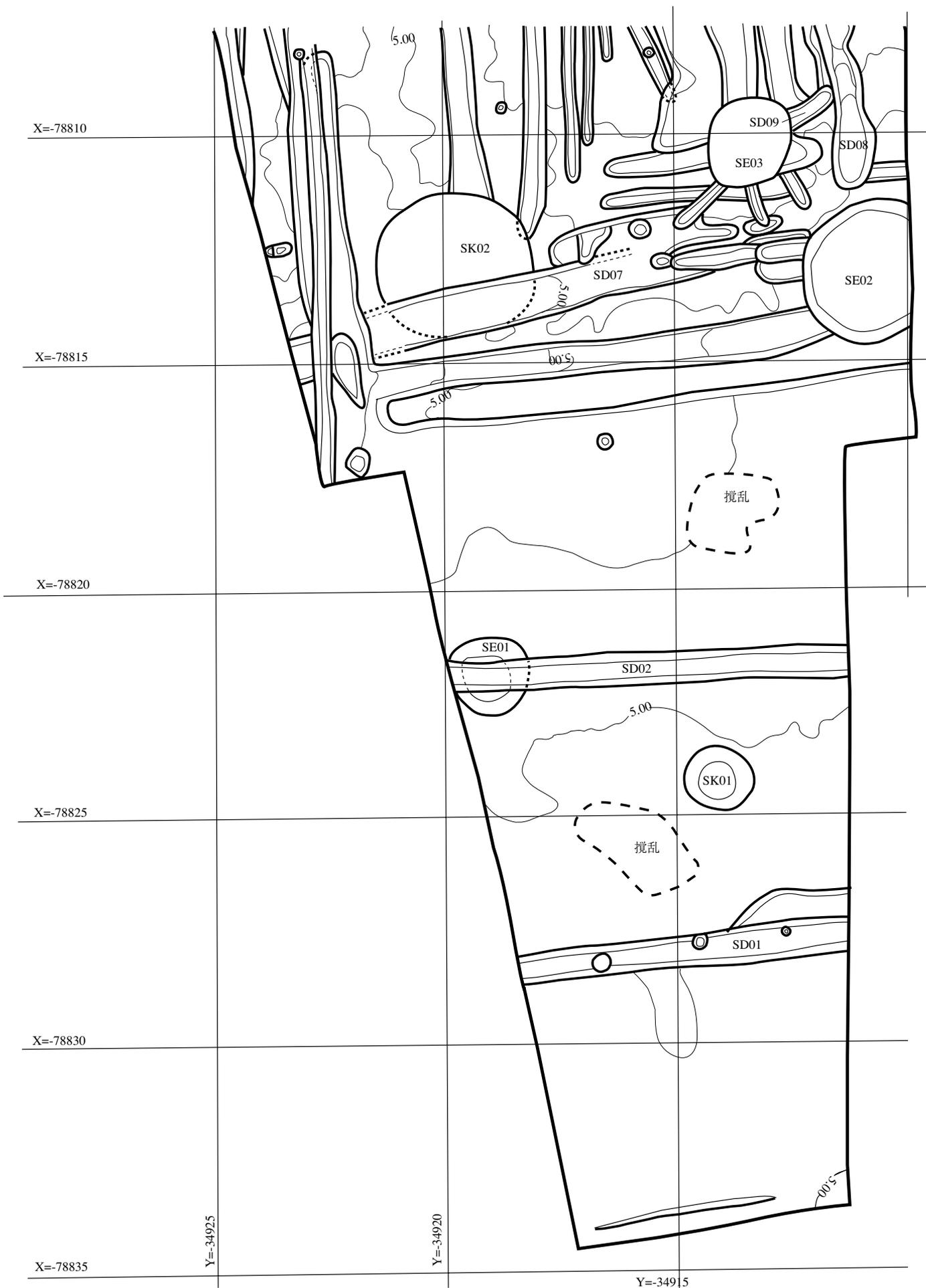
96L区  
西壁セクション  
1 / 40

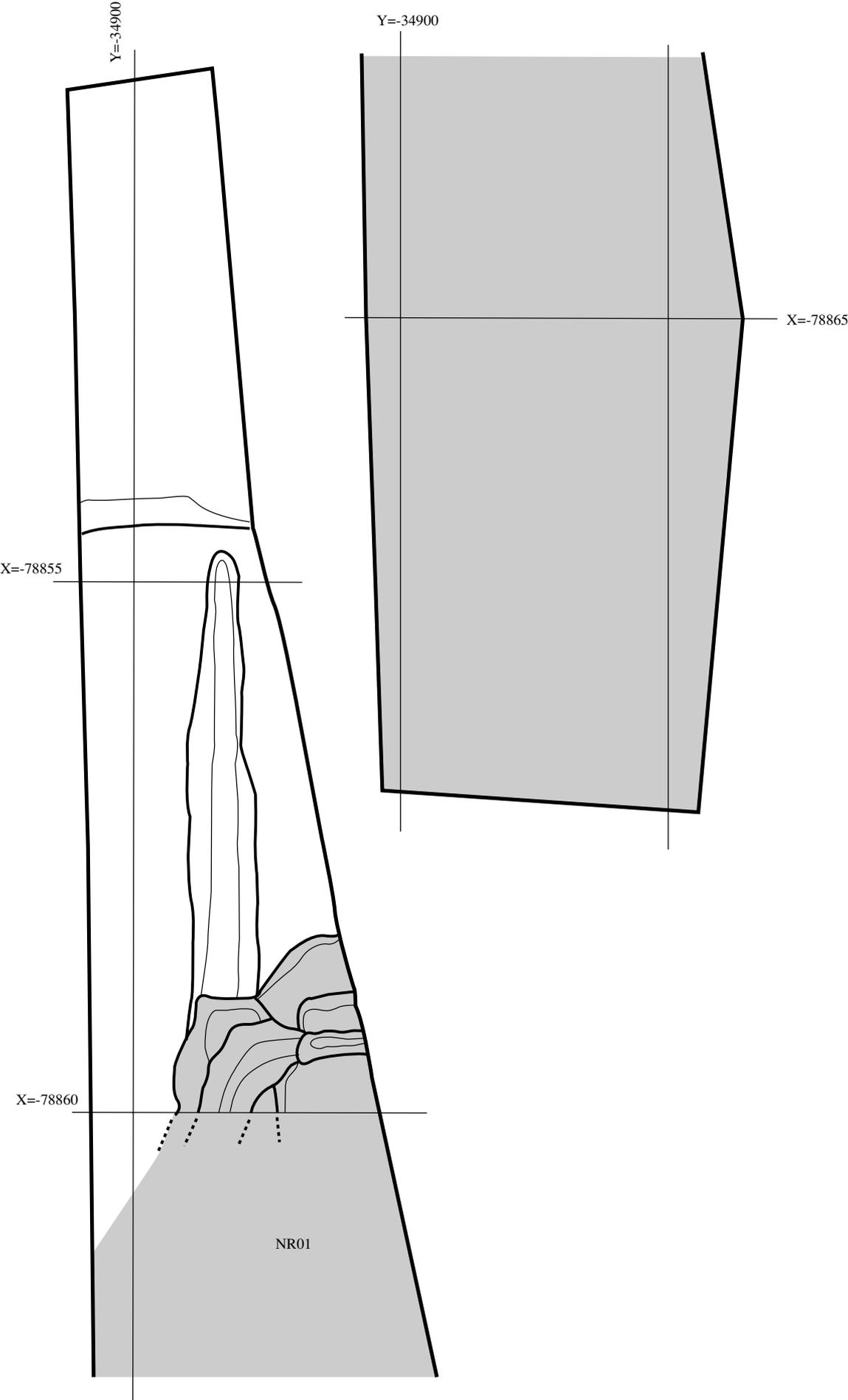


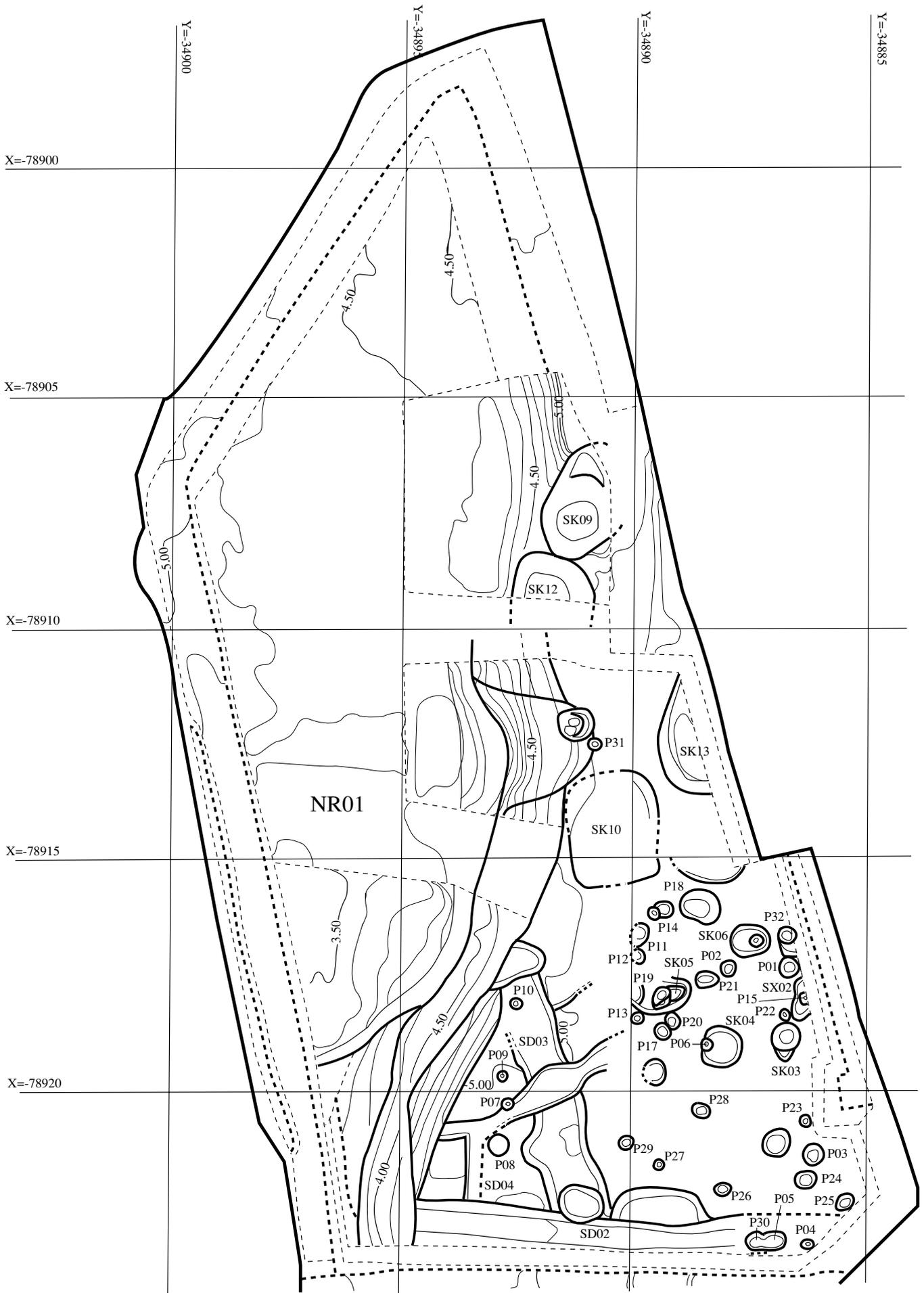
近世耕作面

PL20  
96L 区北部

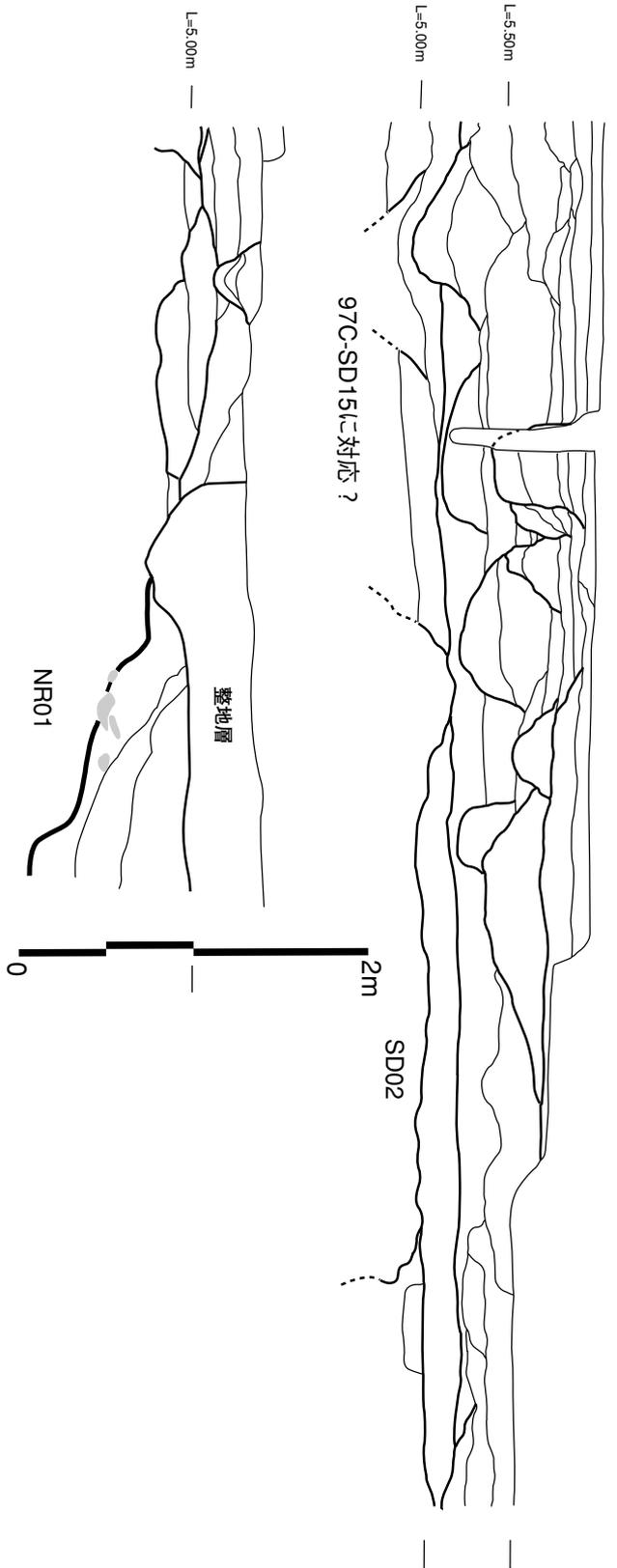




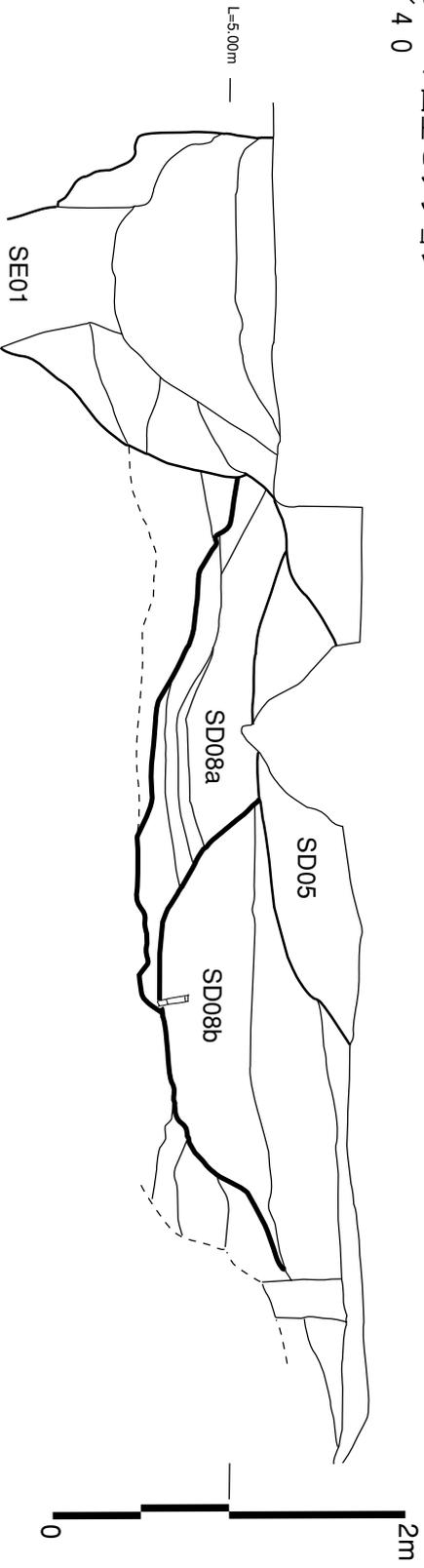




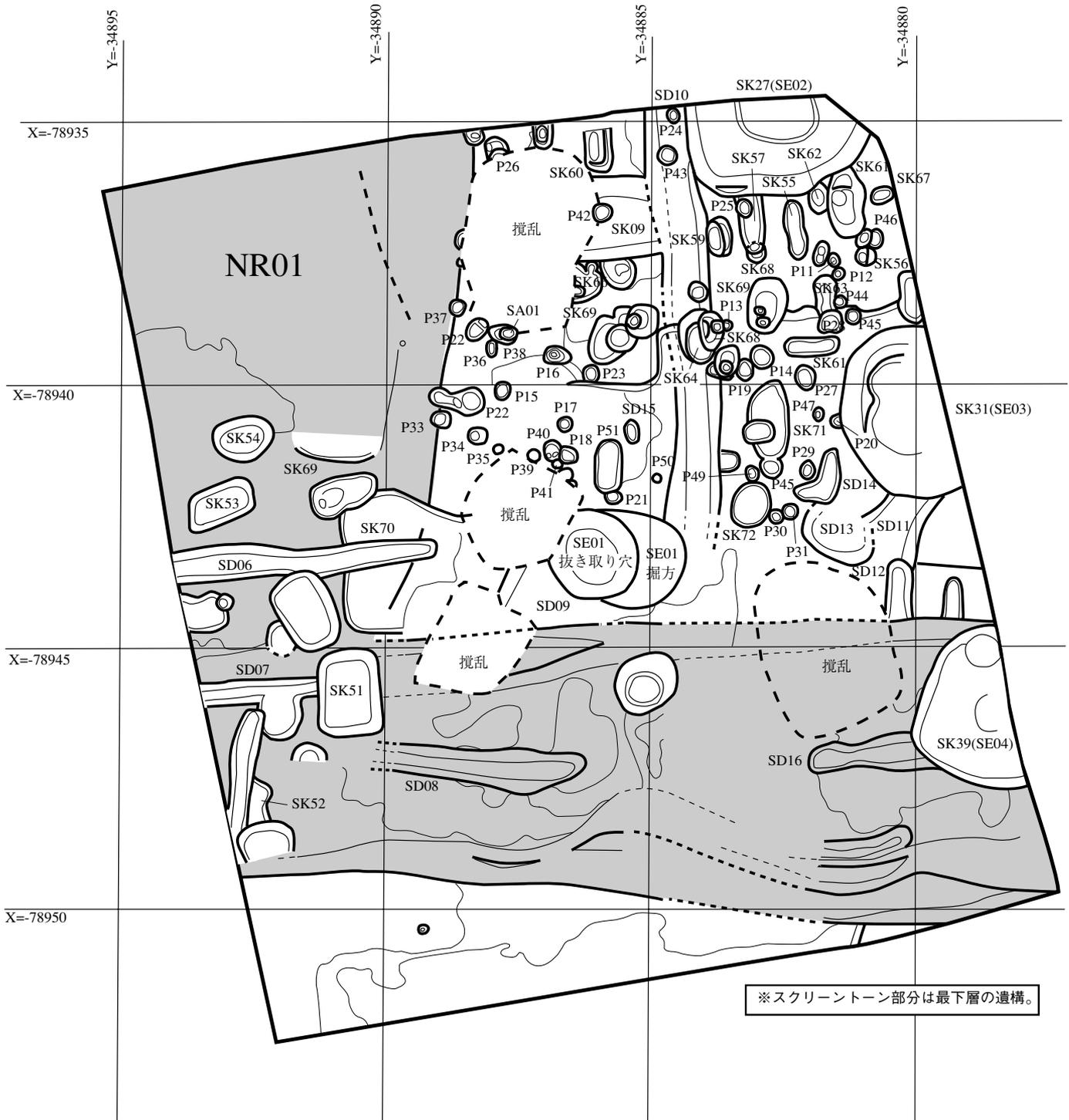
97D区  
南壁セクション  
NO.1  
1 / 40

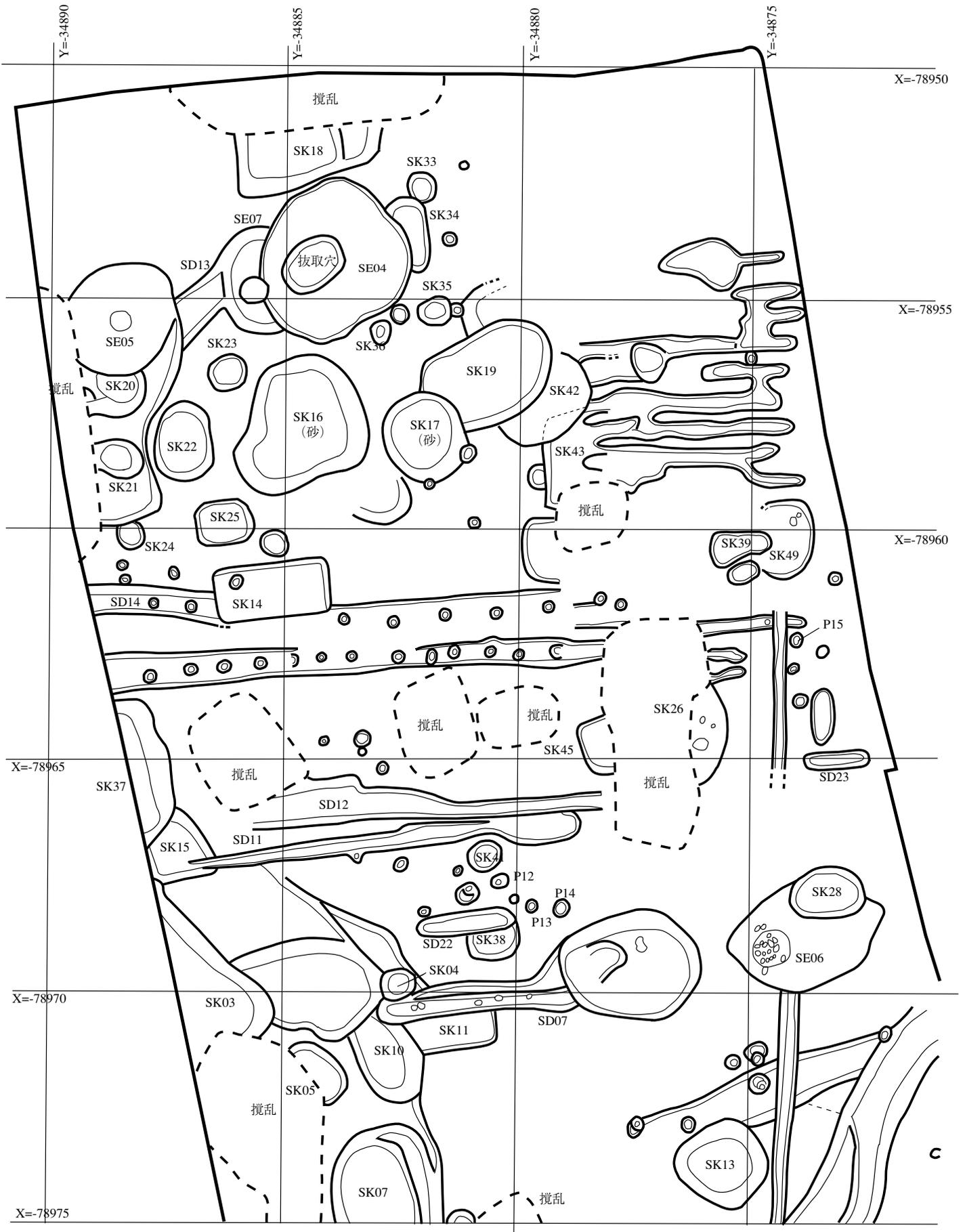


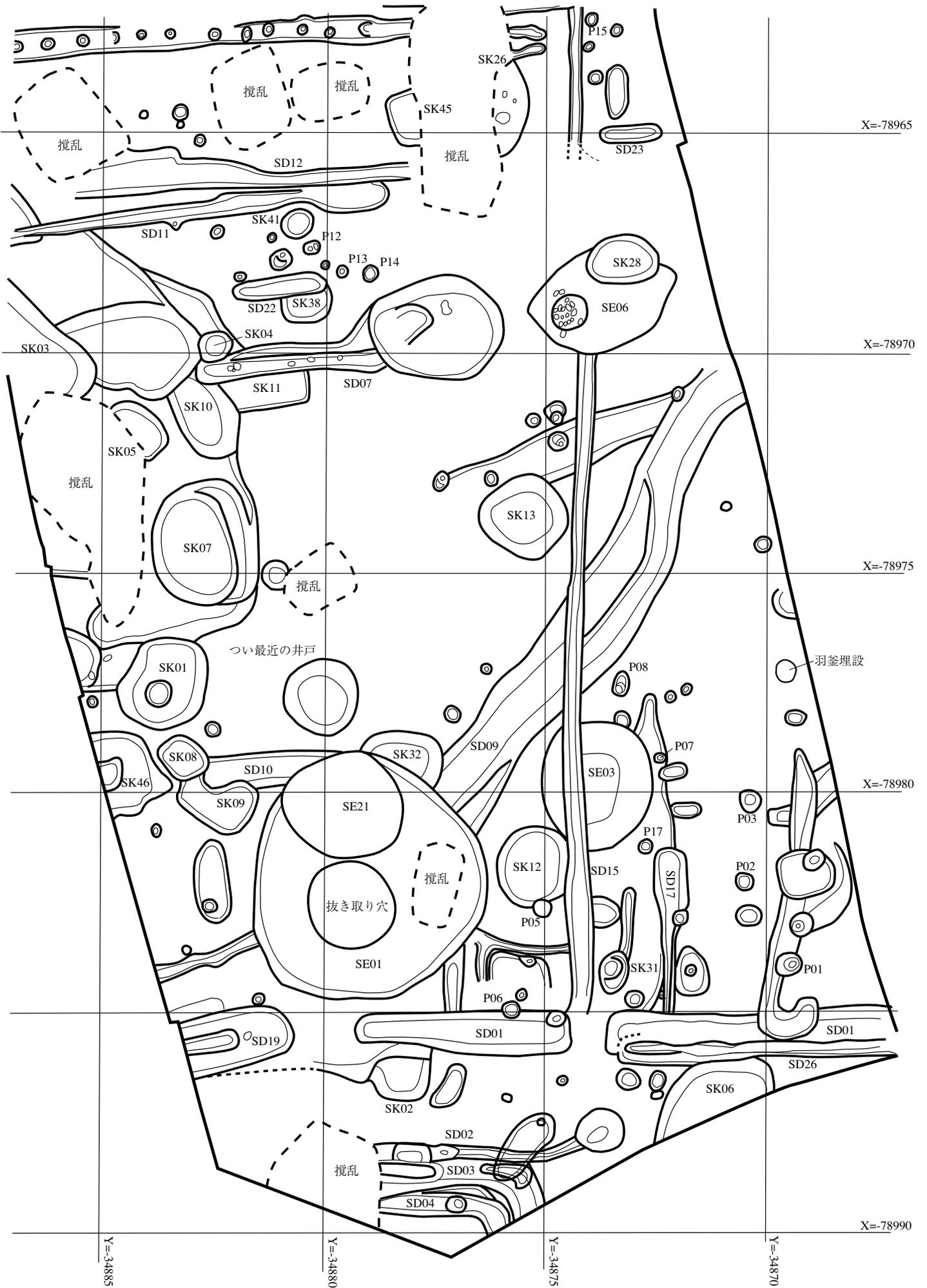
97C区 X9d、10d  
南北バルト西壁セクション  
1 / 40

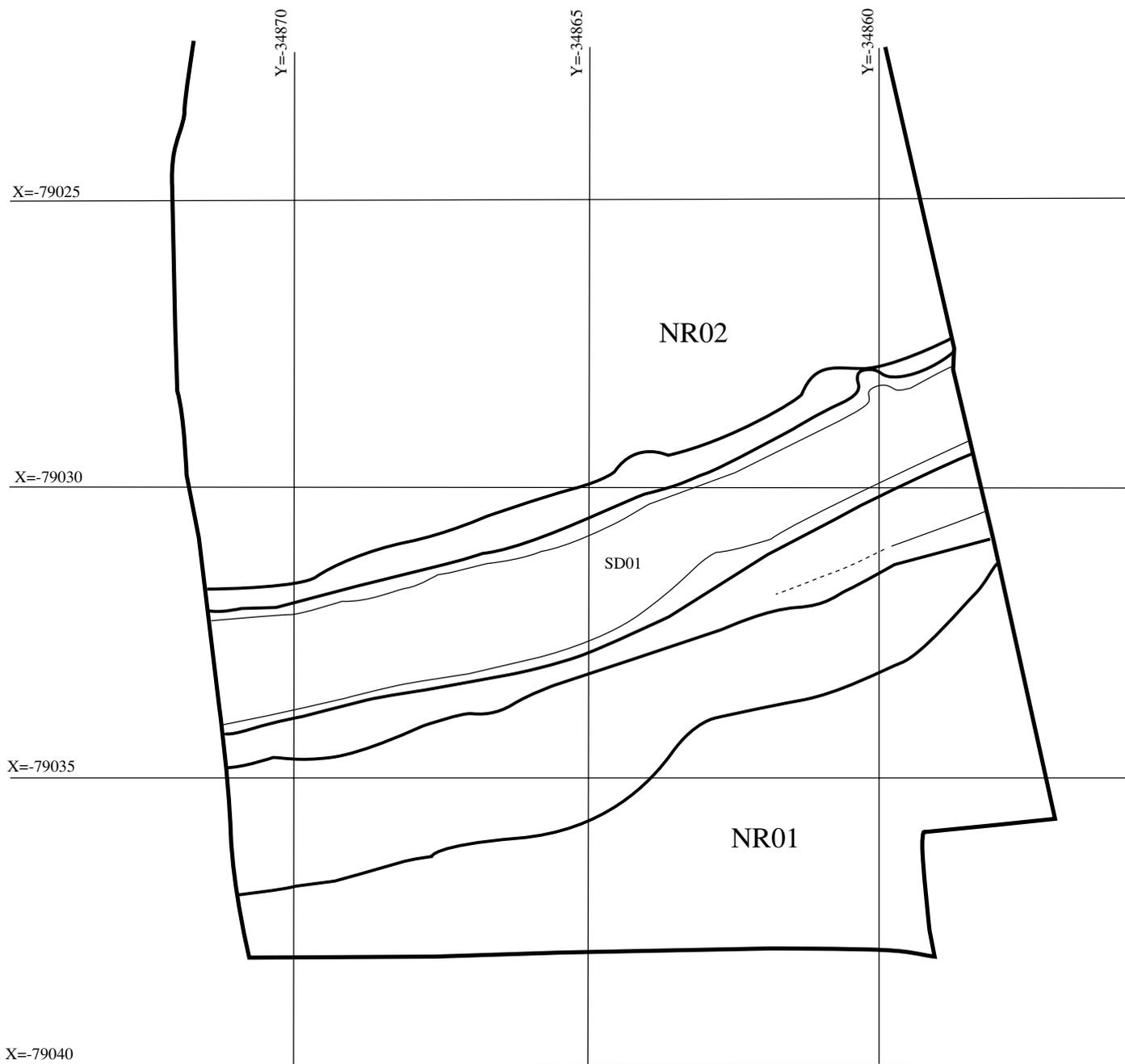














97A区全景  
南から



96BC区全景  
北から





96BC区南半近景  
北から



96BC区北半近景  
北から

96BC区SD22遺物出土状況  
東から



96BC区SE05桶出土状況  
南から



96BC区SD18完掘状況  
東から





96D区遠景1  
北東から



96D区遠景2  
北から

96D区SD01近景  
北から



96D区SD01近景  
西から





97B区全景1  
南から



97B区全景2  
北から

97B区近景1  
北部  
北から



97B区近景2  
南部  
北から





96F区全景  
北西から



96F区SE06  
東から



96F区SE09カゴ井筒検出状況  
南から



96F区SE07上層遺物出土状況

97D区全景1  
南東から



97D区全景2  
北西から





97A区遠景  
北から



97A区近景  
北西から

96K区遠景  
北から



96L区SK02上層  
北東から



96L区全景  
北から



97C区全景  
上面  
北から



97C区全景  
下面  
北から



97C区全景  
下面  
南西から

96H区全景  
北から



96H区中央付近  
北東から



96H区SE06  
南から



96H区SD01  
東から





96G区中景  
北東から



96G区近景  
東から

96G区NR01  
遺物出土状況  
東から



96G区SD01  
東から



96G区  
SD01出土五輪塔  
東から





96G区NR01  
土師皿出土状況1



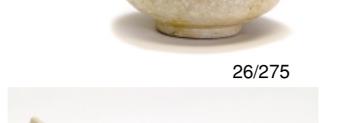
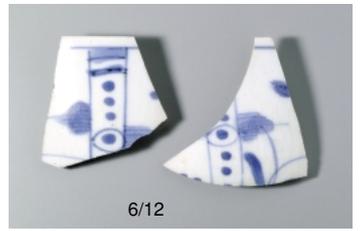
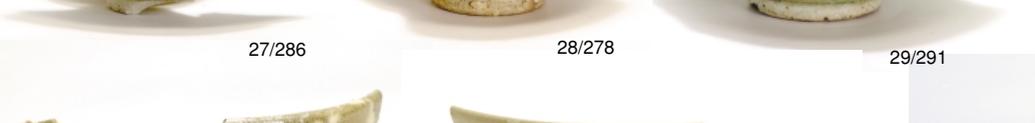
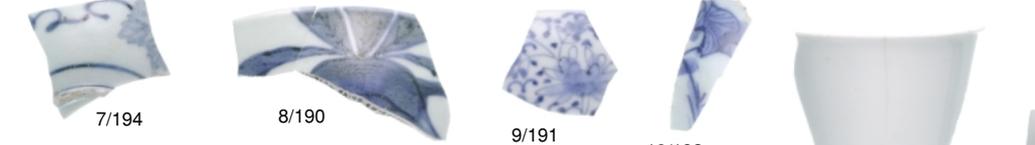
96G区NR01  
土師皿出土状況2



96G区NR01  
漆碗・カゴ出土状況1



96G区NR01  
漆碗・カゴ出土状況2





1/290



2/292



3/277



4/450



5/281



6/293



7/296



8/440



9/299



10/297



11/294



12/333



13/300



15/303



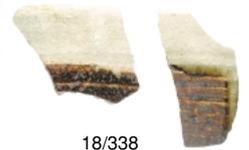
16/295



17/339



14/335



18/338



20/298



21/253



19/302



25/437



22/213



23/337



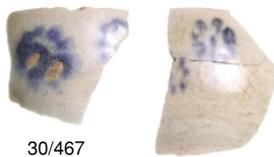
26/435



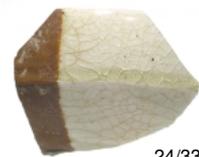
28/320



29/322



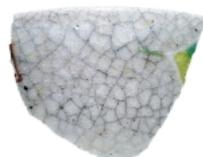
30/467



24/336



27/456



32/330



33/326



34/434



35/3



36/452



37/325



38/323



39/324



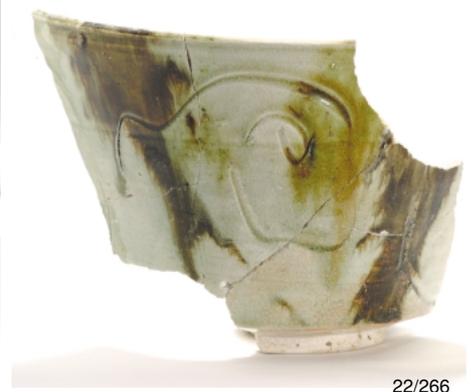
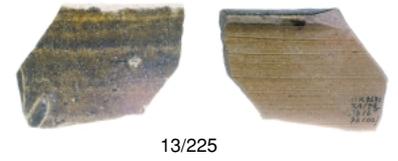
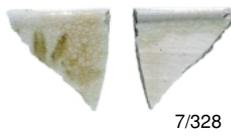
40/327



41/442



42/331





1/221



2/223



7/210



8/227



3/224



4/226



9/232



10/454



11/233



12/234



13/235



14/236



15/245



16/241



17/242



18/449



19/468



20/469



21/246



22/247



23/244



24/460



25/461



26/464



27/463



28/459



1/199



3/251



5/252



6/334



2/200



7/254



8/340



4/255



10/5



11/455



12/256



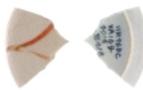
13/208



14/209



15/6



16/202



17/203



21/207



23/259



18/204



19/205



20/206



22/239



24/263



25/237



26/262



27/238



28/257



29/201



30/465



1/439



4/448



5/443



8/444

9/447

10/453



2/438



6/436



3/321

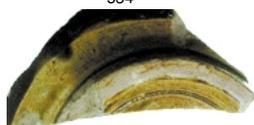


7/451

534

522

531



525



523



519



532



530



11/222



533



526



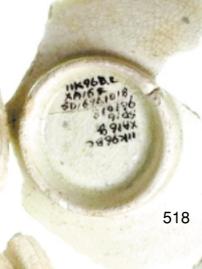
520



527



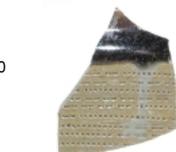
466



518



521



12/332



524



529



528



535



13/182



15/184



14/185



16/183



1/243



5/244



7/248



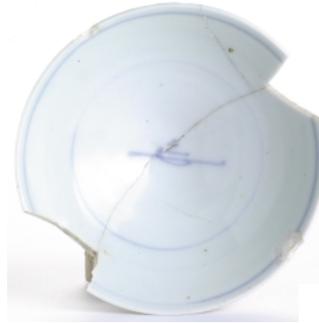
9/4



2/258



6/255



3/245



10/259



4/256



13/260



8/261



11/254



14/263



12/257



16/83



22/84



15/76



17/79



19/81



23/82



18/5



20/77



24/78



21/74



25/75



6/242



1/246



2/247



3/249



7/264



4/250



5/251



8/72



9/87



10/91



13/90



16/252



17/253



18/262



11/93



14/265



12/73



15/266



19/86



20/88



21/89



1/23



2/21



3/19



4/17



5/22



12/24



6/113



7/20



8/18



9/114



11/116



13/118



10/115



14/117



15/119



18/120



16/122



17/121



1/33



2/34



3/28



5/36



4/35



6/37



8/179



7/32



9/38



10/29



11/30



12/31



1/23



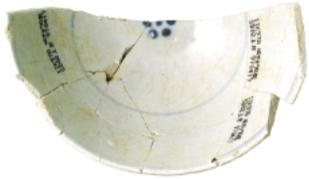
2/73



3/22



4/18



5/74



6/24



7/29



9/32



10/30



11/25



8/76



12/21



13/98



14/79



15/26



16/27



17/77



18/31



19/33



20/69



21/28



1/34



2/81



3/20



4/19



5/80



6/41



7/36



8/37



9/38



10/39



11/40



1/54



2/56



3/55



7/61



5/50



6/53



4/51



8/49



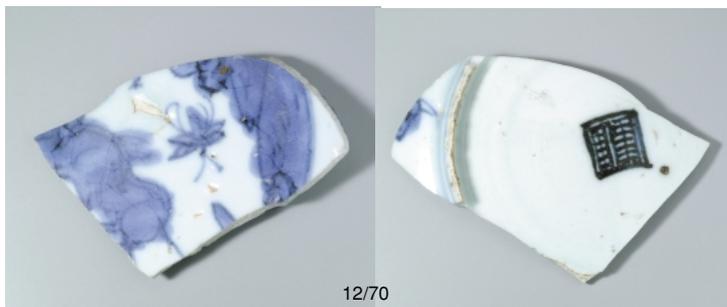
10/57



9/63



11/62



12/70



13/47



14/59



15/46



16/52



1/67



2/72



3/71



4/65



5/68



6/75



7/77



8/79

6/75



9/81



10/64



11/70



12/73



13/69



14/7



15/66

17/80



16/6



18/78



15/66



19/74



20/63



21/82



22/76



16/6





1/96A-R01-1



3/96D-D01-中層-59



6/97D-R01-1



4/97D-R01-7



7/97D-R01-6



8/96G-D01-57



2/96D-D01中層-28



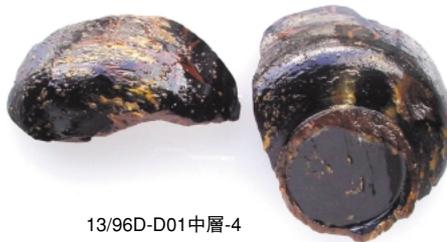
5/96G-R01-26



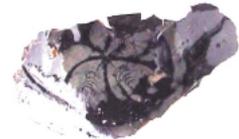
9/96G-R01-21



10/96D-D01上層-10



13/96D-D01中層-4



16/96G-D01下層-31



11/96D-D01中層-34



14/96D-D01中層-5



17/96G-R01-33



12/96D-D01下層31



15/96D-D01下層-63



18/96BC-X02-3



1/97B-K56-5



9/97C-42



16/96D-10



2/97B-K56-6



10/97C-K51-18



17/96D-6



3/97B-K56-7



11/96F-D16-15



18/96D-9



4/97B-K56-9



12/96G-3



19/96D-22



5/97B-K56-10



13/96H-K16-6



20/96BC-22



6/97B-K56-11



14/96BC-D04-2



21/96D-7



24/96F-D02-10



7/97C-K43-16



22/96D-8



25/97C-30



8/97C-34



15/96BC-E11-12



23/97D-R01-1



26/96G-4

線刻土器



97H-76  
遠賀川系B類



97B-K10-269  
削痕系甕



97B-D07-270

赤彩壺

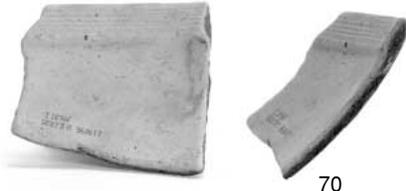


96H-75

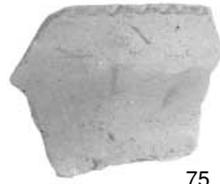
96F-SE07



76



70



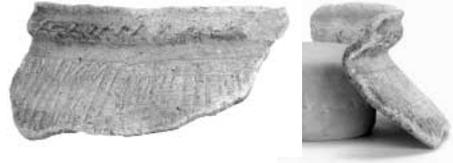
75



73



71



80



86



86 : 底部線刻



79

96L-SK02



13 : 二枚貝連弧紋 ?



15



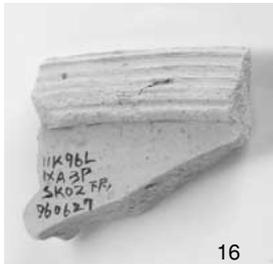
17



18



19



16

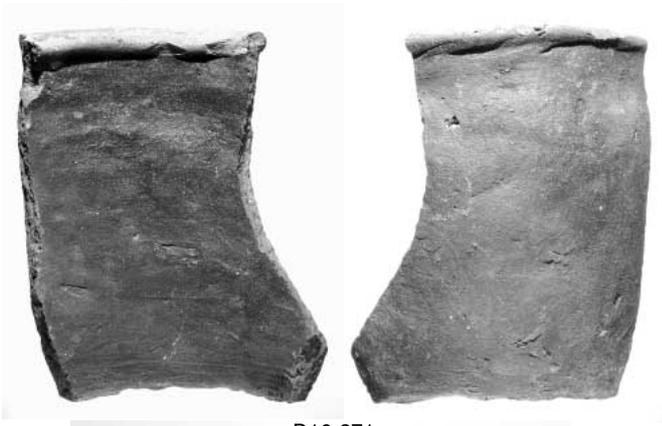


21:タタキ?

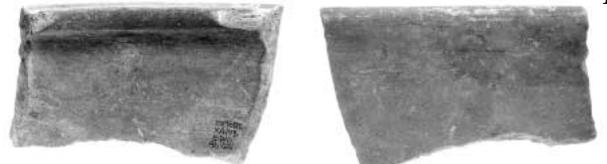


20

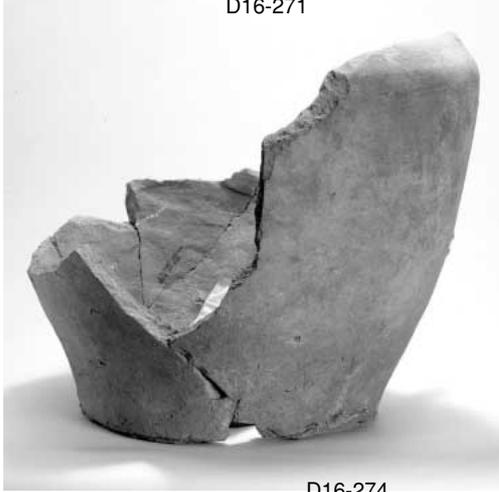




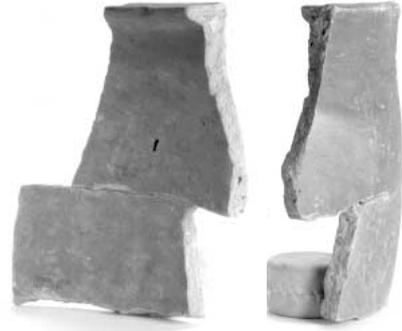
D16-271



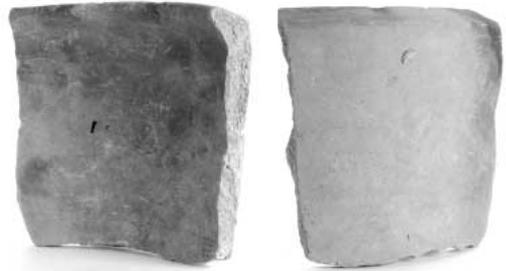
D16-243



D16-274



D16-268



D16-270



D16-269



D16-273



D16-458



D16-344



D16-345



D16-341



D16-342



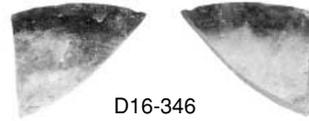
D16-306



D16-348



D16-347



D16-346



D16-308

D16-310



D16-309



D16-311



D16-312



D16-311



D16-312



D16-364



D16-352

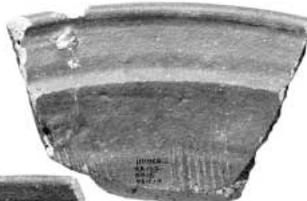


D16-353



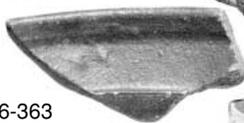
D16-365

D16-359



D16-356

D16-363



D16-362



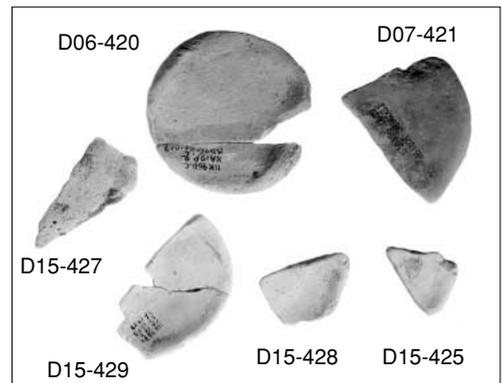
D16-357



D16-457



D16-358



D06-420

D07-421

D15-427

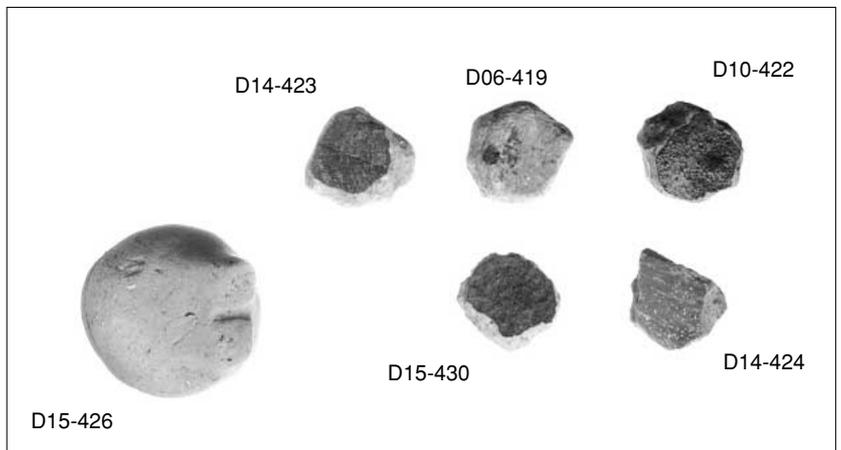
D15-429

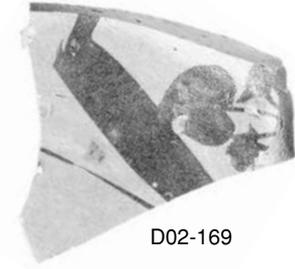
D15-428

D15-425

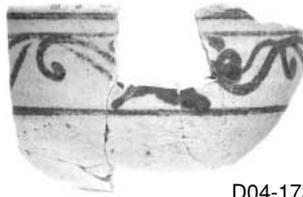


D16-349





D02-169



D04-173



D04-174



D04-170



D04-172



D04-171



D07-175



D07-176



D07-178  
板目あり



D07-180



D14-181



D17-471



D23-473



D17-472



D27-474



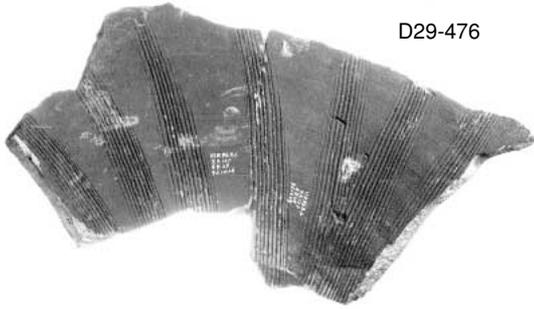
D29-480



D29-476



D29-480



D29-479



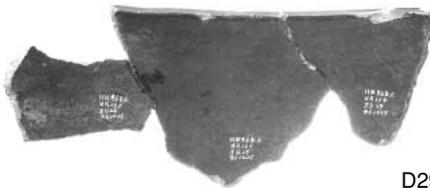
D29-476



D29-475



D29-478



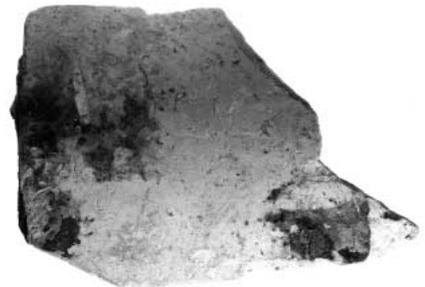
D29-481



D31-482



D31-486



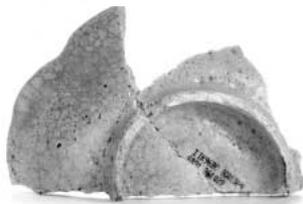
D31-485



D31-483



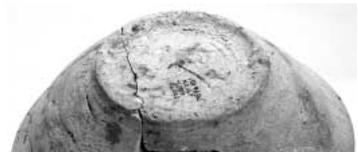
D31-484



D35-488



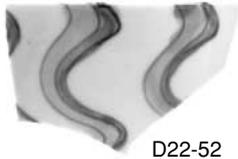
D37-367



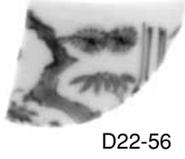
D37-366

D34-487





D22-52



D22-56



D22-53



D22-39



D22-35



D22-32



D22-33



D22-36



D22-43



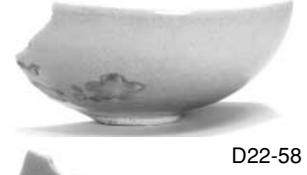
D22-34



D22-51



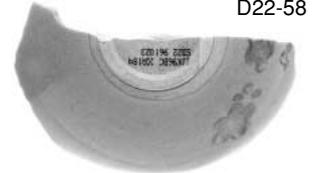
D22-57



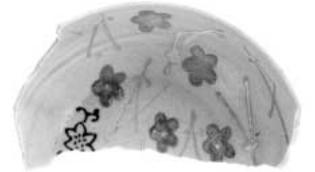
D22-58



D22-59



D22-41



D22-44



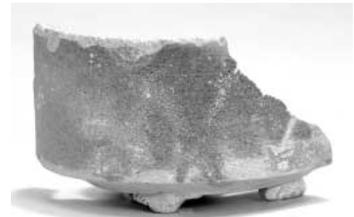
D22-37



D22-40



D22-46



D22-45



D22-517



D22-50



D22-49



D22-48



D22-42



D22-512



D22-66



D22-514



D22-515



D22-416



D22-47



D22-91



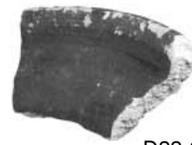
D22-513



D22-90



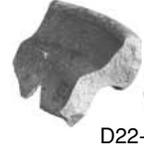
D22-89



D22-61



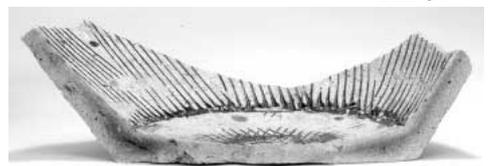
D22-63



D22-516



D22-81



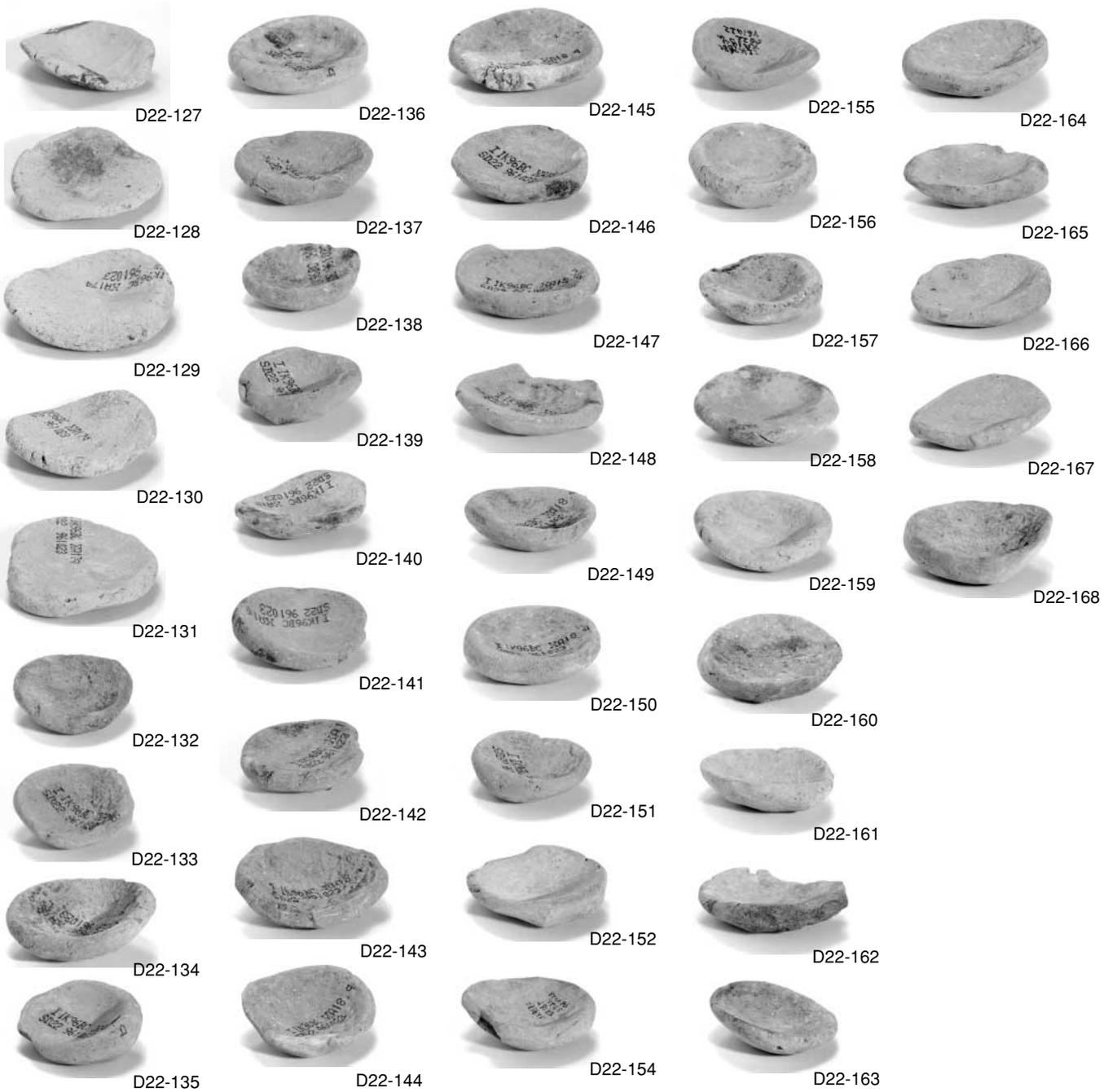
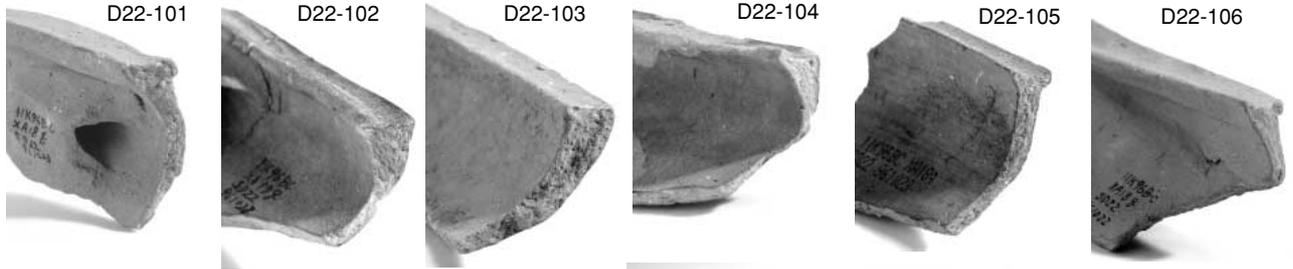
D22-82



D22-84



D22-83





D22-417



D22-418



D22-87



D22-122

D22-123



D22-126



D22-124



D22-120



D22-121



D22-118



D22-117



D22-119



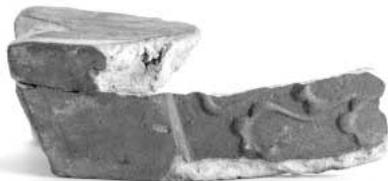
D22-98



D22-97



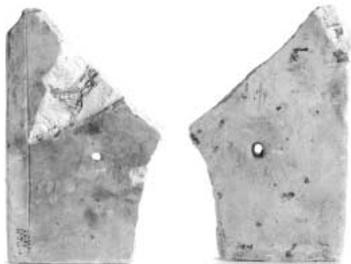
D22-92



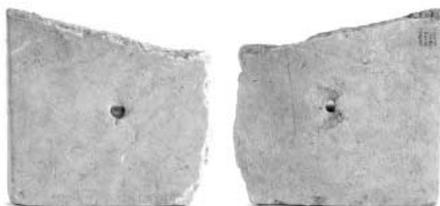
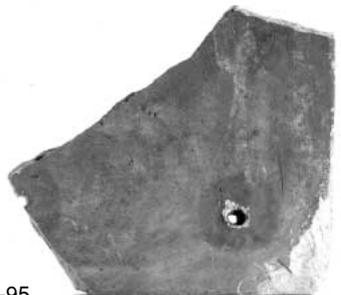
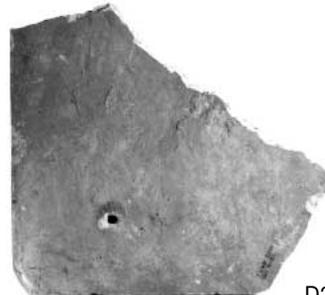
D22-99



D22-95



D22-94



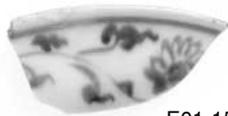
D22-95



D22-96



E01-389



E01-15



E01-396



E01-399



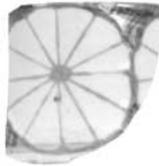
E02-14



E02-16



E05-18



E04-17



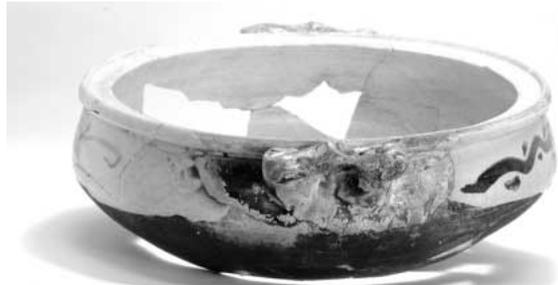
E05-400



E07-405



X04-411



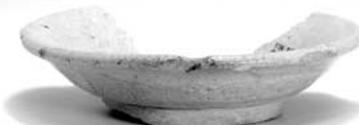
X04-410



X04-412



X07-413



X07-414



X07-415



X08-490



K05-382



K06-384



K07-13



K07-385



K20-386



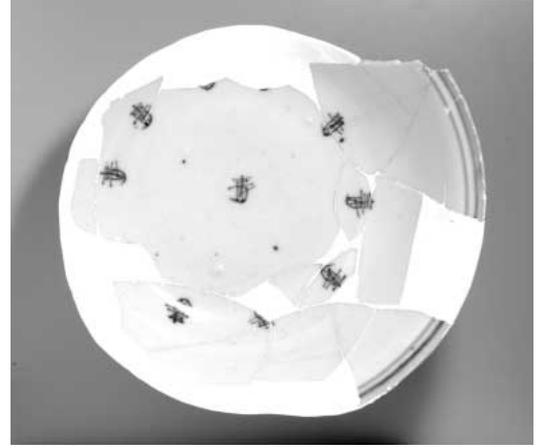
24



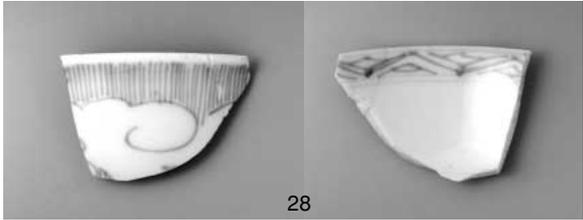
27



31



19



28



186



30



23

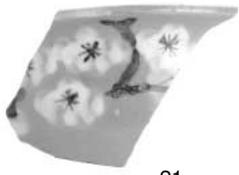


29



26





21



493



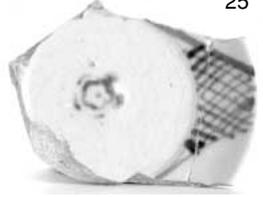
497



492



25



499



501



502



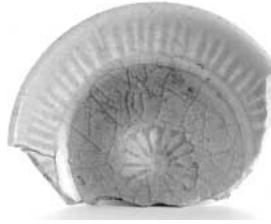
496



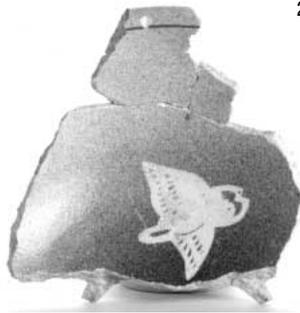
20



503



500



491



494



495



検 II -510



検 II -22



504



検 II -508



検 II -507



検 II -509



505



検 II -506



SE01



40



233



234



41



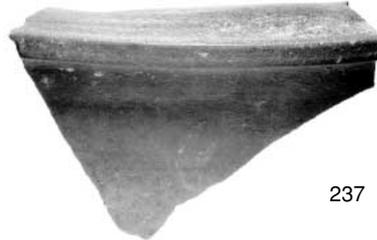
44



39



235



237

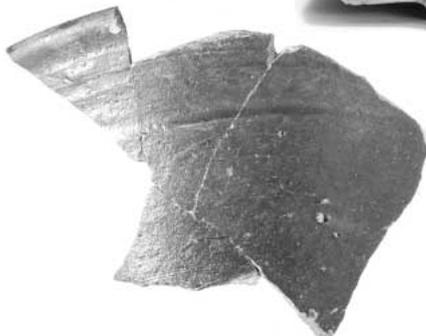
SE01掘形



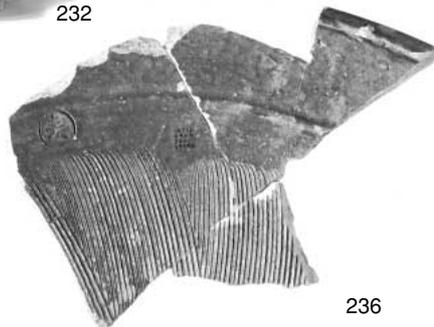
43



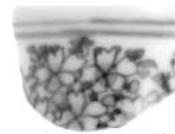
232



236



SE02



42



239

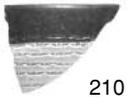


238



240

SD01



210

SD03



1

SD05



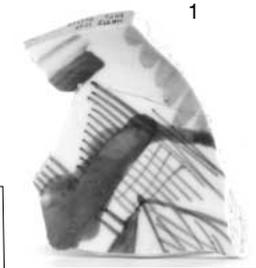
212



213



211



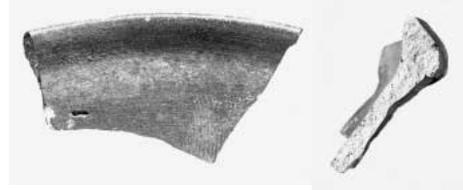
214



216



215



217



SD07



221



220



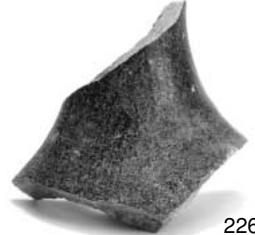
219



218



223



226



222



228



227



225



224





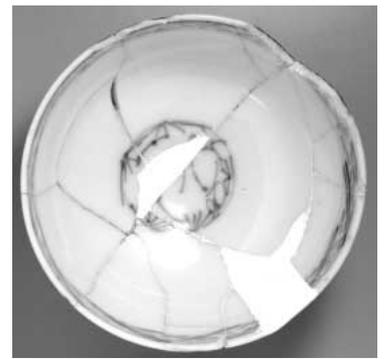
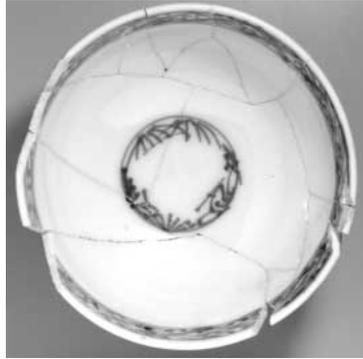
14



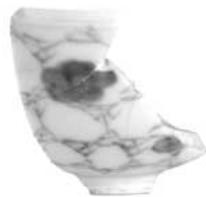
13



12



10



9

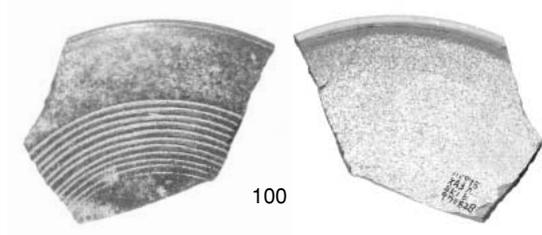


11



99

103



100



102



104



106



107



105



109



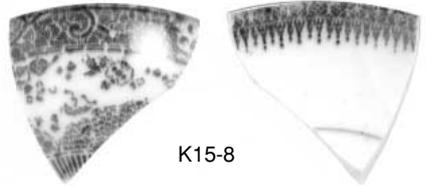
268



K01-2



K08-3



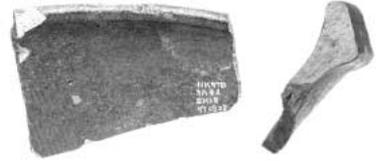
K15-8



K21-111



K21-112



K18-110



K22-15



K26-16



K26-59



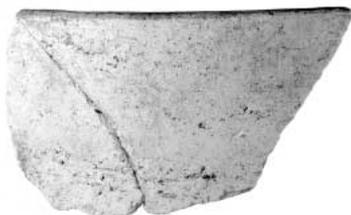
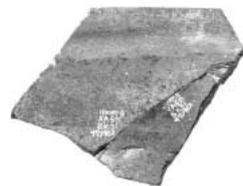
K31-123



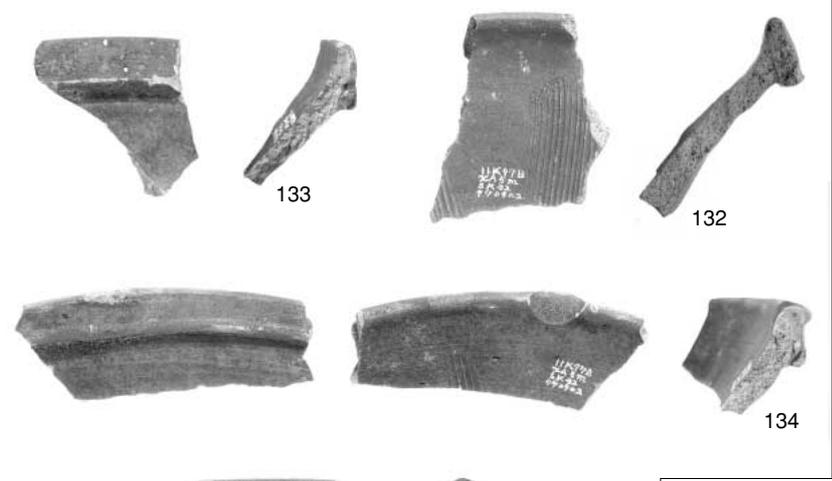
K31-125



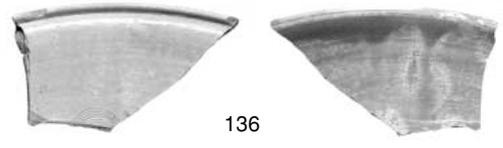
K31-124



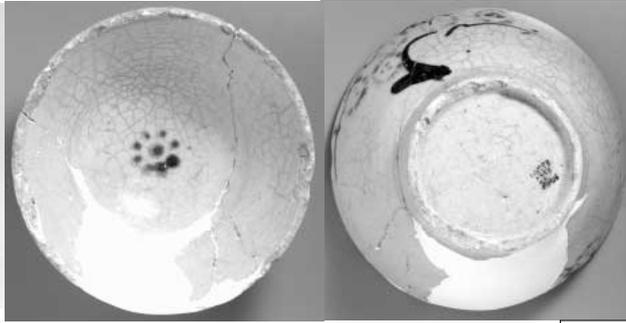
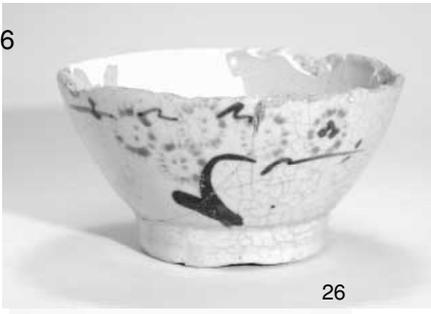
SK32



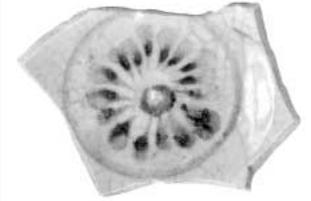
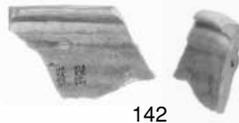
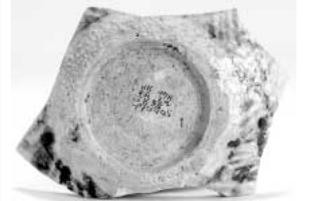
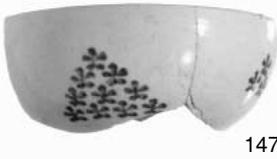
SK33



SK56



SK54



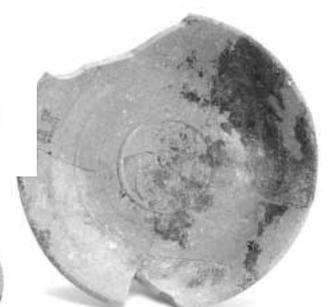
SK68



SK75



SK80



SK56



155



154



156



151

SK88



190

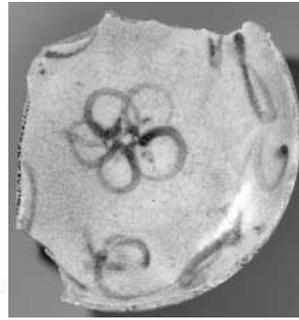


153





K81-165



SX10



6



K89-191



K84-27



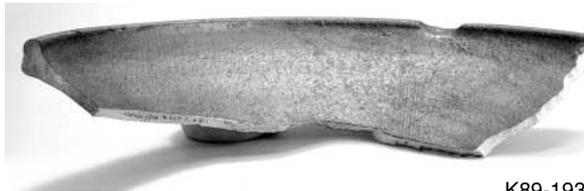
7



K85-166



K91-194



K89-193



K91-195



K91-196



K91-197



230



K91-198



K91-199



K91-203



229



K94-209



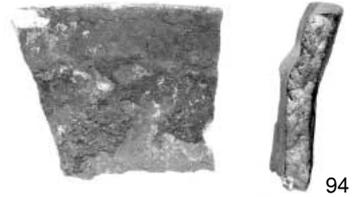
231



80



85



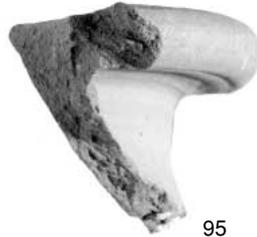
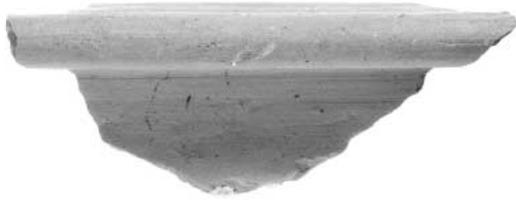
94



97B  
SK10  
91



92



95



96



97B  
SK10  
97

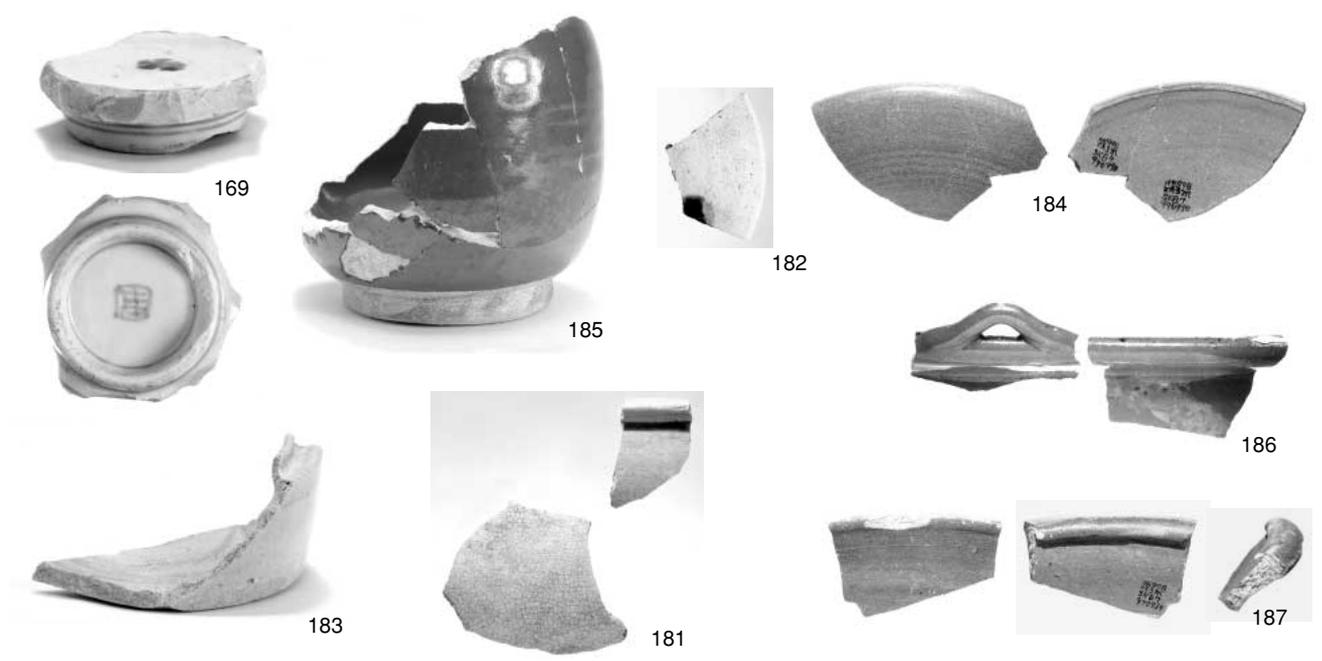
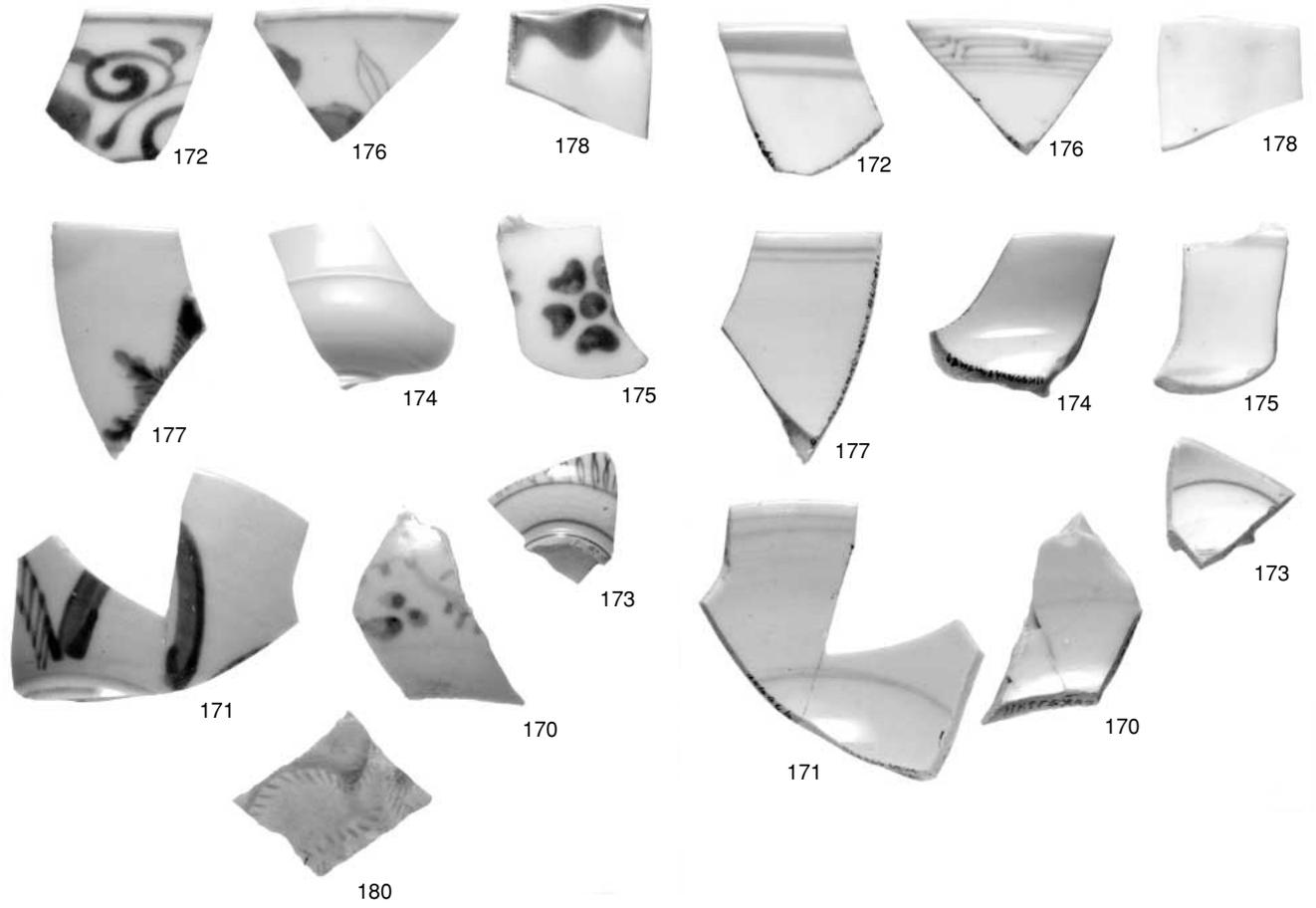


99



102







54



53



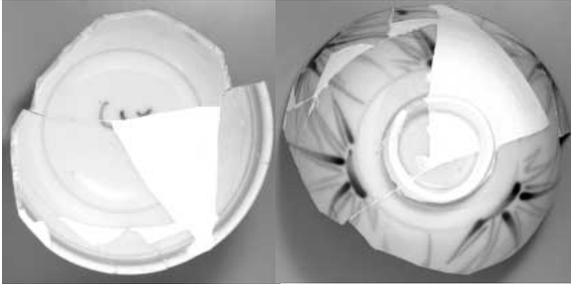
57



51



69



48



55



56



66



49



50



58



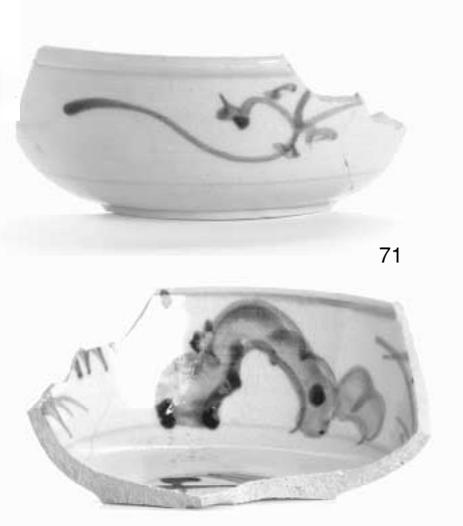
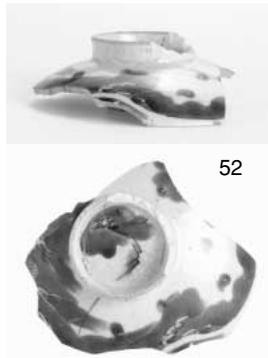
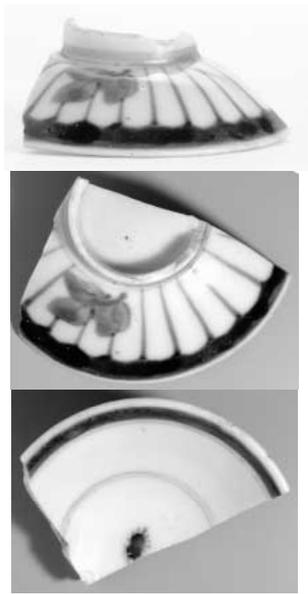
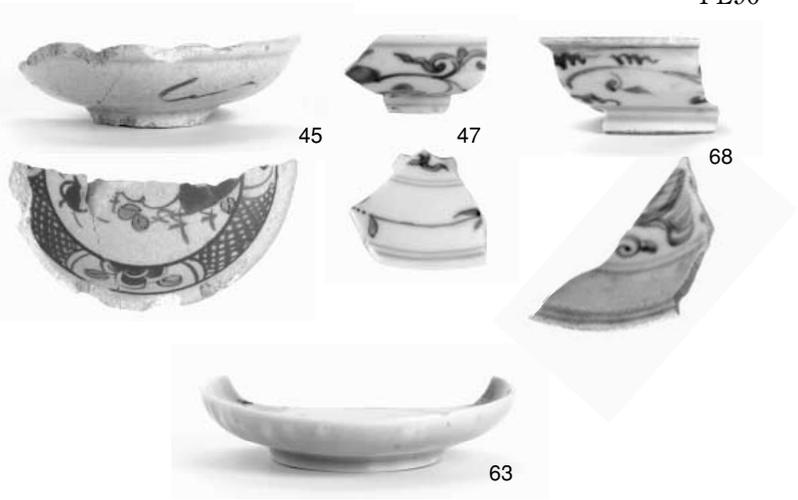
64



65



70





33



50



29



31



26



27



28



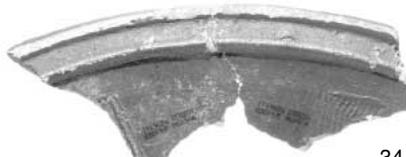
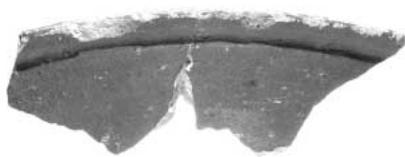
30



37



32



34



SD01斑土



35



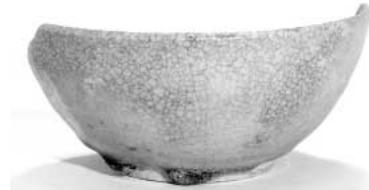
39



40



38

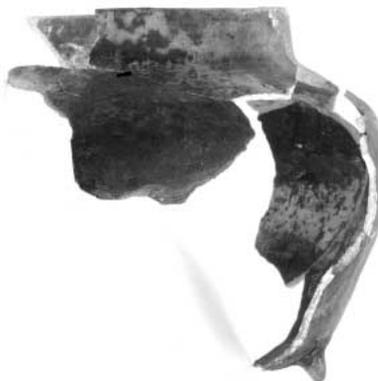


36

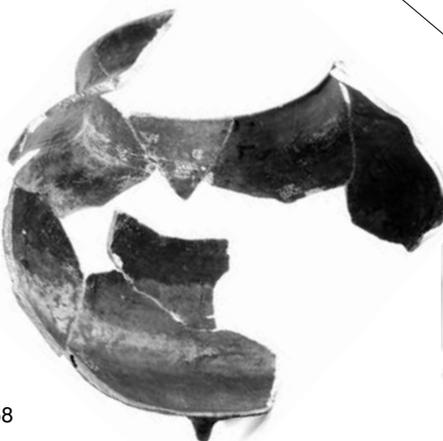


41

SD01中層



58



60



49



51



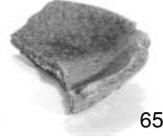
52



42



47



65



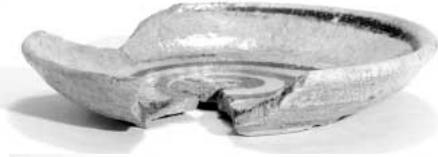
44



64



63



45



46



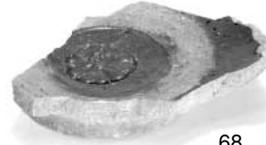
66



67



43



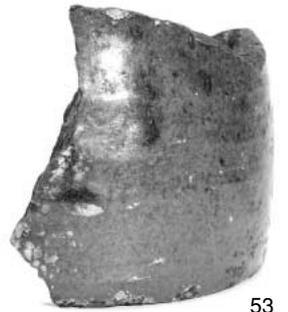
68



61



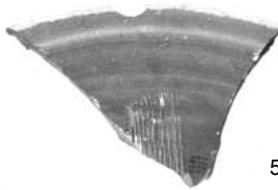
54



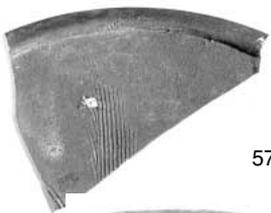
53



48



56



57



55



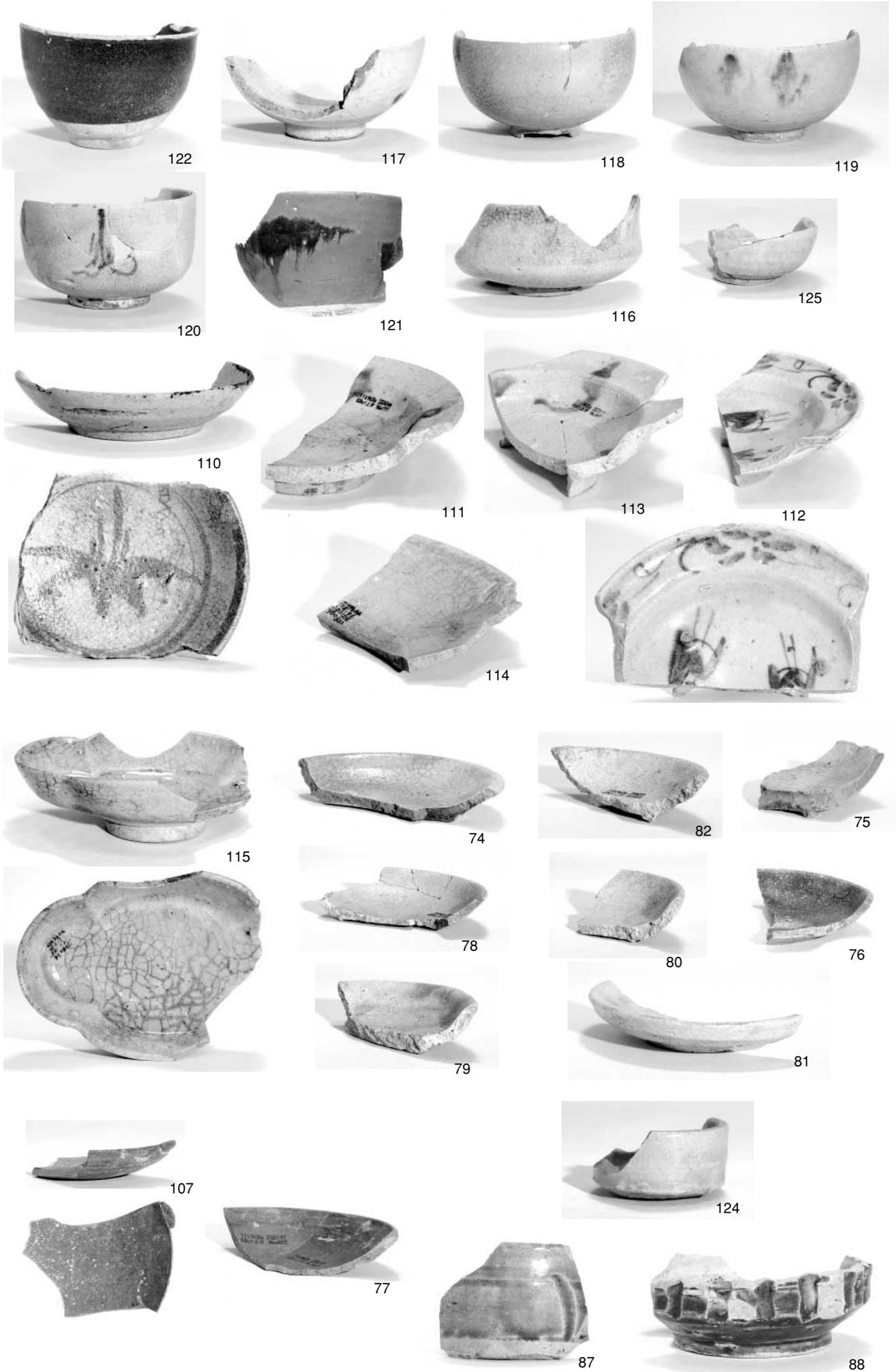
70



71



69





108



83



84



89



130



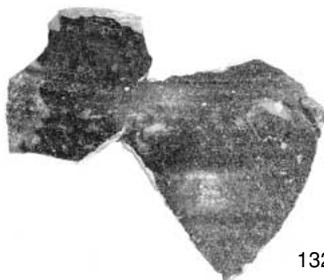
131



127



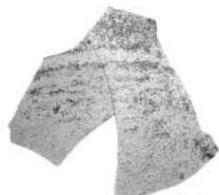
129



132



133



86



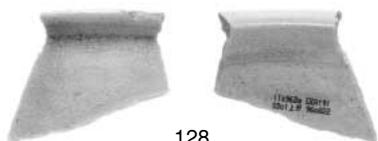
123



90



126



128



92

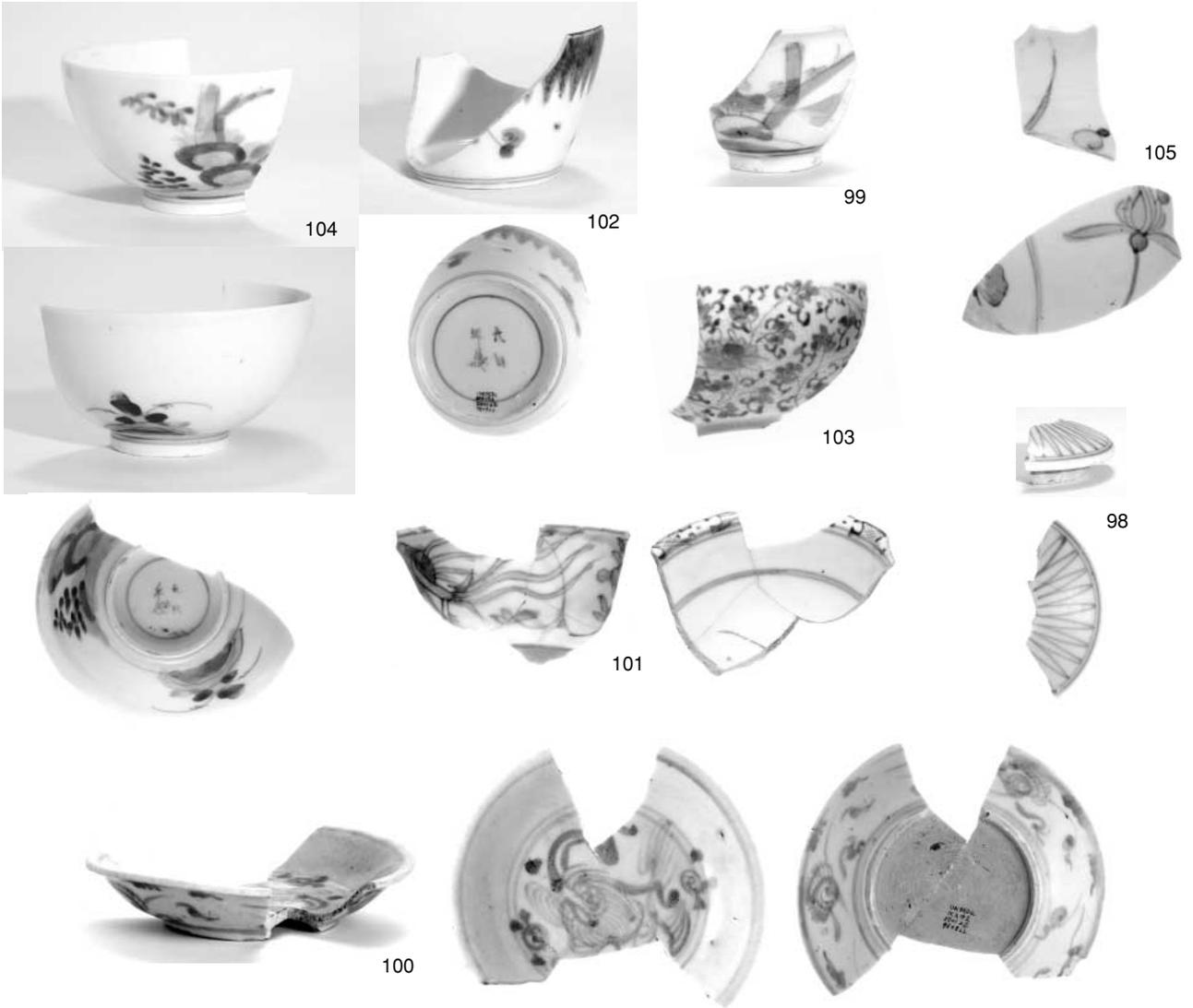


134

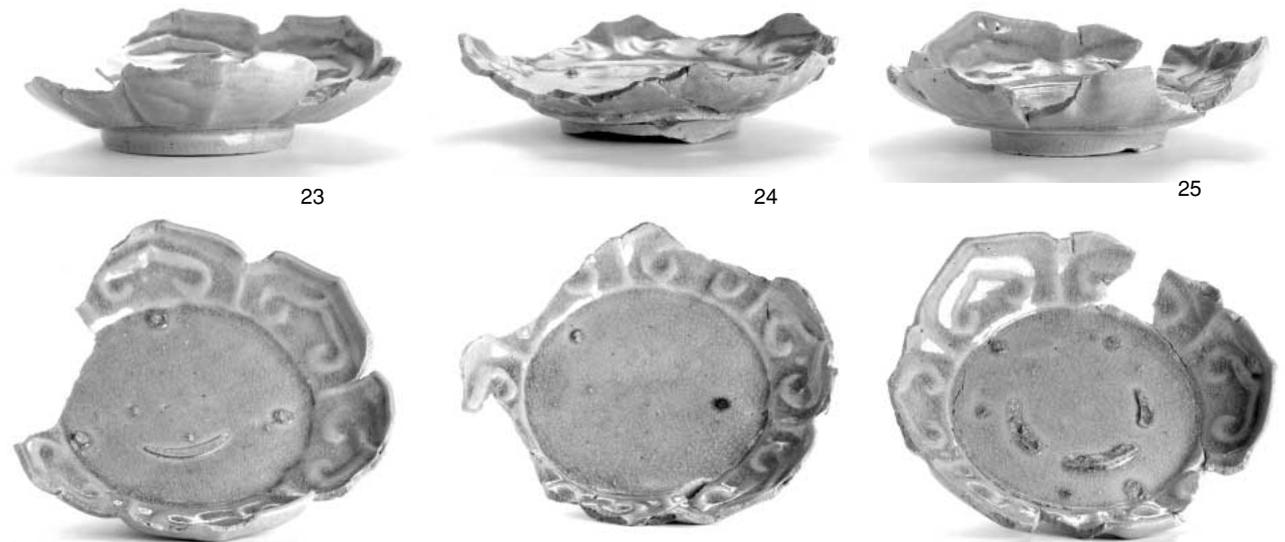


94





96D-SD01

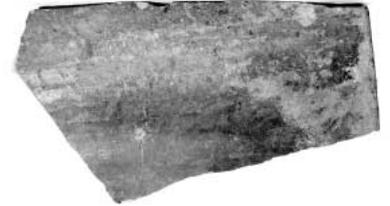




140



96



95



97



135



136



91



137

97A-SD06



48

97A-SD07



58





168



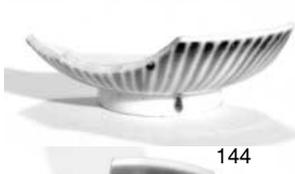
170



143



159



144



145



149



147



160



148



151



154



150



166



153



167



152



169



146



171



155



161



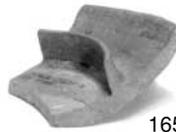
162



156



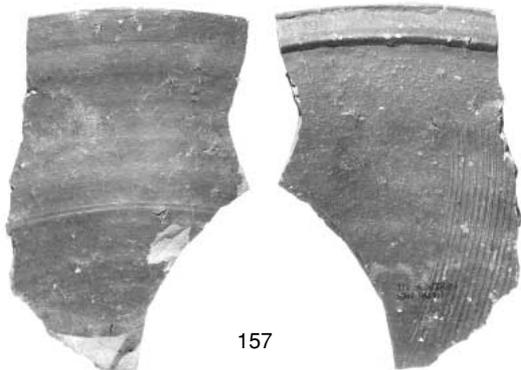
164



165



163



157



93



173



15



11



18



22



7



19



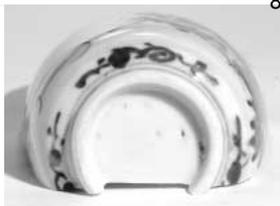
16



8

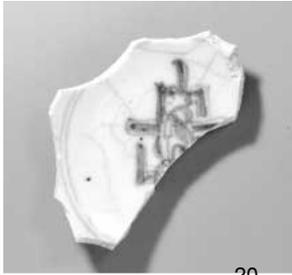


17



13

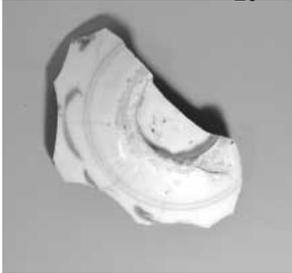




20



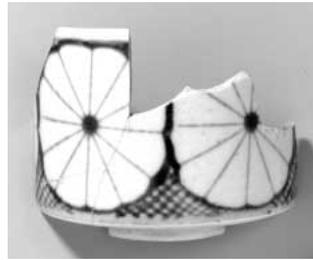
10



14



21



9



4

96D-SX02



1



12



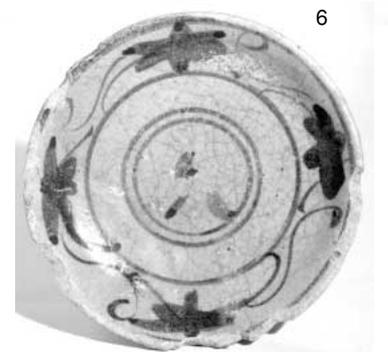
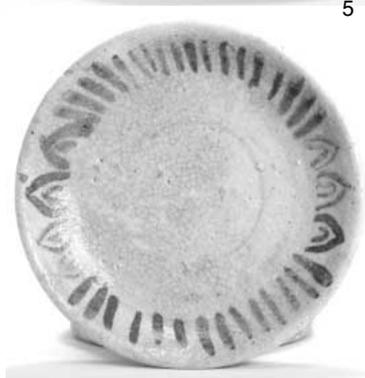
3



5



6



SD01



11



14



16



3

5

8



9



10



12



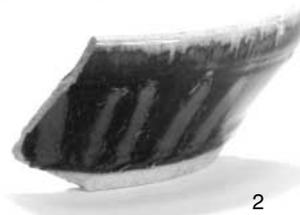
6



4



1



2



13



17

検出



72

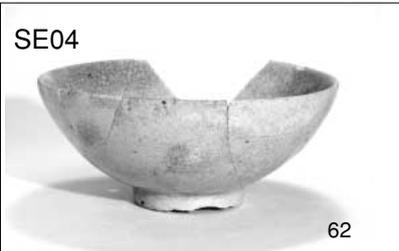
SD03



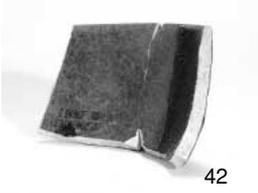
45



SD02



SD15 • 16



42



49



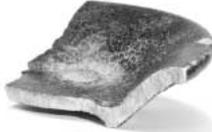
48



33



32



34



41



43



50



47



35



SD17



45



59



44



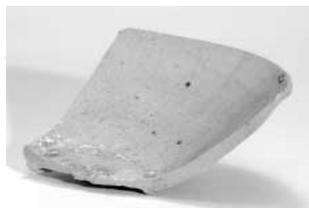
46



54



55



56



53



57



52



58



46



57



41



8



44



43



49



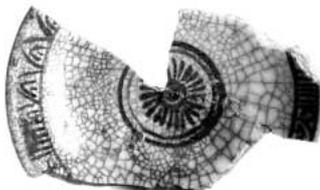
53



5



4



9

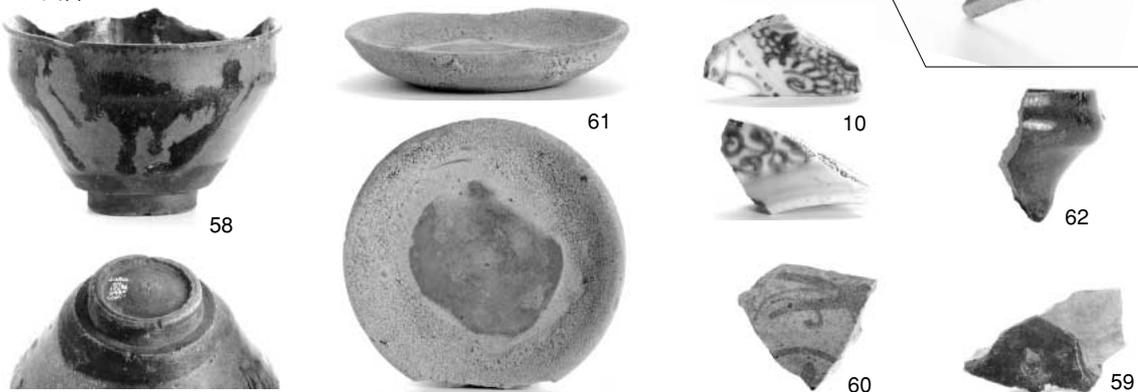


2

NR01



NR01下層



97D

SD02



25



26



29



30

SD05

PL105



31



SK07



1



11



17

SK08



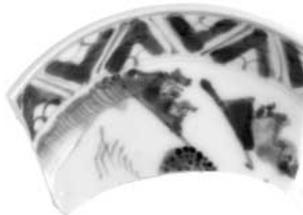
検出



3



18



128



22



127



85



96



98



94



83



97



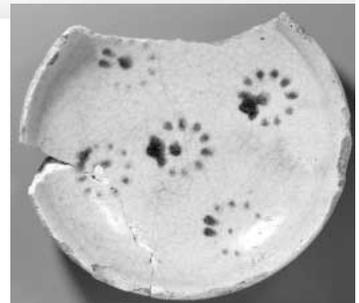
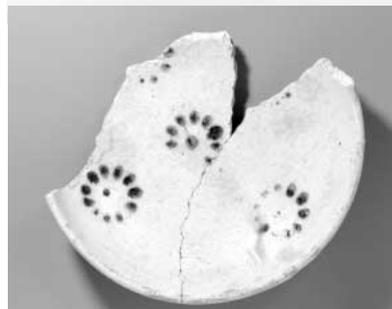
16



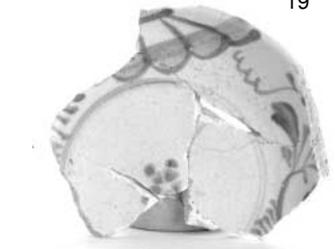
15



92



93



84

90

129

99



123

104



122



126



125



117



108



113



101



118



119



112



114



115



20



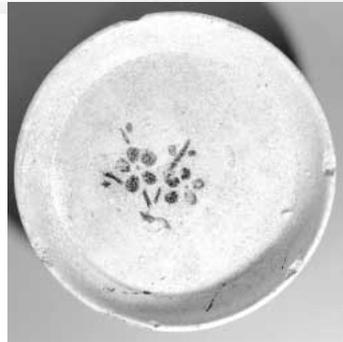
21



106



120



103



100



107



110



102



K08-60



K10-65



K10-66



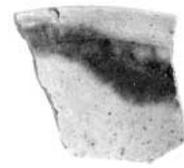
K10-68



K08-56



K10-69



K10-70



K13-71



K13-72



K13-76



K15-5



K13-73



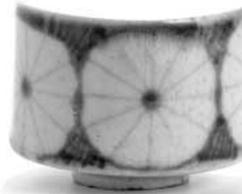
K13-77



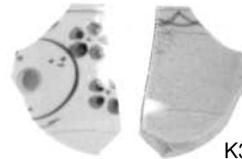
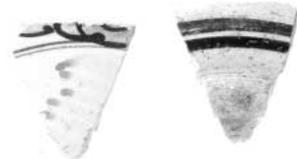
K15-81



K30-118



K31-19



K37-162



K19-82



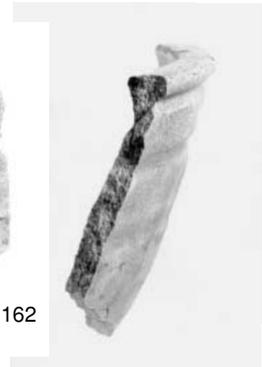
K38-165



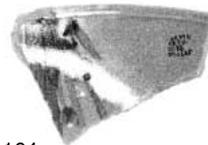
K37-160



K37-162



K38-164



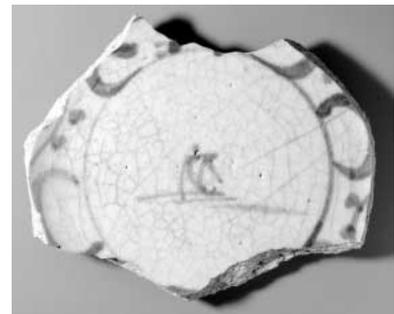
K37-161



K38-166



K37-163



K40-36



85



95



84



101



111



100



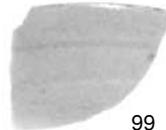
110



86



102



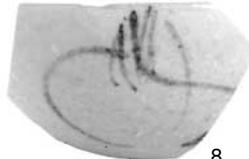
99



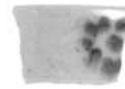
12



14



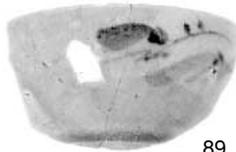
8



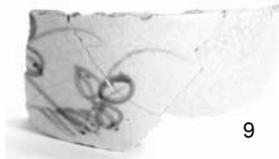
90



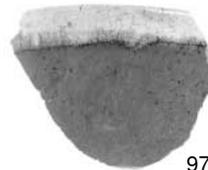
13



89



9



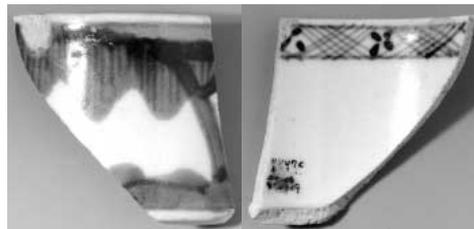
97



106



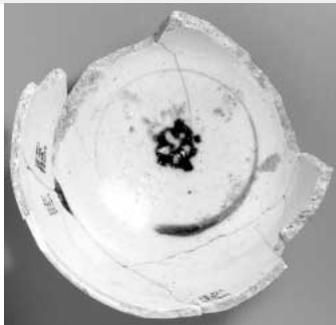
11



7



6



88



10



112

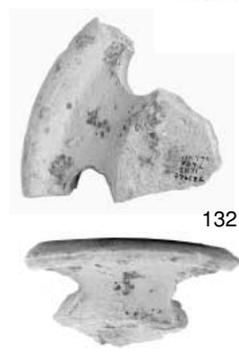
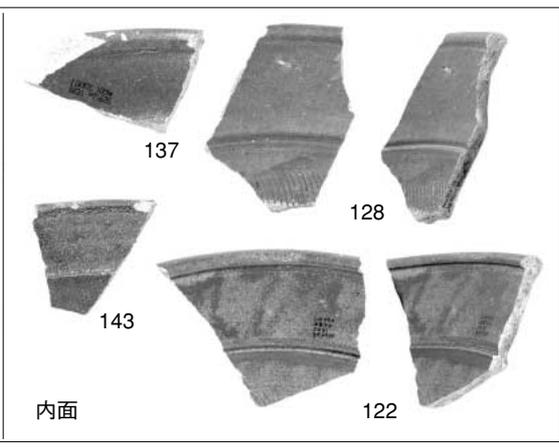
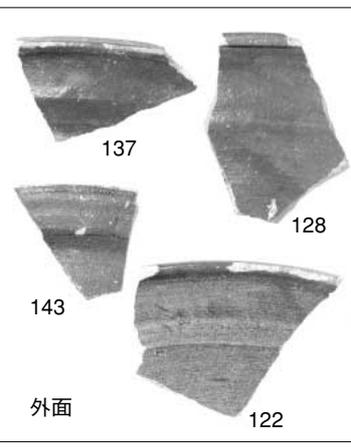
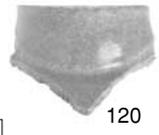
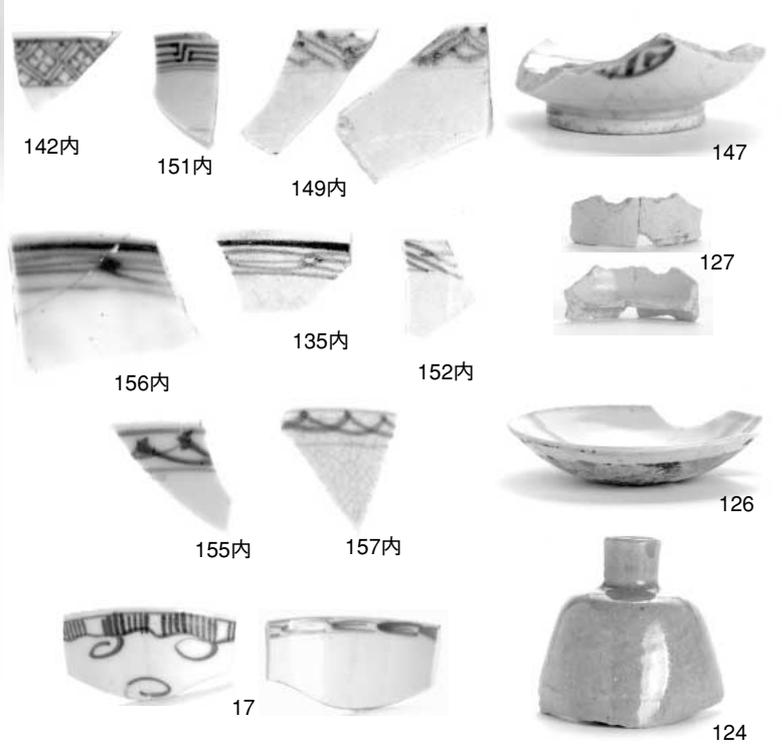
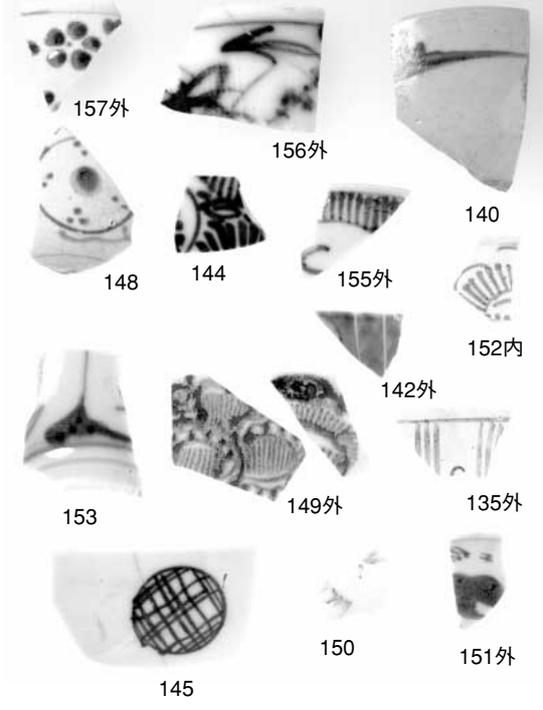


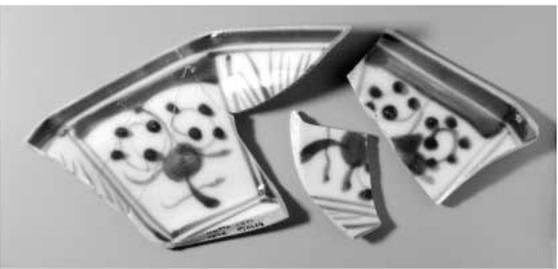
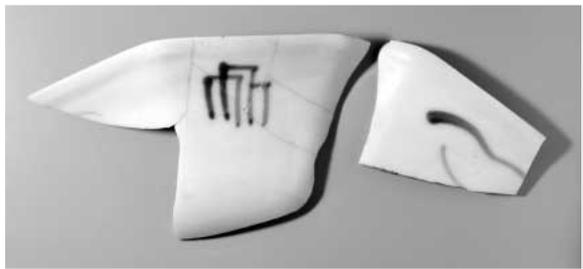
114



外面

内面

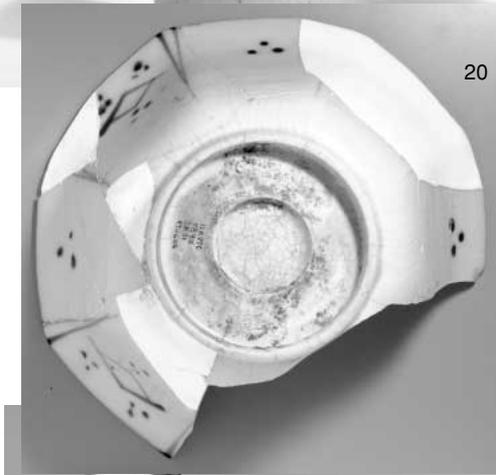




26



20



32



198



195



197



199



200



205



203



204





215



37



38



40



39



218



220



224



230



228



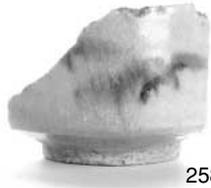
227



223



257



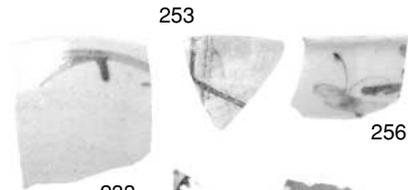
258



272



42



253



233



254



247



238



261



262



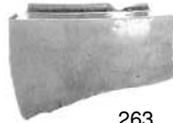
168



243



235



263



250



275



264



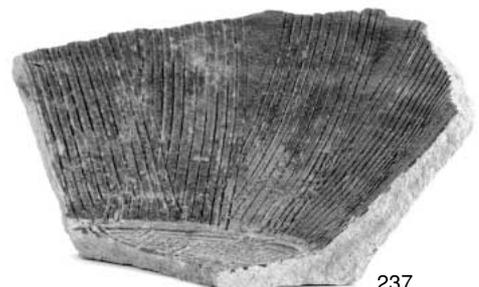
267



234

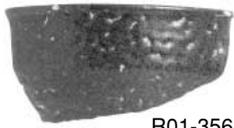


255



237





R01-356



R01-355



R01-357



R01-354



R01-52



R01-353



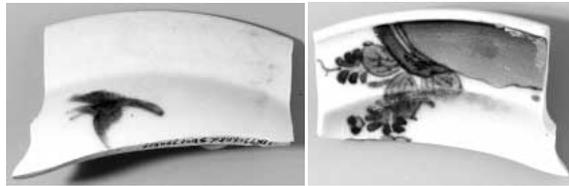
R01-358



R01-359



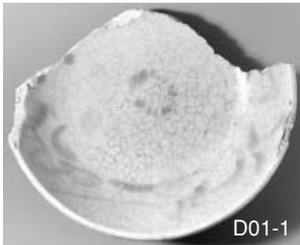
D01-337



D01-2



D01-336



D01-1



D01-328



D05-340



D06-342



D06-3



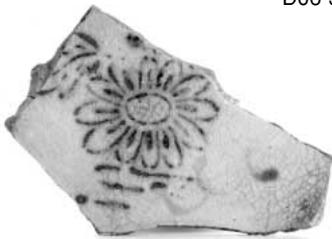
D06-341



D01-331



D07-343



D01-329



D01-338



D08-4



D08-344



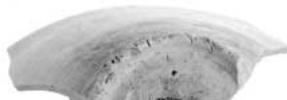
D08-345



D08-348



D08-346



D08-347



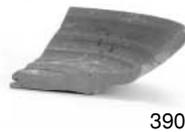
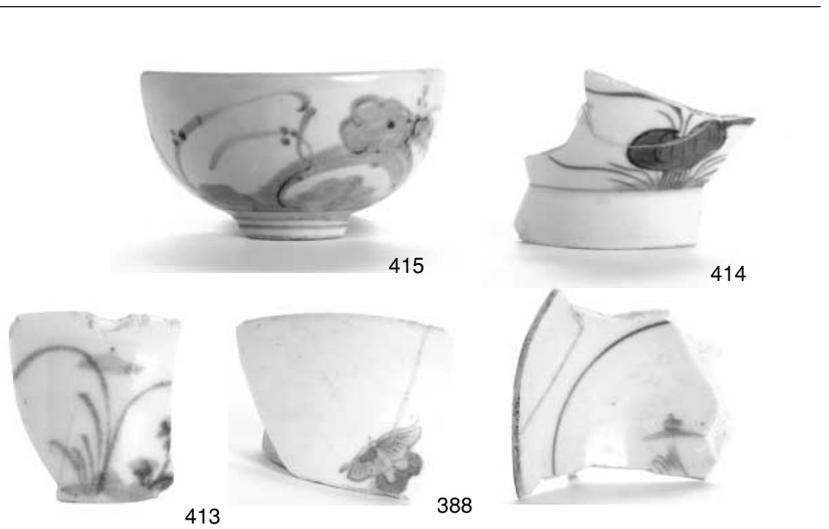


97C検出 その1

検Ⅳ



検Ⅲ



検 II



検 I



検 I



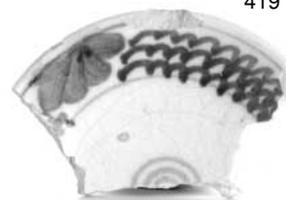
400



420



419



417



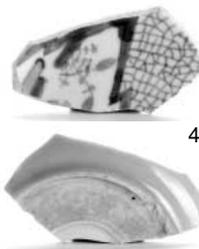
374



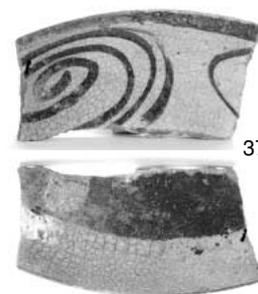
373



397



405



376



371



360



372



361



375

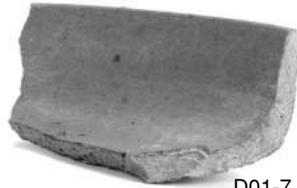


検 I





D01-8



D01-7



D01-6



D01-炭化物-5



D01-炭化物-4



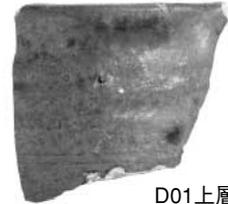
D01-炭化物-3



D01上層-10



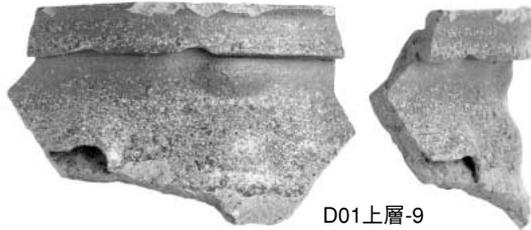
D01上層-9



D01下層-11



D05-13



D05-15



D05-14



D07-17



D17-20



D19-21



D10-19



D09-18



D26-22



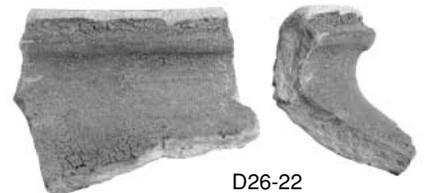
D01-炭化物-4



D01-炭化物-3



D01上層-10



D01上層-9



D01下層-11



D05-13



D05-15



D05-14



D07-17



D17-20



D19-21



D10-19



D09-18

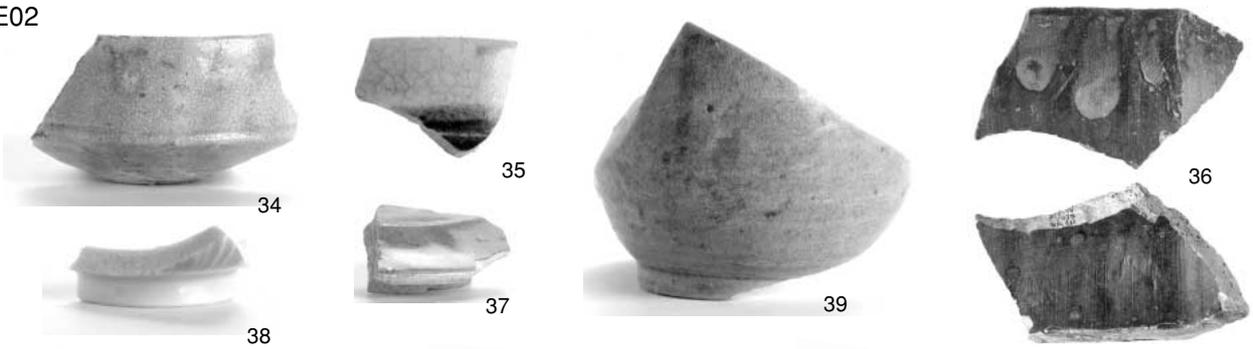


D26-22

SE01



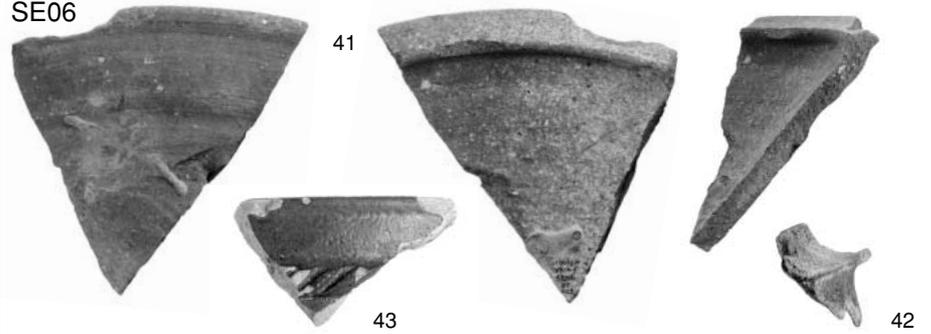
SE02



SE05



SE06



SK02



SK21



SK16



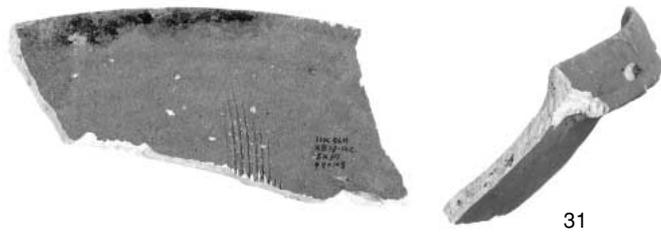
SK27



SX02



SK37

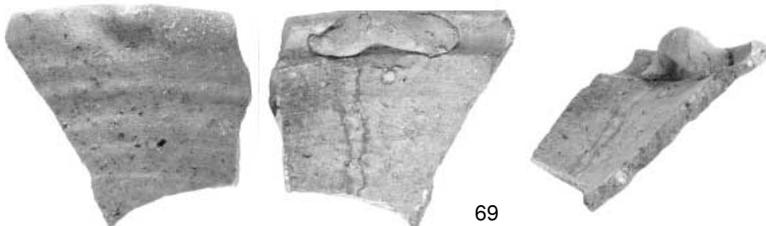
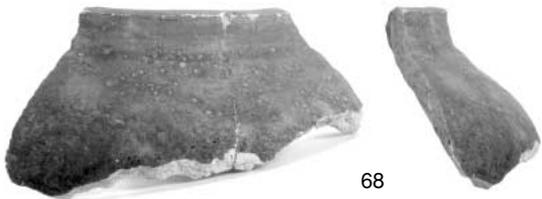
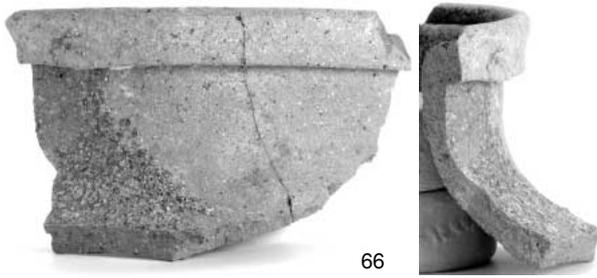
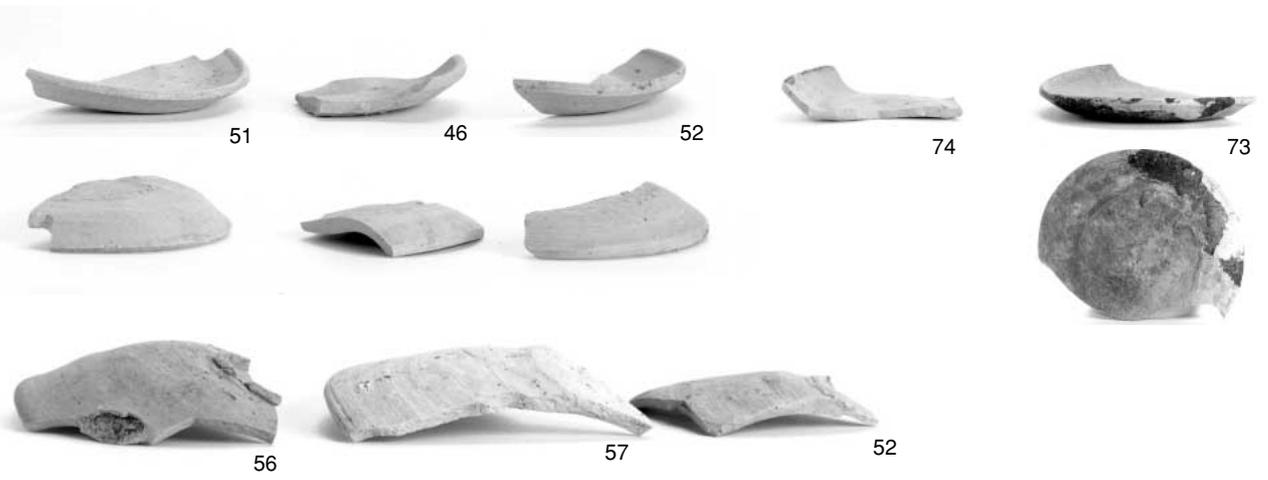


SK45



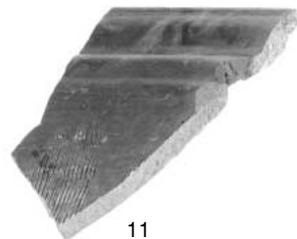
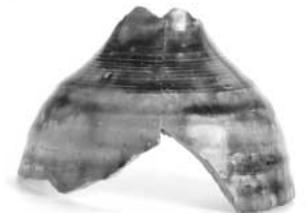
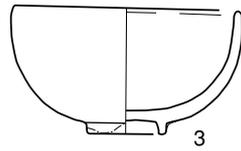
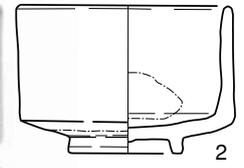
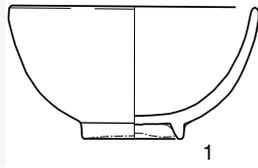
SD01炭化物

検出



古代



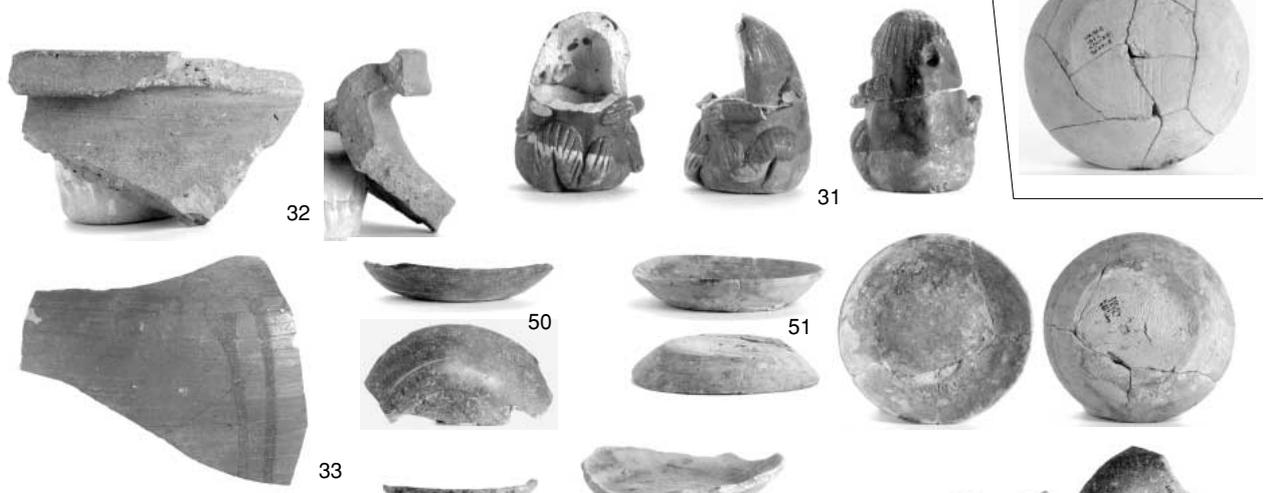


96G 検出

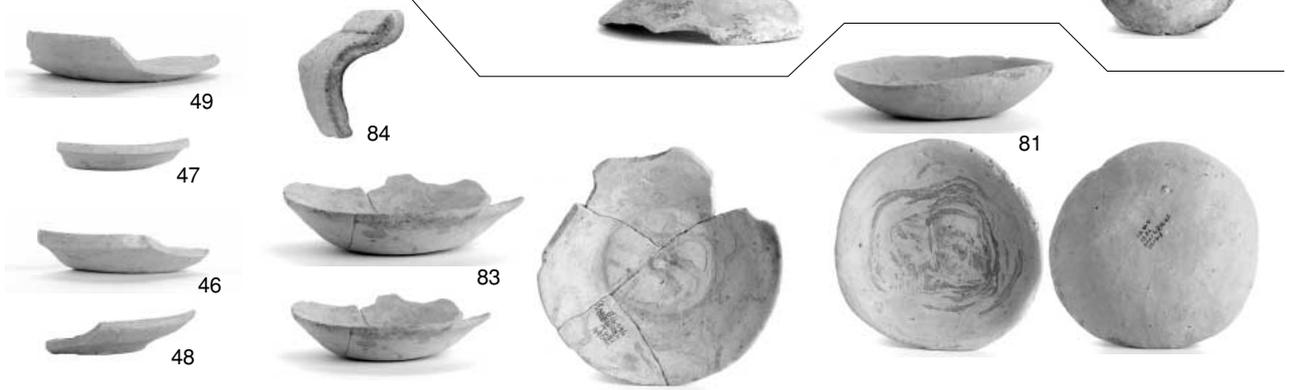




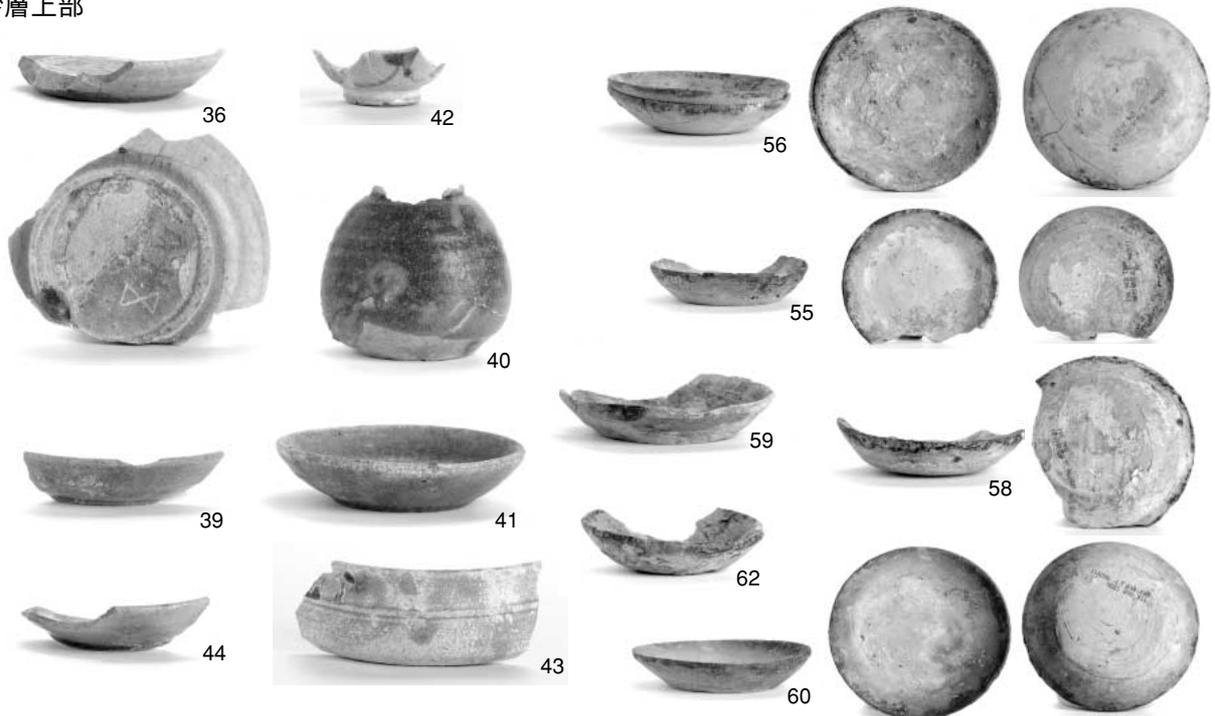
NR01

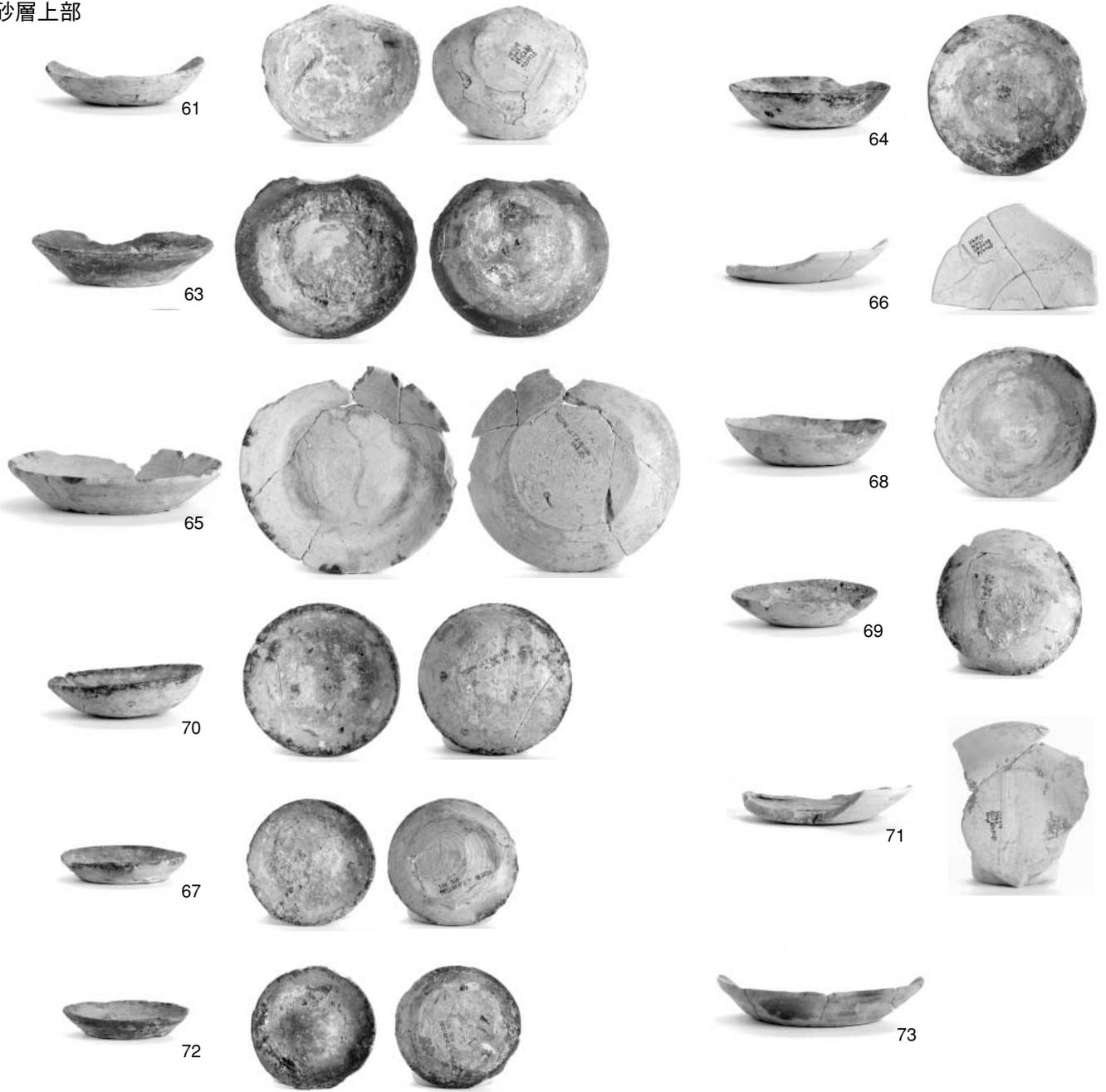


NR01-灰色粘土

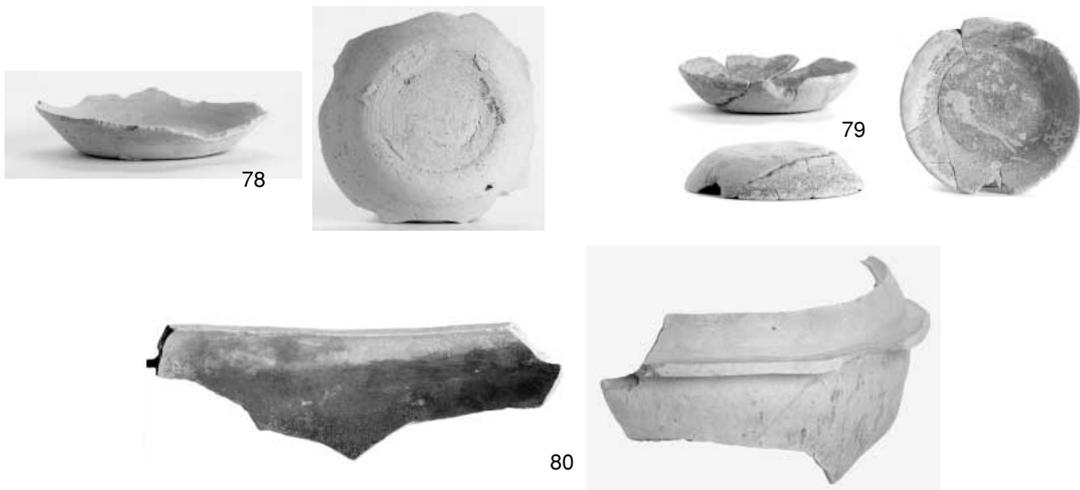


NR01-砂層上部





NR01-砂層下部

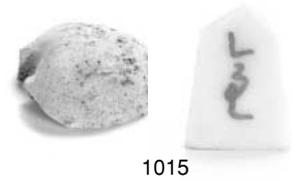
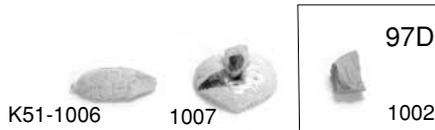
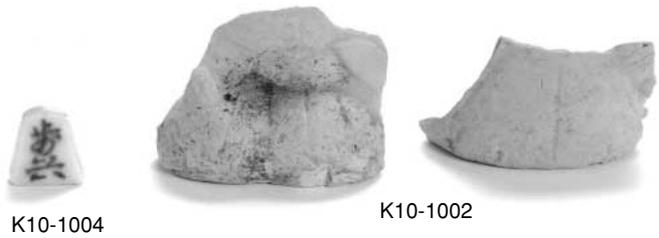
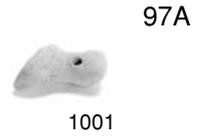
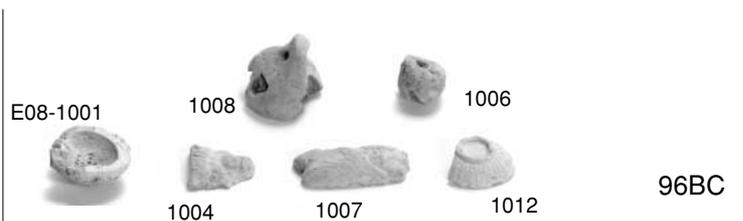
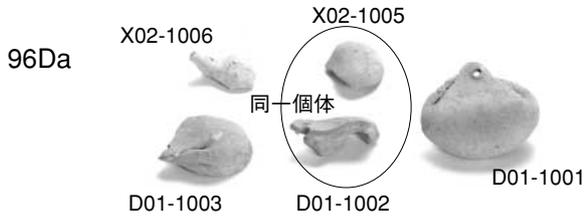


NR01-砂層 2



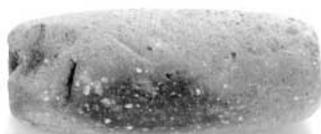
NR01-砂層 3







97B-1013



97B-1014



97B-K10-1005



97C-K41-1005



96Da-1015



97D-1001



97C-検 I -1016



97C-検 II -1022



97C-1015



97B-1011



97B-1012



96BC-1011



96K-2001



97B-2003



97B-2001



97B-2002



97C-2004



97C-K13-2001



97C-K42-2002



97C-K43-2003



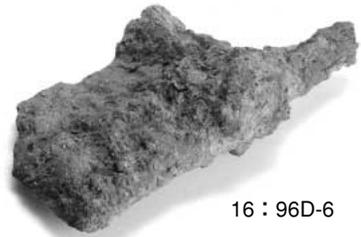
96H-X02-2001



27 : 96D-D01-3



25 : 96D-5



16 : 96D-6



22 : 96D-X02-4



18 : 97C-5



33 : 97C-6



15 : 97B-7

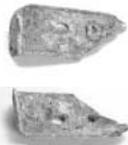


31 : 97C-7



37 : 96G-D01-2

38 : 96G-D01-3



40 : 97B-12



45 : 97D-4



46 : 96D-D01-2



53 : 97B-3



65 : 97B-2



49 : 96D-D01-1



61 : 97B-K10-1



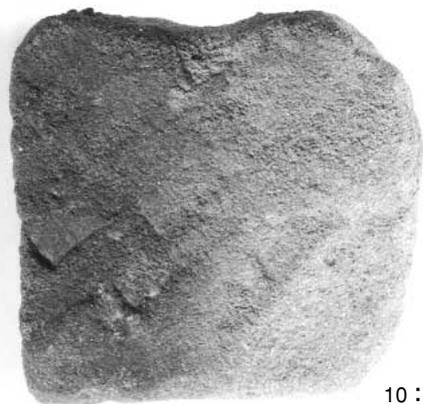
67 : 96BC-E01掘形-1



9 : 96F-1



a : 96BC



10 : 97C-8



1



3



4



5

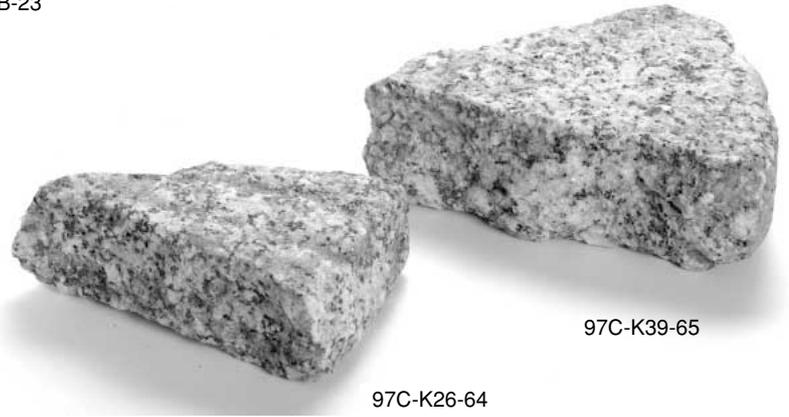
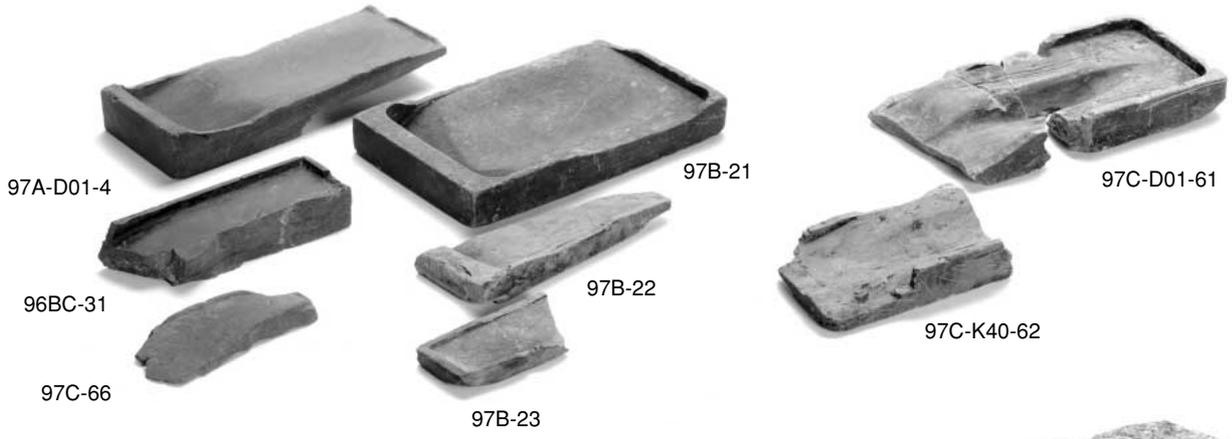


2



※番号は実測図に対応

硯



五輪塔



石臼



96BC-D04下層-1



96BC-14



97B-12



96D-D03-4



96BC-D16-3



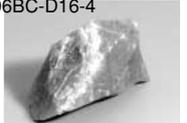
96BC-16



97B-13



96BC-D16-4



96BC-17



97B-14



96D-D03-5



96BC-D16-5



96BC-18



96BC-D16-6



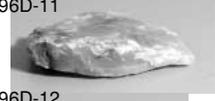
96BC-19



97B-15



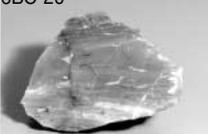
96D-11



96BC-D38-7



96BC-20



97B-16



96D-12



96BC-D38-8



96BC-21



97B-17



96D-14



96BC-K13-9



97B-1



96D-D01下層-1



96BC-K22-10



97B-K03-2



97B-K10-3



96BC-E06-11



97B-K56-4



96D-D01下層-2



96D-15



96BC-E11-13



97B-K56-8

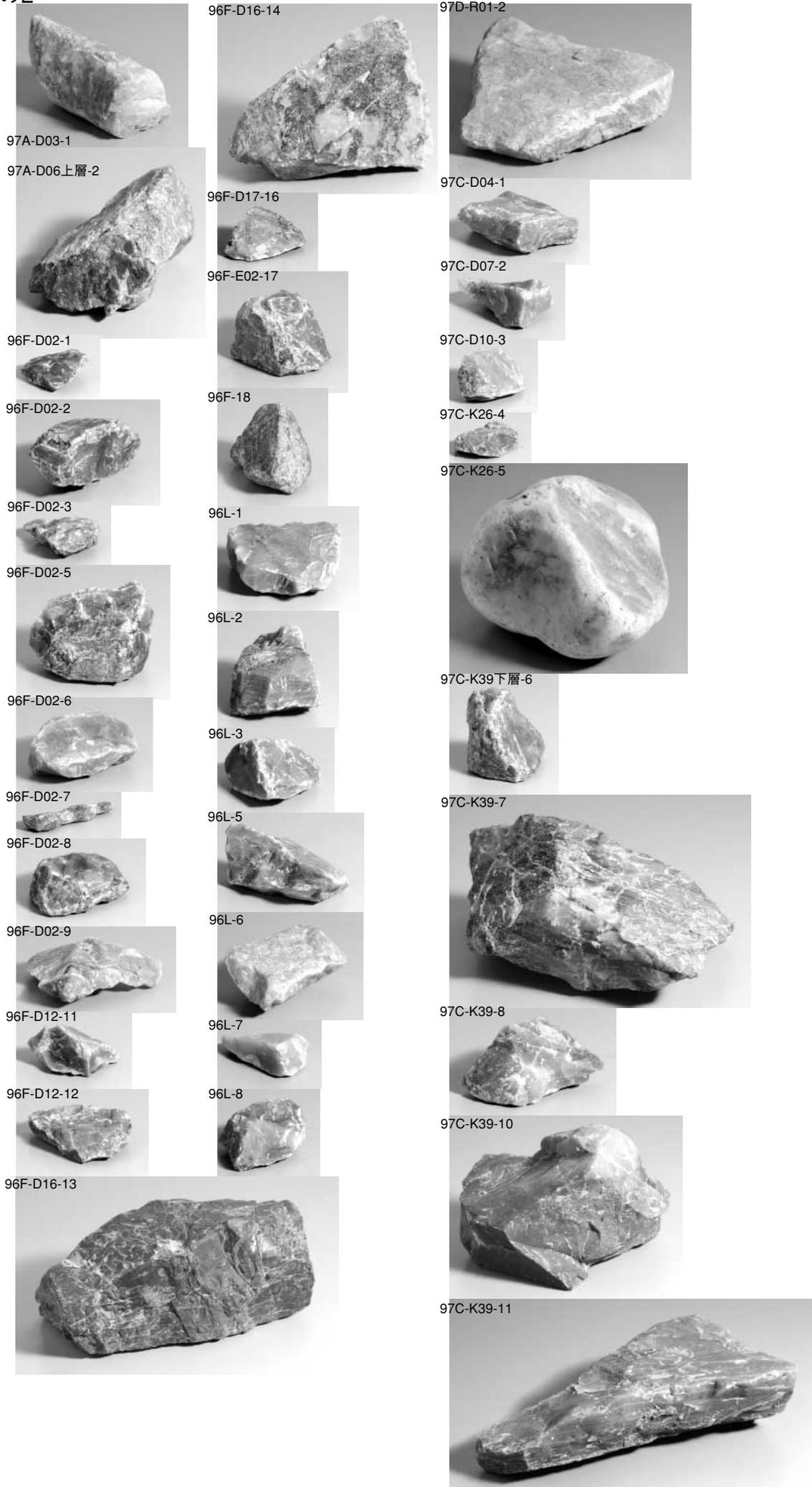


96D-16



96D-D03-3





97C-K39-9



97C-検 I -22



97C-検 II -33



97C-検 I -23



97C-検 II -35



97C-検 II -36



97C-検 II -37



97C-K42-12



97C-検 I -24



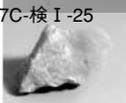
97C-K43-13



97C-K43-14



97C-検 I -25



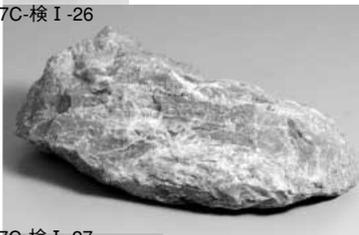
97C-検 II -38



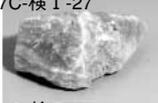
97C-K43-15



97C-検 I -26



97C-検 I -27



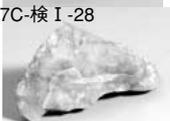
97C-検 II -39



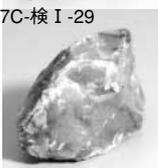
97C-K50-17



97C-検 I -28



97C-検 I -29



97C-検 II -40



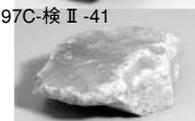
97C-X02-19



97C-検 II -31



97C-検 II -41



97C-検 I -20



97C-43



97C-検 I -21



97C-検 II -32



96H-D01下層-1



96H-D11-4



96G-D01-1



96H-E05-5



96G-D02-2



96H-D01炭化物-2



96H-7



96H-8

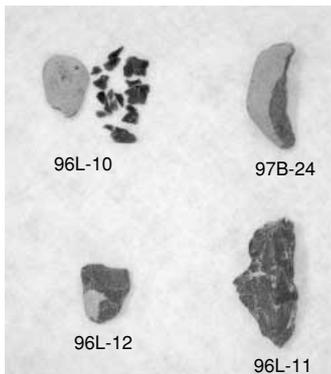


96H-D05下層-3



各種石器

下呂石フレーク・チップ



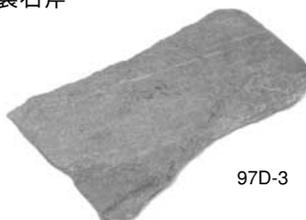
96L-10

97B-24

96L-12

96L-11

打製石斧



97D-3



97A-6

下呂石  
フレーク



97C-68

タタキ石



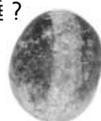
97C-70

タタキ石



97C-69

石錘?



97C-67

有孔磨製石鏃



97A-5



4 : 木簡02



2 : 木簡04



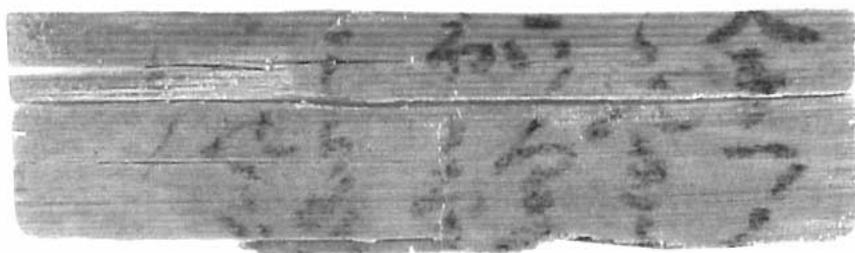
3 : 木簡05



6 : 木簡06



5 : 木簡10



25 : 木簡20



96G-R01-84

ふりがな	かりやすかいせき
書名	菟安賀遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	第93集
編著者名	石黒立人・浅井厚視・佐藤公保・鈴木正貴・蔭山誠一・植田弥生
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須字野方802番24 TEL0567-67-4161
発行年月日	西暦 2001年8月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かりやすか 菟安賀	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 やまとちょうかりやすか 大和町菟安賀	02	099	35度 17分 15秒	136度 46分 50秒	19960415～ 19970322  19970416～ 19980318	4989  1732	東海北陸自 動車道・県 道岐阜稲沢 線建設に伴 う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
菟安賀	集落 城館	古墳時代	溝 1条 井戸 2基	土師器、線刻土器	八王子遺跡古墳時代集 落の南限
		鎌倉～ 室町時代	井戸 4基 溝 5条	陶器、土器、砥石	
		戦国時代末	堀 2条 河道 2条	陶器、土器、中国陶 磁器、木簡、下駄	河道沿いに祭祀空間
		江戸時代	井戸 28基 堀 2条  その他 柱穴、 溝、土坑、通路、 河道など	陶磁器、瓦、土器、 石臼、硯、銭貨、 漆碗	遺物の大量廃棄は、17 世紀前半、18世紀後半、 19世紀後半の3時期に まとまる傾向がある。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第93集

## 菟安賀遺跡

2001年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷



サンメッセ株式会社